

# 和気・堀江の遺跡Ⅱ

姫原遺跡

谷町遺跡

1998

松山市教育委員会

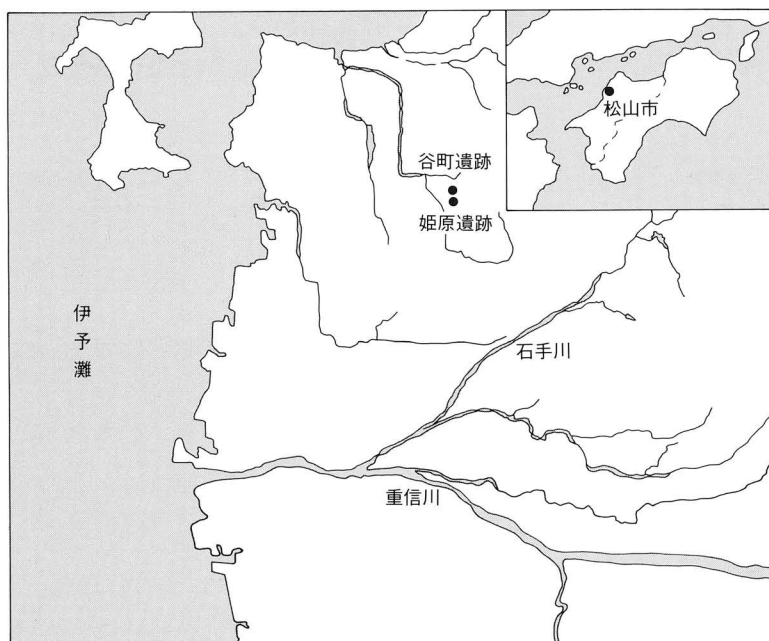
財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

わ け ほり え  
和気・堀江の遺跡Ⅱ

姫原遺跡

谷町遺跡



1998

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



卷頭図版1 姫原遺跡S D17出土遺物



卷頭図版 2 姫原遺跡 S D 17 土層断面



卷頭図版 3 姫原遺跡北壁土層

## 序

この報告書は、平成6年度から同7年度にかけて発掘調査を実施し、その調査結果を財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターがまとめた発掘調査報告書です。

「姫原遺跡」の所在する姫原には、その地名にまつわる伝承があります。允恭天皇の皇子木梨軽太子と同母妹木梨軽大郎女が近親恋愛、政争の末、伊豫流配にあい、心中したという話が記紀に記載されています。この木梨軽大郎女にちなみ「姫原」という地名がついたと言われていいます。このような古来からの伝承が残る当地域ですが、これまで発掘調査例が少なく、遺跡の様相が不明な地域でした。

今回、平成5年に刊行しました『和気・堀江の遺跡』にひきつづき、弥生時代の周溝と、馬や鹿などの獣骨が出土した古墳時代終末の溝や中世の溝を検出した「姫原遺跡」、弥生時代後期の住居を検出した「谷町遺跡」の二遺跡についてまとめたものです。これによって、当地域の弥生後期の集落関連遺構の広がり、松山市域では数少ない古墳時代の馬骨の出土、さらには中世の土器様相をもうかがえるものとなり、大きな知見を得ることができました。

こうした成果をあげることが出来ますのも、埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力を賜りました関係各位の方々のお陰と心からお礼申し上げます。

本書に収められた成果や資料が調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できる事を願うものです。

平成10年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団  
理事長 田中 誠 一

## 例 言

- 1 本報告書は、松山市教育委員会文化教育課が平成7年1月に実施した松山市姫原2丁目甲274-1、-2、甲276-1に所在する姫原遺跡と、平成7年9月に実施した松山市谷町371番地に所在する谷町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺構の番号は、住居址：S B、土坑：S K、溝：S D、性格不明遺構：S Xのように表示し、通し番号を1から付記した。
- 3 遺構、遺物の実測と製図は、山本健一、相原浩二、山辺進也、酒井直哉、上河淳浩、高松健太郎、久保浩二、金子育代、仙波ミリ子、仙波千秋、東山里美、高尾久子、関正子、萩野ちよみ、吉井信枝、二神千春、岩本美保、木下奈緒美、白石あさか、村上真由美が行った。
- 4 遺物の実測図は、弥生土器を1／4、須恵器、土師器を含むその他の土製品については1／3を基本とした。石製品については1／3、2／3である。なお、遺物実測図のスケール下には縮分値を記した。
- 5 本書に使用した方位はすべて磁北である。
- 6 姫原遺跡から出土した獣骨については奈良国立文化財研究所 松井章氏にご教示を賜った。記して感謝申し上げます。谷町遺跡では自然科学分析を(株)古環境研究所に依頼した。
- 7 遺物の撮影及び図版作成は大西朋子が行った。
- 8 本文の執筆は相原浩二、山本健一、梅木謙一が担当し、編集は相原浩二が行った。編集・校正にあたっては梅木謙一、水口あをいの協力を得た。
- 9 本報告書に関する図面と遺物は、松山市埋蔵文化財センターが保管、収蔵している。

# 本文目次

第1章	はじめに	〔相原〕	
1.	調査に至る経緯		1
2.	刊行組織		
3.	環境		2
第2章	姫原遺跡の調査	〔相原〕	
1.	調査の経過		7
2.	層位		8
3.	遺構と遺物		12
4.	小結		41
第3章	谷町遺跡の調査	〔山本〕	
1.	調査の経過		59
2.	層位		
3.	遺構と遺物		63
4.	小結		84
第4章	谷町遺跡における自然科学分析	〔榎古環境研究所〕	95
第5章	考察		
I	松山平野出土の紡錘車	〔山本〕	99
II	松山市山越町出土の弥生時代資料	〔梅木〕	109
第6章	調査の成果と課題	〔相原〕	112

# 挿 図 目 次

## 第1章 はじめに

第1図 松山平野北部の主要遺跡分布図 (縮尺1/25,000)	3
---------------------------------	---

## 第2章 姫原遺跡の調査

第2図 調査地位置図 (縮尺1/2,500)	7
第3図 調査区位置図 (縮尺1/800)	8
第4図 北壁土層図 (縮尺1/50)	9
第5図 東壁土層図 (縮尺1/50)	10
第6図 調査地区割図 (縮尺1/400)	11
第7図 第VI層上面遺構配置図 (縮尺1/120)	13
第8図 S D35測量図 (縮尺1/80)	14
第9図 S D35出土遺物実測図 (縮尺1/4)	14
第10図 S D30測量図 (縮尺1/40)	15
第11図 S D30出土遺物実測図 (縮尺1/4)	15
第12図 S D17測量図 (縮尺1/40)	16
第13図 S D17出土遺物実測図① (縮尺1/4)	17
第14図 S D17出土遺物実測図② (縮尺1/4)	18
第15図 S D17出土遺物実測図③ (縮尺1/4)	19
第16図 S D16測量図 (縮尺1/40)	20
第17図 S D16出土遺物実測図 (縮尺1/4)	20
第18図 S D19測量図 (縮尺1/40)	21
第19図 S D19出土遺物実測図 (縮尺1/4・1/3)	21
第20図 S D22測量図 (縮尺1/40)	22
第21図 S D22出土遺物実測図 (縮尺1/4)	22
第22図 S D15測量図 (縮尺1/100)	24
第23図 S D15出土遺物実測図① (縮尺1/3)	25
第24図 S D15出土遺物実測図② (縮尺1/3)	26
第25図 S D15出土遺物実測図③ (縮尺1/3)	27
第26図 S D15出土遺物実測図④ (縮尺1/3)	28
第27図 S D15出土遺物実測図⑤ (縮尺1/3)	29
第28図 S D15出土遺物実測図⑥ (縮尺1/3)	30
第29図 S D15出土遺物実測図⑦ (縮尺1/3)	31
第30図 S D13・14測量図 (縮尺1/100)	33
第31図 S D13出土遺物実測図① (縮尺1/3)	34



第32図	S D13出土遺物実測図② (縮尺 1 / 3)	35
第33図	S D13・14出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	36
第34図	S D14出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	37
第35図	第Ⅳ層上面遺構配置図 (縮尺 1 / 120)	39
第36図	S K 2・S K 9・S K10測量図 (縮尺 1 / 40)	40
第37図	S K 2・S K 9・S K10出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	43
第38図	包含層出土遺物実測図① (縮尺 1 / 4)	42
第39図	包含層出土遺物実測図② (縮尺 1 / 3)	43
第40図	包含層出土遺物実測図③ (縮尺 1 / 3)	44
第41図	包含層出土遺物実測図④ (縮尺 1 / 3)	45

### 第3章 谷町遺跡の調査

第42図	調査地位置図 (縮尺 1 / 2,500)	60
第43図	調査地測量図 (縮尺 1 / 300)	61
第44図	土層図 (縮尺 1 / 40)	62
第45図	遺構配置図 (縮尺 1 / 40)	64
第46図	S B 1 測量図 (縮尺 1 / 40)	65
第47図	S B 1 内 S K ① 測量図 (縮尺 1 / 20)	66
第48図	S B 1 内 S K ②・S K ③・S K ④ 測量図 (縮尺 1 / 20)	67
第49図	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4・1 / 2・2 / 3)	68
第50図	S B 1 内施設内出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4)	69
第51図	S D 2・S D 3 測量図 (縮尺 1 / 20)	70
第52図	S K 1・S K 2 測量図 (縮尺 1 / 20)	71
第53図	S K 1・S P 1 2 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4)	71
第54図	S D 1 測量図 (縮尺 1 / 40)	72
第55図	S D 1 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4・1 / 3)	73
第56図	第Ⅲ層出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3・1 / 2)	74
第57図	第Ⅳ層出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3・1 / 4)	75
第58図	第Ⅴ層出土遺物実測図① (縮尺 1 / 4・1 / 3)	76
第59図	第Ⅴ層出土遺物実測図② (縮尺 1 / 4)	77
第60図	第Ⅴ層出土遺物実測図③ (縮尺 1 / 4)	79
第61図	第Ⅴ層出土遺物実測図④ (縮尺 1 / 4)	80
第62図	第Ⅴ層出土遺物実測図⑤ (縮尺 1 / 4)	80
第63図	第Ⅴ層出土遺物実測図⑥ (縮尺 1 / 4)	81
第64図	第Ⅴ層出土遺物実測図⑦ (縮尺 1 / 4)	82
第65図	第Ⅴ層出土遺物実測図⑧ (縮尺 1 / 2・2 / 3)	83

## 第5章 考察

第66図	断面形状図	99
第67図	部位名称及び法量	100
第68図	遺物実測図（参考資料）	102
第69図	紡錘車集成図1	105
第70図	紡錘車集成図2	106
第71図	出土遺物実測図（縮尺1／3・1／4）	108
第72図	山越町出土品	109

# 表 目 次

## 第1章 はじめに

表1	調査地一覧	1
----	-------	---

## 第2章 姫原遺跡の調査

表2	S D35出土遺物観察表（土製品）	47
表3	S D30出土遺物観察表（土製品）	
表4	S D17出土遺物観察表（土製品）	48
表5	S D16出土遺物観察表（土製品）	
表6	S D19出土遺物観察表（土製品）	
表7	S D19出土遺物観察表（石製品）	
表8	S D22出土遺物観察表（土製品）	49
表9	S D15出土遺物観察表（土製品）	
表10	S D15出土遺物観察表（石製品）	51
表11	S D15動物遺存体観察表	52
表12	S D13出土遺物観察表（土製品）	
表13	S D13出土遺物観察表（石製品）	54
表14	S D13・14動物遺存体観察表	
表15	S D14出土遺物観察表（土製品）	
表16	S K 9 出土遺物観察表（土製品）	
表17	S K 2 出土遺物観察表（土製品）	
表18	S K 10出土遺物観察表（土製品）	
表19	包含層出土遺物観察表（土製品）	55

### 第3章 谷町遺跡の調査

表20	竪穴式住居址一覧	85
表21	土坑一覧	
表22	溝一覧	
表23	S B 1 出土遺物観察表 (土製品)	86
表24	S B 1 出土遺物観察表 (石製品)	
表25	S B 1 内施設内出土遺物観察表 (土製品)	87
表26	S K 1・S P 12出土遺物観察表 (土製品)	
表27	S D 1 出土遺物観察表 (土製品)	
表28	第Ⅲ層出土遺物観察表 (土製品)	88
表29	第Ⅲ層出土遺物観察表 (石製品)	
表30	第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表 (土製品)	
表31	第Ⅴ層出土遺物観察表 (石製品)	93

### 第4章 自然科学分析

表32	谷町遺跡における植物珪酸体分析結果	97
表33	谷町遺跡 S B 1 内 S K ①における植物珪酸体分析結果	

### 第5章 考察

表34	松山平野出土の紡錘車	103
表35	山越町出土遺物観察表 (土製品)	109
表36	山越町出土遺物観察表 (石製品)	

## 写真図版目次

巻頭図版 1. 姫原遺跡 S D 17 出土遺物

巻頭図版 2. 姫原遺跡 S D 17 土層断面

巻頭図版 3. 姫原遺跡北壁土層

### 第2章 姫原遺跡の調査

図版 1.	1	調査地全景 (南より)
	2	第Ⅳ層上面遺構検出状況 (南より)
図版 2.	1	S D 30 完掘状況 (北より)
	2	S D 17 全景 (北西より)
図版 3.	1	S D 17 遺物出土状況 (北より)
	2	S D 17 土層断面 (南より)

- 図版 4. 1 S D 22遺物出土状況 (南より)  
 2 S D 19遺物出土状況 (南東より)
- 図版 5. 1 S D 15遺物出土状況 (北より)  
 2 S D 15完掘状況 (南より)
- 図版 6. 1 S D 13・14遺物出土状況 (南より)  
 2 作業風景 (東より)
- 図版 7. 1 調査区完掘状況 (南より)
- 図版 8. 1 S D 35・30出土遺物
- 図版 9. 1 S D 17出土遺物①
- 図版10. 1 S D 17出土遺物②
- 図版11. 1 S D 16・19・22出土遺物
- 図版12. 1 S D 15出土遺物①
- 図版13. 1 S D 15出土遺物②  
 2 S D 13出土遺物①
- 図版14. 1 S D 13出土遺物②  
 2 S D 14出土遺物
- 図版15. 1 包含層出土遺物・S D 15・13出土獣骨
- 図版16. 1 S D 15出土獣骨  
 2 S D 15・13出土獣骨

### 第3章 谷町遺跡の調査

- 図版17. 1 調査地全景 (北より)  
 2 完掘状況 (北西より)
- 図版18. 1 S B 1 (北より)  
 2 S B 1内S K①完掘状況 (東より)
- 図版19. 1 S B 1内S K②遺物出土状況 (西より)  
 2 S B 1内S K③遺物出土状況 (西より)
- 図版20. 1 S D 1遺物出土状況 (北より)  
 2 S D 2遺物出土状況 (南より)
- 図版21. 1 第Ⅲ層完掘状況 (南より)  
 2 第Ⅴ層紡錘車出土状況 (西より)
- 図版22. 1 S B 1・S D 1出土遺物
- 図版23. 1 第Ⅲ層・第Ⅴ層出土遺物
- 図版24. 1 谷町遺跡から検出されたプラント・オパール①
- 図版25. 1 谷町遺跡から検出されたプラント・オパール②

巻末図版 1 姫原遺跡 S D 15出土遺物

# 第1章 はじめに

## 1 調査に至る経緯

平成6年度に、松山市姫原2丁目甲274-1、-2、甲276-1と谷町371番地の2ヶ所において宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課に提出された。確認願いが申請された姫原は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.168 姫原遺物包含地』内に、谷町は『No.41 潮見古墳群遺物包含地』内にあり、周知の遺跡地として知られている。

文化教育課では、確認願いが申請された2地点について埋蔵文化財の有無について順次確認調査を実施した。

確認調査の結果、それぞれの申請地内において遺構、遺物が検出されたため、文化教育課と申請者及び関係者は発掘調査について協議を行った。協議の結果、発掘調査は遺跡が消滅する地域に対し、当該地域の遺構の性格や集落域の解明を主目的とし調査を行うこととなった。調査は申請者各位の協力のもと平成6年度に姫原遺跡、同7年度に谷町遺跡の調査を実施した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積 (㎡)	調査期間
姫原遺跡	姫原2丁目甲274-1、-2、甲276-1	1,683	平成7年1月5日～同年2月28日
谷町遺跡	谷町371	701	平成7年9月1日～同年10月26日

なお、室内調査は(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、報告書刊行事業を実施した。

## 2 刊行組織 (平成10年3月31日)

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
生涯教育部	部長	三好俊彦
	次長	丹下正勝
文化教育課	課長	松平泰定
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	田中誠一
	事務局長	池田秀雄
	事務局次長	河口雄三
埋蔵文化財センター	所長	河口雄三
	次長	田所延行
	調査係長	田城武志
	調査主任	栗田正芳(文化教育課職員)
	担当	相原浩二
		山本健一

### 3. 環 境

姫原・谷町遺跡は、松山平野の北東部を走る高縄山系の南西裾部に位置する。姫原遺跡は標高22m、谷町遺跡は標高15mに立地する。西側には西方海岸部と大山寺山塊とに挟まれた南北約7km、東西約2kmの低地が広がっている。高縄山系に源を発する石手川は、平野を北東部から南西方向に流れ、扇状地を形成したのち、重信川と合流して伊予灘に注いでいる。石手川の旧流路は現在とは異なり、現流路より約2km北方の高縄山系南面の御幸寺山麓を西流し、その山麓に沿って北方に流路をとり堀江湾に注いでいたものとされている。低地はこの河川活動によって形成された地溝性の沖積低地と河岸段丘とによって成り立っていると考えられている。この低地部の標高は17m～19mということであるから、低地よりも1m～4m高い河岸段丘上に遺跡が立地していることになる。

『和名抄』によれば、古代伊予国は14郡からなり、そのうち和気、温泉、久米、伊予の4郡と浮穴郡の一部が松山平野にあったとされている。ここでは遺跡の立地する旧和気郡域の低地部と、両遺跡周辺に限って遺跡の分布と史料を概観する。

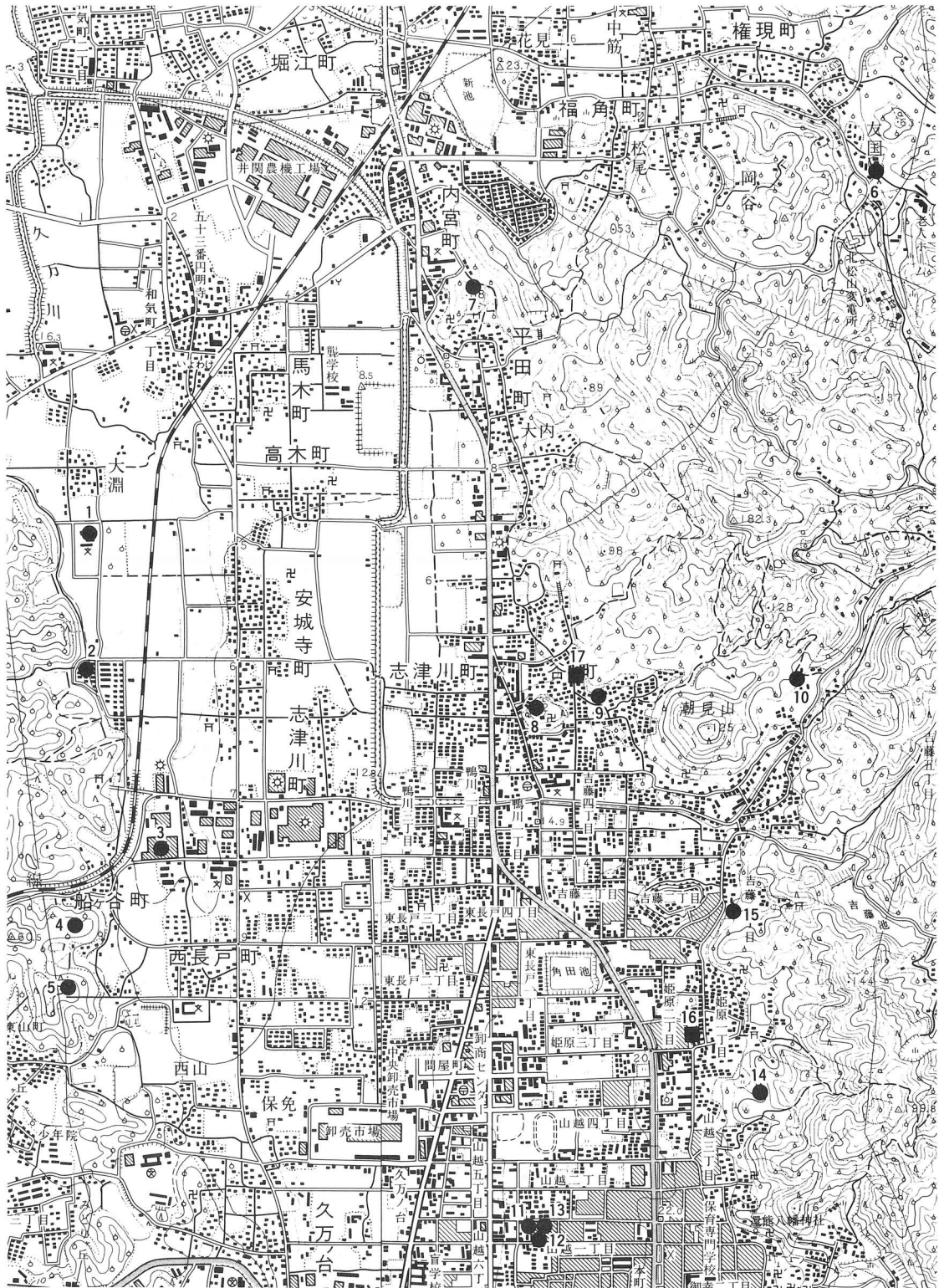
縄文時代の遺跡には、両遺跡から西方の大山寺山塊東辺の低地部で見つかっている。船ヶ谷遺跡は晩期後半の遺跡で河川、杭列、住居址や土器、石器、木製品が出土している。この時期につづく大渕遺跡では、丹塗りの彩文壺をはじめとする土器、石庖丁、石鎌等が出土しており当平野内における稲作開始期の遺跡として注目されている。船ヶ谷遺跡、大渕遺跡の中間部にある三光遺跡では弥生時代前・後期の包含層を検出している。

弥生時代の遺跡には、姫原遺跡が立地する東側丘陵裾に潮見遺跡や吉藤宮ノ谷遺跡があり、前期末から中期中葉の遺物や後期の壺棺が出土している。そのほか前期末の土器や後期の竪穴式住居址を検出した座拝坂遺跡、後期末の竪穴住居址を検出した金毘羅山遺跡などがある。低地部に位置する山越2次調査地では溝状遺構より中期中葉の板鍬や柳葉形磨製石鍬が出土しており、居住域や墓域を微高地上に営み低地部を水田等の生産域としていた可能性が高い。また、同一丘陵の反対斜面にあたる祝谷地区には、中期～後期の大量の遺物や埋納状態で平形銅剣一口を出土した六丁場遺跡、中期と後期の住居址を検出したアイリ遺跡がある。

古墳時代の遺跡は、調査地の東側、山越や姫原の丘陵部に松山市の指定する「姫原古墳群」がある。近年まで同包蔵地内の発掘調査は行われていなかったが、平成4年小学校建設に伴い影浦古墳の発掘調査が行われた。その結果、6世紀中頃～7世紀前半の横穴式石室を主体部とする3基の古墳や箱式石棺を検出し、姫原古墳群の一端が明らかにされている。谷町遺跡北方、高縄山系の西側丘陵には、北谷古墳群、権現古墳群、堂ヶ谷古墳群、潮見古墳群があり、丘陵及び縁辺部には後期古墳が数多く分布している。谷町遺跡の南方約150mには独立丘陵の室岡山(40.5m)が所在する。山の中腹部には薬師如来を本尊とする蓮華寺があり、境内には出土状況は不明であるが、県内唯一とされる阿蘇凝灰岩の舟形石棺の身部がみられる。

一方、太山寺山塊西麓では船ヶ谷向山古墳、三ツ石古墳などがある。船ヶ谷向山古墳は削平により主体部や盛土が失われているが、前方後円墳の可能性を残す5世紀末の古墳で、円筒埴輪や人、鶏、馬等の形象埴輪が出土している。

姫原町の現地名については、姫原の地名に由来する伝承がある。調査地の東約300mの丘陵斜面に一对2基の五輪塔があり、「比翼塚」という名称で祀られている。近親恋愛、政争の末、伊豫流配にあい、



(S = 1 : 25,000)

- 1 大淵遺跡 2 三光遺跡 3 船ヶ谷遺跡 4 船ヶ谷向山古墳 5 船ヶ谷三ツ石古墳 6 塚本古墳
- 7 金毘羅山遺跡 8 蓮華寺 9 座拝坂遺跡 10 潮見遺跡 11 山越遺跡 1 次調査地
- 12 山越遺跡 2 次調査地 13 山越遺跡 3 次調査地 14 影浦谷古墳 15 吉藤宮ノ谷遺跡 16 姫原遺跡
- 17 谷町遺跡

第1図 松山平野北部の主要遺跡分布図

## はじめに

心中をとげたという允恭天皇（412～453）の皇子木梨軽太子と、同母の妹木梨軽大郎女の墓とされ、この軽大郎女にちなんで姫原と呼ばれるようになったと言われている。

### 参考文献

- 栗田茂敏 1993 『影浦谷古墳』 松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター
- 松村淳・梅木謙一・宮内慎一 1993 「座拝坂遺跡の調査」『和気・堀江の遺跡』 松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1989 「吉藤宮ノ谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- 松山市教育委員会 1980 『松山市資料集 第1巻 考古編』
- 宮崎泰好 1991 『祝谷6丁場遺跡調査報告1』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 梅木謙一 1992 『祝谷アイリ遺跡』(財)松山市埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1991 『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター



第2章

ひめ ばら  
姫 原 遺 跡



## 第2章 姫原遺跡の調査

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯

1994（平成6）年10月13日、地権者である友近哲也氏より、松山市姫原2丁目甲274-1、274-2、甲276-1内における専用住宅建設に伴い埋蔵文化財の確認申請が松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.168 姫原遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡として知られているが、同包蔵地内における発掘調査は無かった。

文化教育課では、確認願いが申請された地点についての遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、平成6年10月27日試掘調査を実施した。調査では、弥生時代、古墳時代、中世の遺構や遺物を確認した。

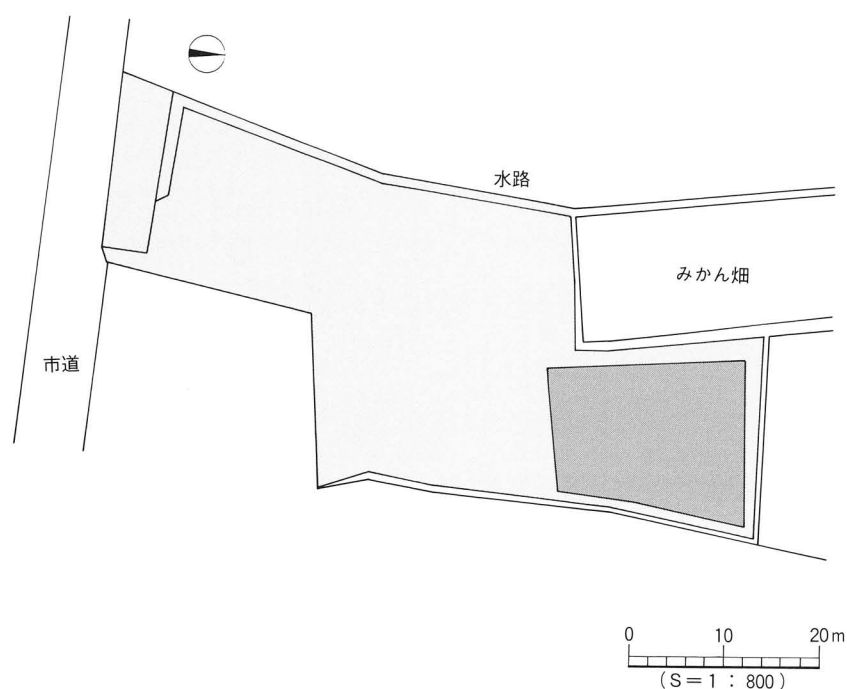
この結果を受け、申請者と文化教育課の二者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、住宅建設により失われる遺構・遺物に対し、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は姫原地区の遺跡の様相解明や歴史的環境を明らかにすることを主目的とし、文化教育課の指導のもと、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者の協力のもと1995（平成7）年1月5日に開始した。



第2図 調査地位置図（S=1：2,500）

## 姫原遺跡の調査



第3図 調査区位置図

### (2) 調査組織

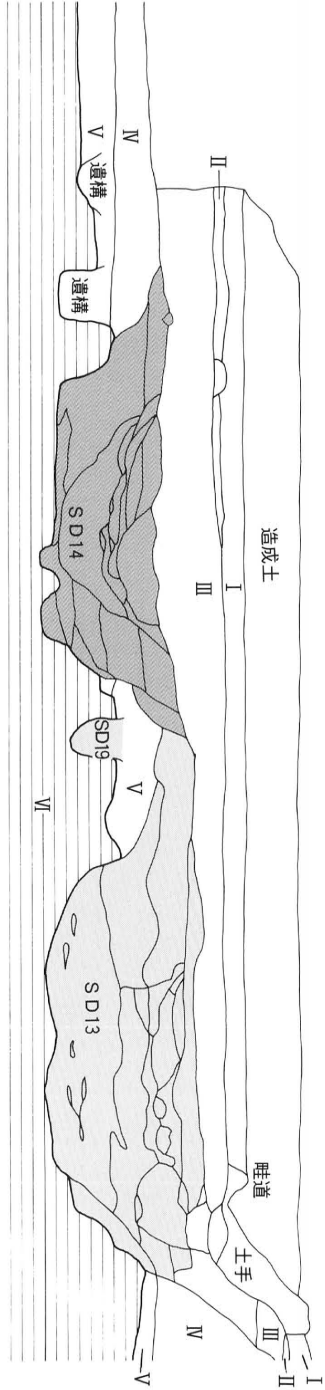
遺跡名	姫原遺跡
調査地	姫原2丁目甲274-1、274-2、甲276-1
調査面積	対象面積 1,683m <sup>2</sup>
調査期間	平成7年1月5日～同年2月28日
調査協力	友近哲也
調査担当	相原浩二・河野史知

## 2. 層位

調査区の現状は休耕田である。耕田は、調査区中央を南北方向に段差のある畦が走り、西側が低い東西2段の棚田となっている。西側の低い耕田は、擁壁工事に伴う進入路建築により、軟弱な土壌を撤去したあと、厚さ70cm～80cmの造成土が敷かれていた。このため、調査区西壁のほとんどは削平されており、第IV層より上層は削り取られている。

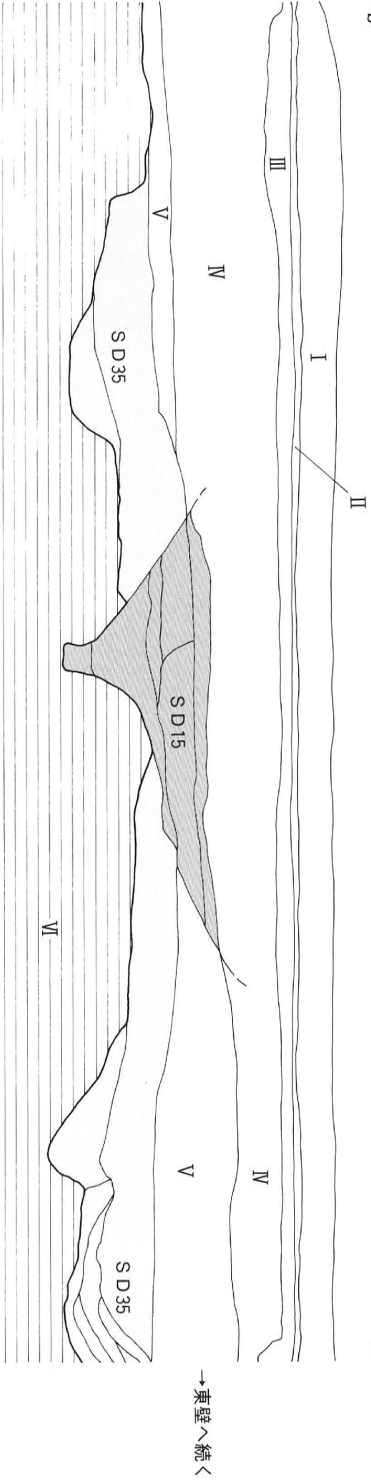
調査区内の基本層位は、上層から第I層耕作土、第II層床土、第III層灰白色砂質土、第IV層黒褐色土、第V層茶褐色土、第VI層黄色土(地山)の順である。調査地西半には、第I層耕作土上に厚さ40cm～50cmの造成土が敷かれている。第I層は厚さ10cm～20cm、第II層は2cm～5cmを測る。第III層は厚さ3cm～35cmの堆積で中世以降の遺物を包含する。第IV層は厚さ25cm～60cmの堆積で古墳時代後期～古代の遺物を包含する。第V層は厚さ15cm～40cmで弥生時代の遺物を包含する。第VI層は無遺物層でいわゆる地山と呼ばれるものである。

L = 22.70m  
a



W - E  
b

L = 22.70m  
b



W - E  
c

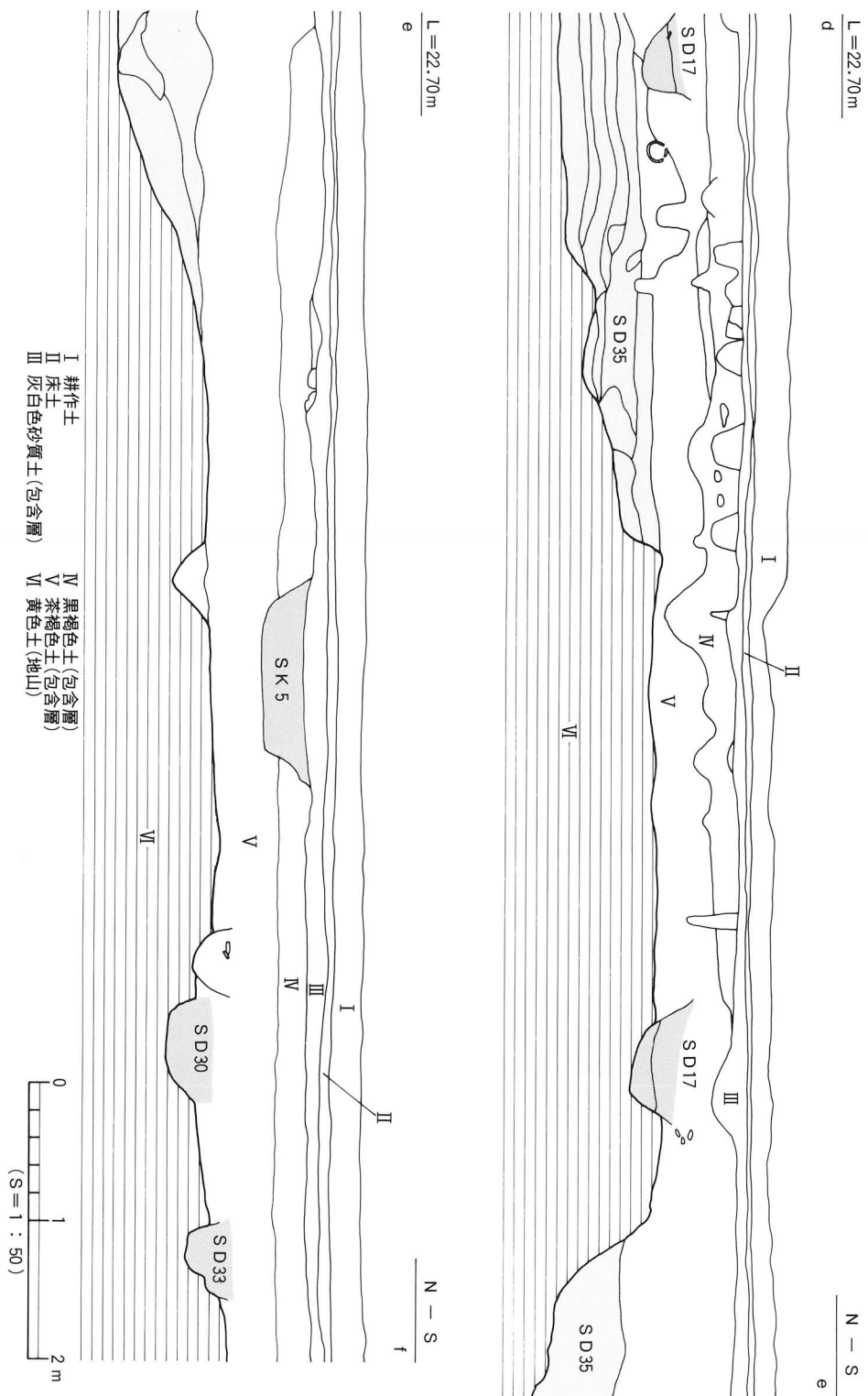
位 層

- I 耕作土
- II 床土
- III 灰白色砂質土 (包含層)
- IV 黑褐色土 (包含層)
- V 茶褐色土 (包含層)
- VI 黃色土 (地山)



第4図 北壁土層図

姫原遺跡の調査



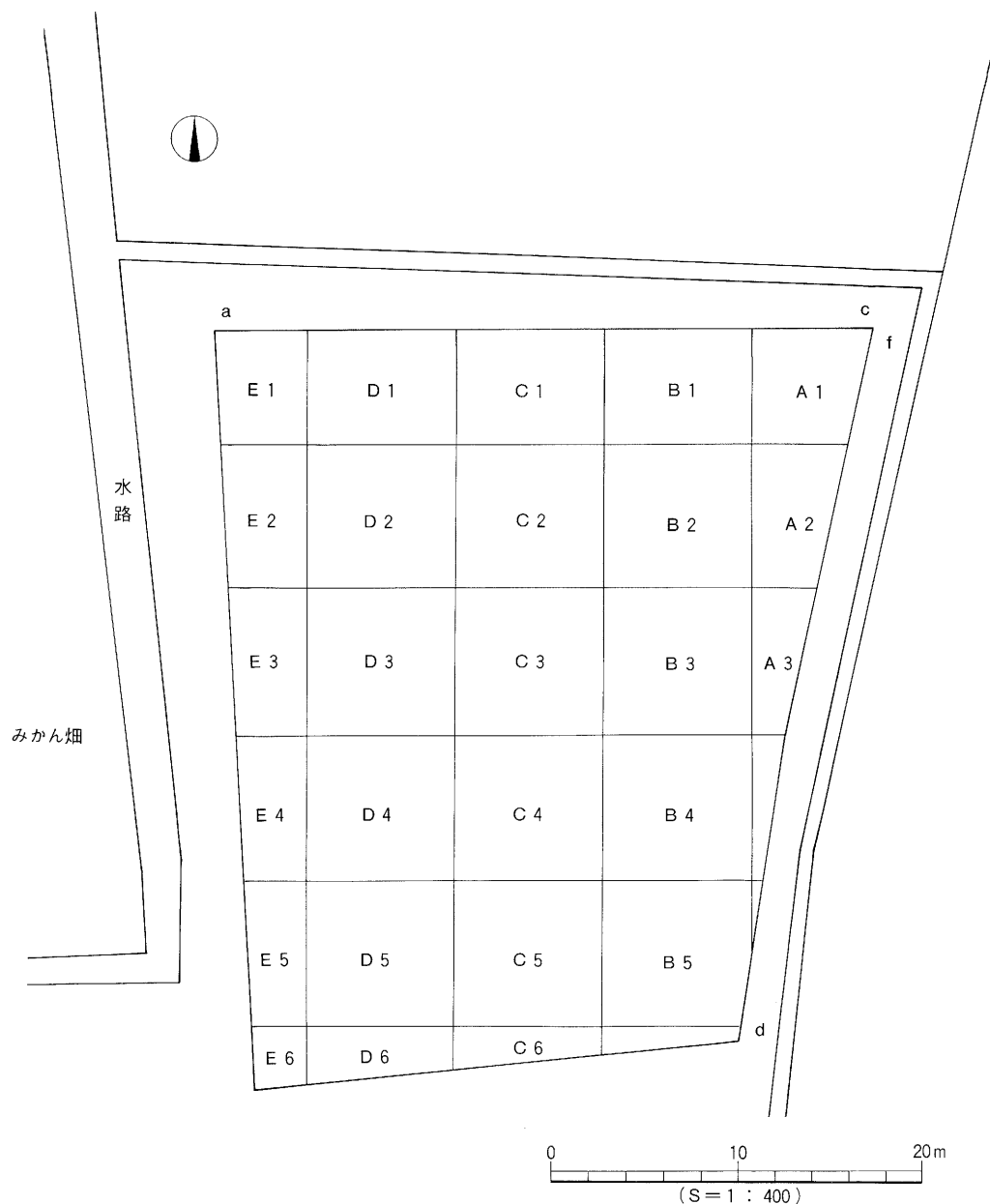
第5図 東壁土層図

## 層 位

各層の堆積状況は、西側と東側では違いが見られる。第Ⅲ層は西に厚く東に薄い、一方第Ⅳ・Ⅴ層は西に薄く東に厚くなっている。第Ⅵ層の地山である黄色土は東から西へゆるやかに傾斜し、調査地北壁の東西間では比高差30cmを測る。また、第Ⅲ層は現代の耕作土と同様に水平堆積をしており、中・近世の水田の可能性が高い。

検出された包含層は出土遺物より、第Ⅲ層は中世以降、第Ⅳ層は古墳時代～古代、第Ⅴ層は弥生時代までに堆積したものと考えられる。遺構は土層断面の観察により、第Ⅳ層上面と第Ⅴ層上面から中層にかけて掘り込まれた遺構であることを確認した。

調査に先立ち調査地の北東コーナーに任意の基準点を設け、磁北方向に4mのグリット（第6図）を設定した。グリットは東から西へA・B・C・D・E、北から南へ1・2・3・4・5・6とし、A1、A2、A3・・・として表記した。



第6図 調査地区割図

### 3. 遺構と遺物

調査地は確認調査の段階で、湧水が多いことが指摘されていた。このことをふまえたうえ、調査地の壁沿いには土層観察用兼水抜き用のトレンチを設定し、排水には万全を期して調査に臨んだ。

調査は試掘調査の結果をふまえ、第Ⅳ～Ⅵ層上面での遺構検出を目的とし、第Ⅳ層上面から遺構検出を行うことにした。第Ⅳ層の遺構検出を行ったところ、予想以上の湧水のため調査の進行状況は思わしくなく、調査の工程に支障が生じた。そこで、包含層上面の遺構検出を断念し、第Ⅵ層（地山）上面を遺構確認面として調査を行った。

なお、第Ⅳ層上面で検出した遺構については「(4)その他の遺構・遺物」で記述するものとする。

#### (1) 弥生時代

今回の調査で検出した弥生時代の遺構には、円形周溝状遺構2条と、溝状遺構4条とがある。遺物では中・後期の土器と石製品が出土している。

##### S D 35 (第8図)

調査区の東壁中央部からはじまり北西方向に流れたのち、北西方向にそのまま走る溝と、北方向に走る2条の溝とからなる。断面はゆるやかな船底状を呈し、幅1.0m、分岐部で最大幅3.0mを測る。深さ0.6m～0.9m、検出長は約10.0mである。埋土は上層で黒褐色シルトを含む砂層の堆積が見られ、溝底では灰色粗砂となっている。

出土遺物は埋土上層から主に弥生時代中期前半の土器が少量出土している。最下層の灰色粗砂からは出土していない。

##### 出土遺物 (第9図、図版8)

甕形土器 (1～7) 1・4は貼り付け口縁で1の口縁直下にはヘラ状工具による数条の沈線文を施している。2・3は折り曲げ口縁で、2の口縁直下には7～9条のヘラ状工具による沈線文が施されている。5～7は甕の底部である。5はくびれの上げ底、6・7は底部外面がややくぼむ上げ底。

壺形土器 (8) 8は頸部から大きく開く口縁部で、頸部には指頭圧痕の突帯が1条巡る。

鉢形土器 (9) 9の体部は内湾気味にたちあがり口縁部は短く外反する。

蓋形土器 (10) 底部外面がくぼんだ甕の底部を、反対にしたような形状で、つまみ部に2個並列の直径4mmの円孔が穿たれている。

時期 出土遺物より弥生時代中期前半に比定される。

##### S D 30 (第10図、図版2)

調査区南東隅での検出である。溝の一部は調査区外へのびるため、全体のプランはつかめないが、内径5m前後の円形周溝になるものと思われる。幅60cm～140cm、深さ20cmを測り、埋土は茶褐色土で、断面は逆台形状を呈する。

出土遺物は中期末の高坏が溝底から出土しているほか、弥生土器の小片が少量出土している。

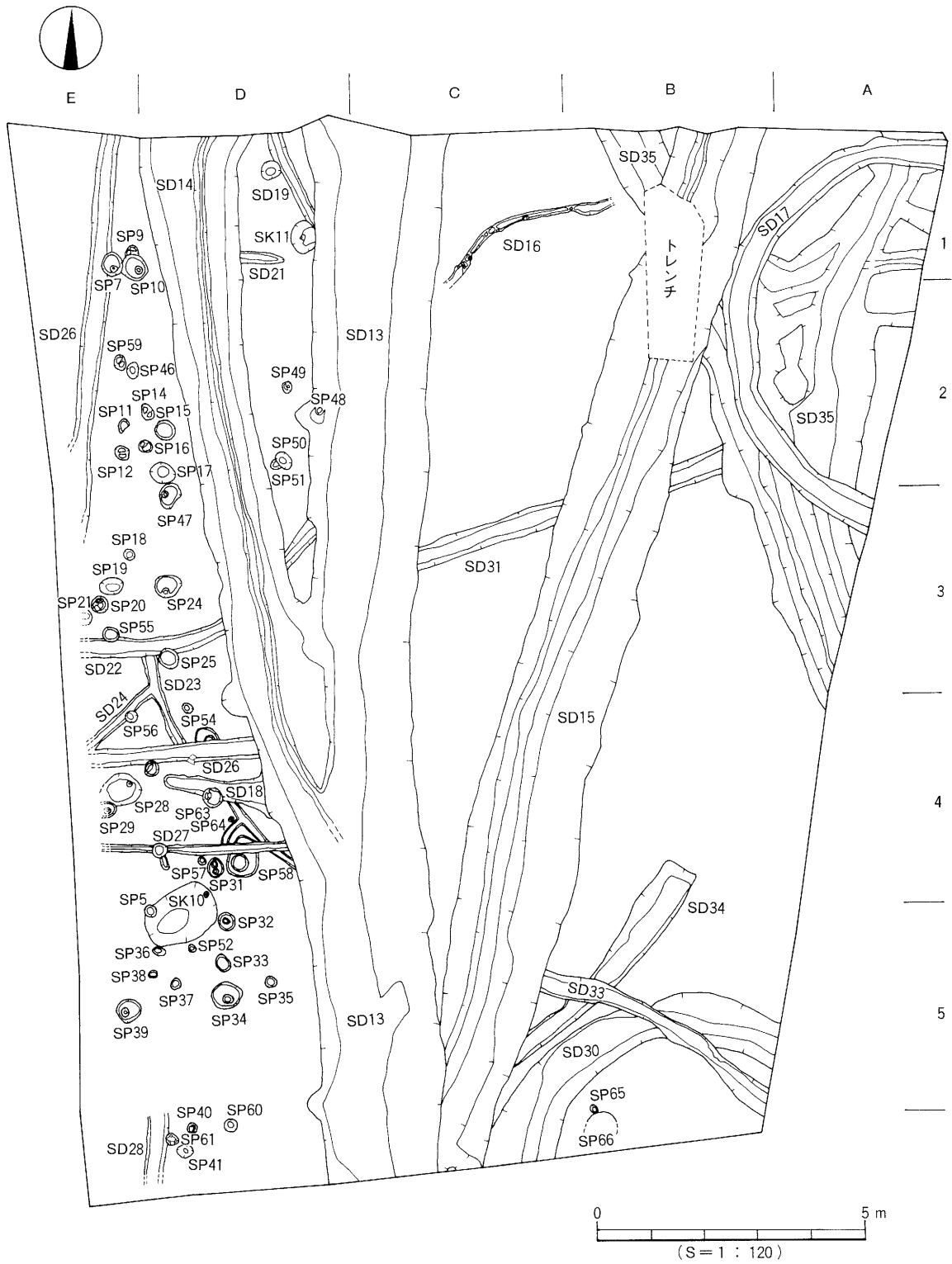
##### 出土遺物 (第11図、図版8)

甕形土器 (11) 11は甕の底部片で、底部の器壁は薄く胴部は外上方に開く。

高坏形土器 (12) 12の脚部は欠失している。坏部は外上方に開いたのち内湾する口縁部。口縁に

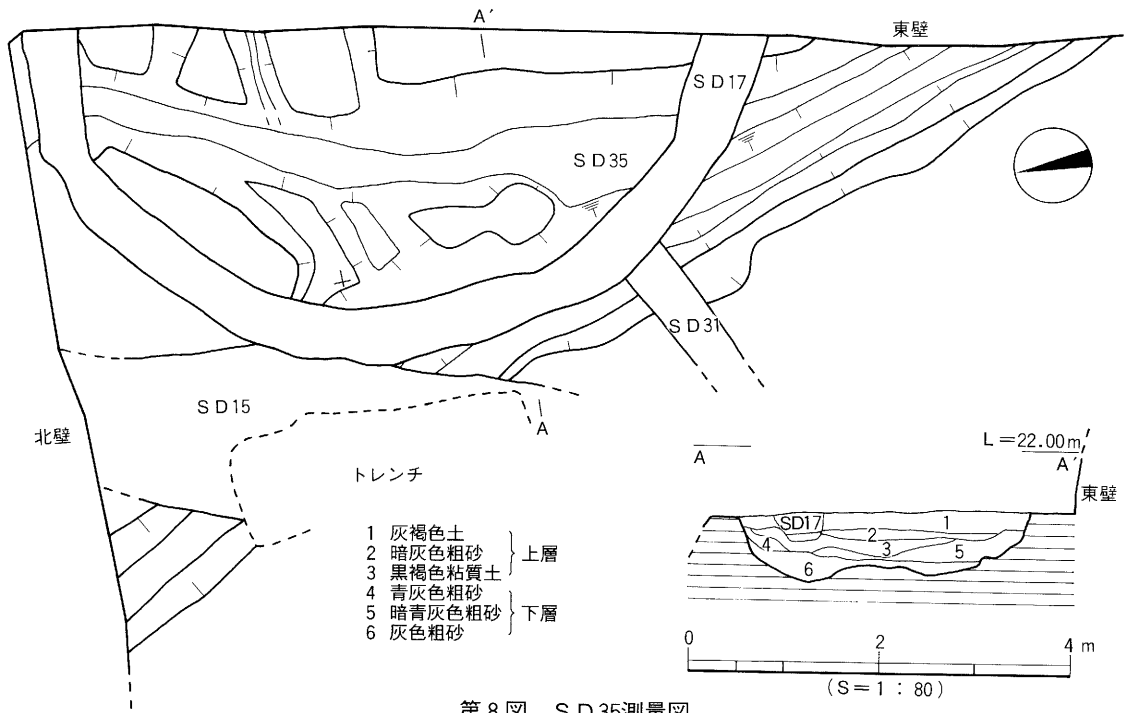


遺構と遺物

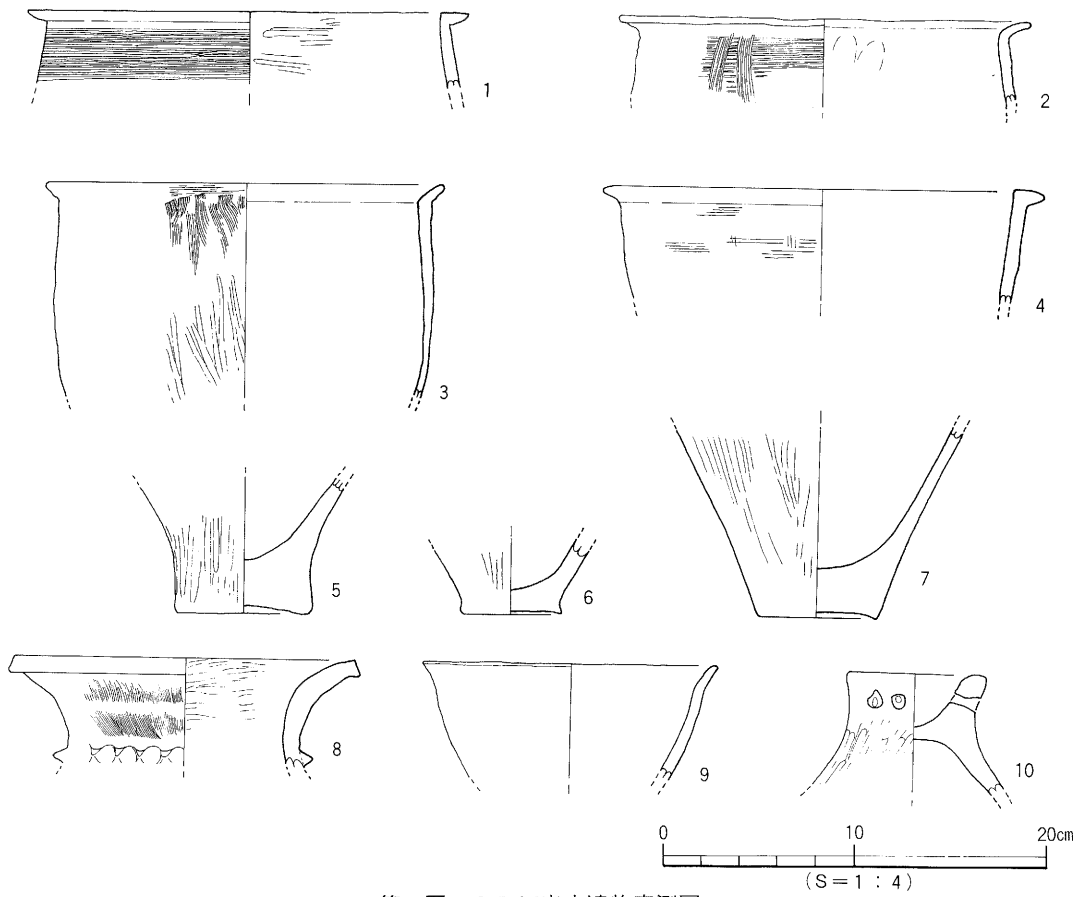


第7図 第VI層上面遺構配置図

姫原遺跡の調査



第8図 SD35測量図



第9図 SD35出土遺物実測図

## 遺構と遺物

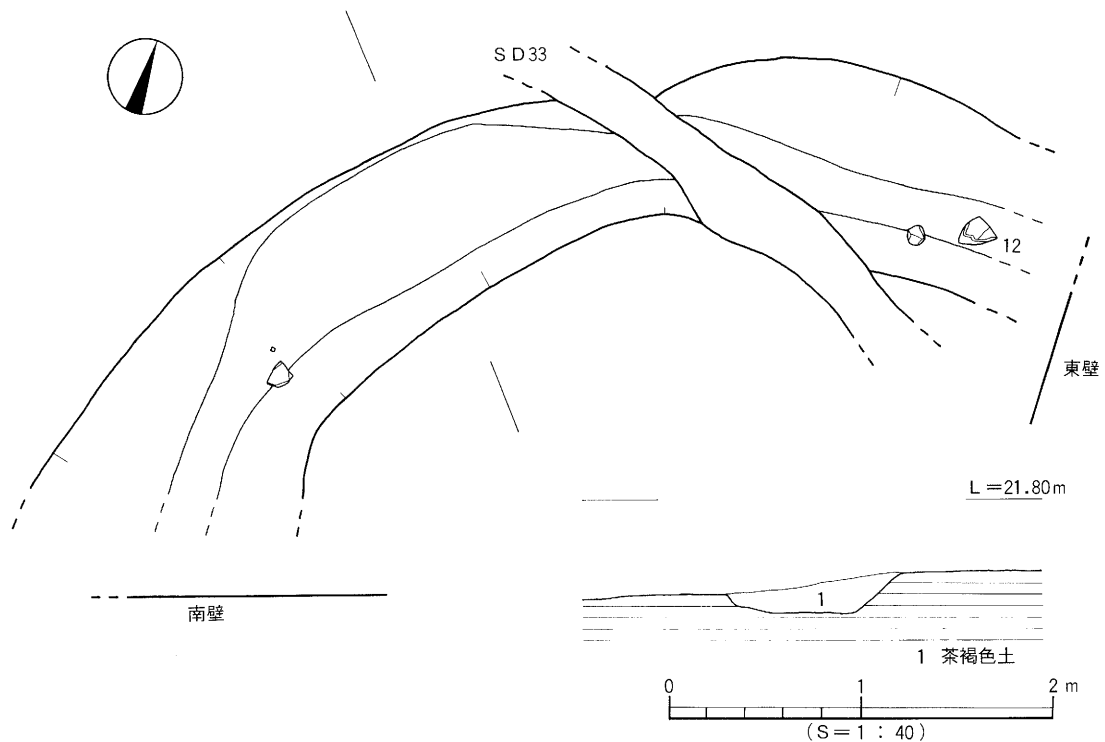
凹線文を施し、凹線文下に「ノ」字状の刺突文を巡らす。坏部外面下半はヘラミガキを施す。

時期 出土遺物より弥生時代中期末に比定される。

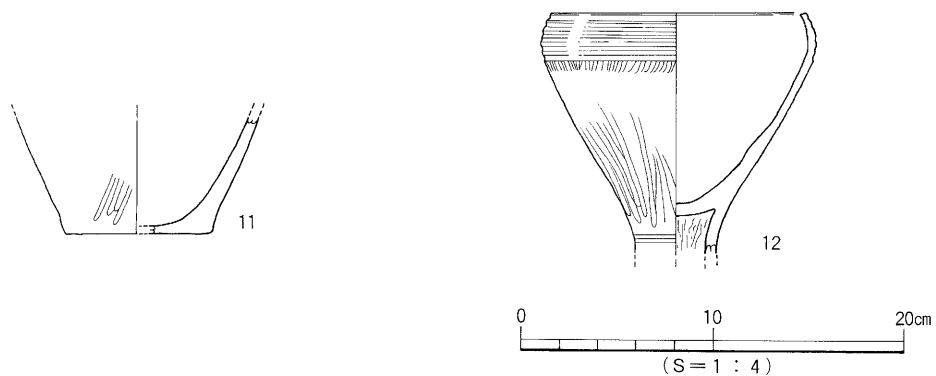
### S D17 (第12図、図版2・3)

調査区北東隅の検出である。全体を把握しえないが、約1/2が調査区外となる。円形を呈する周溝になるものと思われ、その規模は内径で6.0m~7.0mのものとみられる。溝幅0.5m~0.6m、深さ0.2m~0.3mを測る。溝の断面形態は逆台形状である。埋土は下層と上層の2層に分層でき、下層が黒灰色土、上層が灰褐色土である。遺物は下層の黒灰色土から出土している。

出土遺物は北側溝部内に集中してみられ、弥生時代後期の土器が出土した。これらの遺物は出土状況より、投棄されたものと考えられる。

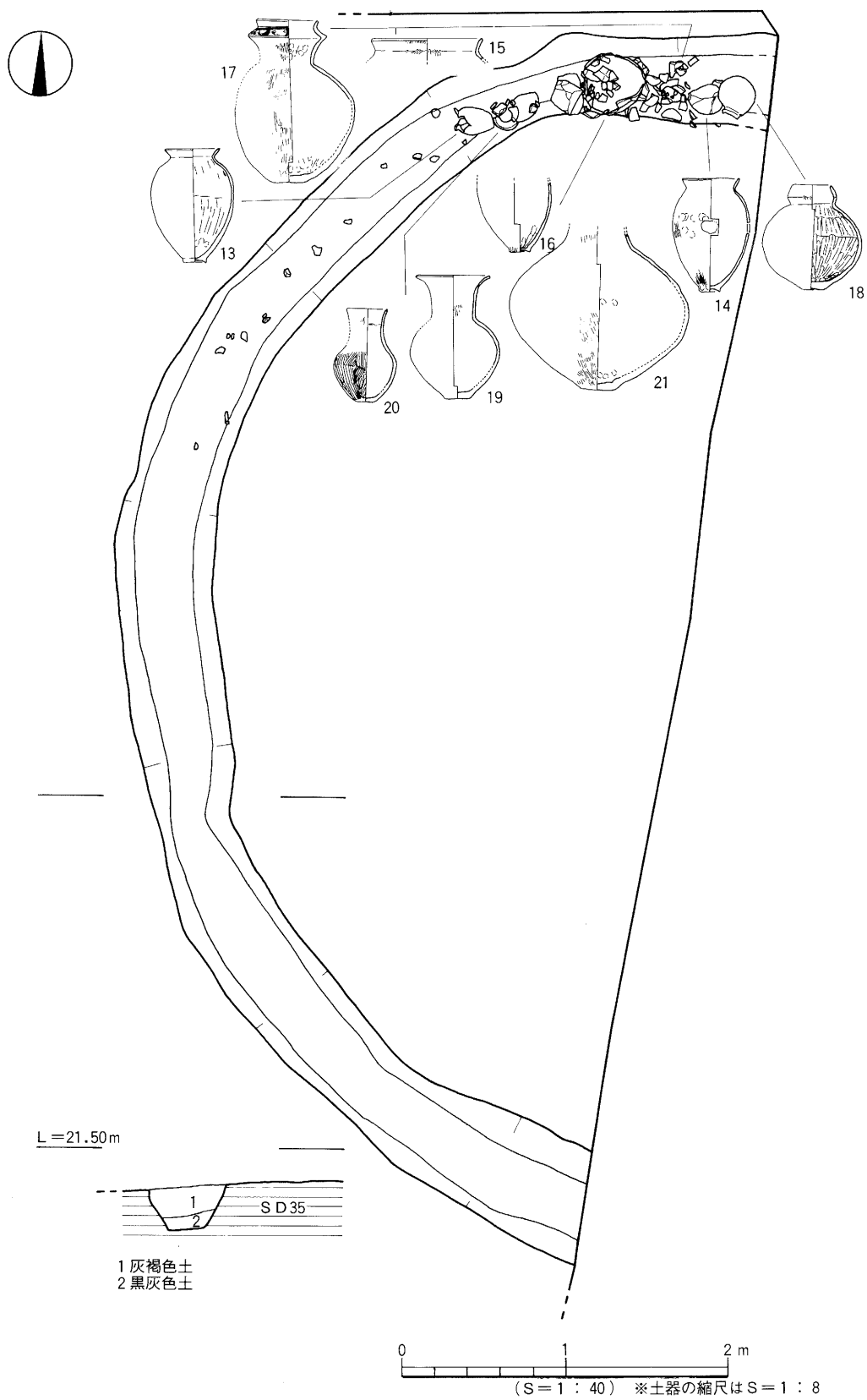


第10図 S D30測量図



第11図 S D30出土遺物実測図

姫原遺跡の調査



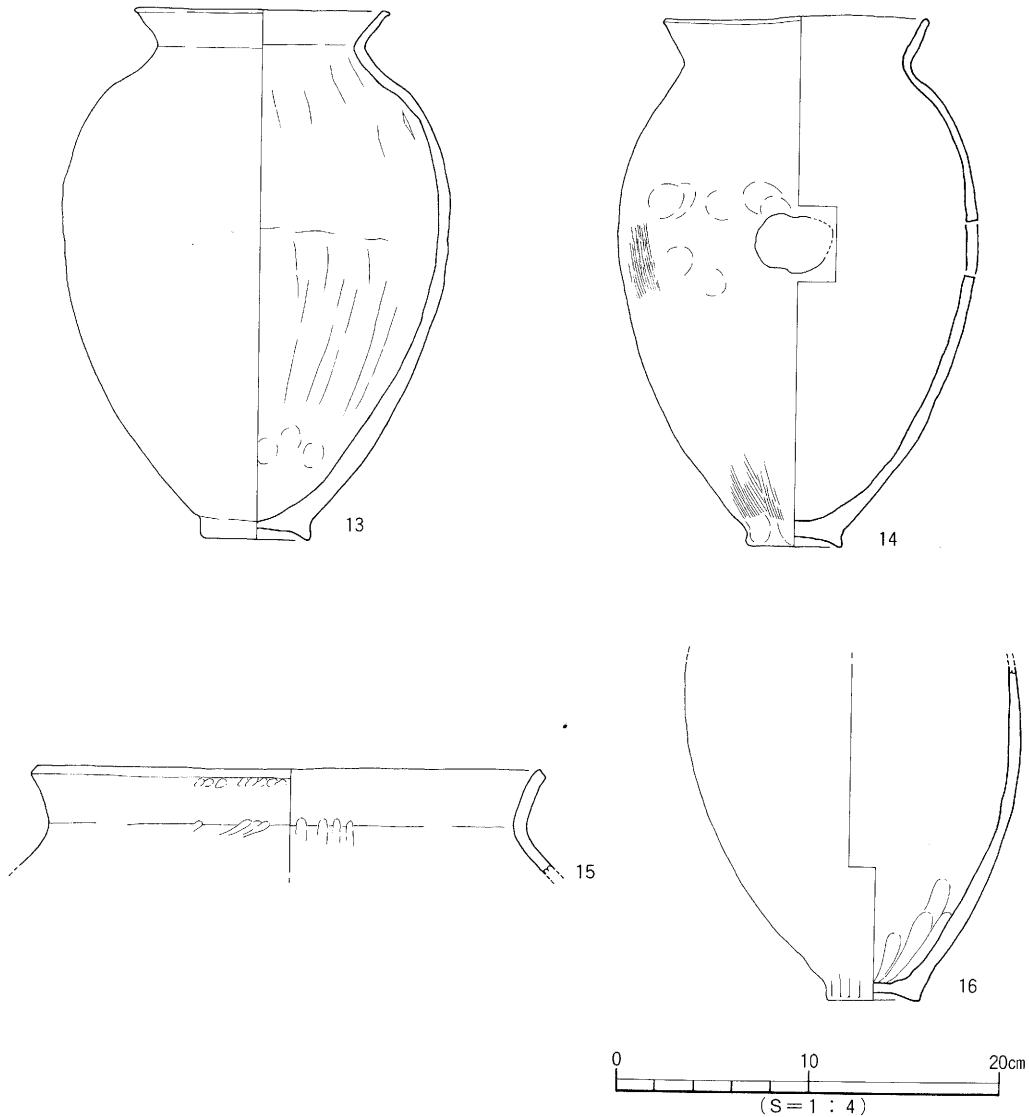
第12図 S D 17測量図

遺構と遺物

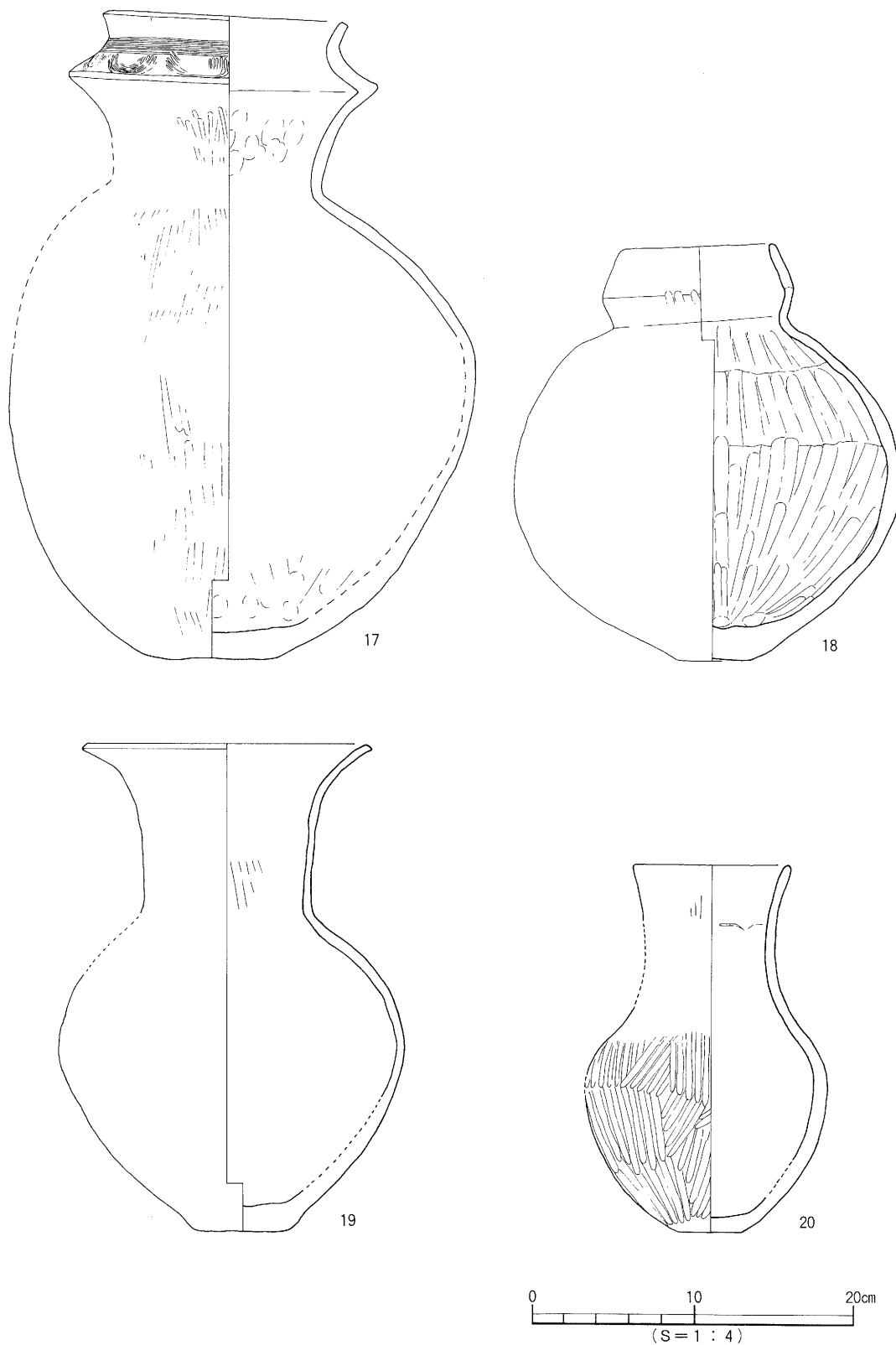
出土遺物（第13～15図、図版9～11）

甕形土器（13～16） 13・14とも口縁部は断面「く」の字状を呈し、胴部最大径を胴中位上半にもつ。14の胴中位部に焼成後の穿孔が1コ穿たれる。15は推定口径26.2cm、残高5.5cmの破片である。ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は断面「コ」の字状を呈する。16は底径5.0cm、残高17.6cmで胴部上半と口縁部を欠失している。

壺形土器（17～21） 17・18は複合口縁壺、19～21は長頸壺である。17は口径14.2cm、器高40.8cmを測る。口縁拡張部は弓状にそり、5本の横沈線文と弧文が施される。胴部最大径を胴中位にもつ。18は口径9.0cm、器高26.0cmを測る。口縁拡張部は内傾してたちあがる。調整は胴内面に強い縦方向のナデが施される。19は口径17.2cm、器高30.7cmを測る。大きく開く口縁部。胴部最大径を中位にもち、底部はやや突出する。調整は内外面ともナデ調整である。20は口径9.8cm、器高23.2cmを測る。ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は丸い。調整は胴部外面にヘラミガキが施されている。21

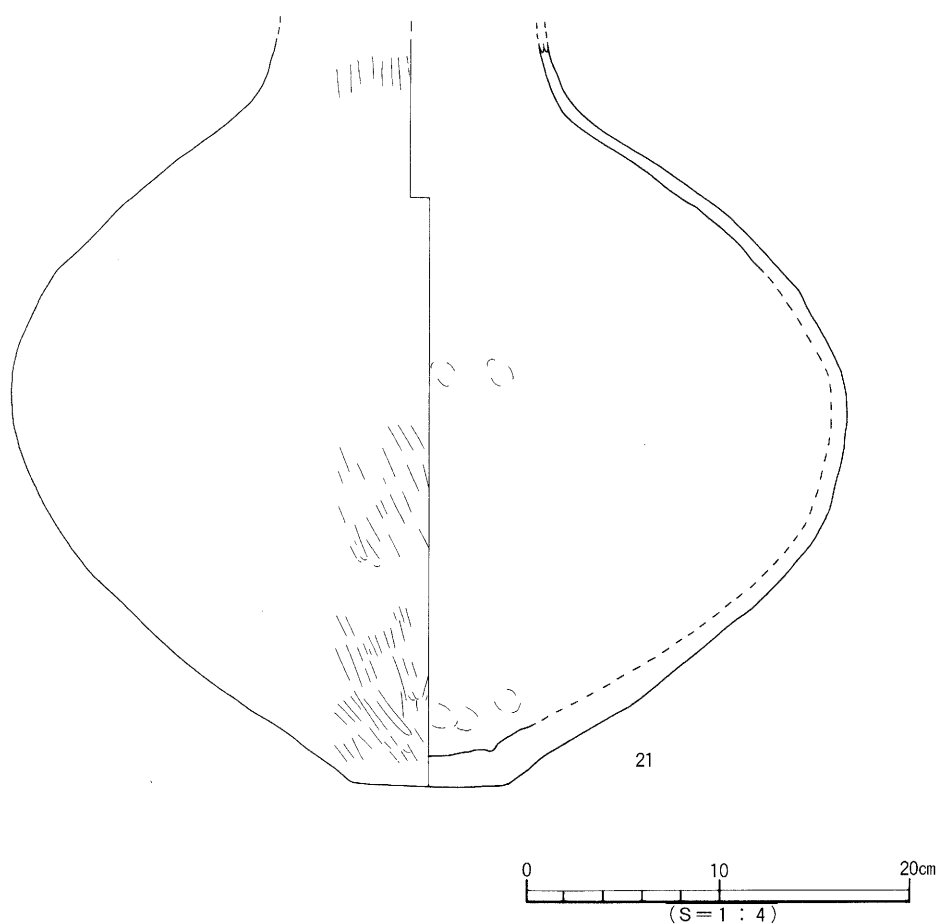


第13図 SD17出土遺物実測図 ①



第14図 SD17出土遺物実測図 ②

## 遺構と遺物



第15図 SD17出土遺物実測図 ③

は底部からの残高39.3cmを測り、頸部と口縁部は欠失している。偏平な胴部にやや突出する底部。

時期 出土遺物より弥生時代後期後葉に比定される。

### SD16 (第16図)

調査区の北中央部での検出で、平面形は弓状を呈する。幅10cm～20cm、深さ10cm、検出長3.6mを測る。断面形は船底状を呈し、埋土は黒灰色土である。

出土遺物はほぼ完形の土器1点のほか、少量の土器片が出土している。

### 出土遺物 (第17図、図版11)

壺形土器 (22) 底部からの残高6.8cmで胴部上半以上が欠失している。偏平な胴部に突出する底部をもつ。調整は外面にミガキが施されている。

鉢形土器 (23) 狭く突出する不安定な底部。体部は内湾し、口縁部は大きく外反する。

時期 出土遺物より弥生時代後期後葉に比定される。

### SD19 (第18図、図版4)

調査区北側の検出で南北方向の小さな溝である。溝の南は中世の溝であるSD13に切られている。

姫原遺跡の調査

北側は調査区外へと伸びる。規模は、検出長1.5m、幅0.25m～0.30mを測る。断面形はU字形を呈し、埋土は黒灰色土である。平面、断面形態と埋土色からSD22とつながる可能性がある。

出土遺物は弥生土器の他、石錘が1点出土している。

出土遺物 (第19図、図版11)

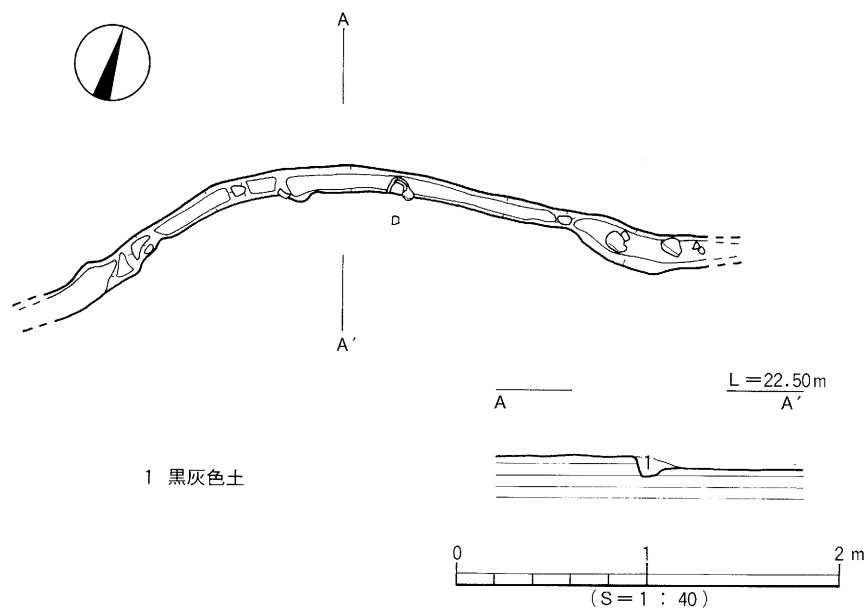
壺形土器 (24) 口径10.5cm、器高20.8cmを測る完形の壺である。平底の底部で体部は球形を呈し肩が張らない。頸部はやや外反気味にたちあがり、口縁部は内湾してたちあがる。口縁端部は細る。

石錘 (25) 北壁の土層断面から出土した有溝石錘である。砂礫岩製で重量は395gを測る。片面に十字の浅い溝が走っている。

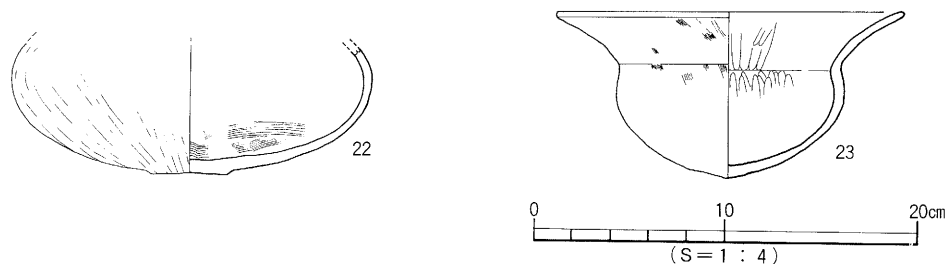
時期 出土遺物より弥生時代後期後葉に比定される。

SD22 (第20図、図版4)

調査区中央部で検出している。西から緩やかに北東に走り、途中SD14とSD13に切られ途切れる。規模は、検出長約5.0m、幅0.25m～0.30m、深さ0.30m～0.35mを測る。断面形は「コ」字状であるが、溝中央部では段を有し二段掘りとなっている。埋土は黒灰色土の単一層である。出土遺物は壺、甕、鉢が出土している。



第16図 SD16測量図



第17図 SD16出土遺物実測図

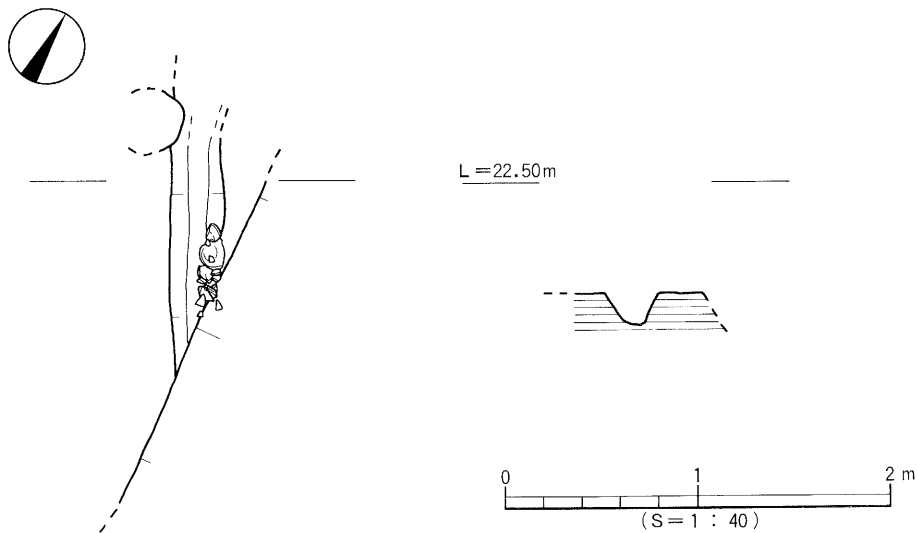


遺構と遺物

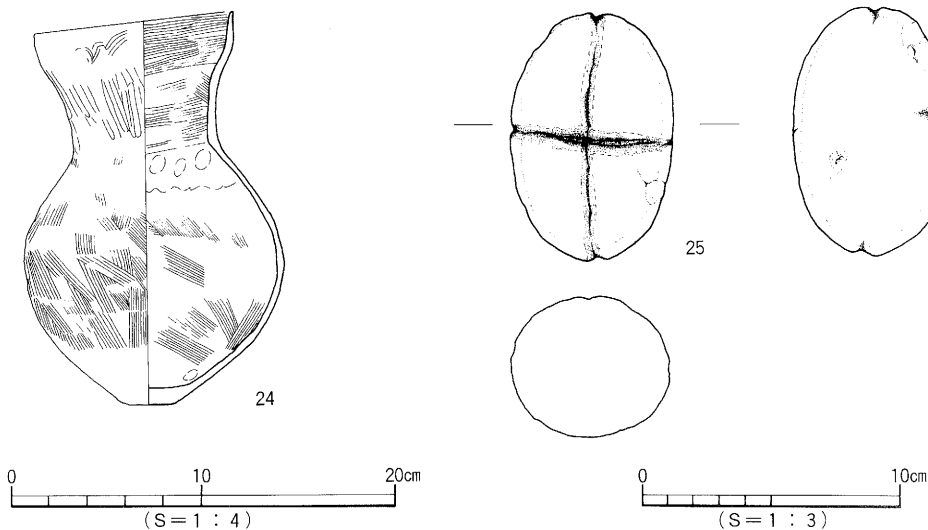
出土遺物 (第21図、図版11)

甕形土器 (26~29) 26・27は底部から体部までの破片で26が残高13.2cm、27は残高13.5cmを測る。26・27とも底部はやや突出し、体部は外傾したのち内湾してたちあがる。調整は外面ハケ目、内面はハケ目のちナデ調整を施している。27の内面は強いナデ調整が看取される。28・29は底部片で29の外面にはヘラミガキが施される。

壺形土器 (30~34) 30・31は複合口縁壺、32は広口壺である。30は頸部から口縁部までの遺存で口径9.9cm、残高11.1cmを測る。器壁は薄い。長い頸部にはヘラ状工具による10~12条の沈線文を施し、口縁拡張部には波状文を施す。31は推定口径9.2cm、残高3.1cmで、口縁拡張部に波状文が施される。32は推定口径11.4cm、残高14.8cmである。張りの少ない肩部から、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。調整は口縁端部はヨコナデ、その他内外面はハケ目調整が施される。33は底径5.0cm、残高9.3cm

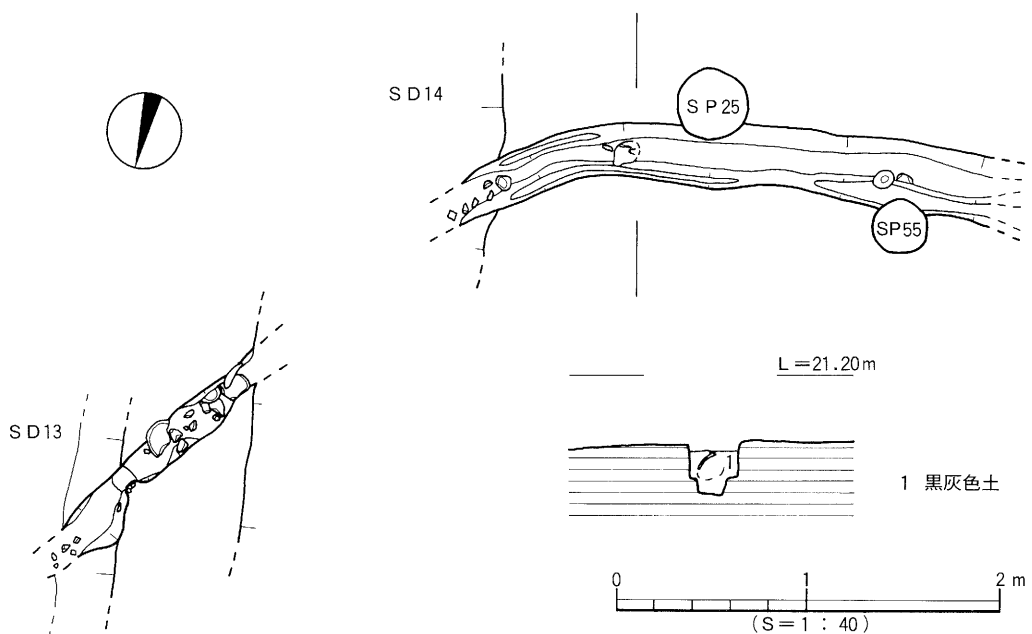


第18図 SD19測量図

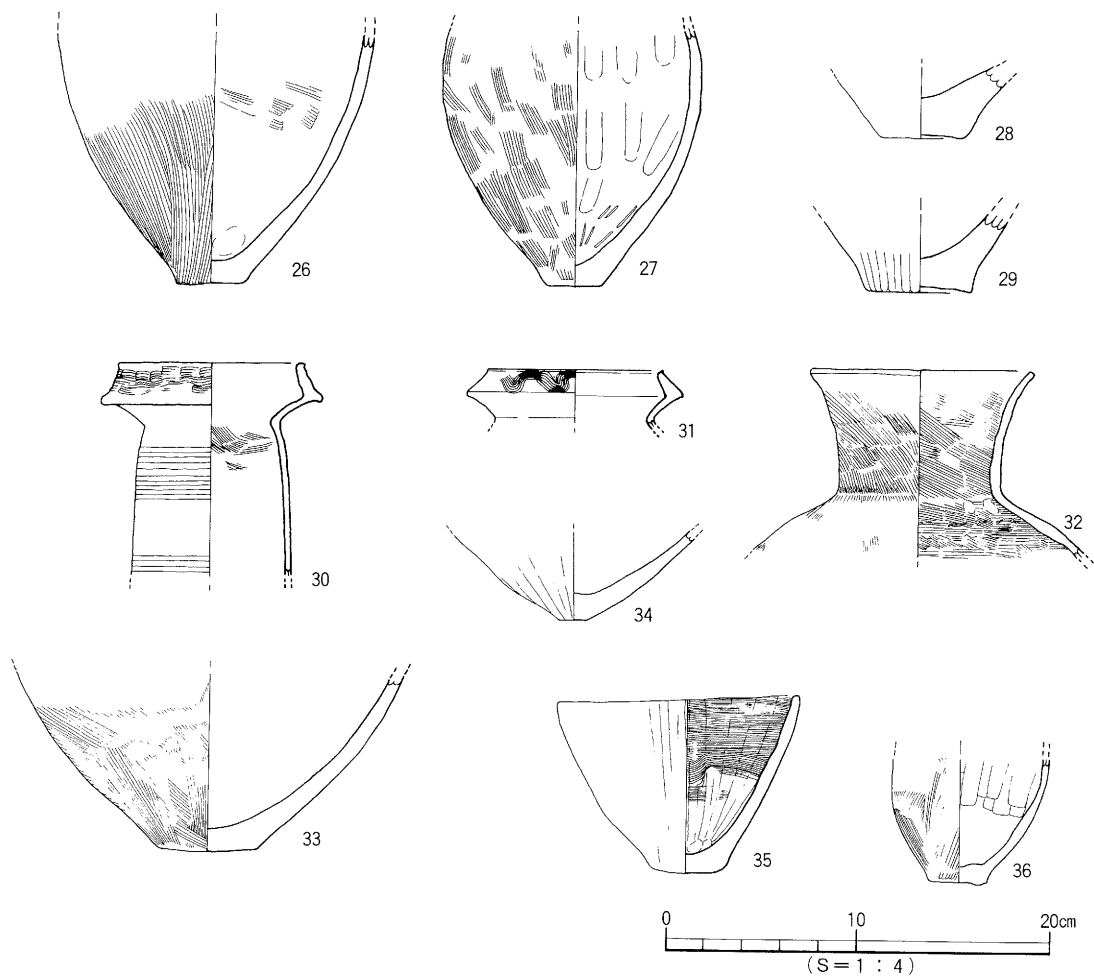


第19図 SD19出土遺物実測図

姫原遺跡の調査



第20図 SD22測量図



第21図 SD22出土遺物実測図

## 遺構と遺物

を測る。底部は平底。調整は外面ハケ目、内面はナデ調整である。34は尖る底部で、底径は1.5cmを測る。調整は外面ヘラケズリののちナデ調整、内面はナデ調整である。

鉢形土器 (35・36) 35は口径12.5cm、器高9.4cmを測る。やや突出する底部から外傾して内湾気味にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。調整は内面ヘラケズリののち横方向のハケ目調整を施す。底部内面には指頭痕を残す。36は底部から体部までの出土で口縁部は欠失している。残高は6.7cmを測る。調整は外面ハケ目調整、内面は縦方向のヘラケズリが施されている。

時期 出土遺物より弥生時代後期後葉に比定される。

## (2) 古墳時代

古墳時代の明確な遺構はS D15の溝1条である。

### S D15 (第22図、図版5)

調査区の南壁中央部から北東方向に縦断する溝である。規模は、検出長19.0m、幅1.8m~2.1m、深さ0.5m~0.6mを測る。両岸はなだらかに落ち込むが、溝底は狭く、断面形は「コ」字状を呈する。埋土は上層、中層、下層に分層される。上層は灰色砂を多く含む黒褐色土、中層は黒灰色土、下層は灰色粗砂層である。遺物は中層の黒灰色土から多く出土しており、下層の灰色粗砂からは土器の小片がわずかに出土するだけである。遺物の出土状況は、溝の中央部より北側と南壁付近に出土が多くみられた。出土した遺物は土師器、須恵器の土器類のほか、管玉、種子、木片、獣骨が出土している。出土した獣骨の種類は馬、鹿である。

### 出土遺物 (第23~29図、図版12・13)

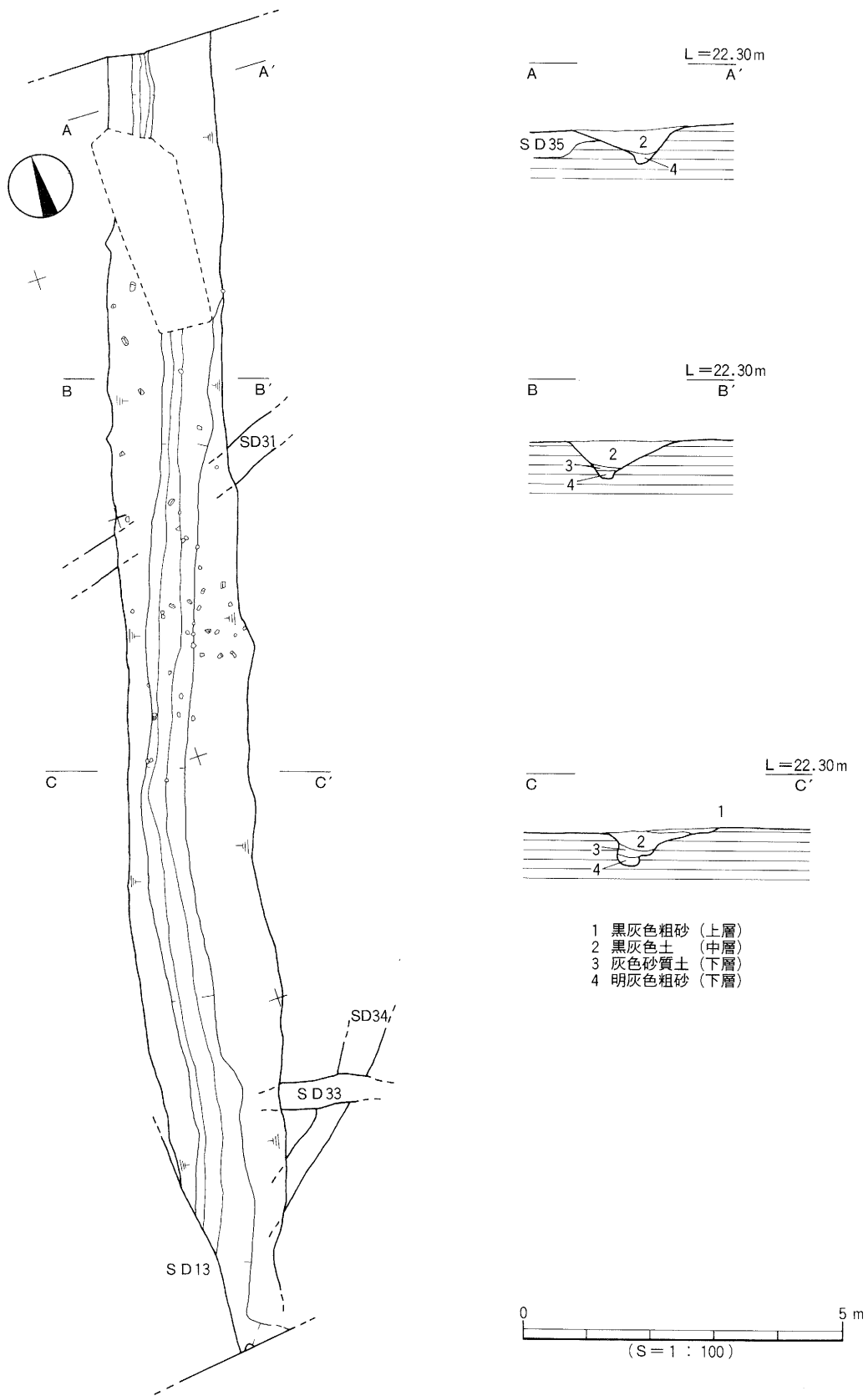
#### (須恵器)

蓋 (37) 残高1.7cmの破片で、天井部に宝珠つまみを有する。

坏身 (38~47・72) 38のたちあがり、短く内傾し端部は丸くおさめる。受部は水平にのびる。39は推定口径11.6cm、残高3.9cmである。たちあがり短く内傾し、受部は上方にのびる。40は推定口径12.4cm、器高4.5cmである。たちあがり短く内傾し、端部は丸くおさめる。底部は平坦。41は推定口径13.6cm、器高3.1cmである。たちあがり短く、受部は上方にのびる。底部は平坦で安定性に富む。42は推定口径9.2cm、器高4.0cmである。たちあがり短くのびて内傾する。底部は平坦。43は口径9.0cm、器高3.2cmである。たちあがり短く内傾し受部は水平にのびる。底部は平坦。44は口径11.2cm、器高4.1cmである。たちあがり内傾して上方にのびる。端部は丸い。底部はやや丸みをもつ。45は推定口径10.2cm、器高3.4cmである。底部は平坦で、口縁部は外反する。46は底部で残高1.7cmである。高台は低く断面は方形。底部外面に「×」のヘラ記号を有する。47は推定口径13.6cm、底径13.2cm、器高4.1cmである。高台は低く体部は外上方に開く。72のたちあがり内傾して、短くのびる。

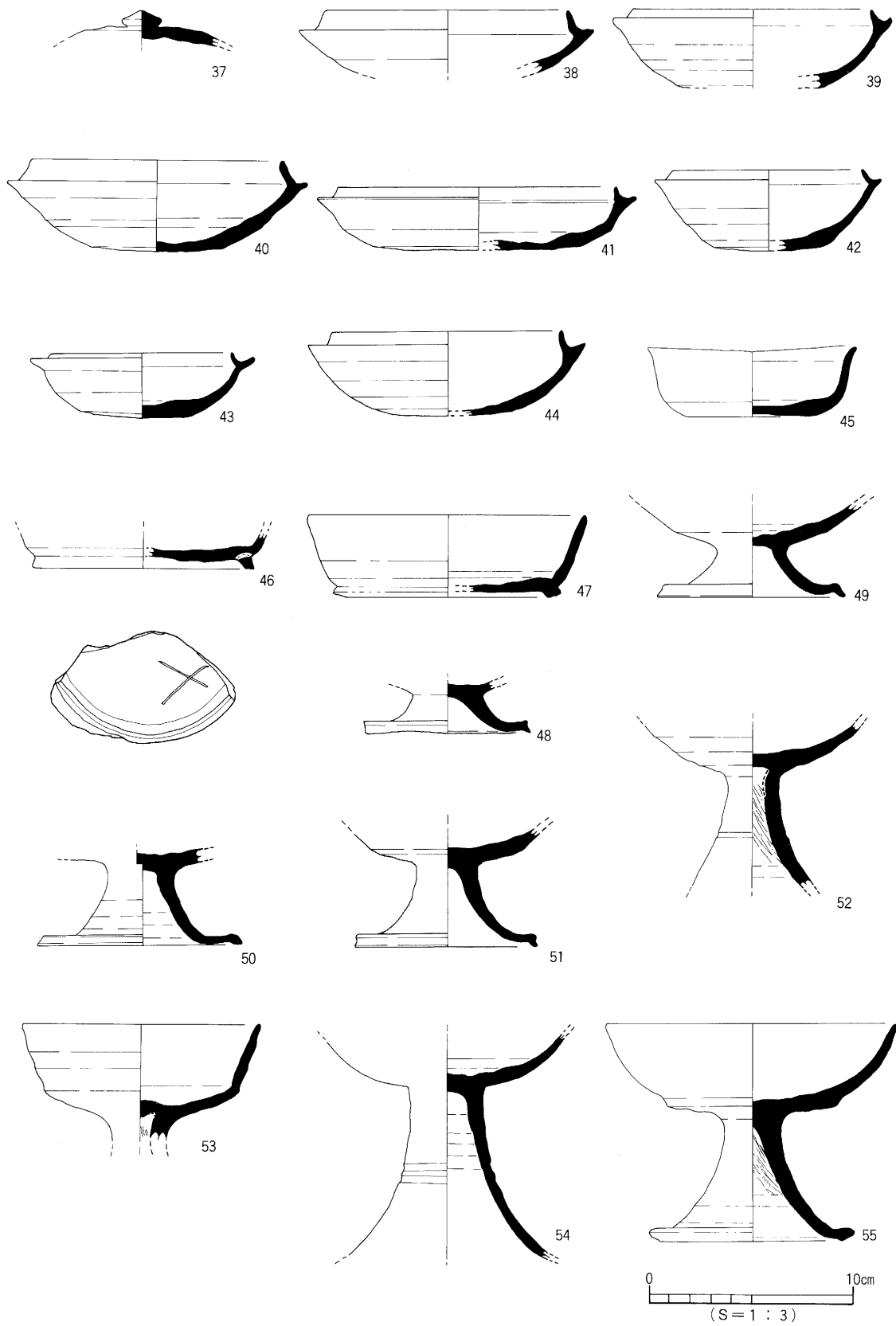
高坏 (48~55) 48は脚部で坏部は欠失している。脚は短脚で、裾部は水平にのびる。端部は下方に屈曲して接地する。49は残高4.6cmで脚は短脚である。50は残高4.7cmで裾部は水平にのびて下方に屈曲して接地する。51は残高5.8cmで裾部は外方に開く。裾端部は下方に屈曲して接地する。52は残高8.2cmで脚裾部と坏部上半は欠失している。脚は長脚で、中央部に1条の凹線が巡る。53は脚部が欠失している。底部から外上方にたちあがる口縁部。口縁端部は丸い。54は脚端と坏部上半が欠失している。脚部には2条の凹線を巡らしている。55は推定口径14.3cm、器高10.7cmを測る。脚裾は短く水平にのびる。坏底は平坦で、外湾してたちあがる坏部である。

姫原遺跡の調査



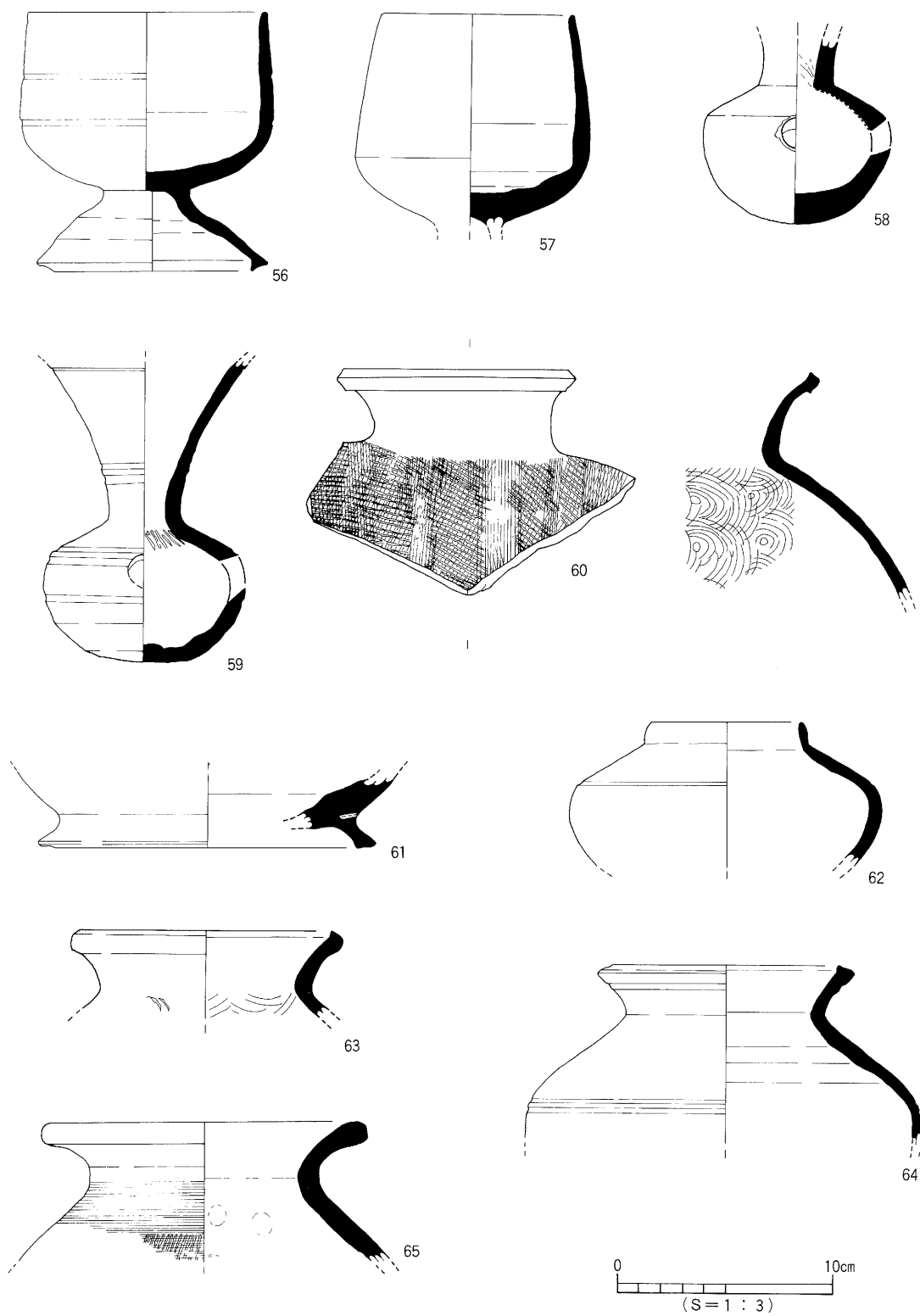
第22図 SD15測量図

遺構と遺物

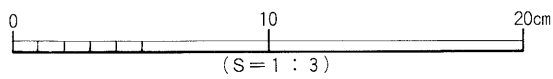
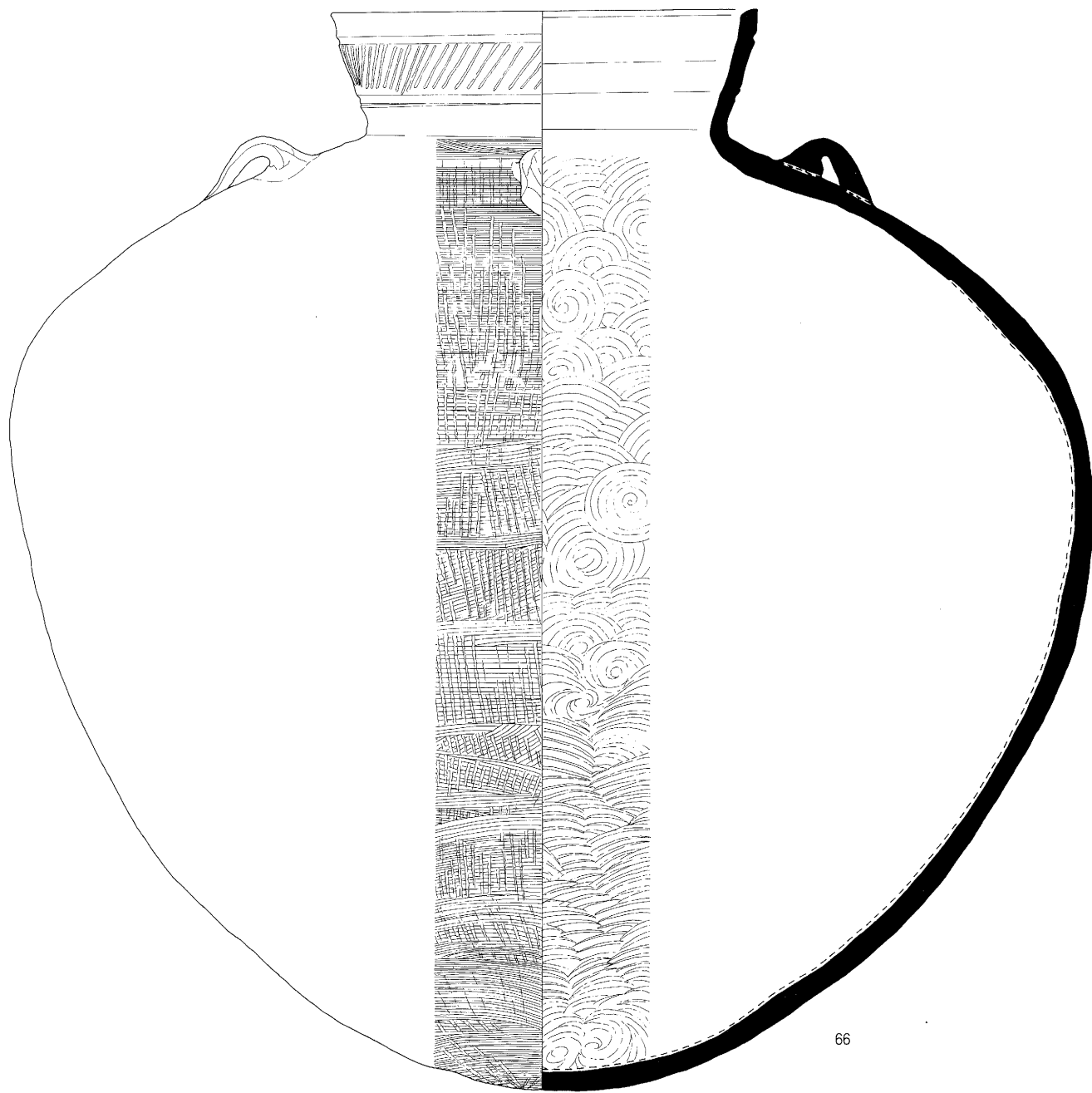


第23図 SD15出土遺物実測図 ①

姫原遺跡の調査

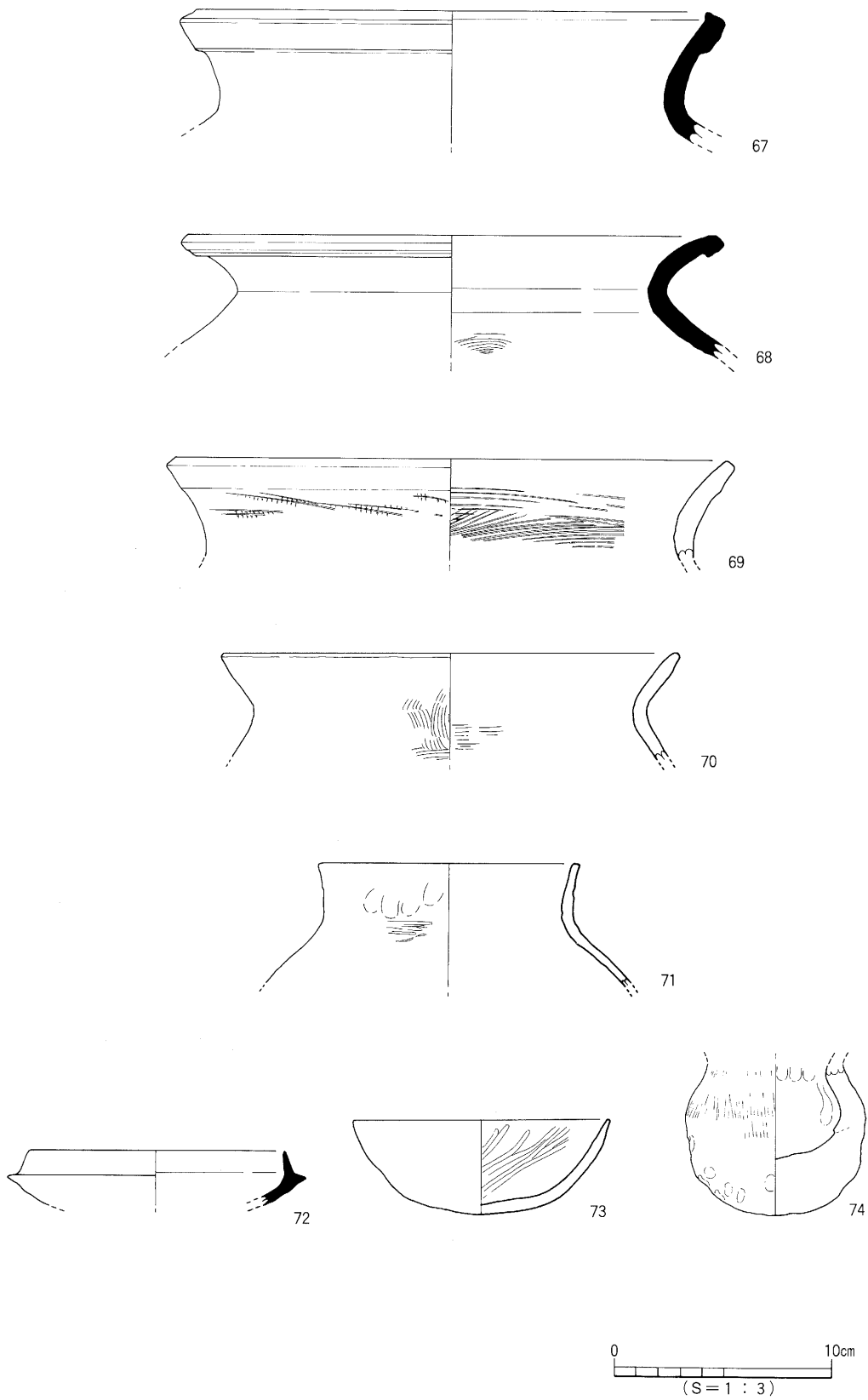


第24図 S D 15出土遺物実測図 ②



第25図 S D 15出土遺物実測図 ③

姫原遺跡の調査



第26図 S D15出土遺物実測図 ④



遺構と遺物

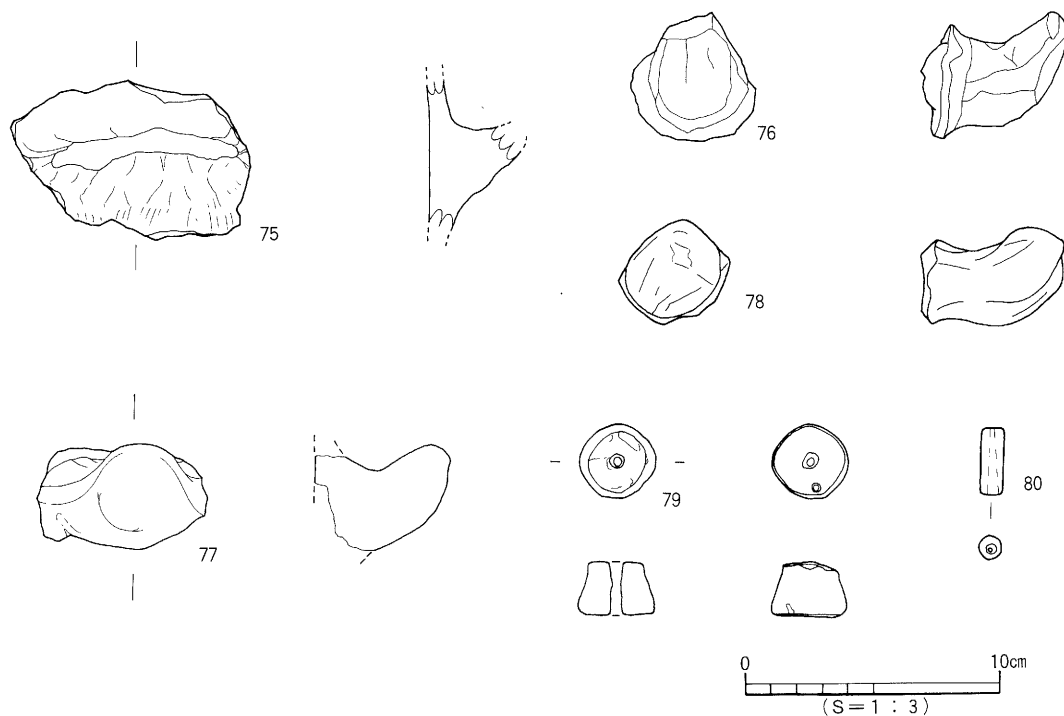
台付鉢 (56・57) 56は推定口径11.0cm、器高12.0cmを測る。脚は「ハ」字状に広がり、脚端は内に屈曲して接地する。体部に2条の沈線が施される。57は残高9.8cmで脚部は欠失している。

甗 (58・59) 58は残高8.6cmで口縁部は欠失している。体部内には穿孔時の粘土塊が残る。59は残高13.9cmで口縁端部は欠失している。体部は球形で口縁部はラッパ状に開く。頸部に2条の沈線が施されている。

横瓶 (60) 60は横瓶と思われる破片である。口縁端部は上下に拡張し外端は稜をもつ。体部外面に格子状のタタキを行ったあと縦位のカキ目調整を施される。

壺形土器 (61~66) 61は長頸壺の底部である。推定底径15.6cm、高台高は1.2cmを測る。高台は「ハ」の字に開き内で接地する。62は短頸壺で底部は欠失している。口縁部はやや内傾し上方に短くのびる。口縁端部は肥厚して丸くおさめる。肩部には1条の沈線を巡らしている。63は口径12.4cm、残高は4.1cmである。口縁端部は内に肥厚する。64は推定口径10.4cmである。体部肩に2条の沈線、口縁部に1条の沈線を施す。口縁端部は内に肥厚し中央に稜をもつ。65は残高6.5cmの破片で口縁端部は丸く肥厚する。66は調査区南壁のSD15土層断面の上層中から出土したものである。口径20.0cm、器高51.0cmを測る。肩部1/2が欠失していて全容は不明であるが肩上部に縦位の耳が4方向に貼付される四耳壺と思われる。底部は丸く、肩の張る体部である。口縁部には2条の沈線で区画されたのちヘラ状工具による斜位の刺突文が施される。

甕形土器 (67・68) 67は推定口径23.2cm、残高6.1cmを測る口縁部片である。端部は肥厚して丸い。68は推定口径24.9cm、残高5.7cmである。口縁端部は下方に肥厚して稜をもつ。



第27図 SD15出土遺物実測図 ⑤

姫原遺跡の調査

(土師器)

甕 (69・70) 69・70は口縁部の破片である。69の口縁端部は断面「コ」字状を呈する。70の口縁部は外方に開き、口縁端部は丸くおさめている。

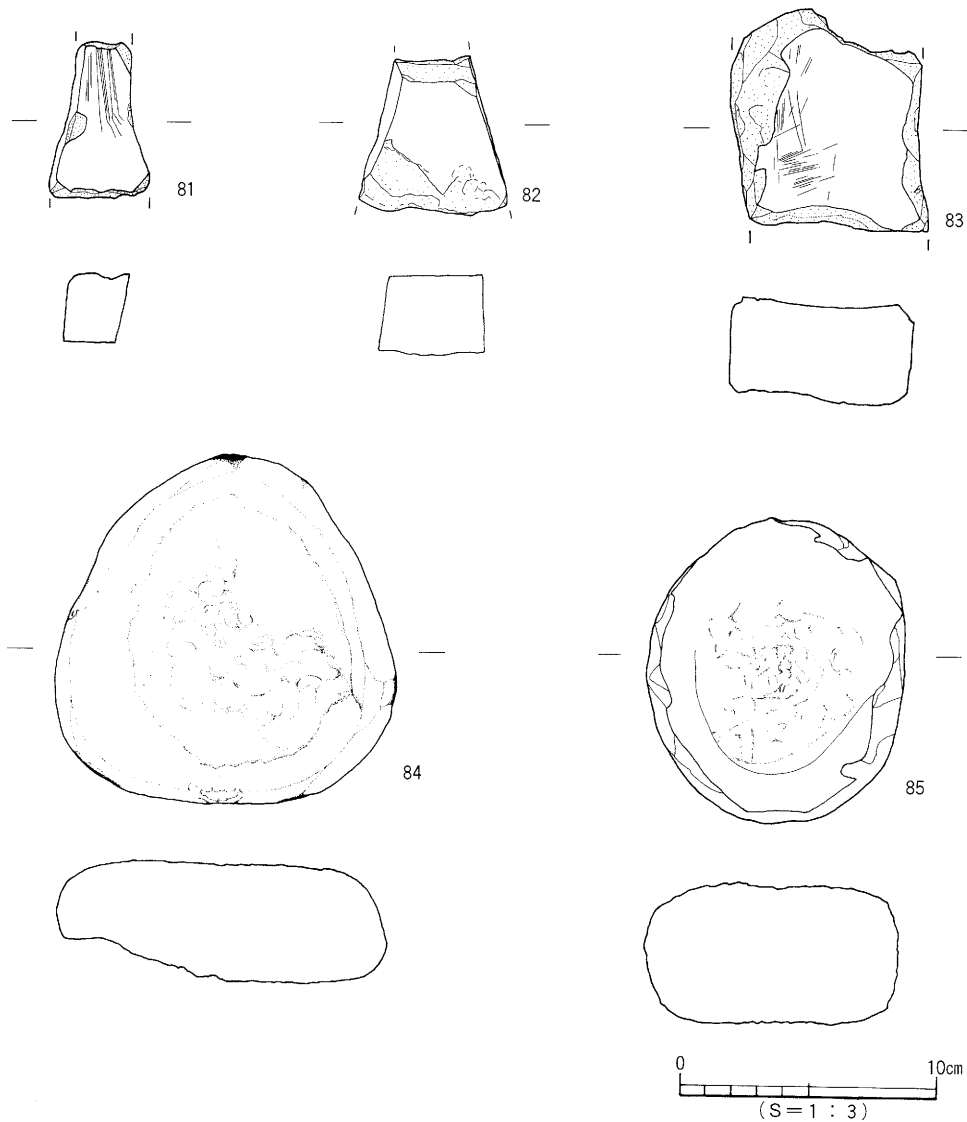
壺 (71) 71は外傾して上方にたちあがる口縁部である。

鉢 (73) 73は口径11.8cm、器高4.4cmを測る。底部は丸く口縁端部は先細る。

手捏土器 (74) 口縁部は欠失しており、残高7.0cmを測る。器壁は厚く体部外面に赤色顔料が付着している (肉眼観察)。

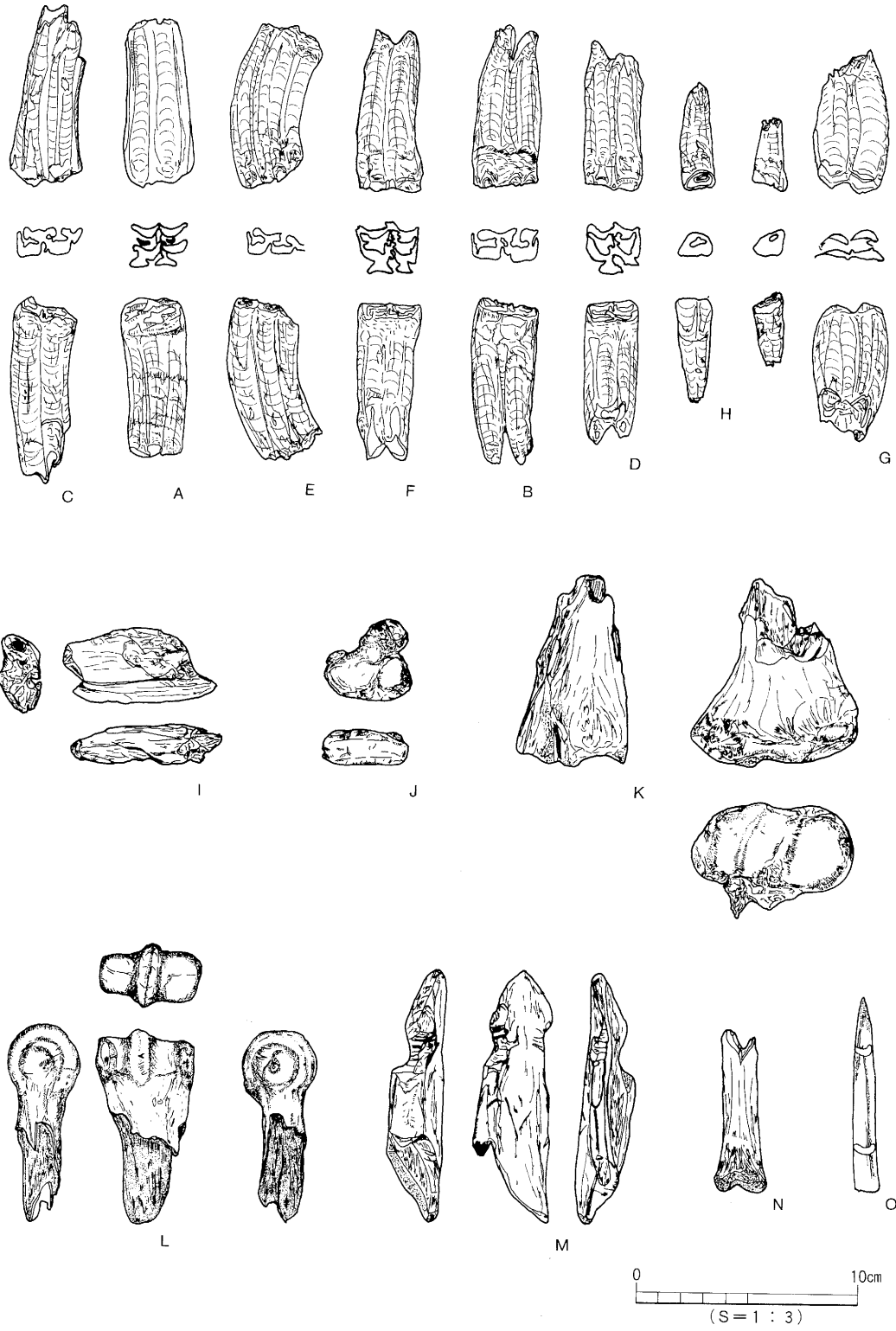
甌 (75~78) 75~78は把手である。75・77は横に偏平で、76・78は棒状である。

不明土製品 (79) 79は断面形が台形を呈する。中心に直径2mm~3mmの孔が穿たれる。紡錘車か。



第28図 S D15出土遺物実測図 ⑥

遺構と遺物



第29図 SD15出土遺物実測図 ⑦

(石製品)

管玉 (80) 80は長さ2.6cm、幅0.9cmの碧玉製である。

砥石 (81~83) 81~83は凝灰岩製の砥石である。

凹石 (84・85) 84は緑色片岩製、85は砂岩製である。

(獣骨)

馬 (A~M) A~Fは成馬の臼歯、Gは若馬の臼歯である。Hは切歯。Iは下顎、Jは橈骨、Kは尺骨、Lは中手骨または中足骨、Mは馬または牛の四肢骨である。斧による解体痕が看取される。

鹿 (N・O) Nは脛骨、Oは筭と思われる。

時期 出土遺物より古墳時代終末(7世紀前半~後半)に比定される。

(3) 中世

S D13 (第30図、図版6)

調査区の中央を南北に走る溝である。途中S D14とに分岐する。検出規模は幅2.1m~2.4m、深さ0.4m~0.5m、長さ20mを測る。断面形は舟底状を呈し、埋土は砂と粘土の互層である。出土遺物は土師器、瓦質土器、貿易陶磁器が出土している。

出土遺物

(土製品)

器台 (86) 86は口縁部の小片である。口縁端外面に櫛状工具による波状文が施されたのち直径2cm程の粘土が貼付される。貼付された粘土外面には円形の沈線が施される。

坏 (87) 87は須恵器で脚はわずかに短く開き水平に接地する。

土師器坏 (88~98) 88の底部は欠失している。口縁端部は短く外傾し丸くおさめる。89~95の底部は回転糸切りである。89は口径11.2cm、器高2.9cmを測る。体部は外上方に開き口縁端近くで屈曲し短く上方にのびる。90は口径12.0cm、器高3.3cmを測る。口縁端部は丸くおさめる。91は口径11.9cm、器高2.6cmを測る。92・93の口縁は欠失している。それぞれ残高は2.4cmである。94の口縁端部は尖り気味。95は口縁端直下外面に稜をもつ。96は底径6.9cm、残高1.0cmを測る。底部外面はハケ状工具により調整され切り離し痕跡が見られない。内面はナデ調整である。色調は内面が白色、外面は燻焼成され暗灰色で瓦質のようにいぶし銀を呈する。97・98の底部は糸切りである。97・98とも底部内面には成形時の段を明瞭に残すが中央はナデ調整が施され同じ作りである。97の色調は内外面とも白色であるが98は外面が白色、内面が暗灰色で96の外面と同様ないぶし銀を呈している。

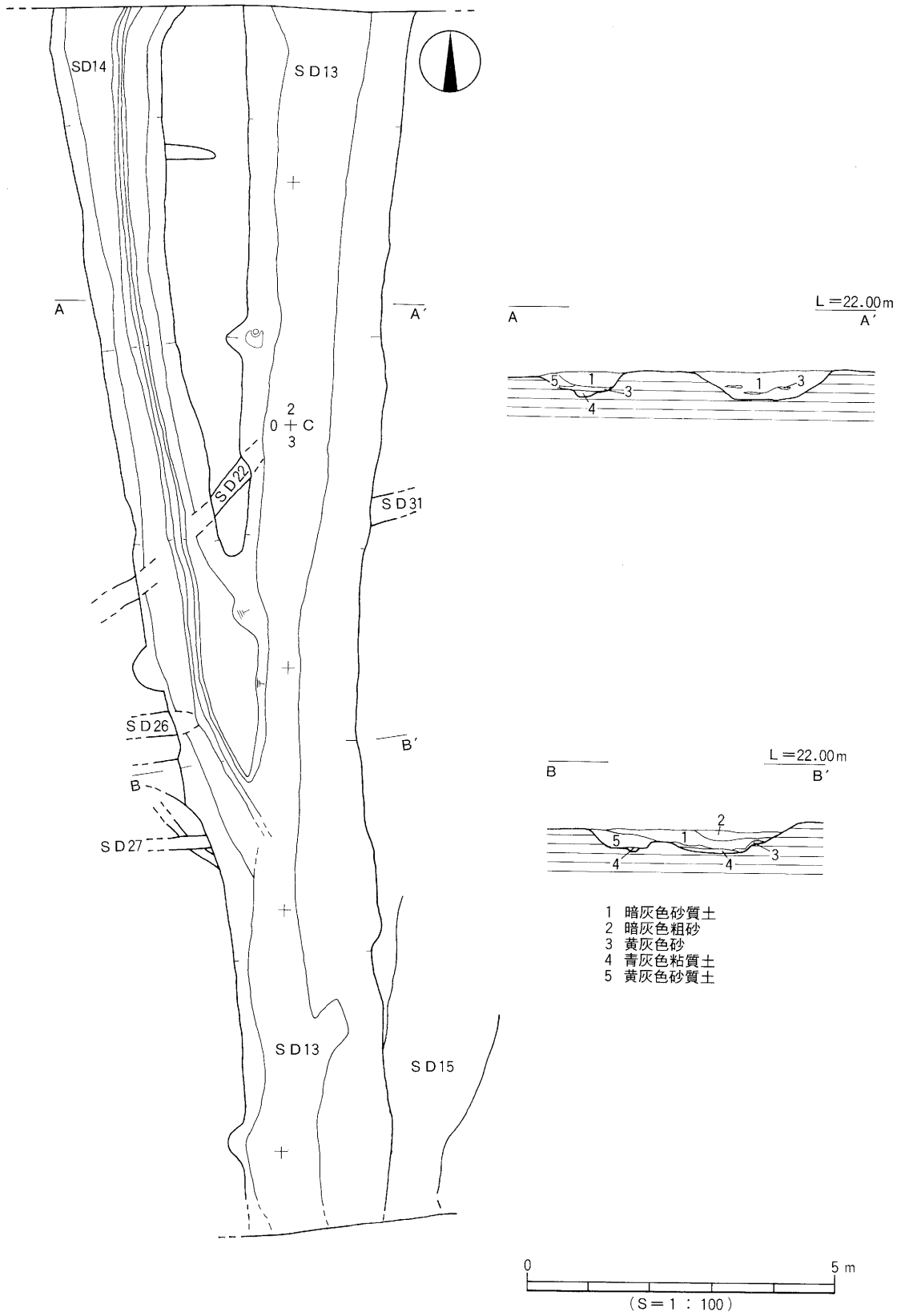
土 釜 (99) 体部上半から口縁部にかけての出土で、推定口径22.3cm、残高5.0cmを測る。体部はやや張り口縁端直下に突帯を巡らす。

甕 (100) 100は亀山焼きと思われる底部片である。外面には格子叩き目を残し内面はナデ調整される。

青 磁 (101) 101は龍泉窯系の青磁碗である。底径6.8cm、残高2.9cmを測る。底部外面は施釉されていない。

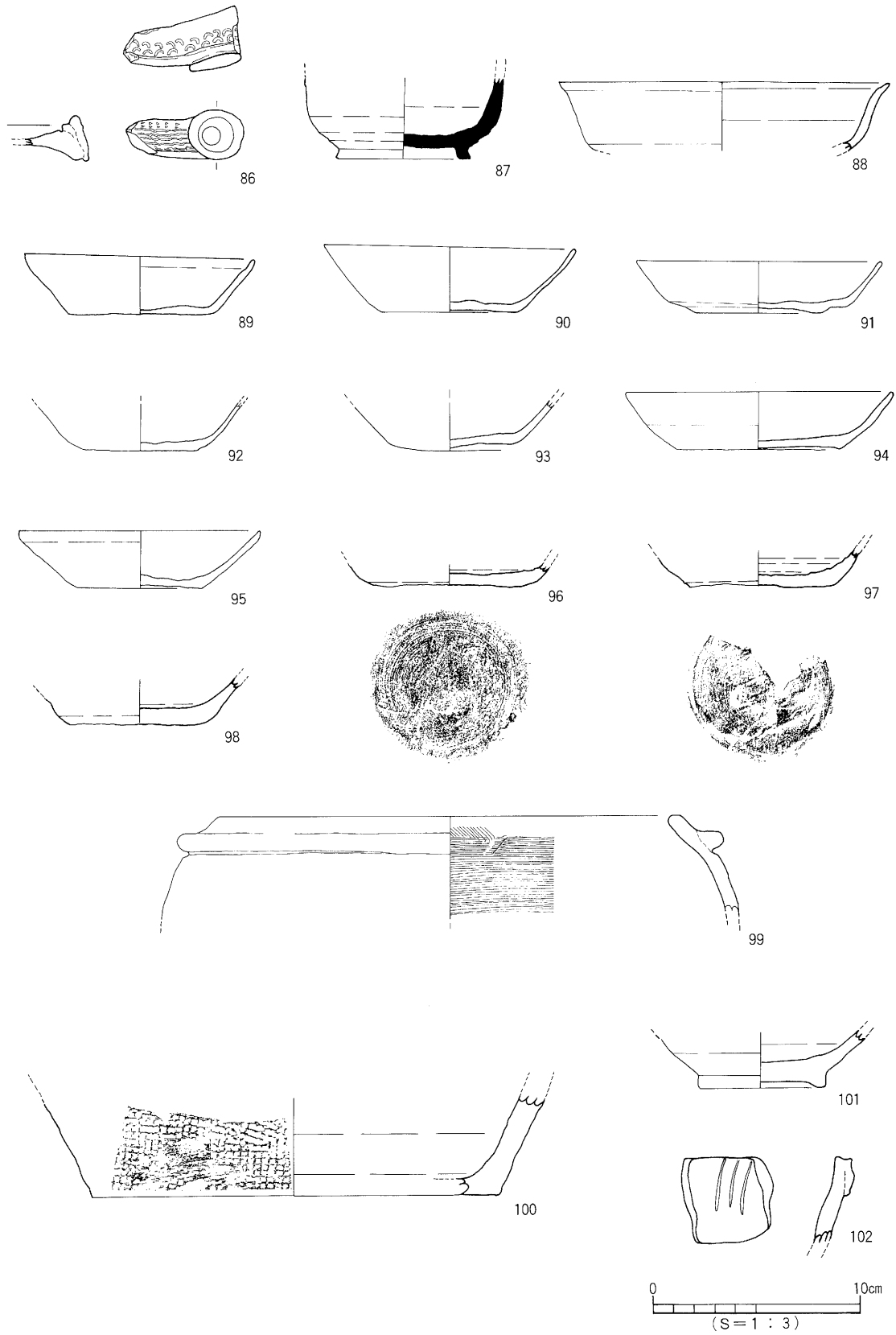
鉢 (102~105) 102は瓦質の口縁部片である。口縁部は肥厚し、端部はくぼむ。口縁端直下内面に縦位の沈線が3条施されている。103~105は東播系のこね鉢である。体部は外傾してのびる。口縁端部は肥厚して上方にのびる。

遺構と遺物



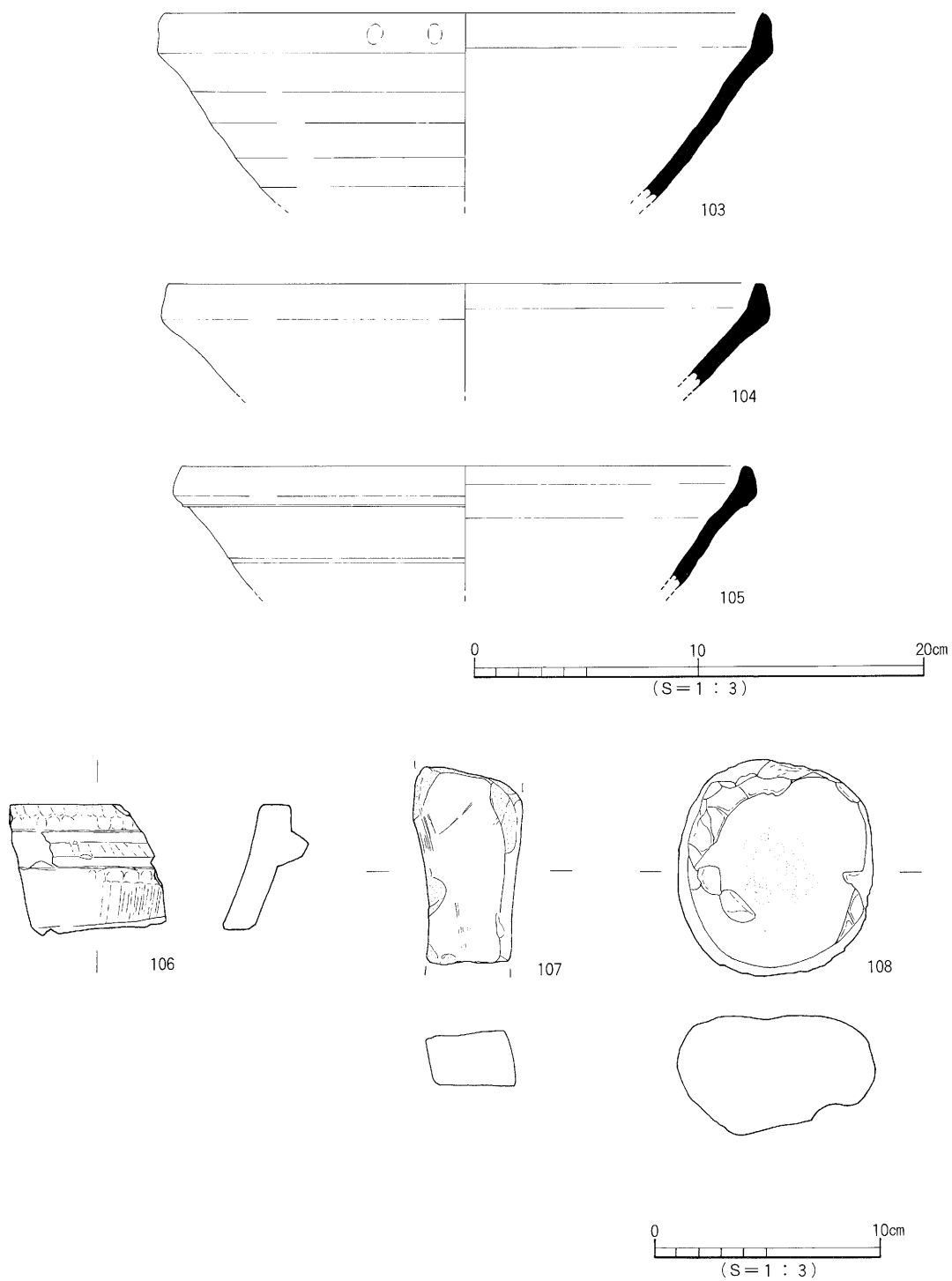
第30図 SD13・SD14測量図

姫原遺跡の調査



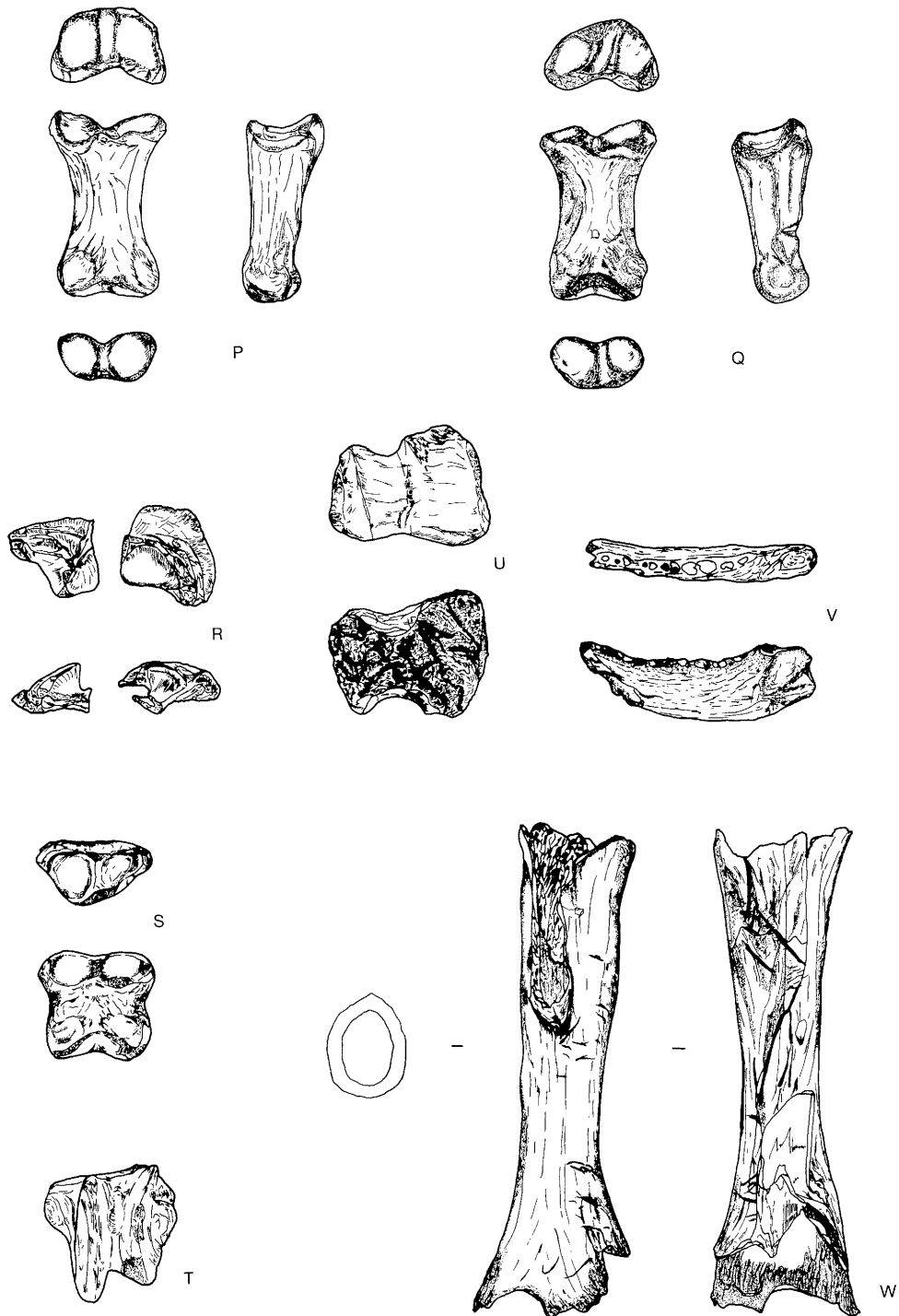
第31図 SD13出土遺物実測図 ①

遺構と遺物



第32図 SD13出土遺物実測図 ②

姫原遺跡の調査



SD13 P~U・W  
SD14 V

0 10cm  
(S=1:3)

第33図 SD13・SD14出土遺物実測図



## 遺構と遺物

### (石製品)

石 鍋 (106) 長さ5.7cm、幅7.0cmの滑石製の破片である。割れ口は研磨されており転用材として使われたものと思われる。

砥 石 (107) 石材は凝灰岩製である。 凹 石 (108) 側辺に打痕が認められる。

### (獣 骨)

馬 (P～U・W) Pは中足骨、Tは脛骨、Uは上腕骨、Wは大腿骨で、解体痕跡がある。

時期 出土遺物より14世紀代に比定される。

### SD14 (第30図、図版6)

SD13から分岐する溝である。幅1.3m～2.0m、深さ0.40m～0.45mを測る。断面形はゆるやかな舟底状を呈する。溝底の埋土は灰色砂が堆積している。出土した遺物は少なく土師器坏、陶磁器、獣骨が出土している。

#### 出土遺物 (第33・34図、図版14・15)

青 磁 (109) 109は龍泉窯系の青磁碗である。口縁部は欠失している。底部内面に「崑山片玉」の銘をもつものである。

土師器坏 (110) 口径10.6cm、器高2.8cmを測る。底部は糸切りである。

獣骨 (V) Vは犬の左顎である。解体痕跡がわずかにみられる。

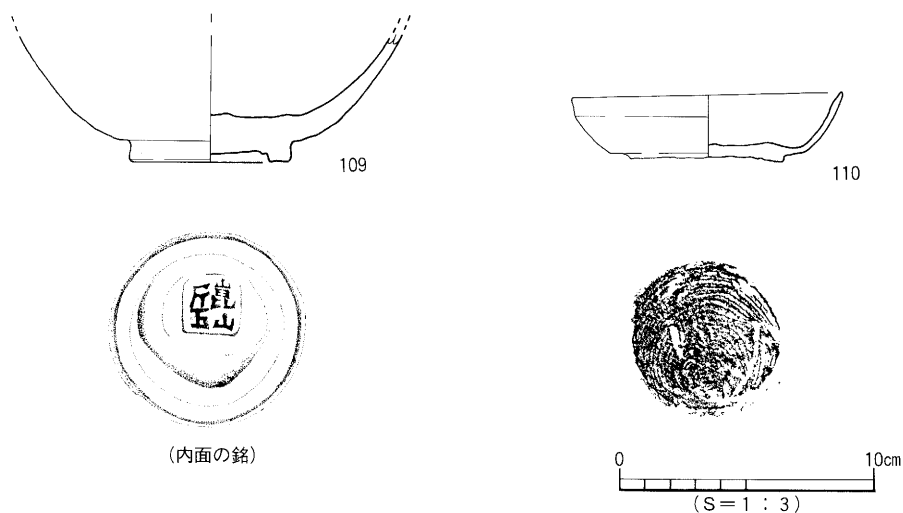
時期 出土遺物より14世紀代に比定される。

### (4) その他の遺構・遺物

第IV層上面で検出した遺構である。土坑8基、溝14条を検出している。検出した溝のうちSD13、14はこの段階でおおまかなプランを検出していた。遺物は土坑SK2、SK9、SK10から数点出土した。第IV層上面の遺構については前述したように、湧水により十分な調査が行えなかったものである。

#### SK2 (第35・36図)

平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸0.90m、深さ0.33mを測る。土坑内南側には



第34図 SD14出土遺物実測図

## 姫原遺跡の調査

最大幅0.20mの三日月状のテラス部がある。埋土は灰白色土である。

出土遺物（第37図）：112は土坑底で出土した龍泉窯系の青磁碗で、内面に印花文。

### S K 9（第35・36図）

平面形は不整形で、規模は長さ4.10m、幅0.30m～1.00m、深さ0.20m～0.70mを測る。東西方向の土坑で西から東へ深くなっている。埋土は土坑最深部と周囲に暗灰色の砂質土が堆積し、その上層には黄灰色の砂質土が堆積している。

出土遺物（第37図）：111は土釜で、推定口径23.8cm、残高3.8cmを測る。体部は内湾してたちあがり口縁部にいたる。口縁部外面直下に断面三角形の突帯が巡る。

### S K 10（第35・36図）

平面形は隅丸長方形を呈し断面形は摺鉢状である。規模は長軸1.40m、短軸1.00m、深さ0.40mを測る。埋土は黒色土である。

出土遺物（第37図）：113は土師器碗で、推定口径16.2cm、残高4.0cmである。器壁は内外面とも平滑で内面はヨコナデ、外面はヘラミガキが施されている。

時期 出土遺物よりS K 2は13世紀前後、S K 9は14世紀代、S K 10は12世紀に比定される。

## （5）包含層出土遺物

第Ⅲ～Ⅴ層から出土した遺物である。重機により掘削を行ったため明確な層毎の遺物の選別は行っていないものである。弥生時代から中世までの遺物が出土している。

### 弥生時代（第38図、図版15）

甕形土器（114～118） 114は大型品である。口縁部下に指頭押圧による刻み目凸帯文をもつ。115は口縁端部が上方に拡張される。拡張部には凹線文が施される。116は粘土紐の貼り付けによる口縁部をもち、胴部にヘラ描き沈線文を施す。117は底部片である。くびれる上げ底となる。118は平底の底部である。口縁部は上方に短くのびる。

壺形土器（119～121） 119は口縁部が上方に拡張される。口縁端部外面に凹線文が施される。120は長頸壺である。口縁部は外上方に開く。121は複合口縁壺である。口縁部は「く」字状を呈し拡張部に沈線文と斜格子文を施している。

高坏形土器（122・123） 122は坏部、123は脚部である。

### 古墳時代

#### （土師器）（第39・40図）

甕形土器（124） 124は土師器の甕である。口縁部は内湾してたちあがる。

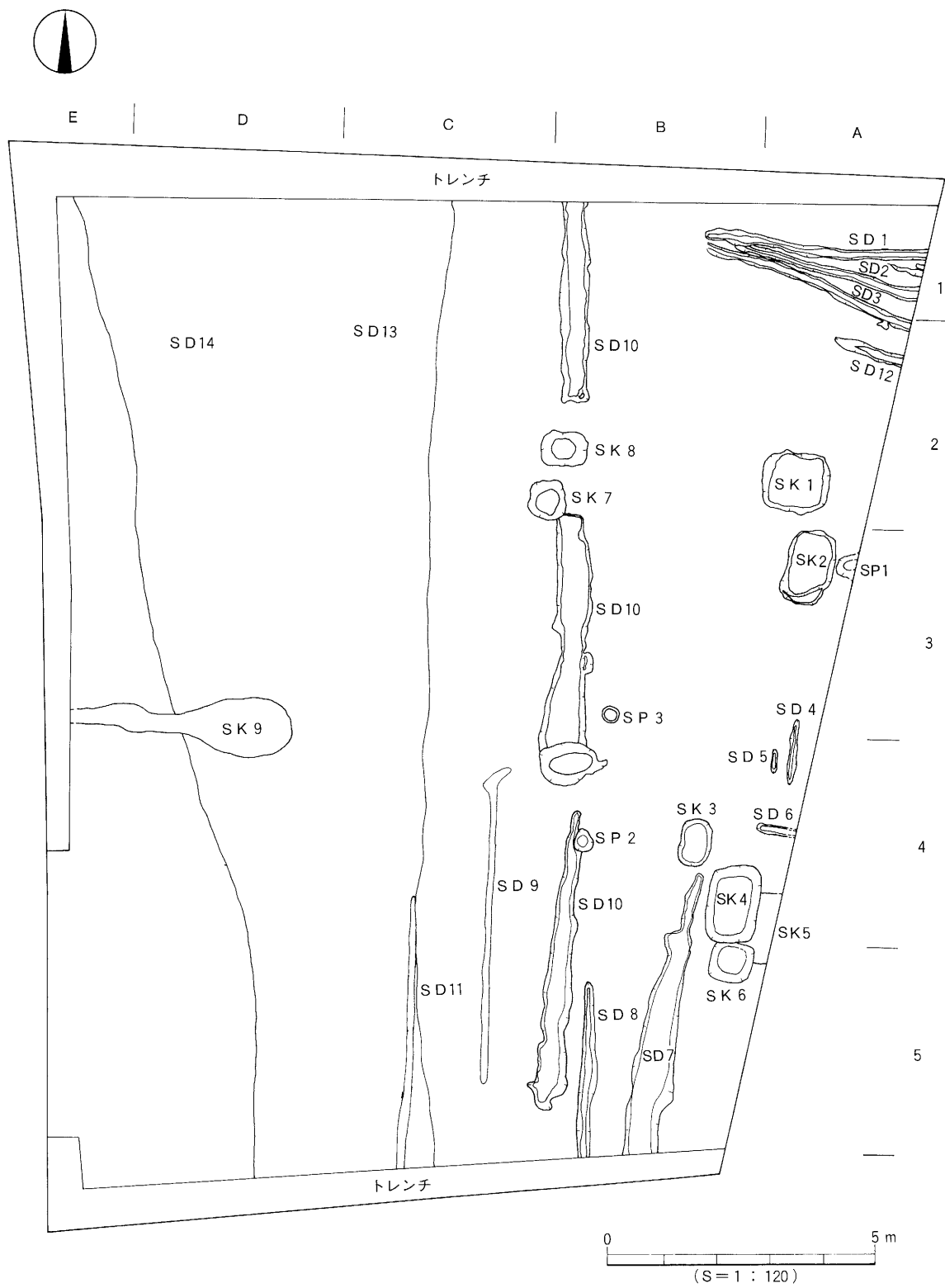
甌（125・126） 125・126は甌の把手である。125・126とも偏平で先端は上方を向く。

高坏（127） 127の脚はゆるやかに内湾して開き裾部へつづく。

#### （須恵器）

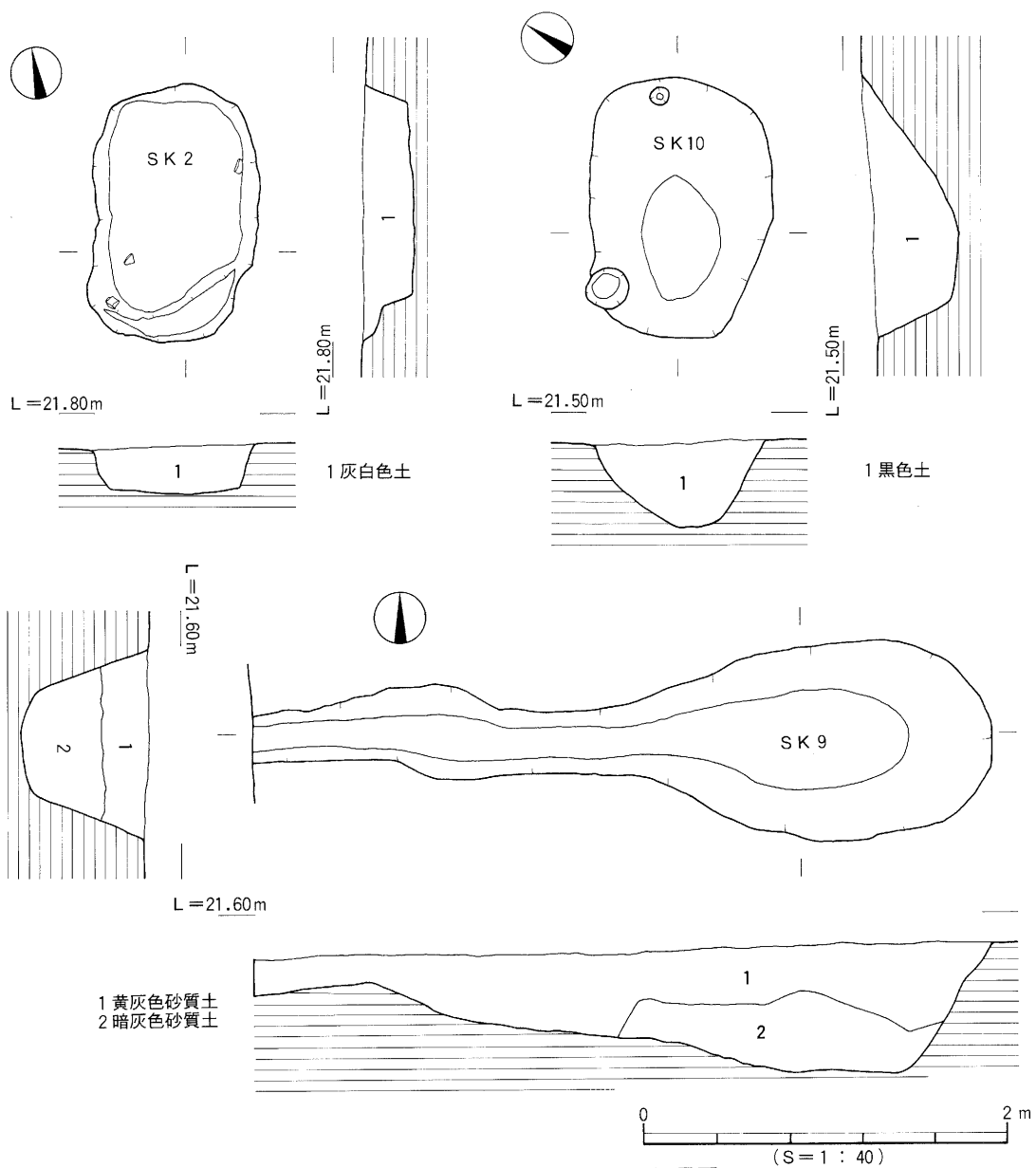
蓋坏（128～131） 128のツマミは中央部が突出する。129は天井部が丸く、ツマミは偏平で高さが低い。130の天井部は丸く、口縁端部は丸くおさめる。131の天井部は平坦である。

遺構と遺物

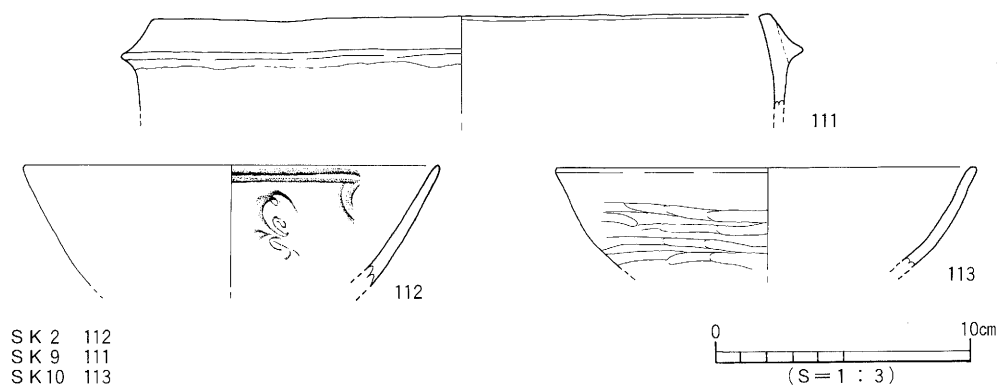


第35図 第IV層上面遺構配置図

姫原遺跡の調査



第36図 SK 2・SK 9・SK 10測量図



第37図 SK 2・SK 9・SK 10出土遺物実測図

## 遺構と遺物

坏 (132~136) 132の底部は平坦で、たちあがりは短くのびる。133のたちあがり短くのびて、受部は水平にのびる。134~136は高台がつくものである。

盤 (137) 137の口縁部は上方に短くのびる。

壺 (138) 138は広口壺である。口縁端部は下方に肥厚し丸い。

提瓶 (139) 139の口縁端部は肥厚し丸い。

甕 (140) 140は口縁部に櫛描波状文、頸部には沈線で2段に区画され刺突文が施される。

### 古代~中世

坏 (141・142) 141の高台は外方に開き高く、端部は丸い。142は底部から内湾してたちあがり口縁部は屈曲し外に開く。高台は内に接して端部は丸い。

土釜 (143) 143の口縁部は内湾する。口縁端直下に断面三角の突帯が巡る。

瓦器 (144~147) 144・146・147は瓦器碗である。144は内湾してたちあがる体部。146の高台は低く断面三角形である。口縁端部は丸い。147の高台は断面三角形である。145は瓦器皿である。口縁部は外反する。内面は煤けている。

須恵器碗 (148) 148は円盤高台で底部は回転糸切りである。

土師器坏・皿 (149・150) 149・150の底部は回転糸切りである。

青磁 (151~153) 151~153は龍泉窯系の青磁碗である。151は底部内面に「金玉満堂」の刻印をもつものである。152は底部内面に印花文が施されている。153は無文の緑釉である。

## 4. 小 結

### (1) 弥生時代

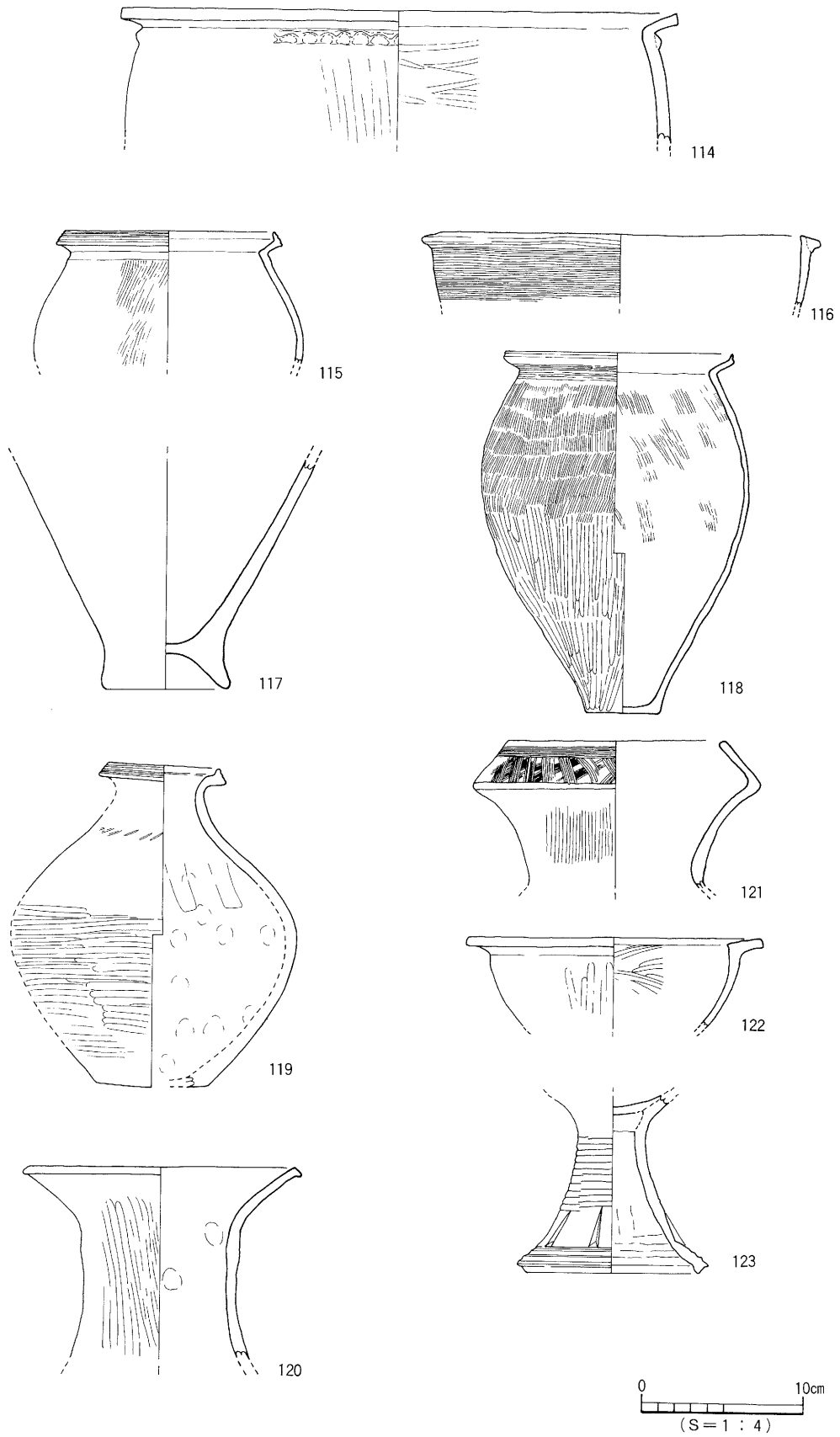
弥生時代の遺構は溝5条と周溝状遺構2条を検出している。検出された遺構の中で最も古いのはSD35である。SD35は調査区北東部でのわずかな検出であったが、溝は2条に分岐し、北流する事が判明した。溝中より出土した遺物は前期末~中期初頭の遺物であり、中期前半には埋没し、その機能を失ったものと考えられる。

中期後半には周溝状遺構と思われるSD30が営まれる。一部調査区外となり全容は不明であるが、円形になるものと考えられる。溝底からは口縁部外面に凹線文が施された高坏の坏部が出土しており、時期判断の資料となっている。溝に区画された内側では、遺構は検出していない。

後期後葉になると遺構数は増えSD16・17・19・22が営まれる。SD16は幅狭の溝で、弧を描いて東西方向に走り、両端が途切れてしまう。溝中からは、鉢形土器が出土している。SD17は周溝状遺構で、半部は調査区外となる。溝の平面形は円形を呈するものと考えられ、溝中からは一カ所に集中して土器が一括投棄された状態で出土している。出土した土器の器種構成は甕形土器4点、壺形土器5点である。甕形土器1点に焼成後の穿孔が一カ所に施されるが、これら土器は祭祀用に作られた特別な土器ではなく、日常的な土器と同じものである。また、溝に区画された内部では遺構は確認されなかった。このほか、SD19からは壺形土器と石錘が出土し、SD22からは壺形土器と鉢形土器が出土している。これらの出土遺物は、後期後葉の土器様相が知られる一つの追加資料となる。

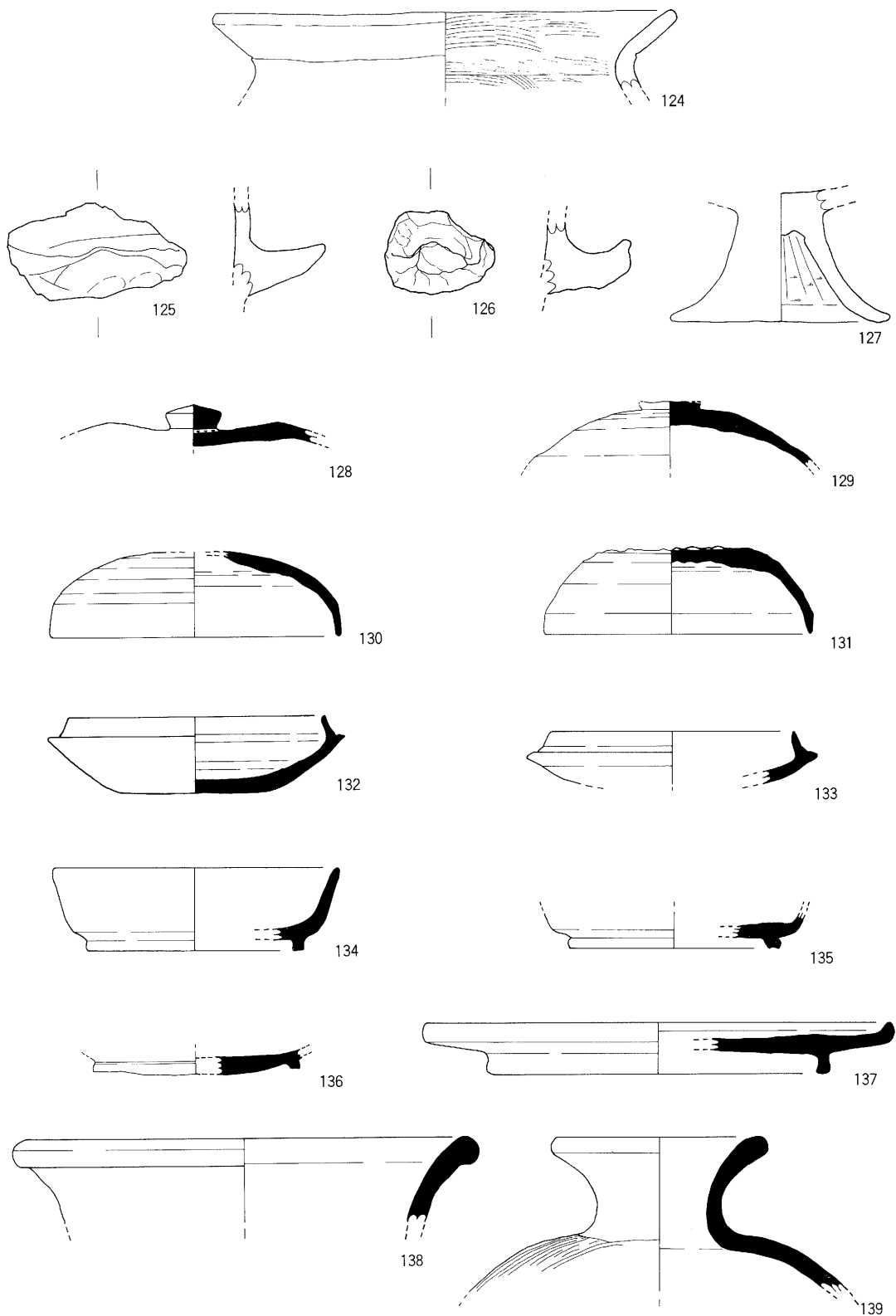
弥生時代の遺構は溝と周溝状遺構で、住居址や土坑など直接生活に結び付く遺構は検出されなかった。しかし、溝からの出土遺物は付近に集落の存在を示すものであり、周辺域には集落が展開するものと考えられる。また、今回の調査で検出した周溝状遺構SD30は松山平野内における周溝状遺構の

姫原遺跡の調査



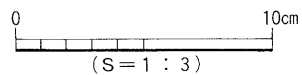
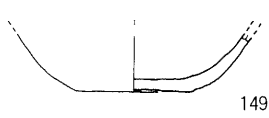
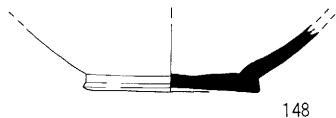
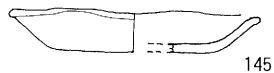
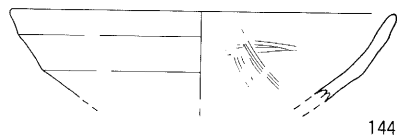
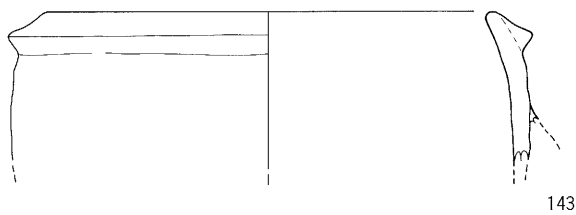
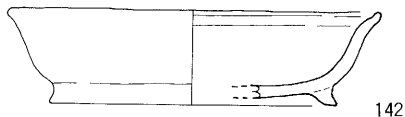
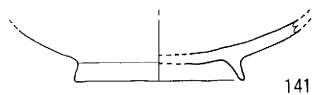
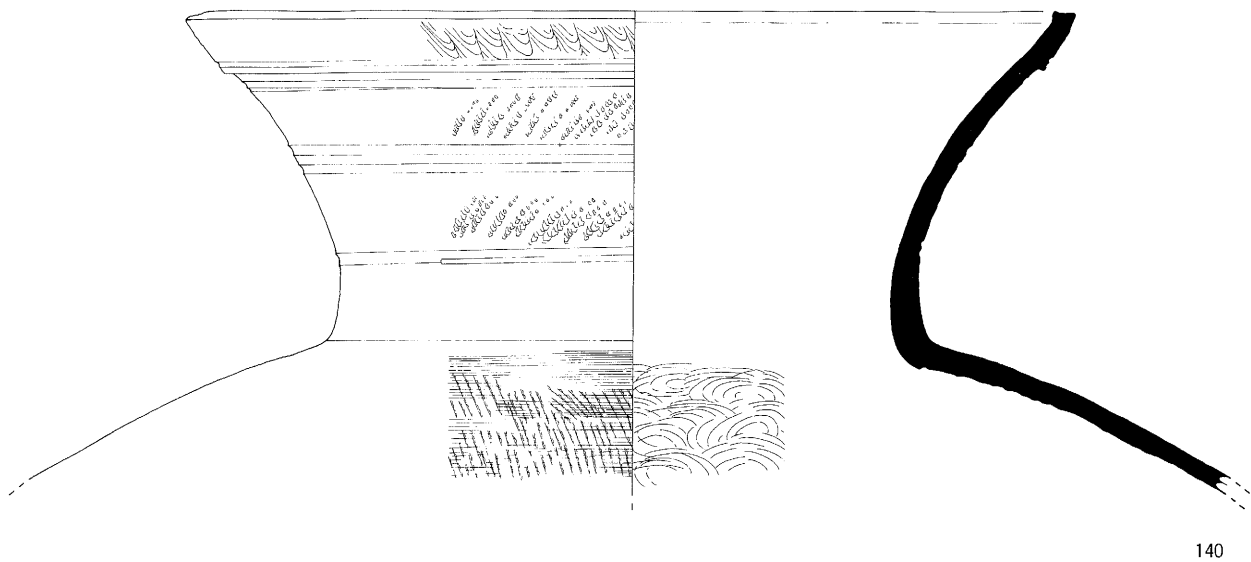
第38図 包含層出土遺物実測図 ①

遺構と遺物



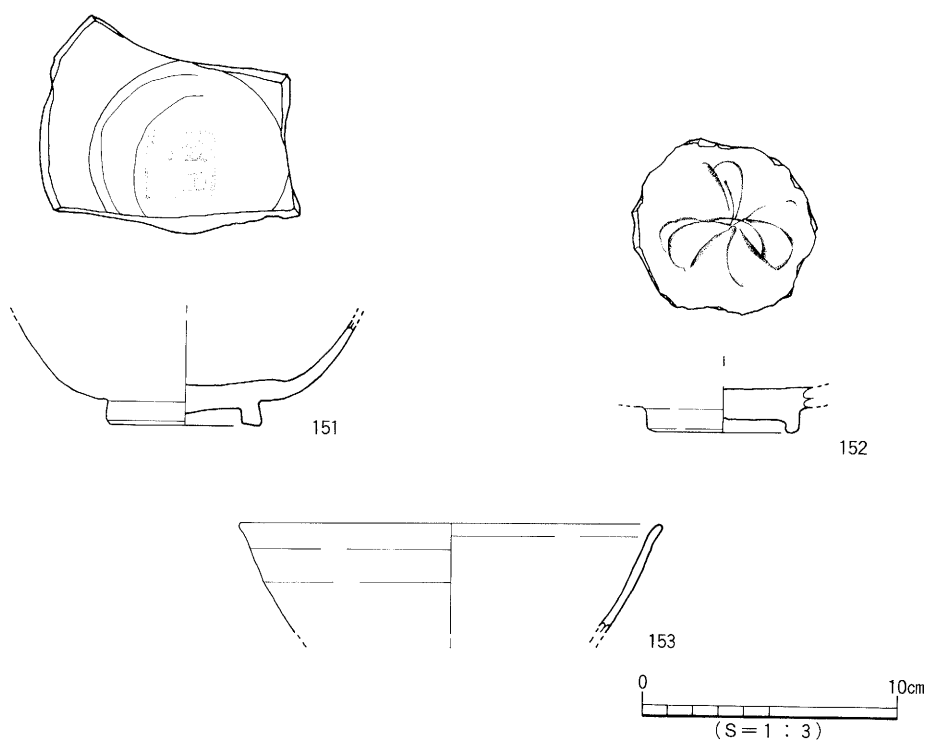
第39図 包含層出土遺物実測図 ②

姫原遺跡の調査



第40図 包含層出土遺物実測図 ③





第41図 包含層出土遺物実測図 ④

最古例として貴重な資料である。

## (2) 古墳時代

古墳時代の遺構はS D15の溝1条である。溝中からは6世紀後半から7世紀後半までの須恵器が出土しており、7世紀後半には埋没していたものと考えられる。遺物は溝の下層である灰色砂からは出土せず、中層以上からの出土である。溝からは須恵器や土師器の土器類のほか、砥石、管玉、馬と鹿の獣骨が出土している。溝から出土した遺物は完形品が無く、小片が多数を占めていることから、廃棄場所として利用されたものと思われる。ただし、赤色顔料が外面に付着した手捏土器や管玉・馬骨の出土は、祭祀的な様相を示しており、溝の性格を考えるうえで注意を要するものである。

## (3) 古代

明確な遺構は検出していない。少量ではあるが、第IV層の包含層中と中世の溝S D13からは9世紀～10世紀代の土器片が出土しており、当遺跡周辺には該期の集落存在が想定される。

## (4) 中世

明確な中世の遺構はS D13・14の溝と土坑2基である。S D14はS D13から分岐する溝で、同時期に併存する。S D13・14からは主に土師器坏、土釜、東播系こね鉢、龍泉窯系青磁、石鍋片の加工品、砥石、獣骨が出土している。埋没年代については、龍泉窯系青磁が横田・森田氏の分類によると13世紀代に比定され、東播系こね鉢は14世紀前半に、土師器坏と土釜は概ね14世紀代に比定されるものである。伊予地域では、土師器坏や皿の外底をヘラ切りする技法は15～16世紀に再び登場するとされているが、S D13と14出土の土師器坏や皿はすべて糸切りである。よってS D13・14は、14世紀後半には埋没したものと考えた。また、現在の田境はS D13上にあり、中世以降の境界を現在に残している。

## 姫原遺跡の調査

今回の調査では、住居址などの生活関連遺構は検出されなかったが、弥生から中世にかけての溝から出土した遺物は周辺域に当該期の集落存在を示すものである。今後は、和気遺跡群内の集落実態や動向を追求して行かなければならない。

### 参考文献

- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』
- 中野良一 1988 「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』
- 橋本久和 1992 「瀬戸内の中世土器」『中世土器研究序論』
- 宮本一夫 1989 「道後平野の中世土器編—13～15世紀を中心に」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化調査室
- 梅木謙一 1991 「松山平野の弥生後期土器」『松山大学構内遺跡』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 栗田正芳・河野史知 1994 『古照遺跡—8次調査—』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1994 『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡—2次調査—』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺物観察表

遺物観察表

—凡 例—

(1) 以下の表は遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 各記載について

法量欄 ( ) : 復元推定値。

形態・施文欄: 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴上→胴部上半、天→天井部。

胎土・焼成欄: 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

( ) 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表2 S D 35出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径(20.0) 残高 4.2	胴部にヘラ描き沈線文。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ→施文	㊦ナデ ㊧ミガキ	にぶい橙色	石・長(1~2) ○	上層	8
2	甕	口径(21.6) 残高 4.6	折り曲げ口縁。胴部に沈線文。	㊦ナデ ㊧施文	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	淡赤橙色 橙色	石・長(0.5 ~2) ○	上層	8
3	甕	口径(20.9) 残高 11.2	折り曲げ口縁。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(12~15 本/cm)ミガキ	㊦ナデ ㊧磨滅にて不明	橙色	石・長(0.3 ~3) ○	上層 黒斑 煤付着	8
4	甕	口径(20.0) 残高 6.0	貼り付け口縁。胴部に沈線文。	㊦ナデ ㊧施文(マメツ)	磨滅にて不明	にぶい黄褐色 浅黄褐色	石・長(1~4) ○		8
5	甕	底径 7.0 残高 7.2	くびれる底部。やや上げ底。	ミガキ ㊦ナデ	磨滅にて不明	橙色	石・長(0.5 ~3) ○	上層	
6	甕	底径 5.4 残高 4.0	やや上げ底の底部。	ミガキ ㊦ナデ	ナデ	淡灰橙色 淡橙色	石・長(1~3) ○	上層	
7	甕	底径 6.2 残高 10.1	やや上げ底の底部。器壁は厚い。	ミガキ ㊦ナデ	ナデ	淡橙色 橙色	石・長(1~4) ○	上層	8
8	壺	口径(17.5) 残高 5.7	「ラッパ」状に開がる口縁部。頸部に指頭圧痕が施された突帯1条。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(14~16 本/cm)	㊦㊧ミガキ ヨコナデ ㊧ナデ	明褐色 にぶい橙色	石・長(0.3 ~3.5) ○	上層	8
9	鉢	口径(15.2) 残高 6.0	口縁部は波状気味。	磨滅にて不明	ナデ	にぶい橙色 オリーブ黒	石・長(1~3) ○	下層	
10	蓋	残高(6.4)	孔が2カ所穿たれる。	ヘラミガキ ナデ	ナデ	にぶい橙色 オリーブ色	石・長(1~4) ○		8

表3 S D 30出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
11	甕	底径(7.6) 残高 6.7	底部は平坦で薄い。	ミガキ(マメツ)	ナデ	灰白色 淡黄色	石・長(1~3) ○	黒斑	
12	高坏	口径 13.2 残高 12.6	内湾する口縁で凹線文を施す。凹線文下に「ノ」字状の刺突文。	㊦ヨコナデ→施文 ㊧ミガキ	㊦ヨコナデ ㊧ナデ ㊧ナデ(シボリ痕)	明黄褐色	石・長(1~2) △		8

姫原遺跡の調査

表4 SD17出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
13	甕	口径 13.2 底径 5.4 器高 28.1	口縁部は断面「く」字状。胴最大径を上半にもつ。底部はやや上げ底。	④底ナデ (その他)ヨコナデ	①ヨコナデ (胴上)取はるアコナデ (胴下)ナデ(指頭痕)	浅黄色 にぶい橙色 黒褐色	石・長(1~5) △	黒斑	9
14	甕	口径 13.9 底径 5.0 器高 28.0	口縁部は断面「く」字状。胴最大径を上半にもつ。やや上げ底。胴部に焼成後の穿孔が1ヶ穿たれる。	磨滅にて不明(一部ハケ痕) 指頭痕 ④底ナデ	磨滅にて不明	にぶい橙色 赤褐色 にぶい橙色	石・長(0.5~3) 石粒 △	黒斑	9
15	甕	口径(26.2) 残高 5.5	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状を呈する。	①ヨコナデ ナデ	①ヨコナデ ナデ	灰黄橙色	石・長(1~4) ○		
16	甕	底径 5.0 残高 17.6	底部はやや上げ底。外傾してたちあげる。	磨滅にて不明 (一部ミガキ痕) ④底ナデ	④上磨滅にて不明 (胴下)ナデ上げ	明赤褐色 にぶい橙色	石・長(1~5) 多 △	黒斑	
17	壺	口径(14.2) 底径 8.0 器高 40.8	口縁拡張部は弓状にそり、5本の横沈線文と弧文が施される。胴部最大径は胴中央にもつ。	①ヨコナデ→施文 ④ミガキ ④底ナデ	①ヨコナデ、ナデ ④頸(胴)ナデ ④底ナデ上げ	にぶい黄色 褐灰色	石・長(1~5) ○	黒斑	9
18	壺	口径 9.0 底径 4.5 器高 26.0	拡張部は内傾してたちあがる。胴部最大径は胴中央にもつ。	①頸ヨコナデ ④底ナデ	①頸ヨコナデ ④底ナデ、ナデ上げ	黄灰色 黄橙色 黄灰色	石・長(1~6.5) ○	黒斑	9
19	壺	口径 17.2 底径 6.0 器高 30.7	大きく開く口縁部。胴部最大径を胴中央にもち、底部はやや突出する。	ナデ	ナデ (工具痕)	明褐色 橙色	石・長(1~4) ○	黒斑	10
20	壺	口径 9.8 底径 4.0 器高 23.2	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は丸い。	①頸マメツ ④ヘラミガキ ④底ナデ	ナデ	淡黄色 浅黄色	石・長(0.5~5) ○	黒斑	10
21	壺	底径 8.0 残高 39.3	扁平な胴部はやや突出する底部。	ミガキ(マメツ) ④底ナデ	ナデ(マメツ) (指頭痕)	橙色 灰白色	石・長(1~4) ○	黒斑	10

表5 SD16出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
22	壺	底径 4.0 残高 6.8	偏球形の胴部にボタン状の突出する底部。	ミガキ	マメツ(一部ハケ痕)	にぶい黄 橙色・暗 灰黄色	石・長(1~4) 石粒 ○	黒斑	
23	鉢	口径(18.1) 器高 8.7	口縁部は大きく外反する。不安定な突出した底部。	①ハケ(マメツ) ④マメツ、ハケリ	ミガキ(マメツ)	褐灰色 浅黄色 茶褐色	石・長(1~3) △		11

表6 SD19出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
24	壺	口径 10.5 底径 2.9 器高 20.8	平底の底部。頸部はやや外反気味にたちあがり、口縁部は内湾してたちあがる。口縁端部は先細る。	①ナデ(一部波状文) ④ミガキ ④ハケ(8本/cm)	ハケ(8~9本/cm) (指頸痕)	橙色	石・長(1~5) ○	黒斑	11

表7 SD19出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
25	石 錘	完形	砂 礫 岩	9.8	6.3	5.6	395	有溝	11

遺物観察表

表8 SD22出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
26	甕	底径 3.6 残高 13.2	底部はやや突出し体部は外傾してたちあがる。	ハケ(6~7本/cm)	ナデ(一部ハケ痕)	暗灰黄色 灰黄色	石・長(1~4) ○		
27	甕	底径 2.8 残高 13.5	底部は突出し、厚い平底。	ハケ(8本/cm)	ナデ上げ (工具痕)	淡橙色 オリブ黒色	石・長(1~3) ○	黒斑	
28	甕	底径 4.3 残高 3.8	底部は厚い平底。	ナデ(マメツ)	磨滅にて不明 (一部ナデ)	にぶい黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~4) 多 ◎		
29	甕	底径 5.4 残高 4.2	底部は厚く、やや上げ底。	ヘラミガキ→ナデ	ナデ	赤橙色 にぶい橙色	石・長(1~5) ◎		
30	壺	口径 9.9 残高 11.1	口縁拡張部に櫛猫波状文。頸部に10~12条のヘラ猫沈線文を施す。器壁は薄い。	㊦ヨコナデ→施文 ㊧ミガキ(マメツ)→施文	㊨マメツ ㊩ナデ(一部ハケ痕)	にぶい橙色 にぶい黄褐色	石・長(1~3) 石粒 △		11
31	壺	口径(9.2) 残高 3.1	口縁拡張部に波状文を施す。	ヨコナデ→施文	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい黄褐色	石・長(1~2) ○		
32	壺	口径(11.4) 残高 14.8	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は丸い。	㊦ヨコナデ ハケ(8~9本/cm)	㊨ヨコナデ ハケ(8~9本/cm) (工具痕、指頭痕)	橙色 橙色・褐灰色	石・長(1~2) ○		
33	壺	底径 5.0 残高 9.3	平底の底部。底部から内湾してたちあがる。	ハケ(5~7本/cm)	ナデ	にぶい黄褐色 浅黄色	石・長(1~6) ○	黒斑	
34	壺	底径 1.5 残高 4.7	小さく突出する不安定な底部。	ヘラケズリ→ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 黒褐色	石・長(1~4) 金ウモン ○	黒斑	
35	鉢	口径 12.5 底径 4.0 器高 9.4	やや突出する底部から内湾してたちあがる。口縁端部は丸い。	磨滅にて不明 (工具痕)	ヘラケズリ→ハケ(9本/cm) (指頭痕)	にぶい黄褐色 にぶい褐色	石・長(1~5) 多 ○	黒斑	
36	鉢	底径 3.0 残高 6.7	突出する底部で厚い平底。	ハケ(6~7本/cm) ㊤ナデ	ヘラケズリ ナデ	灰白色 灰色	石・長(1~5) ○	黒斑	

表9 SD15出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
37	蓋	残高 1.7	宝珠つまみを有する。	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	石・長(細粒) ○		
38	坏身	口径(11.8) 残高 3.1	たちあがりは短く内傾する。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	長(1~2) ○		
39	坏身	口径(11.6) 残高 3.9	たちあがりは短く内傾し、受部は上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(細粒) ○		
40	坏身	口径(12.4) 器高 4.5	たちあがりは短く内傾し、受部は水平にのびる。底部は平坦。	回転ナデ ㊤回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	石・長(細粒 ~1.5) ○	自然釉	
41	坏身	口径(13.6) 器高 3.1	たちあがりは非常に短く、受部は上方にのびる。底部は平坦。	回転ナデ ㊤回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	細砂粒 △		
42	坏身	口径(9.2) 器高 4.0	たちあがりは短く内傾し、受部は上方にのびる。底部は平坦。	回転ナデ ㊤回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	石・長(0.5 ~2) ○		
43	坏身	口径 9.0 底径 3.2	たちあがりは短く、受部は水平にのびる。器高低く、底部は平坦。	回転ナデ ㊤回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	長(1) ○		
44	坏身	口径 11.2 器高 4.1	たちあがりは内傾して上方に短くのびる。端部は丸い。底部はやや丸味をもつ。	回転ナデ ㊤回転ヘラ削り	回転ナデ	褐灰色 明褐灰色	石・長(細粒) ○	自然釉	12

姫原遺跡の調査

S D 15出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面)色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
45	坏身	口径(10.2) 器高 3.4	やや外反する口縁端部。底部は平坦。	回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	黄灰色 灰色	密(石・長) ◎		
46	坏身	底径(10.8) 残高 1.7	高台は低く、断面方形。底部外面に「×」のヘラ記号。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(0.5 ~2) ○	ヘラ 記号	
47	坏身	口径(13.6) 底径 13.2 器高 4.1	高台は低く、体部は外上方に開く。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(0.5 ~2) ○		
48	高坏	底径 8.1 残高 2.6	短脚。裾部は水平にのびて、端部は下方に屈曲して接地する。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰黄色	石・長(細粒) △		
49	高坏	底径 (9.2) 残高 4.6	短脚。裾部は水平にのびて下方に屈曲して接地する。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰白色	石・長(1~2) △		
50	高坏	底径(10.1) 残高 4.7	短脚。裾部は水平にのびて下方に屈曲して接地する。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰白色	石・長(1~2) △		
51	高坏	底径 (9.0) 残高 5.8	短脚。裾部は外方に開き下方に屈曲して接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色、灰白色	石(1~2) △		
52	高坏	残高 8.2	長脚。脚部1条の凹線で区画される。	回転ナデ	回転ナデ→ナデ (シボリ痕)	灰色 灰白色	石・長(細粒) △		
53	高坏	口径(11.7) 残高 5.8	坏底から外方上にたちあがる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ ナデ (シボリ痕)	暗オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(1~2) ○	自然釉	
54	高坏	残高 11.1	長脚。脚部2条の凹線で巡らす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(細粒) ○	自然釉	
55	高坏	口径(14.3) 底径(10.0) 器高 10.7	脚裾は短く水平にのびる。坏底外面に陵。坏底は平坦で外湾してたちあがる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ ナデ (シボリ痕)	灰色	石・長(細粒) △		
56	台付鉢	口径(11.0) 底径 9.0 器高 12.0	脚部は内湾気味に開き、裾端部は内側に下垂する。体部に2条の凹線。	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ ナデ	灰色	長(細粒) ◎		12
57	台付鉢	口径 (8.8) 残高 9.8	底部は丸く、内傾してたちあがる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	明灰色	石・長(1~3) ○		
58	甕	残高 8.6	底部は丸い。体部内には穿孔された粘土が残る。	回転ナデ ナデ	回転ナデ (シボリ痕)	灰色	石・長(1~3) ◎		
59	甕	残高 13.9	平坦な底部。口縁は「ラッパ」状に平く、頸部に2条の沈線。	回転ナデ	回転ナデ (シボリ痕)	灰色	石・長(0.5 ~2) ◎	自然釉	12
60	横瓶	残高 10.7	口縁端部の稜は鋭い。内面に叩き目を残す。	㊦㊧回転ナデ ㊨格子目叩き→ カキ目	㊦㊧回転ナデ ㊩同心円文	灰色	石・長(細粒 ~2) ◎		
61	長頸壺	底径(15.6) 残高 3.5 高台高 1.2	高台は端部が肥厚する厚い底部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石・長(細粒) ○	自然釉	
62	短頸壺	口径 (7.0) 残高 6.7	体部肩に1条の沈線。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(1~3) ○	自然釉	
63	壺	口径 12.4 残高 4.1	口縁端部は内に肥厚し、稜をなす。	㊦㊧回転ナデ ㊨平行叩き	㊦㊧回転ナデ ㊩同心円文	灰白色	石・長(細粒) △		
64	壺	口径(10.4) 残高 8.2	体部肩に2条、口縁端に1条の凹線。口縁端部は内側上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(0.5 ~2) ○		
65	壺	口径(14.2) 残高 6.5	口縁部は丸く肥厚する。	㊦㊧回転ナデ ㊨平行叩き→カ キ目	㊦㊧回転ナデ ㊩同心円文	灰色	石・長(1~3) ○		

遺物観察表

SD15出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
66	四耳壺	口径 20.0 器高 51.0	底部は丸く、肩の張る体部。口縁部は2条の沈線で区画されたのち刺突線が施される。	㊦回転ナデ ㊧回転ナデ→施文 ㊨平行叩き→カキ目	㊦回転ナデ ㊧同心円文	暗青灰色、青灰色	石・長(1~2) ○	自然釉	12
67	甕	口径(23.2) 残高 6.1	口縁端部は肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	石・長(細粒) ◎	自然釉	
68	甕	口径(24.9) 残高 5.7	口縁部は外反し、端部は下方に肥厚して稜をなす。	回転ナデ	㊦回転ナデ ㊧同心円文	灰色	石・長(細粒) ◎	自然釉	
69	甕	口径(26.0) 残高 4.6	口縁端部は断面「コ」の字状。	ヨコナデ	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(4~6本/cm)	にぶい橙色	石・長(1~3) ◎		
70	甕	口径(28.2) 残高 6.6	口縁部は外方に開き、端部は丸くおさめる。	マメツ ハケ(4~5本/cm)	マメツ ハケ(4~5本/cm)	淡赤橙色 にぶい橙色	石・長(0.5~2) 石粒 ○		
71	短頸壺	口径(16.1) 残高 7.6	直立気味にたちあがる口縁部。	ナデ (工具痕)	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	にぶい橙色	長(0.3~2) 石粒 ○		
72	坏身	口径(11.6) 残高 2.5	たちあがりは短く内傾して端部は丸くおさめる。受部は水平にのびる。	磨滅にて不明	回転ナデ	浅黄橙色	石・長(1~3) △		
73	鉢	口径 11.8 器高 4.4	底部は丸く内湾してたちあがる。口縁部は先細る。	㊦ヨコナデ ミガキ→ナデ	ヨコナデ ミガキ	浅黄橙色	石・長(1~3) ○		
74	手捏	残高7.0	厚い器壁。外面に赤色顔料が見られる。	ナデ(指頭痕) ハケ(6~7本/cm)	ナデ (指頭痕)	黄灰色	石・長(細粒~2) 細砂粒 ◎	赤色 顔料	13
75	甗	残高5.9	把手。上外方にのびる。	ナデ ハケ(3~4本/cm)	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(0.5~3) 石粒 ○		
76	甗	残高5.0	把手。上外方にのびる。面取りされる。	ナデ		にぶい橙色	石・長(1~3) ○		
77	甗	残高4.1	把手。上外方にのびる。	ナデ(マメツ)	ナデ	にぶい黄橙色	石・長(1~6) ◎		
78	甗	残高4.0	把手。水平気味にのびる。	ナデ(マメツ)		橙色	石・長(細粒) ○		
79	不明	残高2.9	断面台形。中心に孔が穿たれる。	ナデ	ナデ	にぶい橙色	石・長(1~2.5) ○		

表10 SD15出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
80	菅玉	完形	碧玉製	2.6	0.9	0.2~0.4	5.0		13
81	砥石	1/2	凝灰岩	6.2	3.9	2.8	86.0		
82	砥石	1/2	凝灰岩	6.1	5.8	3.2	142.0		
83	砥石	1/2	凝灰岩	8.7	7.7	4.1	353.0		
84	凹石	完形	緑色片岩	13.7	13.3	4.8	1,275.0		

姫原遺跡の調査

S D 15出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
85	凹石	完形	砂岩	12.0	10.0	5.6	1,061.0		

表11 S D 15動物遺存体観察表

番号	出土地点	種別	部位	年齢	時期	備考	図版
A	S D 15 (B 3)	馬	臼歯 (右顎上)	成馬	7世紀		16
B	S D 15 (A 1)	馬	臼歯 (左顎下)	成馬	7世紀		16
C	S D 15 (D 3)	馬	臼歯 (右顎下)	成馬	7世紀		16
D	S D 15 (B 2)	馬	臼歯 (左顎上)	成馬	7世紀		16
E	S D 15 (B 4)	馬	臼歯 (左顎下)	成馬	7世紀		16
F	S D 15 (A 1)	馬	臼歯 (左顎上)	成馬	7世紀		16
G	S D 15 (A 1)	馬	臼歯 (左顎上)	若馬	7世紀		16
H	S D 15 (B 2)	馬	切歯		7世紀		16
I	S D 15 (B 2)	馬	下顎 (右側前部)		7世紀		16
J	S D 15	馬	橈骨		7世紀		16
K	S D 15	馬	尺骨 (左)		7世紀		16
L	S D 15	馬	中手骨又は中足骨 (右)	成馬	7世紀	遠位端最大幅43.5mm。解体痕有り。	16
M	S D 15	牛又は馬	四肢骨		7世紀	斧による解体痕	15
N	S D 15	鹿	頸骨 (右)	若	7世紀		15
O	S D 15	鹿			7世紀	筭?	15

表12 S D 13出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 胎土 色調 (内面) 焼成	備考	図版
				外面	内面			
86	器台	口径(20.0)	口縁端部は上下に拡張する。口縁端部外面には波状文を施し円形の浮文を貼付する。内面は半載竹管文。	ナデ	ナデ	灰白色	石・長(1~2) ◎	



遺物観察表

S D 13出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
87	坏身	底径 6.6 残高 4.3	高台はやや外側に開き、端面全て接地する。	回転ナデ 底ナデ	回 <del>転</del> 回転ナデ 底ナデ	灰色	密 ◎		
88	土師 坏	口径(16.1) 残高 3.3	口縁部は外反し、口縁端部直下内面に稜をもつ。	マメツ	マメツ	黄灰色 灰白色	石・長(1) ◎		
89	土師 坏	口径 11.2 底径 7.0 器高 2.9	体部は外上方に開き、口縁端部近くで屈曲し、上方にのびる。	ヨコナデ 底回転糸切り、 すのこ痕	ヨコナデ	橙色 灰白色	密 ○		13
90	土師 坏	口径 12.0 底径 6.6 器高 3.3	体部は外上方に開く。口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ→ナデ 底回転糸切り、 すのこ痕	ヨコナデ	灰白色	石・長(1~2) △		
91	土師 坏	口径 11.9 底径 6.0 器高 2.6	内湾気味にたちあがる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ 底回転糸切り、 板圧痕	ヨコナデ	灰白色	石・長(1) △		
92	土師 坏	底径 5.6 残高 2.4	平底の底部から外上方に開く。	ヨコナデ 底回転糸切り	ヨコナデ	灰白色	密 赤色土粒 ○		
93	土師 坏	底径 5.8 残高 2.4	平底の底部。器壁は厚い。	ヨコナデ→ナデ 底回転糸切り、 板圧痕	ヨコナデ	灰色	密 ○		
94	土師 坏	口径(12.9) 底径(7.8) 器高 2.8	平底の底部から内湾気味にたちあがる。口縁端部は尖り気味。	ヨコナデ 底回転糸切り、 板圧痕	ヨコナデ	灰白色	密 ○		
95	土師 坏	口径(11.6) 底径 6.1 器高 2.8	平底の底部から外上方にたちあがり、口縁端近くで上方に屈曲し稜をなす。	ヨコナデ 底回転糸切り、 すのこ痕	ヨコナデ	灰白色	密 ○		13
96	土師 坏	底径 6.9 残高 1.0	外面全体に黒色処理される。	ヨコナデ 底回転糸切り	ヨコナデ 底ナデ	黒灰色 灰白色	密 ○		
97	土師 坏	底径(7.0) 残高 2.0	平底の底部から外上方に開く。	ヨコナデ 底回転糸切り	回転ヨコナデ 底ナデ	灰白色	石・長(1) ○		
98	土師 坏	底径(7.1) 残高 2.3	内面は黒色処理される。	ヨコナデ 底回転糸切り	ヨコナデ 底ナデ	黒灰色 灰白色	石・長(1~2) ○		
99	土釜	口径(22.3) 残高 5.0	体部は張り、口縁端部直下に突帯を巡らす。	ヨコナデ	ヨコナデ ハケ(10本/cm)	黒褐色	石・長(細粒) 石粒 ○	煤附着	
100	甕	底径(21.9) 残高 4.3	平底の底部から外上方に開く。	銅格子叩き目 底ナデ	ヨコナデ	黒灰色	石・長(1~2) ○		
101	青磁碗	底径(6.8) 残高 2.9	底部器壁は厚い。高台部は施釉されない。	ナデ	施釉	オリブ黄色	精良 ◎		14
102	鉢	残高 4.2	口縁部は肥厚する。口縁部内面に下方から上方に向かって3本の沈線が施される。	ナデ	ナデ	黒灰色 灰白色	石(1~2) ○		
103	こね 鉢	口径(26.6) 残高 8.4	口縁端部は上方にのび丸くおさめる。	横ナデ (指頭痕)	ナデ	暗灰色 灰色	石・長(細粒) ○		
104	こね 鉢	口径(26.4) 残高 4.8	口縁端部は上方にのび丸くおさめる。	横ナデ	ナデ	暗灰色 灰色	密 ○	黒斑	
105	こね 鉢	口径(24.9) 残高 5.5	口縁端部は上方にのび丸くおさめる。	横ナデ	ナデ	暗灰色 灰色	石・長(細粒) ○		

姫原遺跡の調査

表13 S D 13出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
106	石鍋	小片	滑石	5.7	7.0	2.4	126.0		14
107	砥石	1/2	凝灰岩	8.7	4.7	2.9	106.0		
108	凹石	完形	頁岩	9.6	8.7	5.3	676.0		

表14 S D 13・14動物遺存体観察表

番号	出土地点	種別	部位	年齢	時期	備考	図版
P	S D 13 (D 5)	馬	未足骨 (左)		14世紀		16
Q	S D 13 (D 5)	馬	未足骨 (右)		14世紀		16
R	S D 13 (D 5)	馬	基節骨		14世紀		16
S	S D 13 (C 4)	馬	中足骨 (左)		14世紀		16
T	S D 13 (C 4)	馬	頸骨 (右)		14世紀		16
U	S D 13 (C 4)	馬	上腕骨		14世紀		16
V	S D 14 (D 2)	犬	左顎		14世紀	解体痕わずかに有り	15
W	S D 13 (C 4)	馬	大腿骨		14世紀	解体痕跡有り	15

表15 S D 14出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
109	青磁碗	底径 6.1 残高 5.0	底部内面に「崑山片玉」の銘をもつ。	施釉	施釉	オリーブ色	精良 ◎		14
110	土師環	口径 10.6 底径 5.9 器高 2.8	平底の底部から内湾気味にたちあがり口縁端部は尖る。	ヨコナデ Ⓢ回転糸切り	ヨコナデ	にぶい黄褐色 淡黄灰色	石・長(1~4) ○		

表16 S K 9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
111	鍋	口径(23.8) 残高 3.8	内湾してたちあがる胴部。口縁端は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色	石・長(1~3) ○		

表17 S K 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
112	青磁碗	口径(16.0) 残高 4.8	内面に印花文。	施釉	施釉	緑灰色	精良 ○		

遺物観察表

表18 SK10出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
113	土師 椀	口径(16.2) 残高 4.0	内湾してたちあがり口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ→ミガキ	ヨコナデ	灰白色 浅黄色	密 ◎		

表19 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
114	甕	口径(34.0) 残高 8.0	口縁部直下に突帯を巡らす。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ	暗灰黄色	石・長(1~4) ○		
115	甕	口径 12.6 底径 4.6 器高 22.6	口縁拡張部に3条の凹線を施す。	㊦ヨコナデ→ハケ ㊧上ハケ(9本/cm) ㊧下ミガキ	㊦ヨコナデ ㊧上ハケ ㊧下ナデ	明赤褐色	石・長(細粒) ○	黒斑	
116	甕	口径 6.9 底径 7.1 器高 20.2	貼り付け口縁。胴部に18条のヘラ描沈線文。	㊦ヨコナデ→施文 ㊧上ナデ(マメツ) ㊧下ミガキ	ナデ(工具痕、指頭痕)	赤橙色	石・長(1~3) ○	黒斑	
117	甕	口径(12.8) 残高 8.1	底部はくびれの上げ底。	㊦ヨコナデ→施文 ㊧ハケ(7~8本/cm)	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	にぶい黄褐色	石・長(細粒~1.5) △		
118	甕	口径(15.0) 残高 4.8	平底の底部。口縁端部は上方にのびる。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ	㊦ヨコナデ ㊧ナデ(指頭痕)	にぶい黄褐色	石・長(1~3) 赤色土粒 ◎		15
119	壺	口径(17.2) 残高 12.0	平底の底部。口縁拡張部に3条の凹線文を施す。	㊦ナデ ㊧ミガキ	㊦ナデ ㊧マメツ	淡橙色	石・長(1~5) ○		15
122	高坏	口径(18.0) 残高 5.6	直立する頸部から外上方に開く口縁部。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ→ナデ	㊦ナデ ㊧ミガキ→ナデ	にぶい橙褐色	石・長(1~3.5) ○		
121	壺	口径(13.4) 残高 9.1	口縁拡張部に4~5条の沈線文と斜格子文。	㊦施文 ㊧ハケ(6本/cm)	磨滅にて不明	橙色	石・長(1~3) ○		
120	壺	底径 6.0 残高 10.7	内湾する胴部。口縁部は水平気味にのびる。口縁端部は断面「コ」字状。	ナデ	ナデ	にぶい橙色	石・長(1~2) ○	黒斑	
123	高坏	底径 10.6 残高 10.2	脚に12条の沈線文と10方向に貫通しない矢羽根透しを有する。	ナデ	ナデ	浅黄褐色	石・長(1~3) △		15
124	甕	口径(21.7) 残高 3.8	口縁端部は肥厚する。	ヨコナデ	ハケ(4~5本/cm) ㊧ハケ(9~10本/cm)	にぶい橙色	石・長(0.5~2.5) ○		
125	甗	残高 4.6	把手。水平気味にのびる。	ナデ (指頭痕)	ナデ	黄橙色	石・長(1~5) ○		
126	甗	残高 4.0	把手。上外方へのびる。	ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~2.5) ○		
127	高坏	底径 10.3 残高 7.1	脚裾は外反してのびる。脚端は丸い。	㊦ナデ ㊧ヨコナデ	㊦底ナデ ㊧ナデ(工具痕) ㊧ヨコナデ	にぶい橙色 明赤褐色	石・長(1~6) ○		
128	坏蓋	残高 2.0	つまみは中央が突出する。	㊦回転ヘラ削り ㊧つまみ回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(細粒) ○	自然釉	
129	坏蓋	残高 3.2	天井部は丸く、つまみは中央がやや突出する。	回転ナデ	回転ナデ	暗緑~灰色 青灰色	石・長(細粒~2) ◎	自然釉	
130	坏蓋	口径(13.6) 残高 4.0	天井部は丸く、口縁端部は丸くおさめる。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	明緑灰色	石・長(1~2) ○		
131	坏蓋	口径(12.4) 器高 4.1	天井部は平坦。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰白色	石・長(1~4) ○	自然釉	
132	坏身	口径(12.0) 器高 3.6	たちあがりは短く外傾する。受部は水平にのびる。	回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	石・長(1~2) ○		

姫原遺跡の調査

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
133	坏身	口径(11.3) 残高 2.5	たちあがりは短く外傾し、受部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(1) ○		
134	坏身	口径(13.1) 器高 4.0	高台断面方形。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石・長(0.5 ~2) △		
135	坏身	底径(9.8) 残高 1.7	高台低い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長(細粒 ~2) △		
136	坏身	底径(9.7) 残高 1.1	高台低く、底部がわずかに突出する。	回転ナデ Ⓢ回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	石・長(細粒 ~2) ◎		
137	盤	口径(21.7) 器高 2.5	高台端面は水平。	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	灰白色	石・長(1~3) ○		
138	広口壺	口径(21.8) 残高 4.0	口縁端部は下方に肥厚し、丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(細粒) 石粒 ◎		
139	提瓶	口径(9.6) 残高 7.3	口縁端部は肥厚し、丸くおさめる。	Ⓢ回転ナデ Ⓢカキ目	回転ナデ ナデ	黄灰色	石・長(細粒) △		
140	甕	口径(32.9) 残高 18.9	口縁端部直下に櫛播波状文、頭部に斜位の刺突文を施す。	Ⓢ回転ナデ→施文 Ⓢ平行叩き→カキ目	Ⓢ回転ナデ Ⓢ同心凹文	暗青灰色	石・長(細粒~1.5) 石粒 ◎		
141	坏	底径(6.5) 残高 2.4	高台は外方に開き、端部は丸い。	磨滅にて不明	磨滅にて不明	浅黄橙色	石・長(細粒 ~3) △		
142	坏	口径(14.4) 底径 11.2 器高 3.7	底部から内湾してたちあがり、口縁端部近くで外反する口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	橙色	密 ○		
143	土釜	口径(17.8) 残高 6.1	口縁端直下外面が肥厚する。	Ⓢヨコナデ Ⓢナデ	ナデ	にぶい褐色 橙色	石・長(1~3) ○	黒斑	
144	瓦器碗	口径(15.0) 残高 3.5	内湾する体部。口縁端は丸くおさめる。	ヨコナデ ナデ	ミガキ	黒灰色	密 ○		
145	瓦器皿	口径(9.8) 器高 1.6	平底の底部から短く外反してたちあがる。	Ⓢヨコナデ Ⓢナデ	ヨコナデ→ミガキ	黒灰色	密 ○		
146	瓦器碗	底径 5.3 残高 1.1	高台は低く断面三角形。	ナデ	磨滅にて不明	黒褐色	密 ○		
147	瓦器碗	底径 5.8 残高 1.4	高台は低く断面三角形。	ヨコナデ	ナデ	淡黄色 黒灰色	石・長(1~4) 金ウンモ △	黒斑	
148	須恵碗	底径 6.9 残高 2.7	平底の底部。底部は回転糸切り。	ヨコナデ Ⓢ回転糸切り	ヨコナデ Ⓢナデ	灰白色	石・長(1~2) △		
149	土師坏	底径 4.5 残高 2.3	平底の底部から内湾気味にたちあがる。	ヨコナデ Ⓢ回転糸切り	ヨコナデ	乳白色	石・長(細粒 ~2) ○		
150	土師皿	口径(7.4) 底径(5.0) 器高 1.7	平底の底部から外上方にたちあがり口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ Ⓢ回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色	密 ○		
151	青磁碗	底径 5.8 残高 4.2	底部内面に「金玉満堂」の銘をもつ。	施釉 Ⓢ回転ナデ	施釉	オリーブ黄色	精良 ◎		
152	青磁碗	底径 5.3 残高 1.8	底部内面に印花文。	施釉 Ⓢ回転ナデ	施釉	灰オリーブ色	精良 ◎		
153	青磁碗	口径(16.4) 残高 4.3	無文の緑釉。	施釉	施釉	オリーブ黄色	精良 ◎		

第3章

たに 町 遺 跡  
谷 町 遺 跡



## 第3章 谷町遺跡の調査

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯

1995(平成7)年3月、阿部博氏より松山市谷町371番地内における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

確認願いが提出された谷町371番地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No41 潮見古墳群遺物包含地』内にあたり、当地一帯は周知の遺跡として知られている。同包含地内では座拝坂遺跡(松村淳 1993)の調査が行なわれており、弥生時代から古代までの遺跡の存在が明らかとなっている。

これらのことから当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1995(平成7)年3月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器、土師器、須恵器を含む遺物包含層と竪穴式住居址状の遺構を検出し、当該地に弥生時代から古代までの集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課と阿部博氏の両者は遺跡の取扱について協議を重ね、宅地開発によって失われる遺構・遺物について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。調査地の南東約70mの座拝坂遺跡では弥生時代から古代までの集落の存在が確認されており、本調査ではこれらの集落の構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり阿部博氏の協力のもと1995(平成7)年9月1日発掘調査を開始した。

#### (2) 調査組織

調査地	松山市谷町371番地
遺跡名	谷町遺跡
調査期間	1995(平成7)年9月1日～同年10月26日
調査面積	701m <sup>2</sup>
調査担当	山本健一・武正良浩

### 2. 層位(第44図)

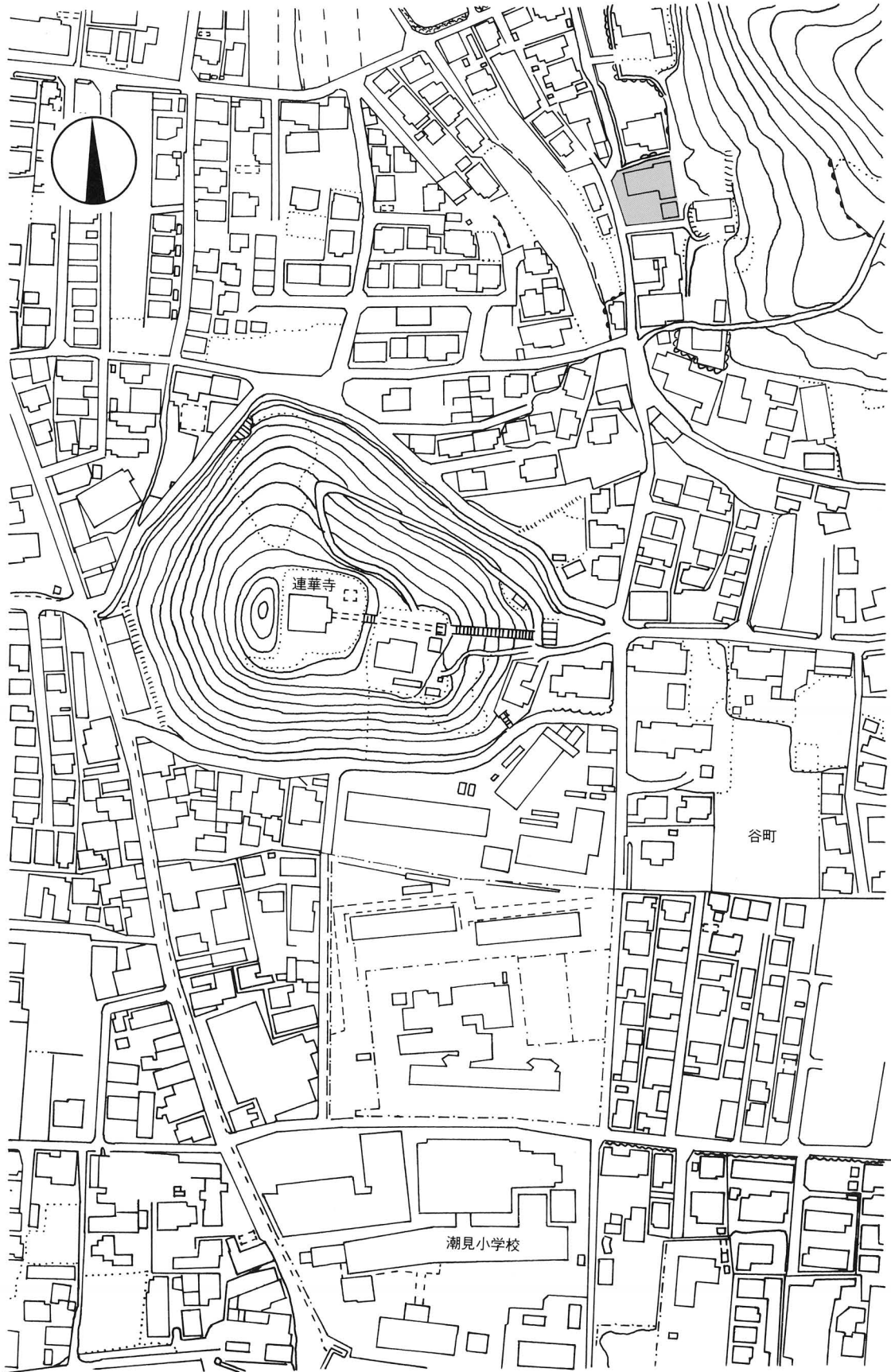
本調査地の基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層造成土、第Ⅲ層明灰黄色砂質土、第Ⅳ層明灰褐色土、第Ⅴ層黒灰色土、第Ⅵ層黄白色粘土である。

第Ⅰ層—灰色砂質土で10cm～50cmの推積を測る。現代の庭土である。

第Ⅱ層—黄灰色土～灰色土(黒色土と黄色土が混じる)で18cm～55cmの推積を測る。現代の造成土である。

第Ⅲ層—多少の土色の差異からⅢ①層明灰黄色砂質土、Ⅲ②層明灰黄色砂質土(Ⅲ①層よりやや暗い)に分層される。Ⅲ①層は14cm～110cm、Ⅲ②層は28cm～32cmの推積を測り、Ⅲ②層は調査地西部でのみにみられた。遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、鉄製品、石製品、鉄滓が出土した。

谷町遺跡の調査



第42図 調査地位置図 (S=1:2,500)



## 層 位

第Ⅳ層—16cm～20cmの推積を測る。調査地西部にはない。弥生土器と須恵器が出土した。

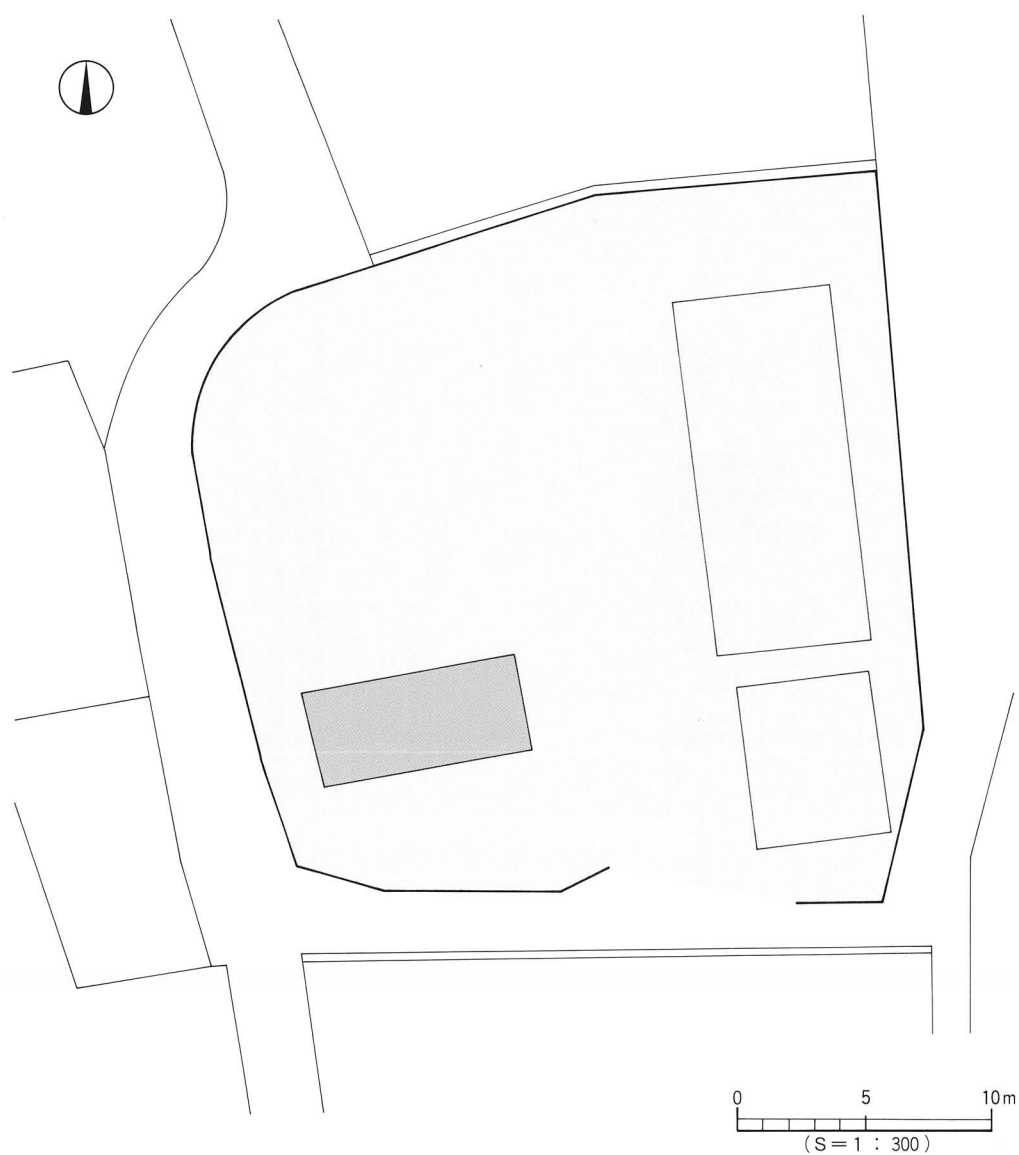
第Ⅴ層—20cm～50cmの推積を測る。調査地西部にはない。弥生土器、須恵器、石製品が出土した。

第Ⅵ層—調査地全域で見られ地山層である。

各層は出土遺物から判断すると、第Ⅲ層は中世以降、第Ⅳ・Ⅴ層は古墳時代に推積したものと判断される。

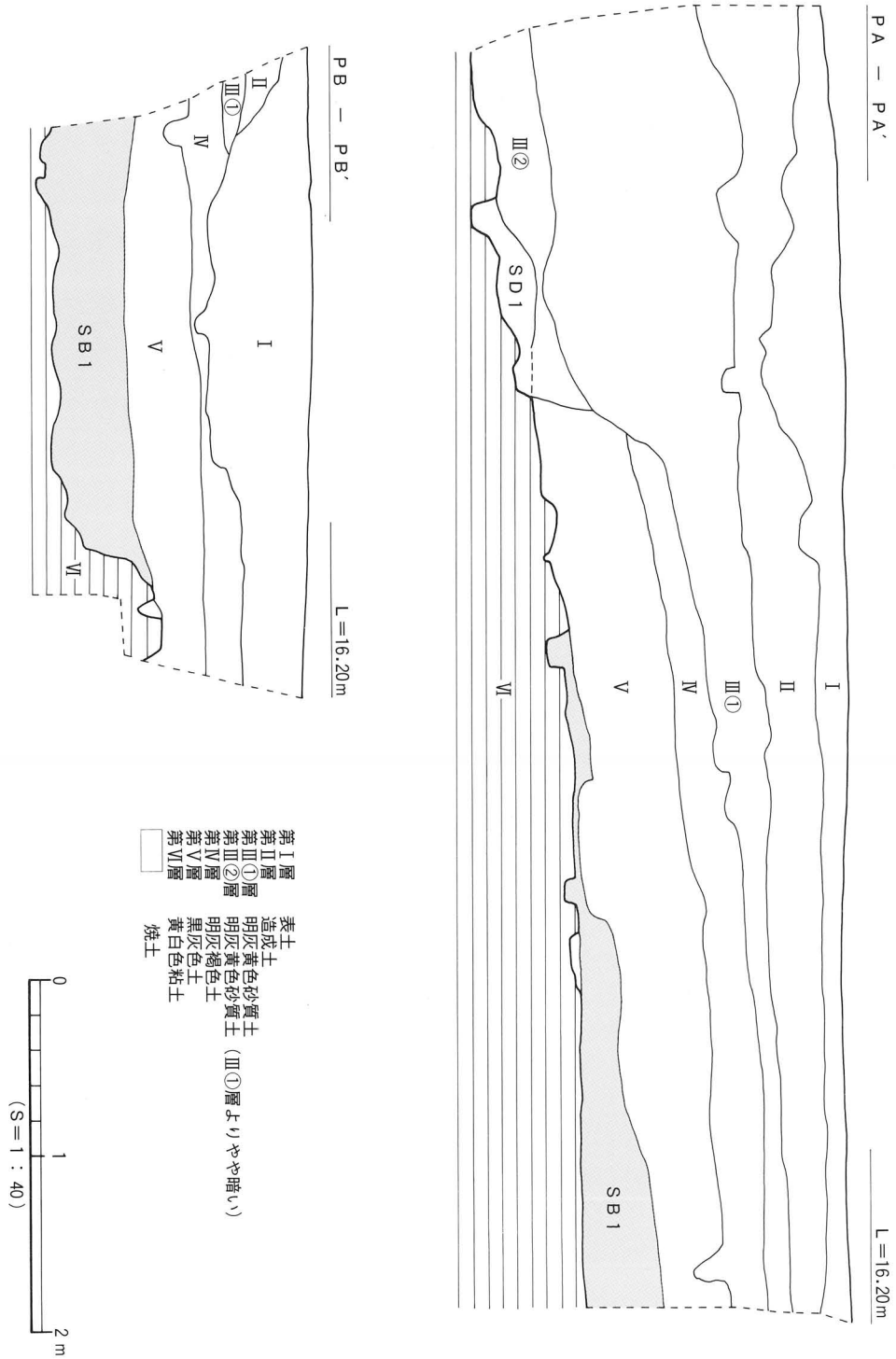
遺構は第Ⅵ層上面での検出である。竪穴式住居址1棟、溝3条、土坑2基、柱穴13基を検出した。調査地西部で検出した中世の遺構は、第Ⅲ層と遺構埋土が酷似するために第Ⅳ層上面からの掘り込みの可能性もある。

遺物は上記第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層中と、遺構内からの出土である。遺構内からは弥生土器、須恵器、石製品が出土した。



第43図 調査地測量図

谷町遺跡の調査



第44図 土層図 (上段北壁・下段東壁)

なお、調査にあたり調査区内を2m四方の区画に分けた。呼称は第45図に記す。

### 3. 遺構と遺物

本調査において確認された遺構は、弥生時代から中世までのもので、竪穴式住居址(SB)1棟、溝(SD)3条、土坑(SK)2基、柱穴(SP)13基である。以下、時代別に記述を行う。

#### (1) 弥生時代

弥生時代の遺構は、竪穴式住居址1棟、溝2条、土坑2基、柱穴8基である。

##### 1) SB1 (第46図～第48図、図版18・19)

調査区の東半部での検出である。住居の西側は第V層堆積前に削平をうけている。住居の壁体は、調査区の南東隅で一部を検出したが、住居址の平面形態は判断できるものではなかった。検出規模は東西4.5m、南北3.4m、深さは0.44mを測る。埋土は黒灰褐色土(黄色土粒状混じり)である。住居址内からは内部施設として、主柱穴2基、壁体溝、高床部、土坑4基、貼り床、焼土を検出している。

主柱穴はSP①、SP②の2基で、他は調査区外となる。SP①の平面形態は円形で、規模は直径45cm、深さ40cmを測る。SP②の平面形態は不整形で、規模は長軸48cm、短軸40cm、深さ46cmを測る。埋土はSP①、SP②とも黒灰色土(黄色土粒混じり)である。

周壁溝は南東部の壁体に沿って検出した。検出規模は、長さ90cm、幅10cm～14cm、深さ11cmを測る。埋土は黒灰色土である。

高床部は2基の主柱穴を囲むように「コ」の字状で検出した。高床部の掘り方は、南東側では住居の掘り方床面より5cm高くなる。高床部は地山を削り出した後、厚さ17cm前後の貼り土(黒灰色土と黄色土の互層)を用いて構築される。よって、住居の掘り方からの高さは22cm、幅95cmを測る。高床部西側は削平され、地山直上に厚さ1cm前後の貼り土が遺存しているだけである。

貼り床は、床面全体で検出した。貼り床の厚さは、SK①周辺から北半は1cm前後、南半から西辺部西側は2～7cmを測る。貼り床上面は平坦である。

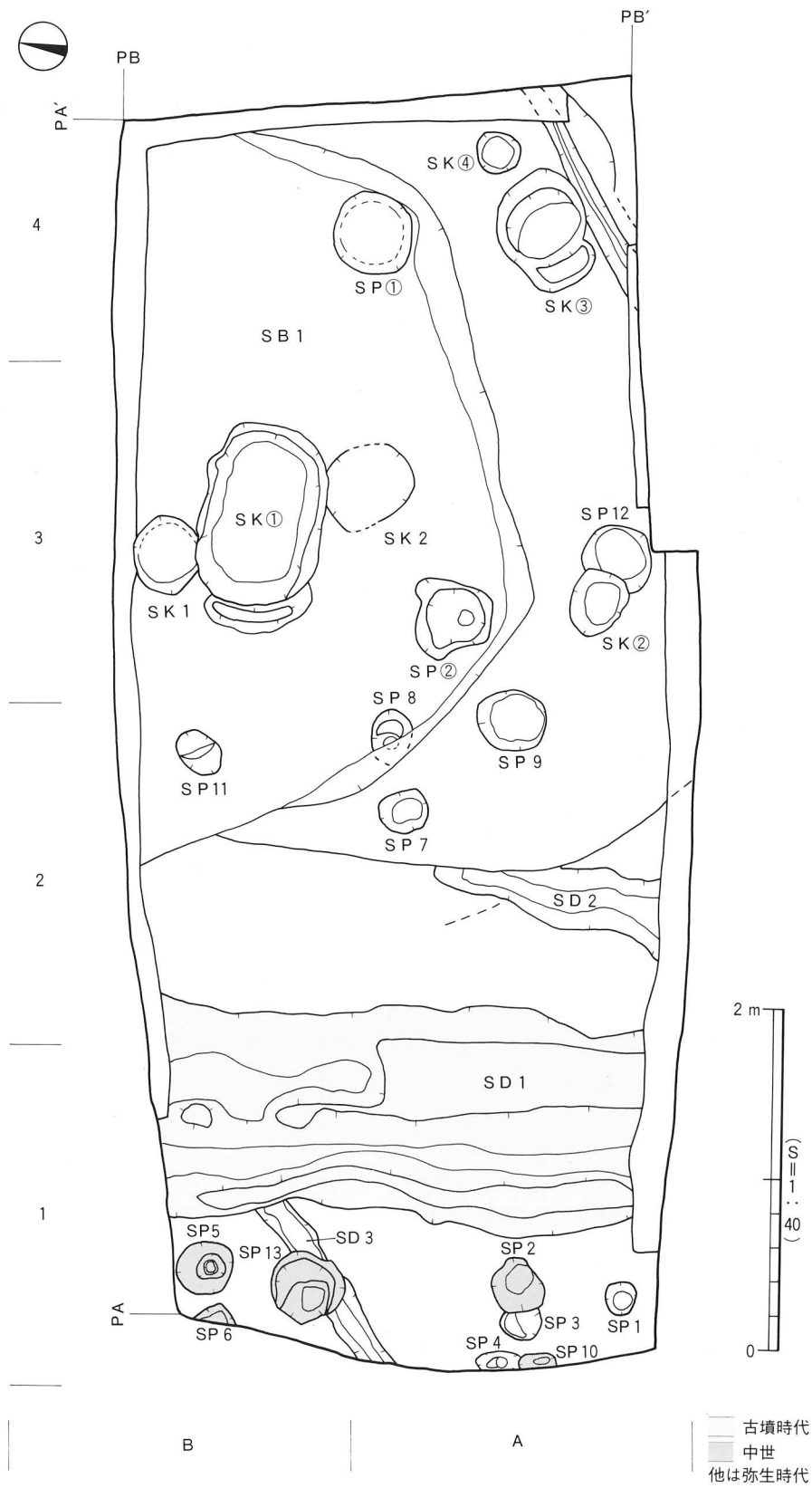
土坑はSK①～④の4基である。SK①は床面で検出した。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸1.24m、短軸0.71m、深さ0.20mを測る。埋土は上層の黒灰褐色土、下層の黒色炭化物層の2層に分層される。SK②～④は高床部で検出した。SK③の平面形態はダルマ形を呈する。規模は長軸68cm、短軸53cm、深さ34cmを測る。埋土は上層の黒灰褐色土(黄色土と砂が混入)と、下層の黒灰褐色土(黄色土粒混じり)の2層に分層される。SK②の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸40cm、短軸28cm、深さ4cmを測る。SK④の平面形態は円形である。規模は直径40cm、深さ7cmを測る。SK②とSK④の埋土は黒灰褐色土の単一層である。

焼土は床面北側の2ヶ所(焼土1、焼土2)にあり、床面からやや盛り上がった状態で検出した。焼土1の北側は調査区外へのびる。焼土1の検出範囲は東西62cm、南北42cm、厚さ4cmを測る。焼土1、焼土2は厚さ1cm前後の貼り床土で覆われている。

遺物は遺存状況が比較的良好な住居址内東部で土器が出土したが、いずれも破片であった。

SB1の埋土からは弥生時代中～後期の甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器と、石鏃が1点出土している。また、SK①・②・③からは弥生時代後期の甕形土器、壺形土器、鉢形土器が出土している。焼土1からも土器が出土しているが、小片のため図示しえるものはない。

谷町遺跡の調査



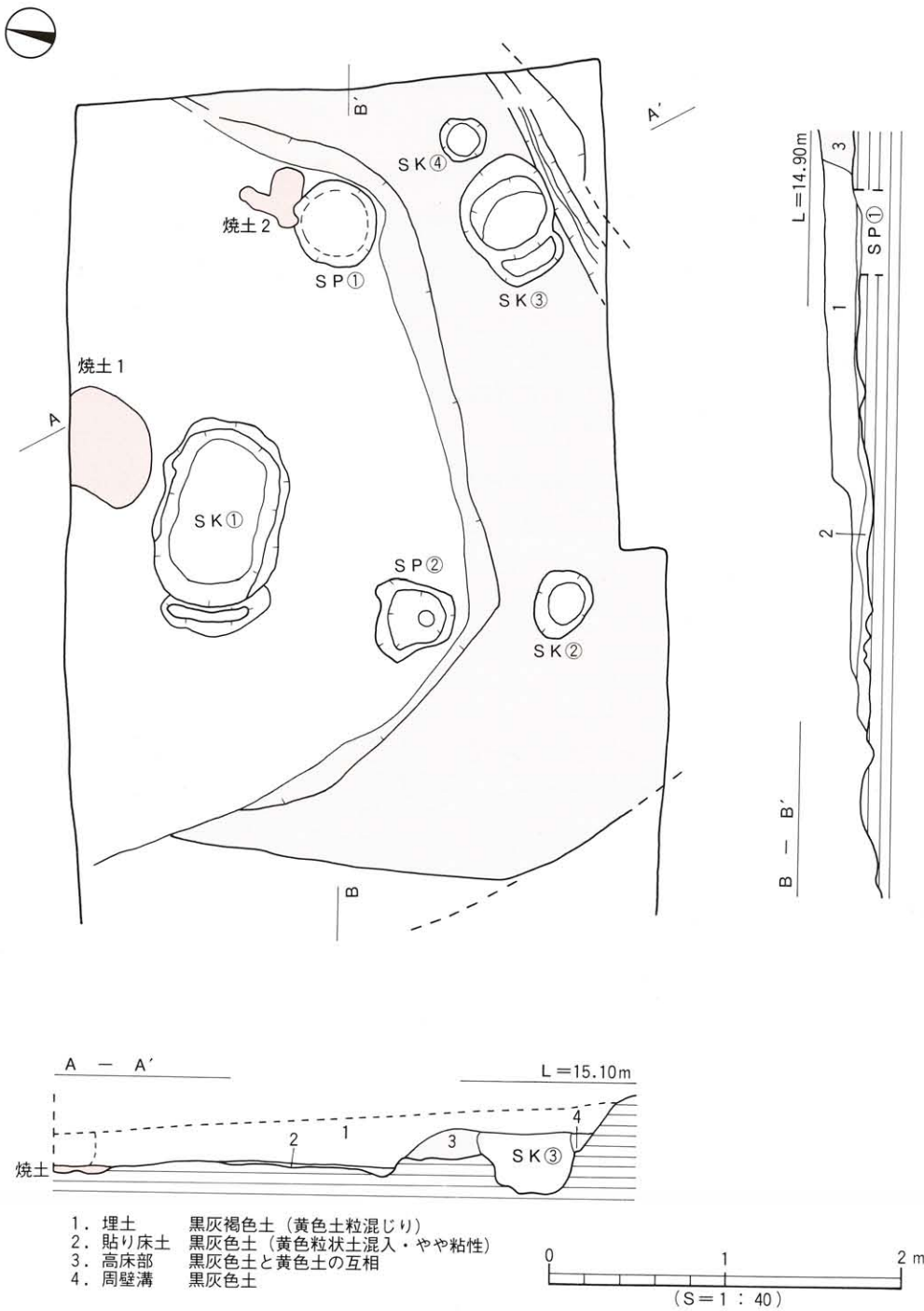
第45図 遺構配置図

遺構と遺物

出土遺物 (第49図、図版22)

弥生土器 (154~170)

甕形土器 (154~157) 154~157は口縁部片である。154はやや外傾気味の口縁部で、端部上面に



第46図 SB1 測量図

谷町遺跡の調査

面をもつ。胴部外面に叩き調整が顕著に残る。156の端部は尖り気味にやや丸味をもつ。157は外傾する口縁部で端部に面をもつ。内外面ともナデ調整が施される。

壺形土器 (158~160) 158は口縁部片で、端部は上下方向に拡張される。端部面に波状文を施す。159・160は底部片である。159は平底の底部。160はやや突出した小型の平底で、外面に叩き調整が残る。

鉢形土器 (161~165) 161は口縁部片で、端部は尖り気味におさめる。外面に叩き調整が残る。162は底部よりやや内湾気味に上外方向へ立ち上がる口縁部、口縁端部は尖る。外面に叩き調整が見られる。163は口縁部片で、口縁端部は稜をもって外反する。164は口縁部片。口縁部は丸くおさめる。165は丸底の底部片。

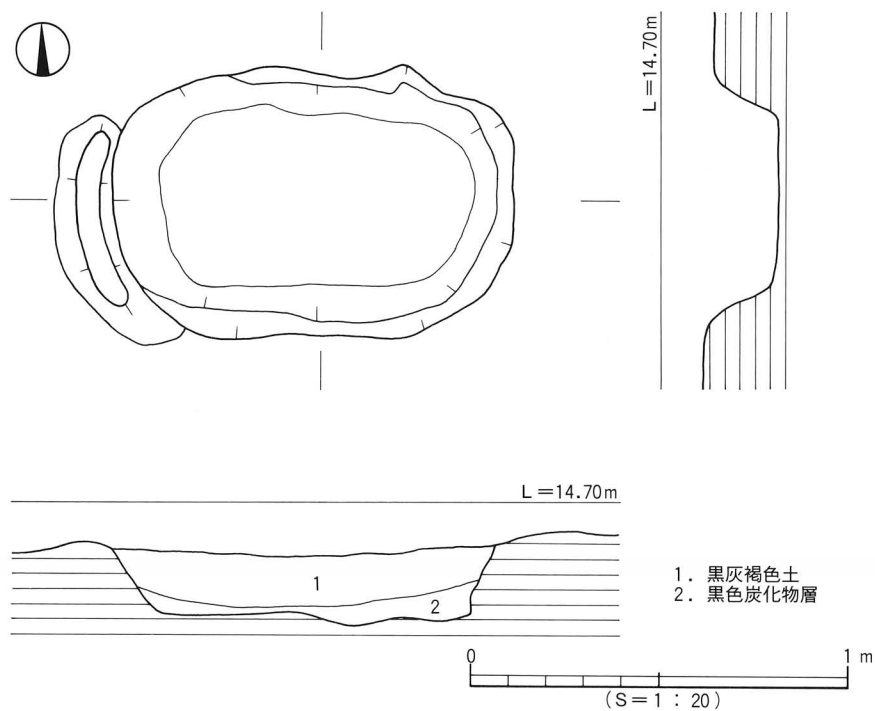
高杯形土器 (166~168) 166は坏口縁部片。口縁端部は上下方向に拡張される。167・168は坏屈曲部片。屈曲部に稜をもつ。

弥生時代中期の土器 (169・170) 169は甕形土器の底部片。底部よりやや外反気味に立ち上がる。くびれをもつ上げ底の底部。170は高杯形土器の杯部片。口縁部内外方を拡張させ、口縁端部外面に刻目を施す。

石製品 (171・172)

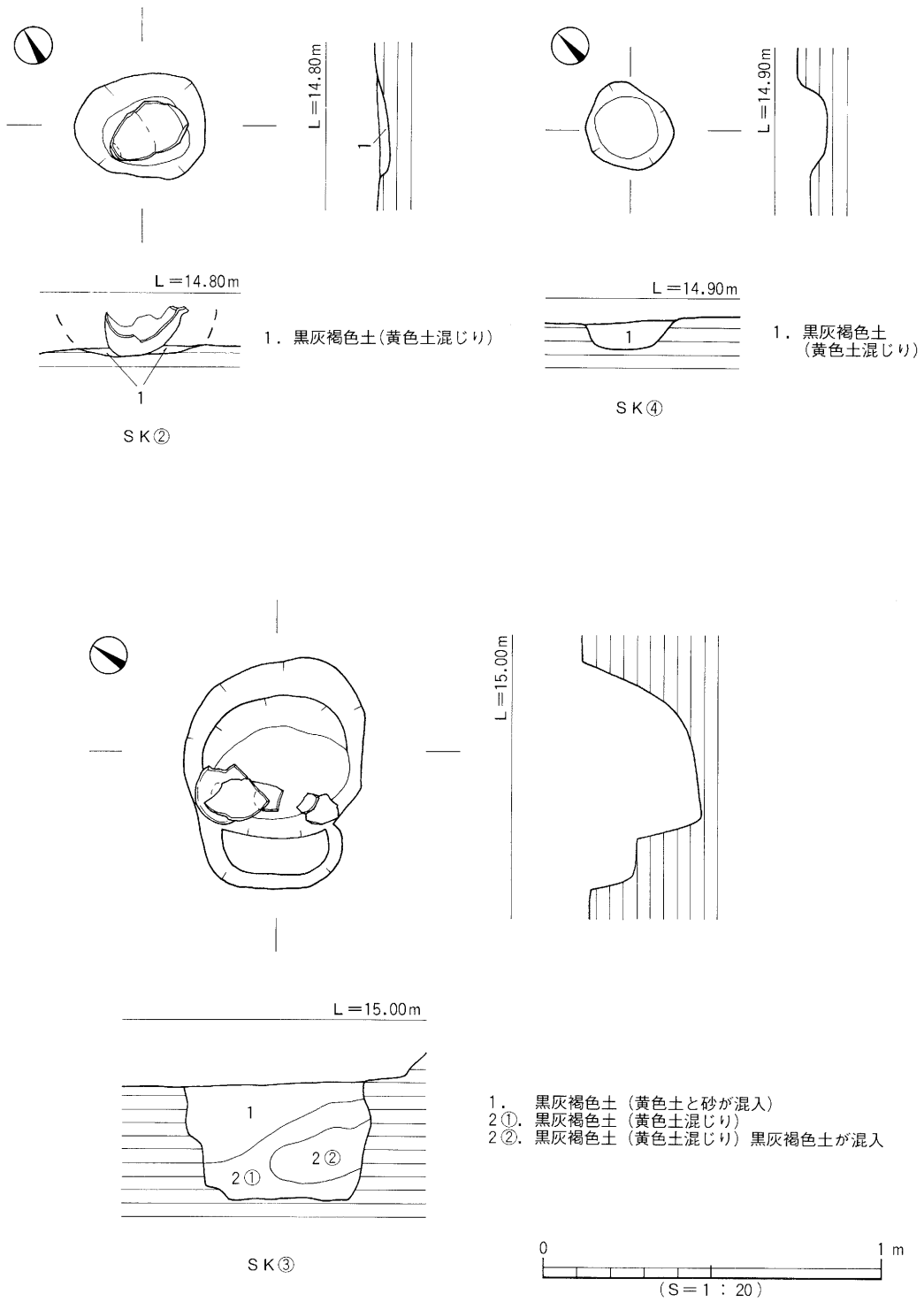
石鏃 (171) 171は打製の凹基無茎式石鏃である。二等辺三角形を呈し、両脚端部をわずかに欠くものである。基部に施された抉りは浅い。法量は長さ2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重量0.55gである。サヌキトイド製。

砥石 (172) 172は欠損品である。使用痕が残存する面すべてに認められる。桑原田中遺跡2次調査地SD6出土の砥石に類例をみる。長さ3.3cm、幅7.9cm、厚さ4.4cm、重量137.7gである。砂岩製。



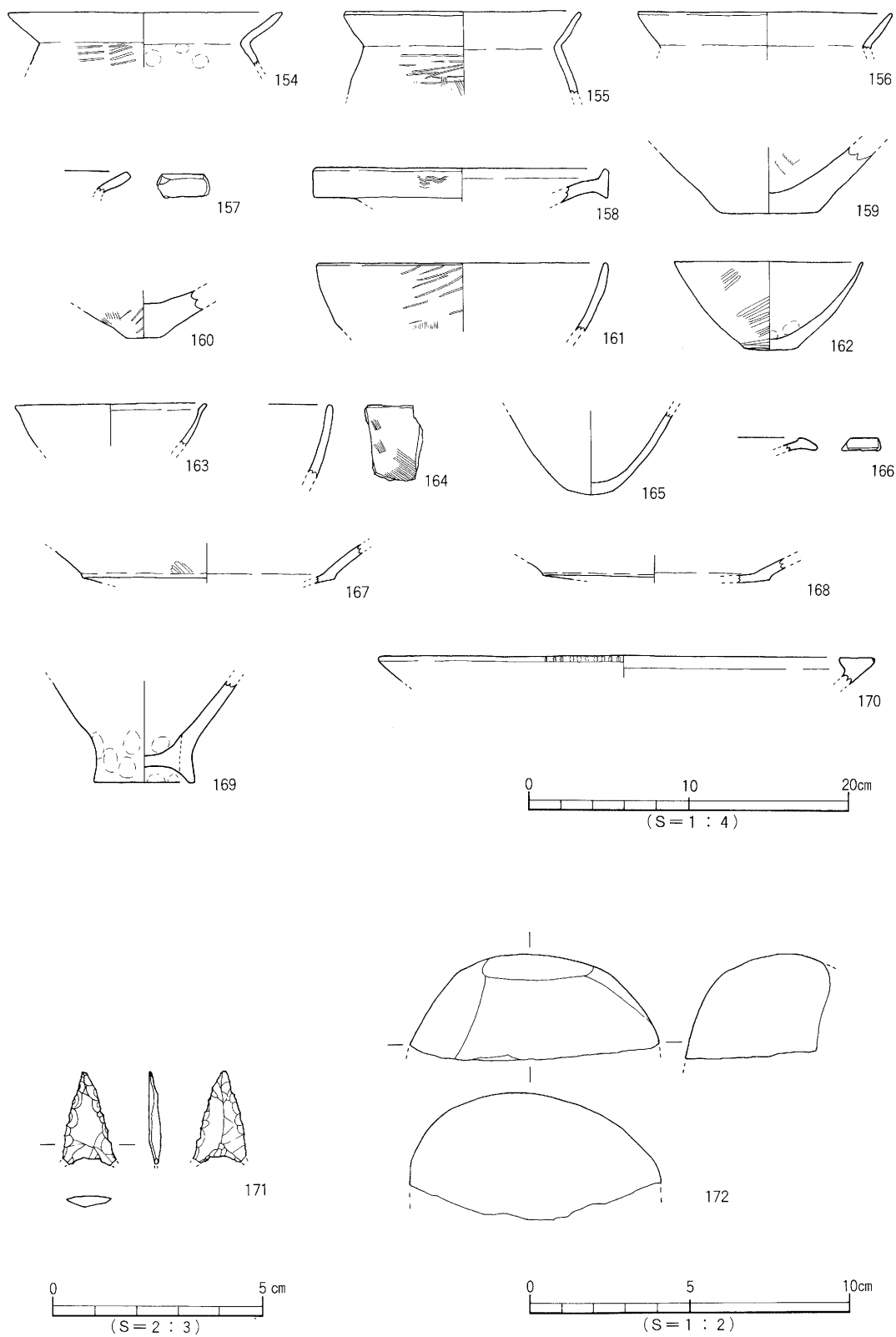
第47図 SB1内SK①測量図

遺構と遺物



第48図 SB1内SK②・SK③・SK④測量図

谷町遺跡の調査



第49図 SB 1 出土遺物実測図



## 遺構と遺物

### 住居址施設内出土遺物 (第50図)

#### 弥生土器 (173~182)

**甕形土器 (173~178)** 173は胴部全体に張りをもち、口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部は尖り気味におさめる。底部は不安定な平底である。器高22.8cmを測る。174・175は外反する口縁部。174は口縁端部に面をもつ。175は口縁端部を先細りにおさめる。176は口縁端部を尖り気味におさめる。177は垂直に立ち上げた口縁部。口縁端部は丸くおさめる。内外面とも磨滅が著しく調整は不明。宮前川遺跡S B 4出土の甕に類例をみる。178は胴部片。胴部全体に張りをもち、器壁は薄い。平底の小さい底部。底部にはハケ調整が多く、胴部は叩き調整が顕著に残る。

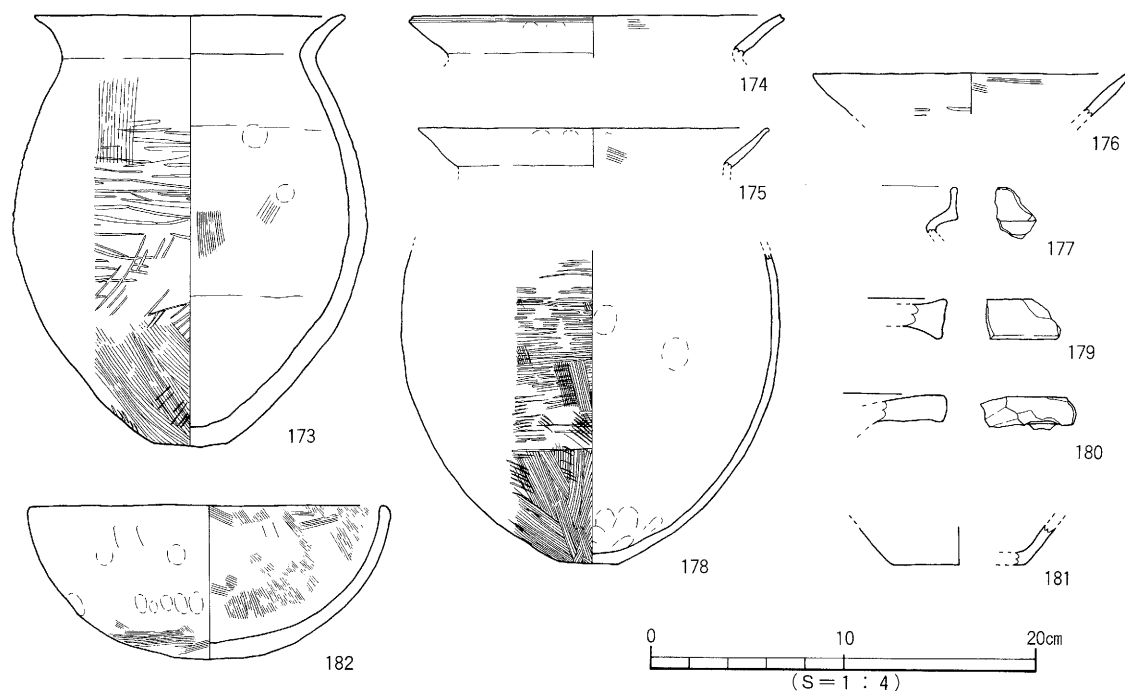
**壺型土器 (179~181)** 179・180は口縁部片で、口縁端部下方が若干肥厚する。

**鉢形土器 (182)** 182は口縁部の一部を欠損する。底部から内湾気味に上方向へ立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。丸底の底部。内外面ともハケ調整が施される。

**時期：**出土した遺物から、廃棄・埋没時期は弥生時代後期末に比定される。

### S D 2 (第51図)

S D 2は、調査区中央部のA 2区に位置し、S B 1に切られる。断面形は舟底状を呈し、基底部は凹凸がみられた。検出長130cm、上場幅20~35cm、深さ6cm前後を測る。埋土は黒灰色土(黄色土混



174~177、181	S K ①出土
173	S K ②出土
178、182	S K ③出土
179	S P ①出土
180	S P ②出土

第50図 S B 1内施設内出土遺物実測図

谷町遺跡の調査

じり)である。遺物の出土はない。溝には人為的な掘り方は認められなかった。

時期：S B 1に切られることから弥生時代後期末以前のものと考えられる。

S D 3 (第51図)

S D 3は調査区南部A 1～B 1に位置し、S D 1・柱穴に切られる。断面形は舟底状を呈し、検出長112cm、幅18cm、深さ8cmを測る。遺物は弥生土器の小片が数点出土したが図化はできなかった。

時期：出土遺物より弥生時代とする。

S K 1 (第52図)

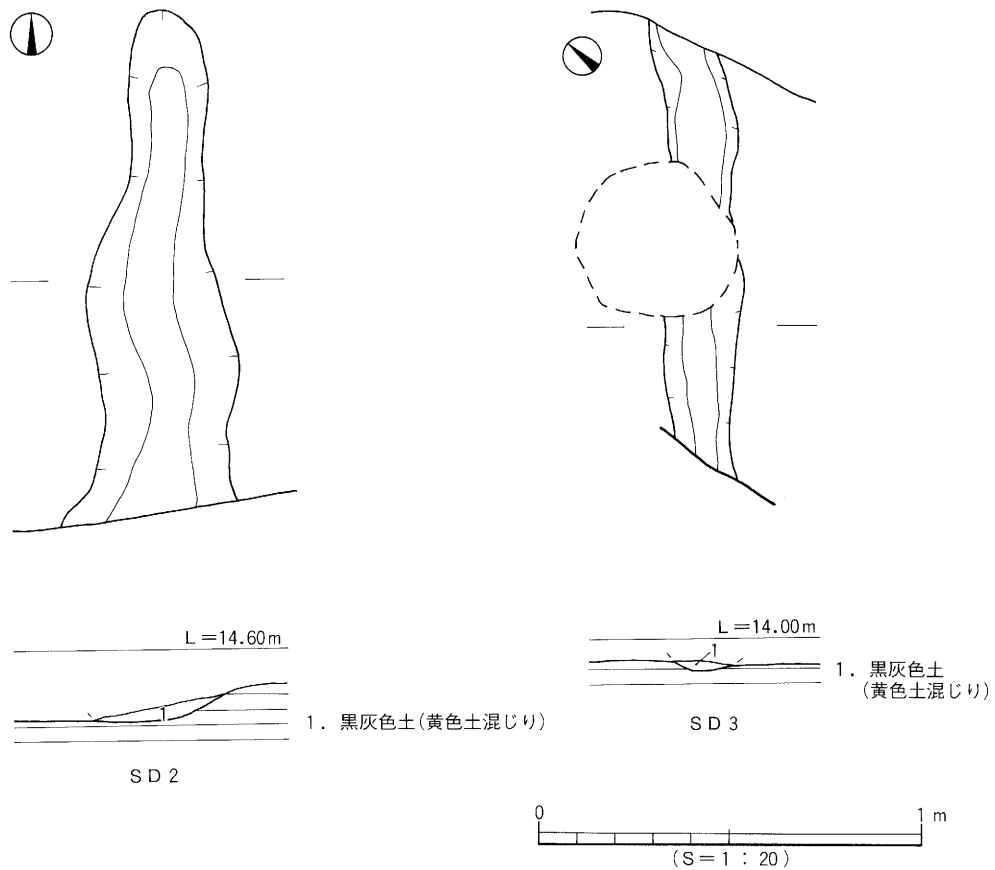
S K 1は、調査地中央北部寄りのB 3区に位置し、S B 1に切られる。平面形は円形を呈し、長さ46cm、幅41cm、深さ45cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は上層の黒灰褐色土(やや炭黒い)、下層の黄灰色土である。遺物は弥生土器の小片が少量出土した。土坑の性格は不明である。

出土遺物(第53図) 183は甕形土器の口縁部片である。外反する口縁部は、端部が尖る。

時期：遺物の出土は少ないが、弥生時代後期に比定される。

S K 2 (第52図)

S K 2は、調査区中央北寄りのA 3区に位置し、S B 1を完掘後検出した。調査の過程によりトレ



第51図 S D 2・S D 3測量図

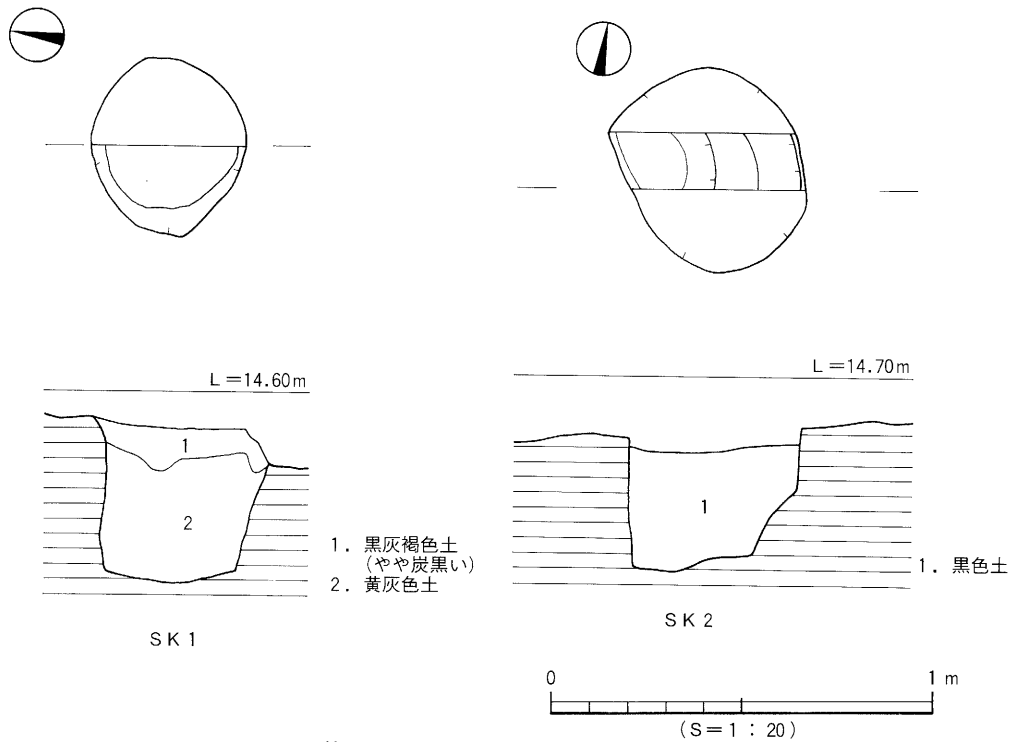
遺構と遺物

ンチ調査のみを行った。平面形は楕円形を呈し、長さ45cm、幅41cm、深さ35cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒色土である。遺物の出土はない。土坑の性格は不明である。

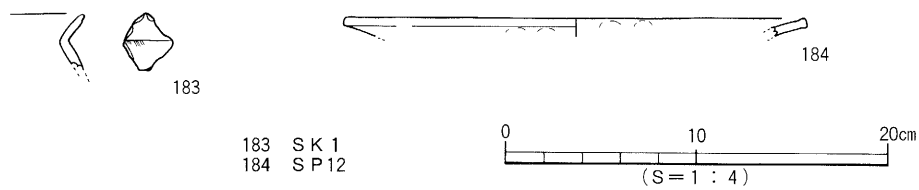
時期：S B 1に切られることにより、弥生時代後期末以前のもと考えられる。

柱 穴 (第45図)

弥生時代の柱穴は8基確認した。調査地全体に散存する。平面形は円～楕円形を呈し、径14～44cm、深さ10～51cmを測る。柱痕の確認できたものには平面形が四角形と円形があり、四角形は一辺13cm、円形は径12cmを測る。埋土は黒灰色粘性土～黒灰褐色土である。遺物はS P 1・S P 12より弥生土器の小片が出土した。第53図・184は甕の口縁部片である。



第52図 SK 1・SK 2測量図



第53図 SK 1・SP 12出土遺物実測図

(2) 古墳時代 … 古墳時代の遺構は、溝1状である。

SD1 (第54図、図版20)

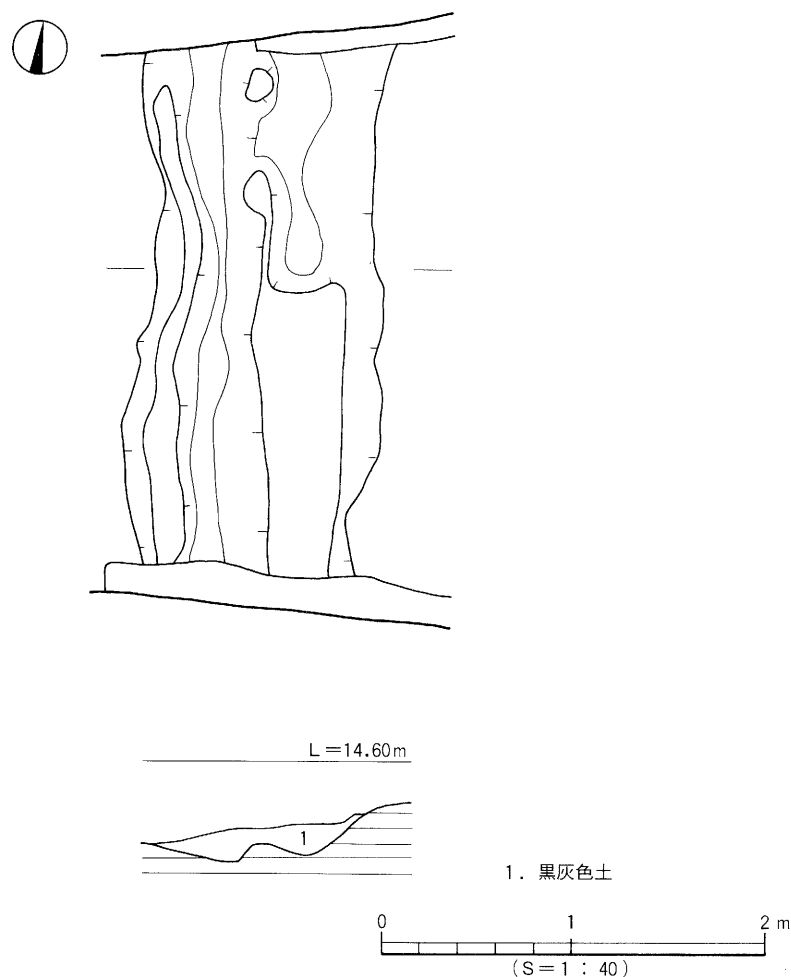
調査地西半部のA1～B2区に位置し、SD3を切る。溝の主軸は地山面の等高線とほぼ平行する。断面形は逆台形状を呈し、検出長281cm、幅114cm、深さ19cmを測り、溝南半部東側では中段がみられた。埋土は黒灰色土である。遺物は弥生土器、須恵器が10cm大の礫石と混存して出土した。

出土遺物 (第55図、図版22)

須恵器 (185～187) 185は短頸壺である。偏球形の体部から強く屈曲した肩部、短くやや外傾した口縁部をもつ。口縁端部は上面に面をもち、端部外面はナデ調整により拡張される。器高7.3cm、口径7.6cmを測る。肩部の2cm下ったあたりまで回転ヘラ削りがみられる。他の部位は回転ナデ調整が施される。186・187は甕の口縁部片である。186は短く外反しながら立ち上がる口縁部。186・187ともに口縁端部は玉縁状におさめる。

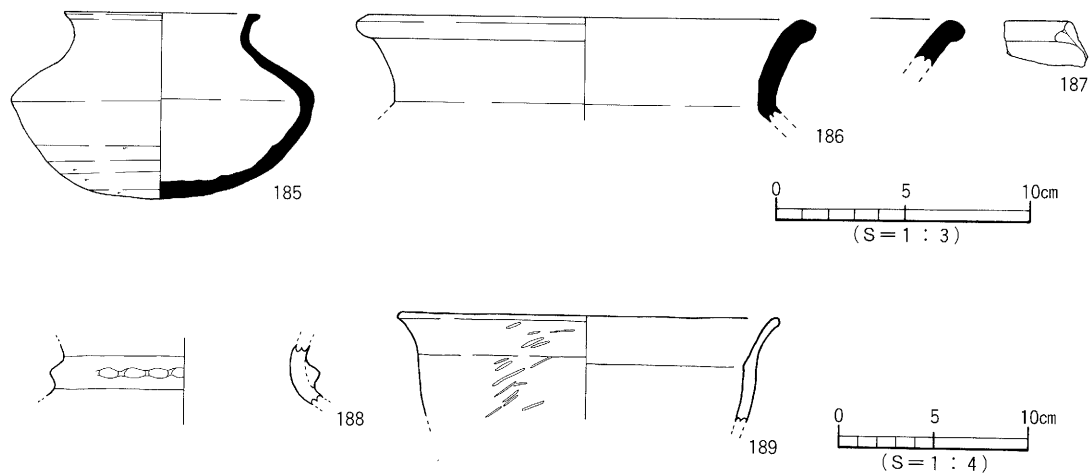
弥生土器 (188・189) 188は壺の頸部片である。頸部には圧痕文突帯が1条巡る。189は鉢の口縁部片である。稜をもって外反する口縁部で、口縁端部は丸くおさめる。外面に叩き痕が残る。

時期：出土遺物より7世紀前半に比定される。



第54図 SD1 測量図

## 遺構と遺物



第55図 SD1出土遺物実測図

### (3) 中世

中世の遺構は柱穴5基を検出した。柱穴埋土が第Ⅲ②層と酷似することから中世と判断した。

柱穴 (SP 2・5・6・10・13)

柱穴は調査地西部の第Ⅵ層上面での検出である。この調査地西部は、第Ⅳ・Ⅴ層が欠除し第Ⅲ層下が第Ⅵ層となる。平面形は円～楕円形を呈し、径22～44cm、深さは浅いもので4～9cm、深いもので45～73cmを測る。柱痕跡は2基の柱穴で確認できた。柱痕の平面形は2基とも円形で、SP 5は直径8cm、SP 13は直径13cmを測る。埋土は明黄灰色砂質土～暗黄灰色土である。遺物の出土はなく明確な時期決定には至らなかった。

### (4) その他の遺物

第Ⅲ層出土遺物 (第56図、図版23)

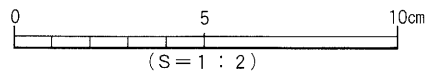
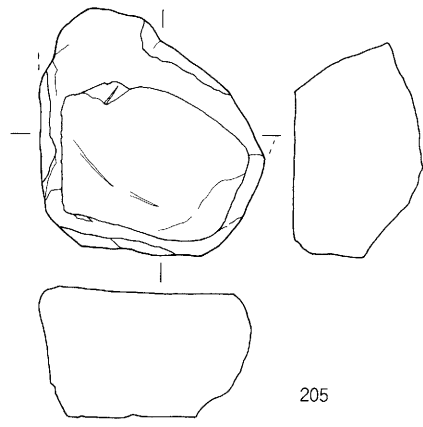
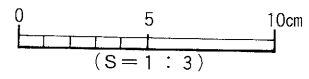
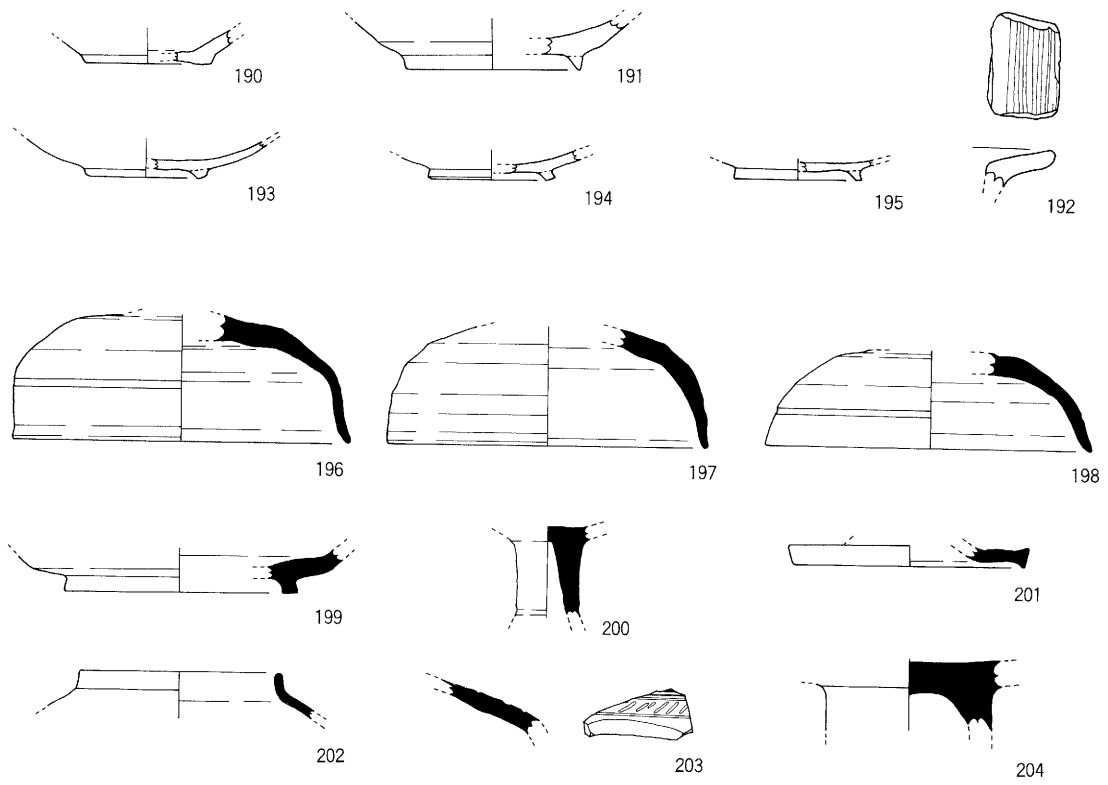
第Ⅲ層からは11～13世紀代の土師器・瓦器の他に混入遺物と考えられる弥生土器、須恵器、石製品、鉄製品 (器種不明)、鉄滓が出土した。

土師器 (190～192) 190・191とも碗の底部片である。190は平底の高台、191は断面三角形の高台を貼り付けている。192は鍋の口縁部片。口縁端部は丸く仕上げる。口縁部内面にハケ調整を施す。190は11世紀代、191は12世紀代、192は12～13世紀代。

瓦器 (193～195) 193～195は碗の底部片である。いずれも低い断面方形の高台を貼り付け、内面には磨き調整が施されている。193～195は13世紀代。

須恵器 (196～204) 196～198は杯蓋である。196は緩やかに弧を描く天井部で口縁部はやや外傾し、口縁端部は外反する。天井部と口縁部の稜は不明瞭で浅い凹線が巡る。197は弧を描く天井部でやや外傾する口縁部である。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。天井部と口縁部の稜は消失している。198は緩やかに弧を描く天井部で口縁部は直線的に外傾する。口縁端部は尖り気味におさめる。天井部と口縁部の稜は不明瞭で浅い凹線が巡る。199は坏の底部片である。底端よりやや内側に「ハ」字状の断面方形の高台が付く。高台の接地面はほぼ平らである。200・201は高杯である。200は脚柱部片で、柱部はやや細身である。杯部との接合部より2.5cm下方に凹線が1条認められる。201は脚裾部片で、裾は水平に伸びており、裾端部は強く撫でられ上下方向にやや拡張する。202～204は壺である。202

谷町遺跡の調査



第56図 第三層出土遺物実測図

は短頸壺の口縁部片で、短く直立する口縁部は端部を丸くおさめる。203は肩部片で、ハケ状工具による右上がりの刺突文の上位に浅い凹線2条と下位に凹線1条が認められる。204は脚付き壺であろうと考えられる。底部と脚部の接合部分で脚部の外面は直立、内面は「ハ」字状を呈する。器壁は厚い。底部内面は使用痕が認められる。

石製品 (205) 205は砥石である。残存部分の3面にて使用痕がみとめられる。石材は砂岩である。

#### 第IV層出土遺物 (第57図)

第IV層からは7世紀前半の須恵器の他に、混入遺物である弥生土器が出土した。遺物の出土量は第V層よりはるかに少ない。

須恵器 (206・207) 206は坏蓋の口縁部片である。口縁端部は尖る。207は坏の底部片である。底部よりやや内側に「ハ」字状の高台が付く。206・207は7世紀前半代。

弥生土器 (208~213) 208は壺の胴部片と思われる。横方向の沈線文の下に4条1組の山形文が施されるところと思われる(弥生時代前期末)。209~213は鉢形土器である。209・210は口縁部片である。209は内湾気味に立ち上がる口縁部で、口縁端部は尖り気味に丸い。210は外反する口縁部で、口縁端部は尖る。211~213は底部片である。211は平底の底部である。外面はマメツを受けているが叩き調整が残る。212は小型の丸味をもつ平底の底部である。外面は叩き調整が残る。213は上げ底の底部である。底端部は丸くおさめる。

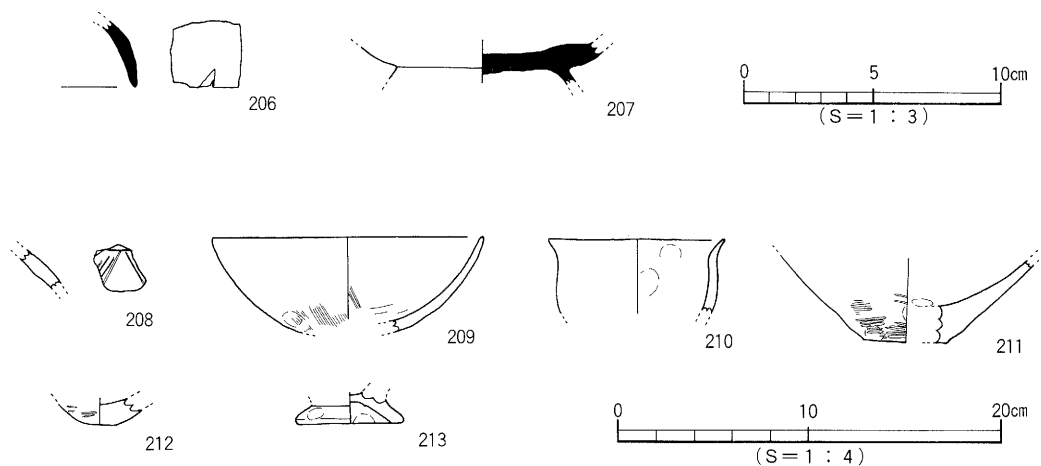
#### 第V層出土遺物 (第58~65図、図版23)

第V層からは7世紀前半代の須恵器の他に、弥生土器、土師器、石製品が混在して出土した。弥生土器の出土量が最も多く、ほとんどのものが弥生時代後期のものであったが、少量弥生時代前期から中期に比定されるものも出土した。

#### 須恵器 (第58図・214~221)

杯蓋 (214・215) 214は天井部と口縁部の境は段により稜をなす。口縁端部に内傾する明瞭な段を有する。215は天井部と口縁部の境の稜は失われている。口縁端部は尖り気味におさめる。

杯身 (216・217) 216は立ち上がりは比較的短く内傾し、端部は尖る。受部は上外方向にのび、受部端部は尖り気味に丸くおさめる。217はたちあがり短くやや内傾し、端部は尖る。受部は上外



第57図 第IV層出土遺物実測図

方向に伸びる。

瓶 (218) 218は瓶類の口縁部と思われる。口縁部は若干内湾気味に開く。口縁部外面にカキ目調整を施している。

壺 (219) 219は短頸壺である。体部は丸味に屈曲する肩部とやや長めの直立した口縁部をもつ。頸部と肩部直下にヘラ記号を刻んでいる。

甕 (220・221) 220は口縁部片である。口縁部は頸部からの立ち上がりは短く外反する。口縁端部は折り曲げて断面方形状に肥厚されている。221は口縁端部片である。端部は玉縁状におさまられる。

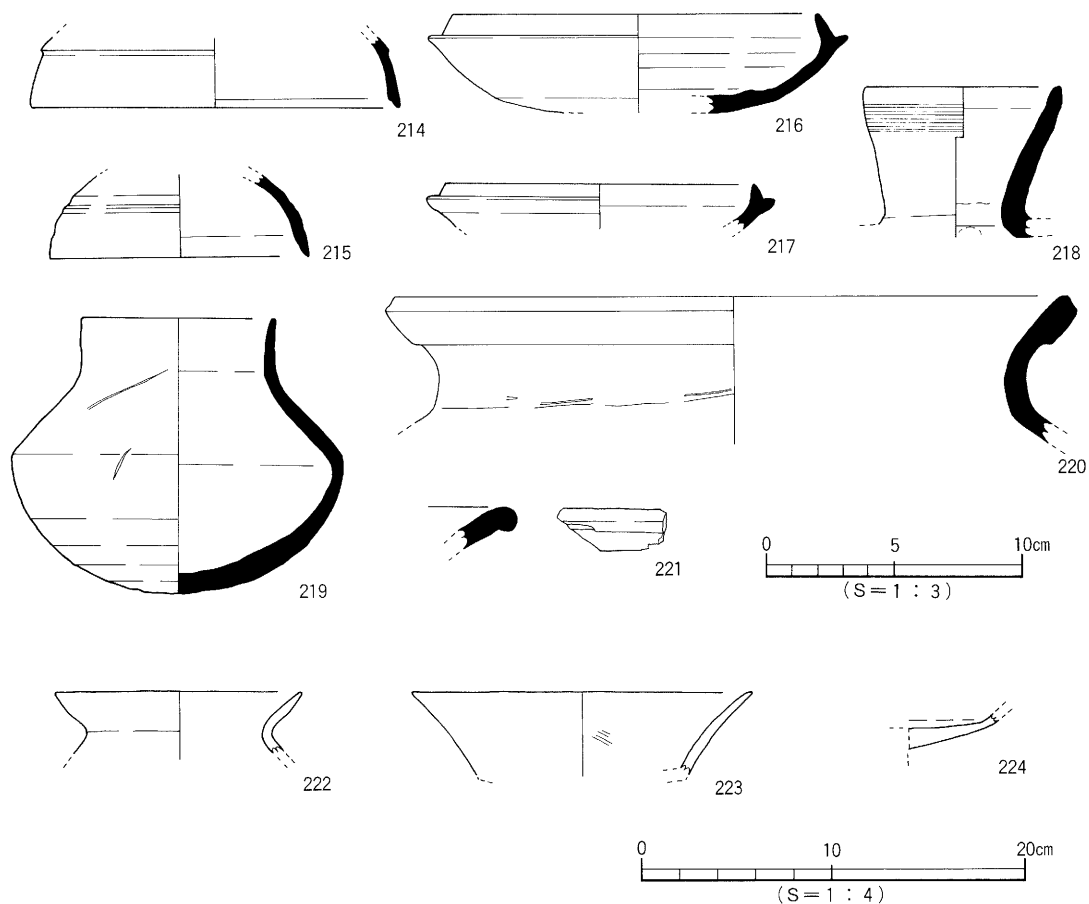
土師器 (222~224)

222は甕の口縁部片である。口縁部は若干内湾し、口縁端部は尖る。223は高杯の坏口縁部片である。外反する口縁部で、口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。224は高杯の脚と坏の接合部分である。胎土は混和剤は少ない。

弥生土器 (後期) (第59図~63図)

甕形土器 (第59図・225~243)

225は稜をもって外反する口縁部である。外面は叩き調整が顕著に残る。鉢形土器とも考えられる。

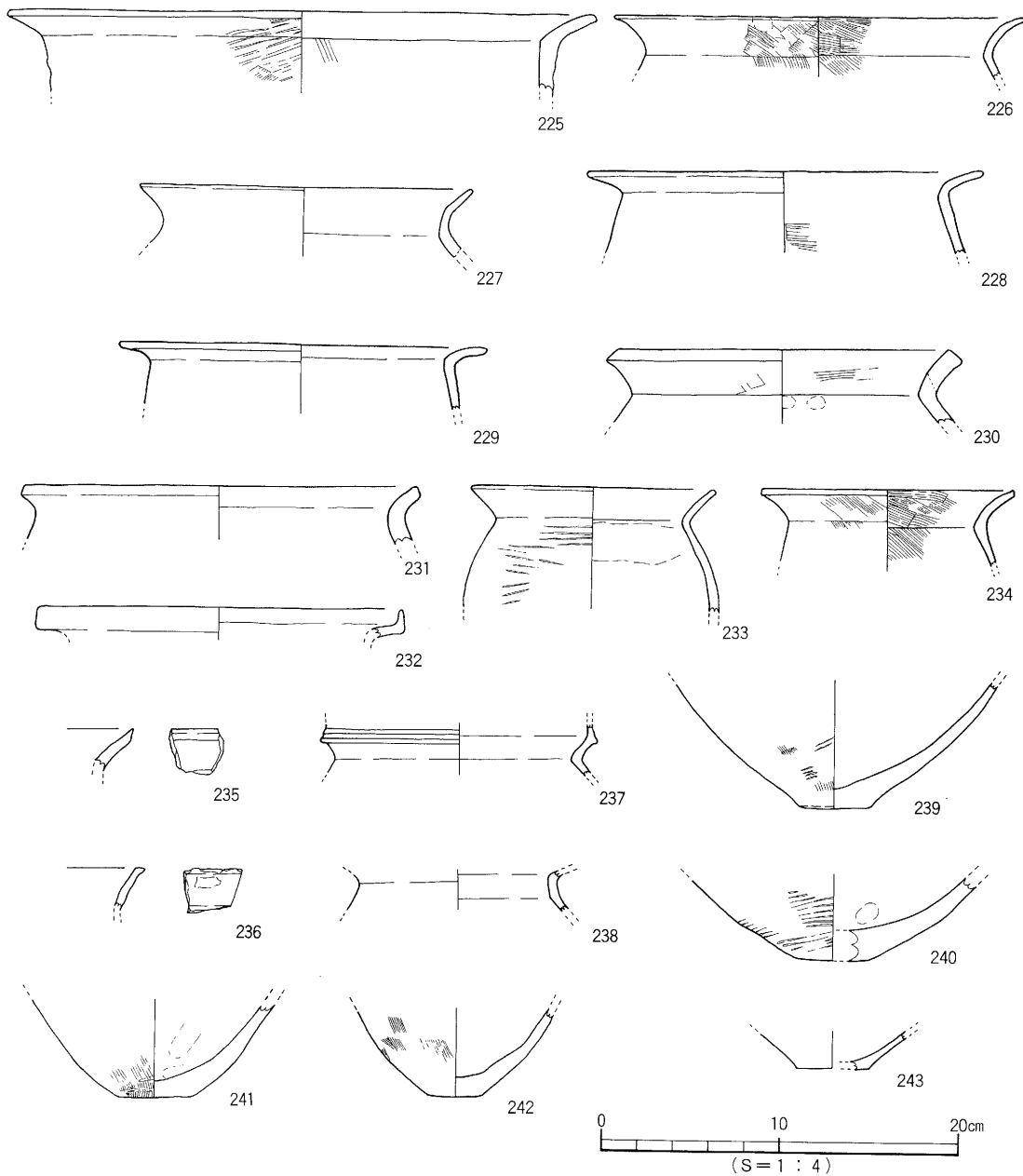


第58図 第V層出土遺物実測図 ① (須恵器・土師器)



遺構と遺物

226・227はやや長めの外反する口縁部である。228・229は口縁部が大きく開くもので、228は水平近く、229はほぼ水平に折れ曲がる。230・231は器壁の厚いもので、230は外反する口縁部で端部は面を持つ。231は短く外反する口縁部で端部は面をもつ。232は上方に短く立ち上がる口縁部をもつ。233・234は「く」字状を呈する口縁部で、233は稜をもってゆるやかに外反する。外面に叩き調整が残る。234は稜をもって外反し、端部に面をもつ。235・236は口縁部片。235は口縁内面上位は若干凹み、端部外方に面をもつ。236は外傾する口縁部で内面上位は若干ナデ凹む。端部は外方へ拡張する。237・238は頸部片。237は外反する口縁部に内傾して立ち上がる拡張部をもつ。端外面には凹線が認められる。



第59図 第V層出土遺物実測図②(弥生後期 甕形土器)

器壁は薄い。238は内面頸部直下にケズリ調整が顕著に見られる。239～243は底部片である。239・240はわずかに突出する平底である。241・242は平底である。243は平底で器壁は薄い。

壺形土器（第60図・244～259）

244～246は複合口縁部片。244は直立するもので、端部は短く外反する。口縁外面上位に波状文、下位に簾状文を施す。245は接合部片で、簾状文が施される。246は短く内傾する複合口縁である。247～249は口縁部が大きく開く。247は端部下方を拡張する。端面に波状文を施す。頸部に凸帯が認められる。249は端部はナデにより下方へ拡張するものとおもわれる。250～255は口縁端部片である。250～253はほぼ水平に開くもので、250・251は端部を肥厚気味に下方に拡張する。250は端面に波状文を、251は波状文と竹管文を施す。252は端部下方がやや拡張し、端面はナデ凹み波状文を施す。253は端部はやや拡張気味である。254は器壁は厚く、上外方向に面をもつ。255は内傾する複合口縁の端部片で上位に簾状文、下位に山形文を施す。256・257は頸部片。凸帯には斜格子目文を施す。257は内面に稜をもつ。258・259は底部片。258は突出する平底。259はやや突出する平底である。

鉢形土器（第61図・260～274）

260～265は口縁部片で、口縁部が外反するものである。260は弱い稜をもって弱く外反する。261は稜をもって外反するもので、端部は尖る。262は稜をもって外反し、端部はナデにより若干下垂する。263は稜をもって外反し、端部に面をもつ。264・265は短く外反する。266～270は直線的もしくはやや内湾気味に上外方向へ立ち上がる口縁部のものである。266はやや内湾気味に立ち上がる。267は直線的に立ち上がり、端部は先細る。底部は丸底。268は直線的に立ち上がり端部は丸い。底部はやや丸い平底。269は直線的に立ち上がり大きく開くもので浅い。端部は先細り、底部は突出する平底。270は内湾して立ち上がり口縁部は内傾するものである。底部は丸底。271は体部片。外面に叩き調整が顕著に残る。272～274は底部片。272はわずかに上げ底気味の小さな平底。273は丸底。274は平底である。

高杯形土器（第62図・275～282）

275・276は杯部接合部片で、接合部は段をなす。277は口縁部片で、端部は上下に拡張し波状文を施す。278～280は脚柱部片。278・279は円柱状。279は内面に工具痕が認められる。280は円孔が穿たれる。281・282は裾部片である。281は三角錐の柱部から直線的に外方向へ開くもので、端部は下方に面をもつ。282は三角錐の柱部から短くやや外反するもので、柱部内面にしぼり痕が認められる。

支脚形土器（第63図）

283・284は脚裾部片で器壁は厚く裾部は短く「八」字状に開く。284は外面に叩き調整を顕著に残す。285は円柱状のもので、器高4.8cmを測る。上下面とも中央部が凹む。286・287は角状突起部で、286は断面偏平、287は角先端部は平らである。

弥生土器（前期～中期・第64図）

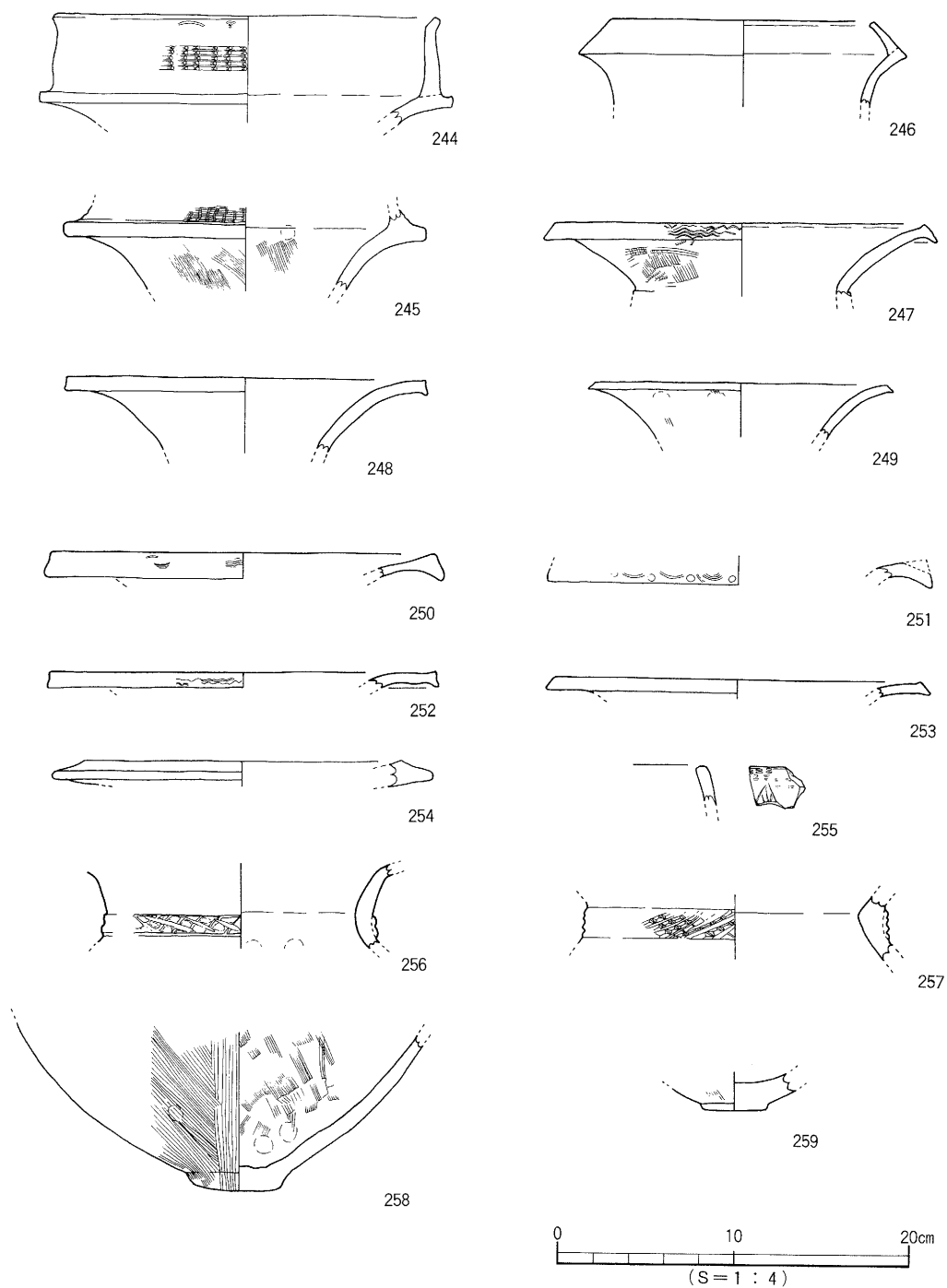
甕形土器（288～293）

288～291は折り曲げ口縁である。288はやや折り曲げが強いもので端部は丸くおさめる。289は折り曲げが強く「く」字状を呈するものと思われる。器壁はやや厚く端部に刻目を施す。290はやや折り曲げが強いもので、器壁は厚い。端部は丸くおさめ頸部に指押圧された凸帯が巡る。291は口縁端部下に刻目をもつ断面三角形の凸帯が巡る。292は頸部片。刺突文が2条施される。293は口縁部の形態は不明。断面三角形の凸帯。

遺構と遺物

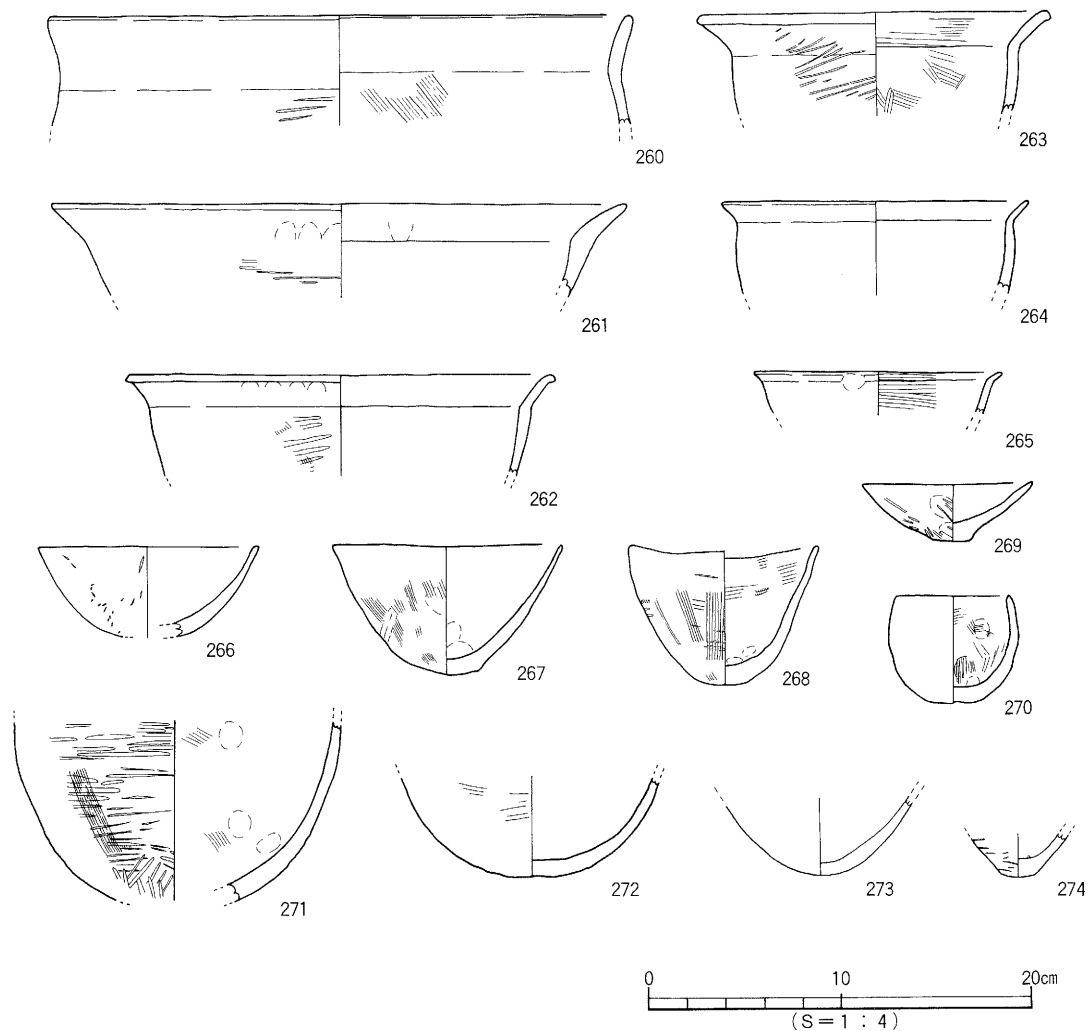
壺形土器 (294~299)

294~298は口縁部片。294は大きく開くもので、端部を下方に拡張する。295は大きく開き端部に面をもち、上端に刻目を施す。296は外反が強く端部は肥厚させ、斜格子目文を施す。器壁は厚い。297は端部を上下に肥厚させ、2条の凹線を施す。298は無頸壺の口縁部片と思われる。内傾し端部下に

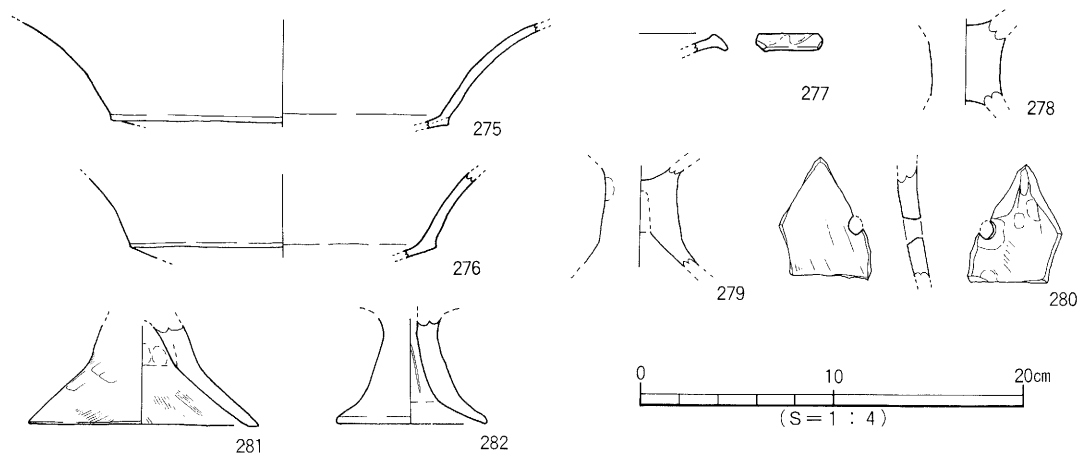


第60図 第V層出土遺物実測図 ③ (弥生後期 壺形土器)

谷町遺跡の調査



第61図 第V層出土遺物実測図 ④ (弥生後期 鉢形土器)



第62図 第V層出土遺物実測図 ⑤ (弥生後期 高环形土器)

遺構と遺物

円孔を2ヶ所に穿つ。299は頸部片である。器壁は厚く、指押圧された凸帯が巡る。

鉢形土器 (300)

300は口縁部片である。やや内傾するもので端部は丸くおさめる。

高杯形土器 (301・302)

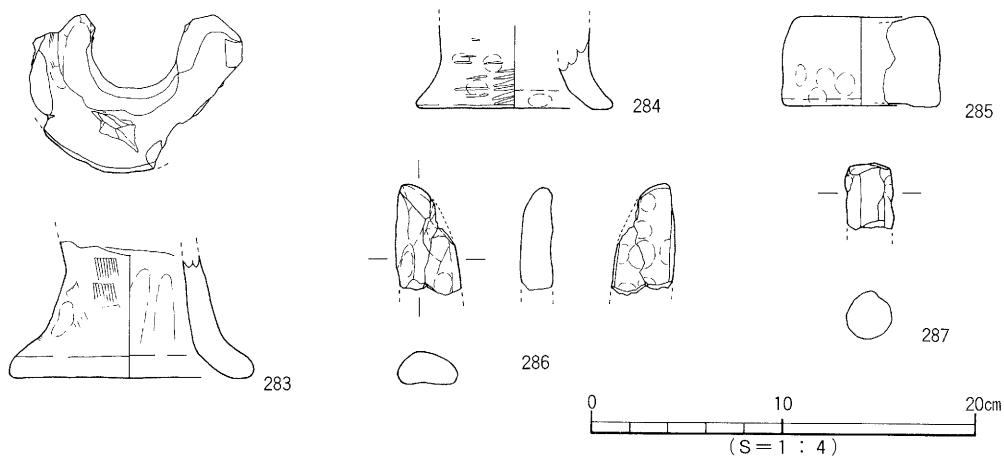
301・302は坏口縁部片。301は端部を内外方向に拡張する。端部上面には円形浮文を、外端面に刻目を施す。

ジョッキ形土器 (303~305)

303・305は把手片。303は円形を呈する。305の断面は内側が偏平、304は把手上端接合部分と考えられる。

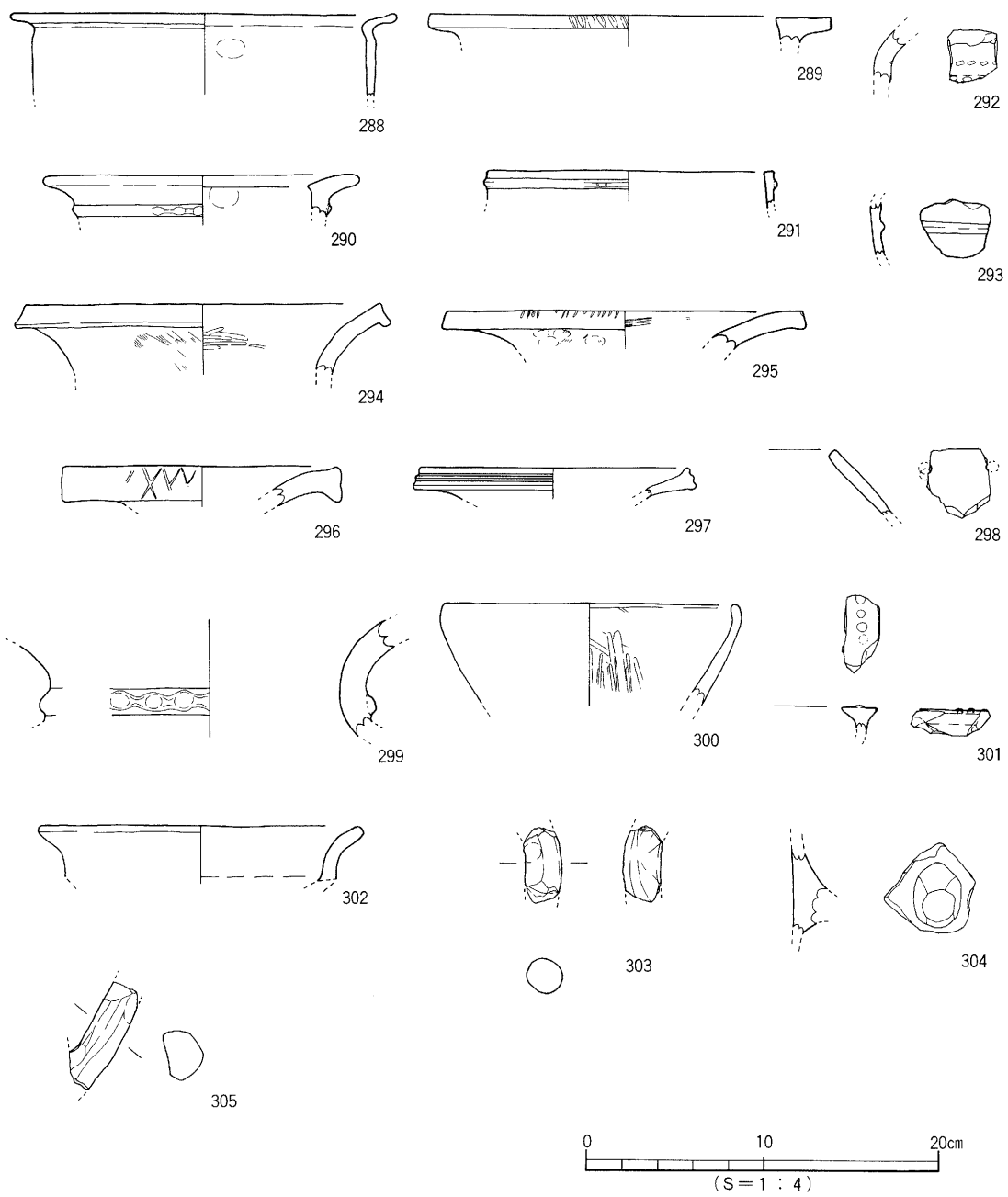
石製品 (第65図・306~311)

306は石斧の刃部片。偏平片刃で、石材は結晶片岩。残存長4.3cm、幅3.7cm、厚さ1.1cmを測る。加工面は丁寧に研磨されている。307は削器。石材は安山岩で残存長4.6cm、幅6.0cm、厚さ1.2cmを測る。打製石包丁とも考えられる。308~310は磨き石と考えられる。器面全体に使用痕が確認できる。308の石材は安山岩で長さ5.6cm、幅4.2cm、厚さ2.2cm、重さ55.3gを測る。309の石材は凝灰岩で長さ5.2cm、幅3.2cm、厚さ2.3cm、重さ50.38gを測る。310の石材は安山岩で長さ5.0cm、幅3.5cm、厚さ1.8cm、重さ80.1gを測る。311は紡錘車である。平面は円形で中央に径0.63cmの円孔を穿つ。断面は台形状を呈し、側面は丸味がある。中央の孔より外側1.2cmの頂部と側部との境には線刻が部分的に確認できる。また、頂部には4等分するように直線的な線刻が4組ある。それ等は2本1組のものが2ヶ所、1本のものが2ヶ所にある。2本1組の線刻は外方向に尖った様に見られる。底部は中央の孔より外側0.7cmの所に、同心円が描かれた後に獣か鳥類の線刻がなされている。頂部・底部は同一方向に研磨痕が、側部は回転による研磨痕が確認できる。石材は緑色片岩で頂部径1.3cm、底部径3.15cm、高さ0.8cm、円孔0.6cm、重さ23.9gを測る。



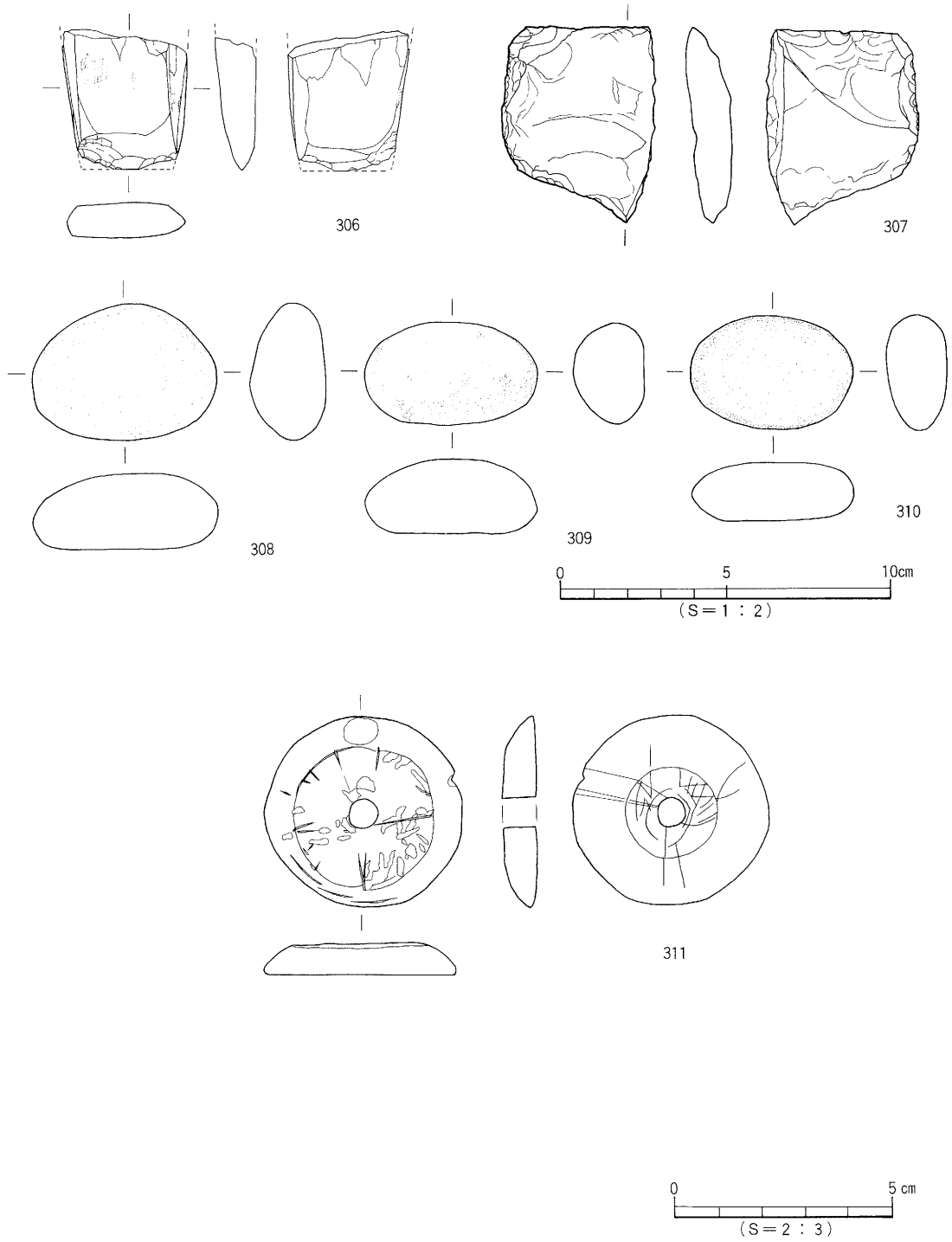
第63図 第V層出土遺物実測図 ⑥ (弥生後期 支脚形土器)

谷町遺跡の調査



第64図 第V層出土遺物実測図 ⑦ (弥生前期～中期)

遺構と遺物



第65図 第V層出土遺物実測図 ⑧ (石製品)

## 4. 小 結

本調査地においては弥生時代、古墳時代、中世の遺構と遺物を検出することができた。

### (1) 層 位

第Ⅲ層を除去した地形は、調査地西部では段状の地形を呈し、下段からは第Ⅲ層と類似する埋土の柱穴群を確認した。このことは中世に地形が改変され、何らかの土地利用がされたものと考えられる。

第Ⅴ層からは、弥生時代から古墳時代までの遺物が混在して出土した。遺物の時期差が大きいことや、出土した弥生土器は多量で、ほとんどのものが磨滅を受けていたことにより、第Ⅳ層・第Ⅴ層は調査地上部からの2次的な推積層と考えられる。また、第Ⅴ層より出土した弥生土器は大部分が後期のものではあったが、前期から中期までに比定されるものもあった。このことは調査地周辺に、同時期の遺構が存在することを示唆したものである。

### (2) 遺構と遺物

遺構では弥生時代の竪穴式住居址を検出した。この住居址は高床部が設けてあり、高床部では土坑3基を確認した。このうちSK③は貯蔵穴と考えられる。出土土器中には1点の外来系(吉備系)土器がある。この土器は宮前川遺跡SB4で類例を見るが、本住居址は宮前川遺跡SB4よりやや古いと考えている。また外来系土器(SB1及び基本層位第Ⅴ層中)の出土は、他地域との交流が想定される資料である。本住居址は弥生時代後期末に位置づけられるもので、当該期の住居形態を考える上での一資料となるものである。

遺物では第Ⅴ層中より紡錘車が出土した。この紡錘車の時期的な位置づけを行うために、資料の収集(第5章 松山平野出土の紡錘車)を行った。その結果、石材・断面形状から概ね古墳時代中期に位置づけられる。

本調査によって、座拝坂遺跡と同様に弥生時代集落の存在はより明らかになった。ただし、今回検出された竪穴式住居址は座拝坂遺跡のものより若干新しいものであり、集落が継続的であったことが分かる。一方、当調査地においては古代の遺構・遺物は未確認であったが、中世の遺構と遺物を確認した。両遺跡の相違点であり、成果の一つといえる。

## 参考文献

- 梅木謙一・宮内慎一 1994 「桑原田中遺跡2次調査」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 西尾幸則・栗田茂敏 1986 「津田第Ⅰ地区」『宮前川遺跡調査報告書』松山市教育委員会



## 遺構・遺物観察表

## ——凡 例——

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覽である。

(2) 遺構の一覽表中の出土遺物は略記した。

例) 弥生→弥生土器、須恵→須恵器

(3) 遺物観察表の記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値。

形態・施文欄: 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴→胴上半、天→天井部。

胎土・焼成欄: 胎土欄は混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

( ) 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表20 竪穴式住居址一覽

竪穴 (SB)	時 期	平 面 形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				周壁溝	備 考
					高床	土坑	炉	カマド		
1	弥生後期末	方 形	4.50×3.40×0.44	2	○	○			○	

表21 土坑一覽

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B3	円 形	逆台形状	0.46×0.41×0.45	黒灰褐色土 (やや炭黒い)	弥生土器	弥 生	SB1に切られる。
2	A3・B3	楕円形	逆台形状	0.45×0.41×0.35	黒色土		弥 生	SB1に切られる。

表22 溝一覽

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A1・2. B1・2	逆台形状	2.81×1.14×0.19	黒灰色土	弥生、須恵、砥石	古 墳	SD3を切る
2	A2	船底状	1.30×0.35×0.06	黒灰色土 (黄色土混)		弥 生	SB1に切られる
3	A1・B1	船底状	1.12×0.18×0.08	黒灰色土 (黄色土混)	弥 生	弥 生	SD1、SP13に切られる。

谷町遺跡の調査

表23 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
154	甕	口径(17.2) 残高 3.5	やや外傾気味の口縁部。口縁端部上面に面をもつ。	㊦マメツ ㊦叩き	マメツ	橙色 浅黄橙色	石(0.5~1) 長(1~2) ○		
155	甕	口径(15.0) 残高 5.3	「く」の字状口縁。口縁端部はやや丸くおさめる。	㊦ナデ ㊦叩き→ハケ	㊦ナデ ㊦マメツ	浅黄橙色	石・長(1~2) 石粒 ○		
156	甕	口径(16.0) 残高 2.7	口縁端部は尖り気味にやや丸い。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 橙色	石・長(0.5~3) 砂粒 ○		
157	甕	残高 1.4	口縁端部は面をもつ。	ナデヨコ ナデ	ヨコナデ	灰白色	石(0.5~2.5) 長(0.5~1) ○		
158	壺	底径(18.2) 残高 1.7	口縁端部は上下方面に拡張、端部面に波状文を施す。	マメツ	マメツ	橙色 黒褐色	石(0.5~1) 長(0.5~1.5) ○		
159	壺	底径(6.0) 残高 4.2	平底の底部。	マメツ	㊦ハケ ㊦ナデ (指頭痕)	橙色 黒褐色	石(1~2) 長(0.5~1) ○		
160	壺	底径(2.0) 残高 3.0	わずかに突出する小さな平底の底部。	右上りの叩き ハケ(6~7本/cm)	ナデ (指頭痕)	にぶい橙色 黒褐色	微砂粒金雲母 ○		
161	鉢	口径(18.2) 残高 4.3	口縁端部は尖り気味。	㊦叩き ㊦ハケ	マメツ	にぶい橙色	石・長(0.5~2) ○		
162	鉢	口径(11.8) 底径 3.2 器高 5.6	底部よりやや内湾気味に上外方向へ立ち上がる。口縁端部は尖る。	叩き ㊦ナデ	ナデ (指頭痕)	橙色 黒褐色 にぶい黄褐色	石(0.5~4.5) 長(0.5~2) 微砂粒金雲母 ○	22	
163	鉢	口径(12.2) 残高 2.6	口縁端部は稜をもって外反する。	㊦ヨコナデ マメツ	マメツ	橙色	石(1) 長(0.5~1) ○		
164	鉢	残高 4.75	口縁端部は丸くおさめる。	ハケ	マメツ	にぶい橙色 黒褐色 明赤褐色	石(0.5) 長(0.5~1) ○		
165	鉢	残高 5.3	丸底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 黒褐色	石(1~1.5) 長(0.5~1.5) ○		
166	高坏	残高 1.2	口縁端部は上下方向に拡張。	マメツ	マメツ	浅黄橙色	石・長(0.5~1.5) ○		
167	高坏	残高 2.5	屈曲部に稜をもつ。	ミガキ マメツ	マメツ	橙色 にぶい黄褐色	石(1~3) 長(0.5~1) ○		
168	高坏	残高 1.6	屈曲部に稜をもつ。	ナデ ミガキ	ヨコナデ	にぶい黄 橙色	石・長(0.5~3) ○		
169	甕	底径(6.4) 残高 6.5	底部よりやや外反しながら立ち上がる。くびれをもつ上げ底の底部。	マメツ ㊦ナデ (指頭痕)	マメツ ㊦ナデ (指頭痕)	にぶい橙色 黒褐色 にぶい褐色	石(1~2) 長(0.5~2) ○		
170	高坏	口径(31.0) 残高 1.7	口縁端部内外を拡張。端部に刻目。	マメツ	ナデ	浅黄橙色	石・長(0.5~3) ○		

表24 S B 1 出土遺物観察表 石製品 法量の( )値は現存値である

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
171	石 鏃	両脚端部損	サヌキトイド	(2.2)	(1.2)	0.2	0.55		
172	砥 石	1/2欠損	砂 岩	(3.3)	(7.9)	(4.45)	(137.7)		

遺物観察表

表25 SB1内施設内出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
173	甕	口径(16.3) 底径 3.7 器高 22.8	不安定な平底の底部。口縁部外反、端部は尖り気味。胴部2ヶ所接合痕有り。	㊦ナデ ㊧叩き→ハケ ㊨叩き→ハケ ㊩ハケ→ナデ	ナデ ㊨ハケ→ナデ	にぶい橙色	石・長(0.5~3) 金雲母 ○	SK②	22
174	甕	口径(19.0) 残高 2.3	外反する口縁部。口縁端部に面をもつ。	マメツ	ハケ	にぶい褐色	長(0.5~1.5) 微砂粒 ○	SK①	
175	甕	口径(18.4) 残高 2.1	口縁端部先細り。	マメツ	ハケ	橙色 にぶい橙色	石(1) 長(0.5~1.5) ○	SK①	
176	甕	口径(16.6) 残高 2.3	口縁端部尖り気味。	㊦マメツ ㊧叩き	ハケ	灰褐色 明褐色	石(1) 長(0.5~2) ○	SK①	
177	甕	残高 2.8	垂直に立ち上げた口縁部。口縁端部は丸くおさめる。外来系。	マメツ	マメツ	橙色 浅黄褐色	石・長(0.5~2) ○	SK①	
178	甕	底径(2.6) 残高 16.7	張りをもつ胴部。平底の小さな底部。	叩き→ハケ8本 /0.8cm	マメツ ㊨ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色 にぶい褐色	石(0.5~2) 長(0.5~3) ○	SK③	
179	壺	残高 1.6	口縁端部下方をやや肥厚。	マメツ	マメツ	明赤褐色 橙色	石(1~1.5) 長(1) ○	SP①	
180	壺	残高 2.1	口縁端部下方を肥厚。	マメツ	マメツ	黒褐色・ 褐灰色 橙色	石(1~1.5) 長(0.5~1) ○	SP②	
181	壺	底径(7.0) 残高 2.1	平底の底部。器厚は薄い。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 橙色	石・長(1) 微砂粒 ○	SK①	22
182	鉢	口径(18.7) 残高 8.7	底部より内湾ぎみに上方向へ立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。丸底の底部。	㊦ナデ ㊧マメツ ㊨ハケ(7~8本/1cm)	ハケ(7~8本/1cm)	浅黄褐色	石・長(0.5~4) 金雲母 ○	SK③	

表26 SK1・SP12出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
183	甕	残高 2.8	外反する口縁。口縁端部は尖り気味。	㊦マメツ ㊧ハケ	マメツ	にぶい黄褐色	長(0.5~1.5) 金雲母 ○	SK 1	
184	甕	口径(24.0) 残高 0.95	外傾する口縁部。口縁端部はやや肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色 黒褐色 にぶい黄褐色	長(0.5) 微砂粒 ○	SP12	

表27 SD1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
185	壺	口径 7.6 器高 7.35	偏球形の体部、強く屈曲した扁部。短くやや外傾した口縁部で口縁端部上面に面をもつ。	㊦→㊧回転ナデ ㊨→㊩回転ケズリ	回転ナデ	灰色	長(0.5~2) 微砂粒 ○		22
186	甕	口径(17.0) 残高 4.1	短く外反して立ち上がる口縁部。口縁端部は玉縁状におさめる。	ナデ	マメツ	浅黄褐色	長(0.5) ○		
187	甕	口径(13.0) 残高 1.8	口縁端部は玉縁状におさめる。	ナデ ヨコナデ	ナデ	灰色	長(0.5~1) ○		
188	壺	残高 3.2	圧痕文突帯が一条巡る。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 褐灰色	石・長(0.5~2.5) ○		
189	鉢	口径(19.4) 残高 5.5	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	㊦ナデ 叩き	マメツ	にぶい黄褐色	石・長(0.5~2) ○		

谷町遺跡の調査

表28 第Ⅲ層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
190	椀	底径 (5.0) 残高 1.3	平底の円盤高台。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(0.5~3) 金雲母 ○		
191	椀	高台径 (6.8) 高台高 0.6 残高 2.0	高台やや高く、断面三角形。	マメツ	マメツ	灰白色	微砂粒 ○		
192	銅	残高 1.5	口縁部片。口縁端部丸い。	ナデ	㊦ハケ ナデ	褐灰色 明赤褐色	石・長(0.5~2) 金雲母 ○		
193	椀	高台径 (4.8) 高台高 0.3 残高 1.5	高台底く断面方形。内面に磨き調整。	ナデ	ミガキ	黒色・灰白色 橙色・黒色	微砂粒 ○		
194	椀	高台径 (4.9) 高台高 0.3 残高 1.2	高台底く断面方形。内面に磨き調整。	マメツ	ミガキ	灰白色 暗灰色	微砂粒 ○		
195	椀	高台径 (5.0) 高台高 0.35 残高 0.8	高台底く断面方形。内面に磨き調整。	ヨコナデ ㊦ナデ (指頭痕)	ミガキ	黒色	長(0.5) 微砂粒 ○		
196	蓋	口径(13.1) 残高 5.0	口縁部と天井部を分ける稜は、不明瞭で凹線が巡る。口縁端部は丸い。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	長(0.5~1.5) ○		23
197	蓋	口径(12.4) 残高 4.2	口縁部と天井部を分ける稜はない。口縁端部は尖り気味に丸い。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色 灰色	長(0.5~1) ○		
198	蓋	口径(12.6) 残高 3.8	口縁部と天井部を分ける稜は、不明瞭で凹線が巡る。口縁端部は尖り気味。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラ削り ㊨回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(0.5~1) 微砂粒 ○		
199	坏	高台径 (9.1) 高台高 4.6 残高 1.8	断面方形の高台。高台はハの字状に付く。	ナデ	ナデ	灰色	長(0.5~1) ○		
200	高坏	残高 3.6	脚柱部。柱部に1条の凹線が巡る。	回転ナデ	ナデ	灰色	微砂粒 ○		
201	高坏	底径 (9.0) 残高 0.8	裾部は水平に伸びる。端部は強い撫により上下方向に拡張する。	回転ナデ	回転ナデ	黒褐色 褐灰色	長(0.5~1) 微砂粒 ○		
202	壺	口径 (7.0) 残高 1.8	口縁部は短く直立する。端部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色	密 ○		
203	壺	残高 2.0	上段2条の浅い凹線。中段、右上がりの刺突文。下段1条の凹線。	ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰白色	長(0.5) 微砂粒 ○		
204	壺	残高 2.8	接合部分。内面底部に使用痕。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(0.5~1) ○		

表29 第Ⅲ層出土遺物観察表 石製品 法量の( )値は現存値である

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
205	砥石	約1/3欠	砂岩	(6.3)	(5.8)	3.5	(162.2)		

表30 第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
206	蓋	残高 2.7	口縁端部は尖る。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	長(0.5~1) 微砂粒 ○		Ⅳ層

遺物観察表

第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
207	坏	残高 1.7	高台付の坏身。	回転ナデ 回転ヘラ削り	ナデ	灰色	長(0.5~1) ○	Ⅳ層	
208	壺	残高 2.2	横方向の沈線文下に4条1組目の山形文を施す。	ナデ	ナデ	明赤褐色 黒色	長(0.5~2) ○	Ⅳ層	
209	鉢	口径(14.0) 残高 5.1	内湾気味に立ち上がる口縁。口縁端部は尖り気味に丸い。	ハケ	マメツ Ⓢハケ	橙色	長(0.5~1) 石(1)	Ⅳ層	
210	鉢	口径(9.4) 残高	外反する口縁。口縁端部は尖る。	マメツ	マメツ	灰白色	長(0.5~1.5) ○	Ⅳ層	
211	鉢	底径(4.4) 残高 4.7	平底の底部。外面に叩き調整残る。	タタキ	マメツ	にぶい橙色 黒褐色 橙色	長(0.5~1.5) 石(1~1.5) ○	Ⅳ層	
212	鉢	底径 1.8 残高 1.5	丸味をもつ平底の底部。外面は叩きが残る。	叩き	ナデ	赤褐色 黒色	石長(1~2.5) 金雲母 ○	Ⅳ層	
213	鉢	底径 3.4 残高 1.6	上げ底の底部。底端部は丸くおさめる。	ナデ 指頭痕 Ⓢナデ 指頭痕	ナデ	赤褐色 灰白色 赤褐色・灰白色 黒褐色	長(0.5~1) 微砂粒 ○	Ⅳ層	
214	坏蓋	口径(14.5) 残高 2.8	天井部と口縁部との段差による稜をもつ。口縁端部に内傾する明瞭な段。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(0.5) ○	Ⅴ層	
215	坏蓋	口径(10.2) 残高 3.3	天井部と口縁部との稜はもたない。口縁端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(0.5) 微砂粒 ○	Ⅴ層	
216	坏身	口径(14.0) 残高 3.9	立ち上がりは短く内傾。	Ⓢナデ 回転ナデ Ⓢ回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	長(1~1.5) 砂粒(3.5) ○	Ⅴ層	
217	坏身	口径(12.0) 残高 1.8	立ち上がりは短く内傾し、端部は尖る。受部の突出は短い。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 橙色	微砂粒 ○	Ⅴ層	
218	瓶類	口径(7.6) 残高 5.9	口縁内湾ぎみに開く。	回転ナデ カキ目	回転ナデ	灰白色	長(0.5~1) ○	Ⅴ層	
219	壺	口径(7.6) 残高 11.0	偏球形の体部。丸く屈曲する肩部。口縁は直立し、端部は尖り気味。ヘラ記号が施される。	回転ナデ	回転ナデ Ⓢマメツ	紫灰色 灰色	長(0.5~1.5) ○	Ⅴ層	23
220	甕	口径(26.0) 残高 5.7	口縁部は外反し断面方形。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	長(0.5~2) ○	Ⅴ層	
221	甕	残高 1.7	口縁端部は玉縁状におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(0.5) 微砂粒 ○	Ⅴ層	
222	甕	口径(13.0) 残高 3.3	若干内湾する口縁部。口縁端部は尖る。	マメツ	マメツ	橙色	石長(0.5~2.5) ○	Ⅴ層	
223	高坏	口径(17.8) 残高 4.4	外反する口縁部。口縁端部は尖り気味に丸い。	マメツ	マメツ 一部ハケ	浅黄褐色	長(0.5~1) 微砂粒 ○	Ⅴ層	
224	高坏	残高 1.8	坏と脚部の接合部片。胎土は混和剤少ない。	マメツ	マメツ	橙色	長(0.5) 微砂粒 ○	Ⅴ層	
225	甕	口径(32.8) 残高 4.7	稜をもって外反する口縁部。外面叩き調整顕著	Ⓢハケ 叩き	Ⓢマメツ ハケ	にぶい橙色	石長(0.5~1.5) ○	Ⅴ層	
226	甕	口径(23.0) 残高 3.5	稜をもってゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は尖り気味。	ハケ	Ⓢヨコハケ ハケ	明黄褐色 黒褐色 黒褐色	長(0.5~1) 微砂粒 ○	Ⅴ層	
227	甕	口径(18.7) 残高 3.4	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は尖り気味。	マメツ	マメツ	橙色	長(0.5~4) 微砂粒 ○	Ⅴ層	

谷町遺跡の調査

第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
228	甕	口径(22.0) 残高 4.7	外方向に折れ曲がる口縁部。	ナデ	㊦ナデ ㊧ハケ→ナデ	橙色	長(0.5~4) 石(0.5~1) ○	V層	
229	甕	口径(20.6) 残高 3.6	弱い稜をもって外方向へ折れ曲がる口縁。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 黄褐色・ 黒褐色	長(0.3~3) 石(1~4) ○	V層	
230	甕	口径(18.4) 残高 4.2	稜をもって外反する口縁部。 口縁端部に面をもつ。	マメツ	㊦ハケ ㊧マメツ	にぶい黄橙色	石・長(0.5 ~2) ○	V層	
231	甕	口径(22.0) 残高2.3	弱い稜をもって外反する口縁部。 口縁端部は面をもつ。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄褐色	石・長(0.5 ~1) ○	V層	
232	甕	口径(20.5) 残高1.6	上方に短く立ち上がる口縁部。 外來系。	マメツ	マメツ	にぶい橙色	石・長(0.5 ~3) ○	V層	
233	甕	口径(13.4) 残高 7.1	「く」字状口縁部。口縁端部は 面をもつ。外面叩き調整が残 る。	㊦マメツ ㊧叩き	マメツ	橙色 橙色・褐 灰色	石・長(0.5 ~1.5) ○	V層	
234	甕	口径(14.0) 残高 4.4	稜をもって外反する口縁部。 口縁端部は面をもつ。	㊦ナデ ハケ	ハケ(10~12本 /1.2cm)	にぶい黄褐色 明黄褐	長(0.5~1) 石(1~1.5) 微砂粒 ○	V層	
235	甕	残高 2.3	口縁内面上部は若干凹む。端 部外方に面をもつ。	マメツ	マメツ	橙色 淡黄色	長(0.5) 石(1~3) ○	V層	
236	甕	残高 2.4	外傾する口縁部。口縁上位は 若干ナデ凹む。口縁端部は外 方へ拡張する。	ヨコナデ	㊦端マメツ ハケ	浅黄褐色	微砂粒 ○	V層	
237	甕	残高 2.9	外反する口縁部は弱い稜をもつ て内傾ぎみに立ち上がる端部 が付く。器厚は薄い。外來系。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 灰白色	微砂粒→砂 粒 ○	V層	
238	甕	残高 2.0	頸部片。内面ケズリ調整。外 來系。	ナデ	ケズリ	浅黄褐色 橙色・灰 褐色	微砂粒 ◎	V層	
239	甕	底径(4.0) 残高 7.3	わずかに突出する平底の底部。	叩き→ハケ	マメツ ㊦工具による押 圧痕	灰黄色 にぶい橙色 灰黄色	長(0.5~1) 石(0.5~3) ○	V層	
240	甕	底径(4.0) 残高 4.8	わずかに突出する平底の底部。 外面タタキ調整が残る。	叩き	ナデ	橙色 黄灰色	長(0.5~4) 石(0.5~2) ○	V層	
241	甕	底径(4.0) 残高 5.5	平底の底部。	叩き→ナデ ㊦ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長(0.1~4) 微砂粒 ○	V層	
242	甕	底径(3.0) 残高 5.2	平底の底部。	ハケ	マメツ	にぶい黄褐色 褐灰色	石・長小石 (0.5~4) ○	V層	
243	甕	底径(4.0) 残高 2.2	平底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長(0.5~1.5) ○	V層	
244	壺	口径(21.7) 残高 6.25	口縁部上位波状文。下位は簾 状文を施す。直立する口縁部。 端部は外反する。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色 黄灰色淡黄色	長(0.5~1.5) 石(1~2) ○	V層	
245	壺	口径(15.0) 残高 5.0	複合口縁部は短く内傾する。 口縁部は無文と思われる。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい黄褐色	長(0.5~4) 石(3) ○	V層	
246	壺	残高 4.6	複合口縁接合部片。接合部は 「コ」字状を呈する。簾状文を 施す。	ナデ ハケ	ハケ	淡橙色 にぶい黄褐色	石・長(0.5 ~5) ○	V層	
247	壺	口径(21.0) 残高 4.1	外反する口縁部。端部は下方 に拡張し、波状文を施す。頸 部に凸帯。	ハケ8本/9mm	マメツ	橙色	長(0.5~1) 石(1~1.5) ○	V層	
248	壺	口径(20.5) 残高 4.2	大きく開く口縁部。口縁端部 はナデによりやや下垂する。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色	長(0.5~1.5) 石(1) ○	V層	

遺物観察表

第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
249	壺	口径(16.6) 残高 3.2	大きく開く口縁部。口縁端部は面をもつ。	マメツ ハケ	マメツ	橙 色	長(0.5~1.5) 石(1~1.5) ○	V層	
250	壺	口径(21.0) 残高 1.4	口縁端部は下方に拡張。端面に波状文を施す。	ナデ	マメツ	明黄褐色 にぶい黄褐色 (灰褐色)	長(1~2) 石(0.5~3) ○	V層	
251	壺	残高 1.3	口縁部は下方に拡張するものと思われる。端面に波状文と竹管文を施す。	マメツ	マメツ	橙 色	石・長(0.5~2.5) 金雲母 ○	V層	
252	壺	口径(22.0) 残高 0.9	水平に開く口縁部は下方にやや拡張する。端面はナデ凹み、波状文を施す。	マメツ ハケ	ナデ	橙 色	長(0.5~3) 石(3) ○	V層	
253	壺	口径(21.0) 残高 0.9	水平に開く口縁部。端部は拡張気味。	ナデ	マメツ	橙 色	長(1) 石(3) ○	V層	
254	壺	口径(18.2) 残高 1.4	口縁部片。器壁は厚く上外方に面をもつ。	マメツ	⊕若干ハケ マメツ	黄褐色 明黄褐色	長(0.5~2) 石(1~3) ○	V層	
255	壺	残高 2.4	複合口縁端部片？ 上位に簾状文、下位に山形文を施す。	マメツ	マメツ	にぶい橙 色	長(0.5~1) ○	V層	
256	壺	残高 4.9	頸部片(複合口縁)。 頸部凸帯には斜格子目文の刻目。	マメツ	マメツ	黒褐色 橙 色	長(0.5~2) 石(0.5~1) ○	V層	
257	壺	残高 3.8	頸部片(複合口縁)。頸部凸帯には斜格子目文の刻目。内面に稜。	マメツ	マメツ	明黄褐色 淡黄色	長(1~2) 石(0.5~3) ○	V層	
258	壺	底径 5.0 残高 9.2	丸味のある突出する平底の底部。	ハケ→ナデ ⊕ナデ	ハケ→ナデ	にぶい黄褐色 黒褐色 浅黄褐色 浅黄褐色	石・長(0.5~2.5) ○	V層	
259	壺	底径 (3.6) 残高 2.2	突出する平底の底部。	ハケ ⊕マメツ	マメツ	黒褐色 浅黄褐色 褐灰色	長(0.5) 微砂粒 ○	V層	
260	鉢	口径(30.2) 残高 5.8	弱い稜をもってやや外傾する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	⊕マメツ ⊗叩き	⊕マメツ ⊗ハケ(6本/1.0cm)	にぶい黄褐色	長(0.5~1) 石(1) 金雲母 ○	V層	
261	鉢	口径(30.0) 残高 5.0	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は尖る。	叩き→ナデ	マメツ	にぶい黄褐色	長(0.5~3) 石(1~3) 砂粒(5) ○	V層	
262	鉢	口径(22.0) 残高 5.4	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は面をもち、ナデにより若干下垂する。	⊕マメツ 叩き→ハケ	マメツ	黒褐色 橙 色	長(0.5~1) 石(1) ○	V層	
263	鉢	口径(18.2) 残高 5.3	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	⊕ナデ 叩き→ナデ	⊕ナデ ハケ→ミガキ	にぶい黄褐色 褐灰色	石・長(0.5~3) ○	V層	
264	鉢	口径(16.2) 残高 5.0	稜をもって短く外反する口縁部。口縁端部は尖り気味。	マメツ	マメツ	橙 色	長(0.5~1) 石(1) 金雲母 ○	V層	
265	鉢	口径(13.0) 残高 2.2	稜をもって短く外反する口縁部。口縁端部は尖り気味。	マメツ	ハケ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長(0.5~2) 微砂粒 ○	V層	
266	鉢	口径(11.4) 残高 4.8	内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。	叩き→ナデ?	マメツ	にぶい黄褐色	長(1) 金雲母 ○	V層	
267	鉢	口径 12.0 器高 6.8	底部より上外方へ立ち上がる口縁部。口縁端部は先細る。丸底の不安定な底部。	叩き→ハケ→ ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	長(0.5~2) 石(2) ○	V層	23
268	鉢	口径 9.8 器高 7.4	底部より上外方へ立ち上がる口縁部。口縁端部は丸い。やや丸味のある平底。	叩き→ハケ(7本/0.8cm) ⊕マメツ	⊕ハケ ⊗マメツ ⊕ナデ	にぶい黄褐色 黒褐色 橙 色	長(0.5~1) 石(1~1.5) 微砂粒 ○	V層	23
269	鉢	口径 9.0 底径 2.0 器高 3.05	底部より直線気味に上外方へ立ち上がる口縁。口縁端部は先細る。突出する平底。	叩き ⊕ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 黒褐色	長(0.5~3) ○	V層	

谷町遺跡の調査

第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
270	鉢	口径(16.1) 底径(1.8) 器高 5.7	底部より内湾して立ち上がり 口縁部はやや内傾する。口縁 端部は尖り気味に丸い。丸底 の底部。	マメツ	ハケ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	長(1) 金雲母 ○	V層	
271	鉢	残高 9.65	体部片。 外面叩き調整が顕著に残る。	叩き→ハケ	ハケ	にぶい橙色	長(0.5~2) 石(0.5~1.5) ○	V層	
272	鉢	底径 2.5 残高 5.3	わずかに上げ底気味の平底。	ハケ (胴下→底)マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長(1~4) 金雲母 ○	V層	
273	鉢	残高 4.2	丸底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい橙色	石・長(1~3) 金雲母 ○	V層	
274	鉢	底径 1.8 残高 2.2	平底の底部。 外面叩き調整残る。	叩き (底)ナデ	マメツ (底)ハケ	にぶい黄橙色	石・長(1~3) 黒・金雲母 ○	V層	
275	高坏	残高 5.7	坏接合部片。 接合部に稜をもつ。	マメツ	マメツ	橙 色	石・長(1~4) 金雲母 ○	V層	
276	高坏	残高 4.5	坏接合部片。 接合部に稜をもつ。	マメツ	マメツ	黄橙色	長(0.5~2) 石(1~2) ○	V層	
277	高坏	残高 0.95	口縁部片。 口縁端部は上下に拡張。 端面に波状文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 にぶい橙色	長(0.5~1.5) ○	V層	
278	高坏	残高 4.5	脚柱部片。 坏部うわのせ技法。	マメツ	マメツ	灰白色	長(0.5~4) ○	V層	
279	高坏	残高 5.2	脚柱部片。 坏部うわのせ技法。 柱部内面上位に棒状工具痕。	マメツ	マメツ	黄橙色 橙 色	長(0.5~1) 石(1) ○	V層	
280	高坏	残高 6.0	脚片。 円孔を穿つ。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	橙 色	石(1~2) ○	V層	
281	高坏	底径(12.0) 残高 5.3	直線的に「ハ」字に開く裾部。 裾端部は下方に面をもつ。土 師器の可能性あり。	ハケ(7本/0.8cm)	ハケ	橙 色	長(0.5~4) 石(1) ○	V層	
282	高坏	底径(8.0) 残高 5.7	三角錐の柱部。短い裾部。 内面にしぼり痕。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) 金雲母 ○	V層	
283	支脚	底径(13.0) 残高 7.3	「ハ」字状に開く短い裾部。 器壁は厚い。	ハケ→ナデ	ナデ上げ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(0.5~3) 金雲母 ○	V層	
284	支脚	底径(10.3) 残高 4.4	「ハ」字状に開く短い裾部。 器壁は厚い。 外面叩き調整顕著。	叩き (指圧痕)	マメツ	灰白色 灰白色 浅黄褐色	長(0.5) 微砂粒 ○	V層	
285	支脚	上部径(6.6) 底径(8.0) 器高 4.8	断面台形状を呈する。 上・下面共に中央部が凹む。	ナデ (指圧痕)	ナデ	にぶい黄褐色 橙 色	長(0.5~2) 石(1) ○	V層	
286	支脚	残高 5.9	角状突起部。 断面はやや扁平。	ナデ (指圧痕)		にぶい橙色 黒褐色	長(0.5~2) 石(1) ○	V層	
287	支脚	残高 2.4	角状突起部。 角先端部は平。	ナデ		浅黄橙色 黒褐色	長(0.1~2) 微砂粒 ○	V層	
288	甕	口径(22.0) 残高 4.7	折り曲げ口縁。 端部は丸い。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ	㊦マメツ ㊧ナデ	明褐色 にぶい黄橙	長(0.5~1) 石(1~4) ○	V層	
289	甕	口径(22.8) 残高 1.5	折り曲げ口縁。 端部に刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色	長(0.5~1) 石(1) ○	V層	
290	甕	口径(18.0) 残高 2.5	折り曲げ口縁。 頸部に指押圧が施された突帯。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	長(0.5~3) 石(0.5~2) ○	V層	



遺物観察表

第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
291	甕	口径(16.2) 残高 2.1	口縁部片。端部下に刻目をもつ断面三角形の凸帯。	マメツ	マメツ	にぶい黄色 浅黄橙色	長(0.5~1) ○	V層	
292	甕	残高 2.6	頸部片。 刺突文2条。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 橙 色	長(0.5~1) 石(1) ○	V層	
293	甕	残高 3.1	断面三角形の凸帯文。	マメツ	マメツ	橙 色	石・長(0.5~3) ○	V層	
294	壺	口径(20.2) 残高 4.1	大きく開く口縁部。口縁端部は下方に拡張。	㊦ナデ ハケ	㊦マメツ ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(0.5~3.5) ○	V層	
295	壺	口径(20.0) 残高 2.2	大きく開く口縁部。 口縁端部上端に刻目。	ヨコナデ→ハケ (指頭痕)	ヨコナデ→ハケ	にぶい褐色 橙 色	長(0.5~1) 石(1~2) 微砂粒 ○	V層	
296	壺	口径(16.0) 残高 2.3	口縁端部下方に拡張。 端面に斜格子目文。 器壁は厚い。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	石・長(0.5~2) ○	V層	
297	壺	口径(15.0) 残高 1.8	上・下に肥圧させた口縁部。 口縁端部に2条の凹線。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	長(0.5~1) 微砂粒 ○	V層	
298	壺	残高 3.8	無頸壺か? 口縁直下に円孔2ヶ所。	マメツ	マメツ	灰黄褐色	長(0.5~1) 微砂粒 ○	V層	
299	壺	残高 6.7	指押圧された凸帯。 器壁は厚い。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 淡黄色	長(0.5~2.5) 石(1) 砂粒 ○	V層	
300	鉢	口径(16.4) 残高 5.8	やや内傾する口縁部。 口縁端部は丸い。	㊦ナデ ハケ→ミガキ	㊦ナデ ハケ→ナデ ㊦ハケ→ミガキ	にぶい赤褐色 灰褐色	石・長(0.5~2.5) ○	V層	
301	高坏	残高 1.6	口縁端部内外方に拡張。 口縁端部上面に円形浮文。 外方端に刻目。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい黄褐色	長(0.5~1.5) 石(1) ○	V層	
302	高坏	口径(18.2) 残高 5.2	外反する口縁部。口縁端部は やや丸味の面をもつ。 器壁は厚い。	マメツ	ヨコナデ	にぶい黄褐色	長(0.5~1) 石(1~1.5) 金雲母 ○	V層	
303	ジョッキ	径 2.1 残高 4.4	把手部分。 断面円形。	ナデ (指頭痕)		にぶい黄褐色	長(0.5~3) 石(1~3) ○	V層	
304	ジョッキ	残高 4.7	把手上部の接合部。	ナデ		にぶい黄褐色	石・長(0.5~2.5) ○	V層	
305	ジョッキ	幅 2.3 残高 6.4	把手部。 断面は内側が偏平。	ナデ		にぶい橙色	石・長(0.5~3) ○	V層	

表31 第Ⅴ層出土遺物観察表 石製品 法量の( )値は現存値である

(1)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
306	偏平片 石 刃斧	刃部片	砂質片岩	(4.3)	(3.7)	(1.1)	(32.2)		
307	削器	約1/2	安山岩	(4.6)	(6.0)	(1.2)	(45.3)		
308	磨き石	完形品	安山岩	5.6	4.2	2.2	55.3		
309	磨き石	完形品	凝灰岩	5.2	3.2	2.3	50.4		

谷町遺跡の調査

第Ⅴ層出土遺物観察表 石製品 法量の( )値は現存値である (2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
310	磨き石	完形品	安山岩	5.0	3.5	1.8	80.1		
311	紡錘車	ほぼ完形品	緑色片岩	4.4	4.5	0.8	23.9		23

## 第4章 自然科学分析

### —— 谷町遺跡における植物珪酸体分析 ——

(株)古環境研究所

#### 1. 試料

試料は、弥生時代とされる住居跡SB1内の土坑SK①から採取された2点である。

#### 2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対して直径約40 $\mu$ mのガラスビーズを約0.02g添加  
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu$ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10<sup>-5</sup>g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

#### 3. 分析結果

##### (1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表32および表33に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す（図版24・25）。

[イネ科]

機動細胞由来：イネ、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）

穎の表皮細胞由来：イネ

[イネ科-タケ亜科]

機動細胞由来：メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

## (2) 植物珪酸体の検出状況

土坑SK①の下層上面（試料No. 1、炭化植物）と下層中（試料No. 2）について分析を行った。その結果、前者では棒状珪酸体が多量に検出され、イネやネザサ節型も比較的多く検出された。また、ウシクサ族型やメダケ節型、クマザサ属型なども検出された。イネの密度は7,300個/gと高い値であり、稲作の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを上回っている。後者でもおおむね同様の結果であるが、イネの密度は2,900個/gと比較的低い値であり、イネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、試料No. 1ではイネが卓越していることが分かる。

## 4. 考察

弥生時代とされる住居跡SB1内の土坑SK①からは、イネが多量に検出され、イネの籾殻に由来する植物珪酸体も検出された。このことから、土坑SK①内には何らかの形でイネ藁およびイネ籾（殻）が入れられていた可能性が考えられる。また、土坑の下層上面で検出された炭化植物は、おもにイネ藁に由来するものと推定される。

## 参考文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.
- 杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村、FP直下から検出された炭化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析。日本第四紀学会要旨集，19，p.94-95.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学，9，p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学，17，p.73-85.

谷町遺跡における植物珪酸体分析

表32 谷町遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g) 分類群 / 試料	S K 1	
	1	2
イネ科		
イネ	73	29
イネ籾穀(穎の表皮細胞)		29
ススキ属型	15	
ウシクサ族型	44	37
ウシクサ族型(大型)	7	
タケ亜科		
メダケ節型	22	44
ネザサ節型	123	153
クマザサ属型	22	58
未分類等	51	73
その他のイネ科		
表皮毛起源	7	22
棒状珪酸体	458	658
茎部起源		7
未分類等	588	548
植物珪酸体総数	1409	1659

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ	2.14	0.86
ススキ属型	0.18	
メダケ節型	0.25	0.51
ネザサ節型	0.59	0.74
クマザサ属型	0.16	0.44

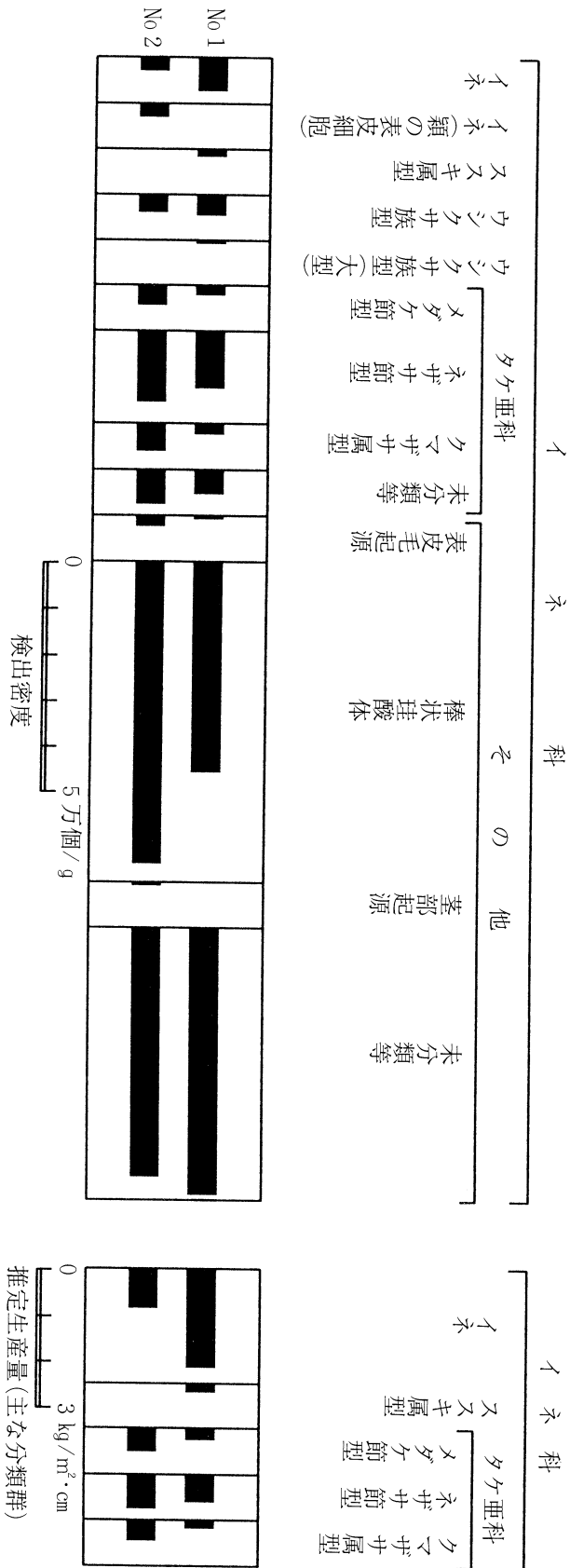


表33 谷町遺跡S B 1内SK①における植物珪酸体分析結果

# 第5章 考察Ⅰ 松山平野出土の紡錘車

## —— 断面形からみた谷町遺跡出土の紡錘車の位置づけ ——

### 1. はじめに

谷町遺跡の紡錘車は第Ⅴ層より出土した。第Ⅴ層は2次的な推積層と考えられるもので、弥生時代から古墳時代までの遺物を包含しており、年代幅が大きい。紡錘車は底面に同心円と線刻が施されており、松山平野では初例の出土で、貴重な資料である。よって、本稿では谷町遺跡出土の紡錘車の位置づけを行なうために、資料の収集をおこなってみた。

### 2. 時期区分と分類

集成は、弥生時代から古墳時代までの資料を取りあつかう。時期区分は、弥生時代では各期を前半・後半もしくは前葉～後葉に、古墳時代は前期～後期に区分した。

断面形	素 材	転 用 品	土 製 品	石 製 品
長 方 形				
台 形 状				
紡 錘 形 状				

第66図 断面形状図

紡錘車の種類は土器片を転用したものを転用品、紡錘車として作られたものを土製品、石製のものを石製品として記述する。

紡錘車の断面形及び部位名称・法量については便宜上、第67図に示す呼称法をとる。

### 3. 各期の遺物について

#### 1) 弥生時代前期

前期では転用品と土製品があり、転用品の出土が多い。両種とも縄文晩期終末から弥生前期前半に比定されている。断面形はともに長方形を呈するが、土製品は若干厚く、側面には丸味がある。

#### 2) 弥生時代中期

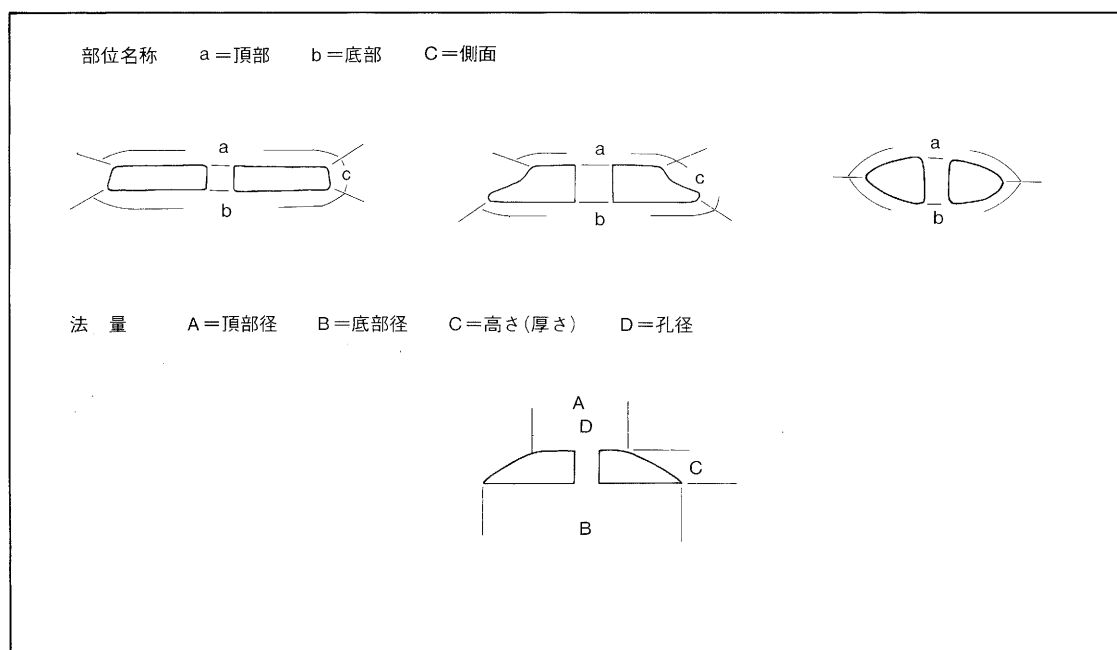
中期では転用品、土製品、石製品が見られ、前期より資料数は増加する。転用品の出土が多く、石製品、土製品の順となる。転用品は前期に比べ多少大きく、より円形に仕上げられ、断面の側面は丸いものが多い。石製品はほとんどのものが扁平な断面長方形を呈するが、1点だけ厚さが厚く断面形は中央部から端部にかけて三角形状を呈するものがある。石材は石英粗面岩のものが1点あるが、他は結晶片岩である。土製品は後葉に1点みられ、断面形は長方形を呈するが、中央円孔部分より側面部がやや薄く作られている。

#### 3) 弥生時代後期

後期では転用品、土製品、石製品が見られる。土製品の出土が多く、石製品、転用品は少ない。土製品は前期・中期よりやや厚みが増し、断面形は長方形のものと、長方形ではあるが中央部より端部がやや薄くなるものが見られる。また、断面が著しく厚いものがある。石製品と土製品の断面形は長方形で、中期のものとはほぼ同じである。石製品の石材は緑色片岩・頁岩である。

#### 4) 古墳時代

古墳時代では、土製品と石製品が見られる。土製品は大きさ、断面形とも多様である。断面形には



第67図 部位名称及び法量



長方形、台形状、紡錘形状の三種がある。石製品は中期に位置づけられるものがある。断面形はすべて台形状である。側面の形状が段をなすものと、なさないものとの2種類がみられる。石材は結晶片岩と蛇紋岩が1点ある。

以上、弥生時代から古墳時代までの様相を時期別に列記した。器種別にまとめると次のようになる。

①転用品は縄文晩期から出現し、弥生後期まで見られるが、弥生中期にピークをみる。平面形は時期が新しいほど円形に近く加工されている。断面形は土器の転用のため、いずれも扁平な長方形を呈する。

②土製品は縄文晩期終末から古墳時代まで見られるが、弥生後期にピークをみる。平面形はほぼ正円である。断面形は長方形のものと、紡錘形のものの2種類が混在するが、古墳時代では台形状が加わる。

③石製品は弥生時代中期中葉から古墳時代まで見られるが、弥生時代中期後葉と古墳時代中期に出土が多い。断面形は、弥生時代と古墳時代では大きく異なる。弥生時代はほとんどのものが長方形、古墳時代は台形状となり、さらに、台形状のもの側面には、段を有するものとそうでないものがある。なお、中央に穿たれる円孔には弥生時代中期から後期は頂部と底部の両方向から空けるものと、一方向からあけるものが混在する。両方向から空けられているものうち1点は石包丁からの転用品と考えられている(第69図・23)。古墳時代は一方向からに限られる。石材は弥生時代は3種類と多用されるが、古墳時代では2種類となる。そのほとんどは結晶片岩である。

石製品中(3-③項)では石庖丁からの転用品と考えられるものが1点あったが、今回の集成表では石製品に含めた。他県ではこの種のもの報告や分類がされている。今後はこの種の紡錘車の資料が増すと考えられ、転用品と本来紡錘車として作られたものに分ける必要があるだろう。

#### 4. 谷町遺跡出土の紡錘車の位置づけ

今回の資料の収集中には、出作遺跡SX01出土のものがある。断面形は台形状を呈し、側面は段を有さないもので、石材は結晶片岩である。谷町遺跡出土品は、法量に若干の差はあるものの、出作遺跡のものに酷似している。よって谷町遺跡出土の紡錘車は、古墳時代中期に位置づけられる。

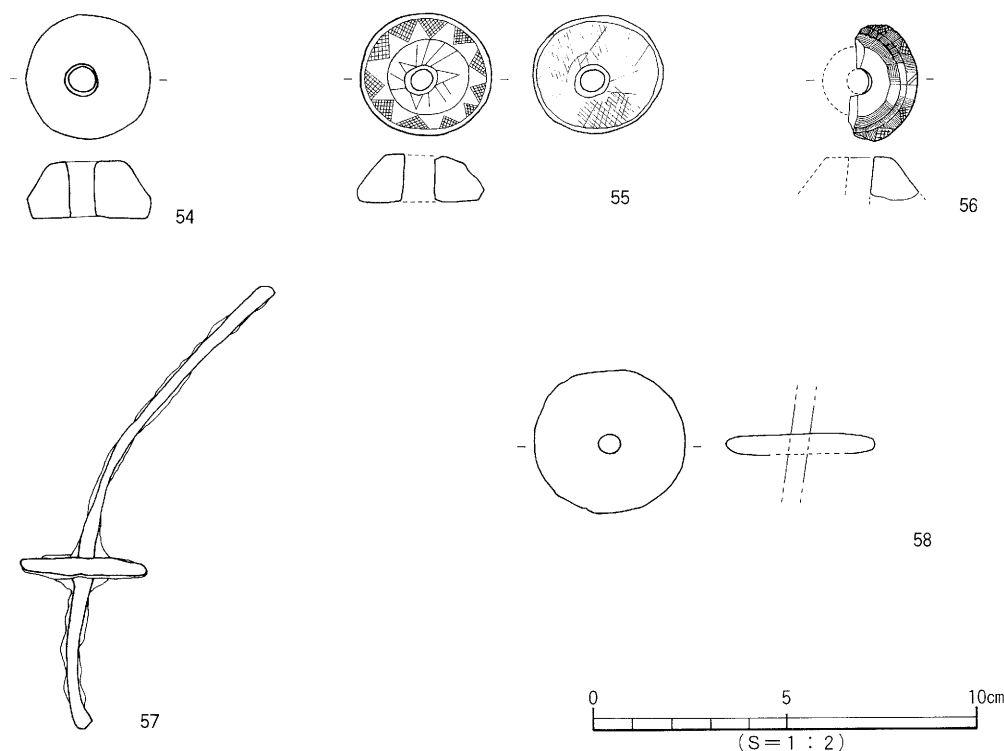
今回取り扱われなかったものとして、石製品で断面形が台形状を呈し、側面や上面に施文するものと、鉄製品がある。これらは時期幅が大きいことや時期不明であることから集成表には載せなかった。ただし、出土数が少なく、貴重なものと考えられるため、ここで参考資料として実測図を載せておく。

#### 5. おわりに

今回は時間的な制約があり、わずかの資料の収集に終わってしまった。今後も資料数を増やすべく収集に努力していきたい。時期が特定された資料の増加により、集成表の空白部が満たされれば、より明確な紡錘車の変遷をみることができよう。

最後に谷町遺跡出土の紡錘車の石材鑑定を愛媛県立博物館学芸員千葉昇氏に行って頂いた。記して感謝申し上げます。また資料の収集・提供では当埋文センター栗田茂敏調査員、相原浩二調査員、武正良浩調査員、山之内志郎調査員に、収集及び作図・浄書は加島なおみ、関正子、玉井順子、豊田直美、

考 察



No.54~56石製品, No.57・58鉄製品

第68図 遺物実測図 (参考資料)

萩野ちよみ、福島利恵、吉井信枝 (敬称略)に協力を得た。

紡錘車出土遺跡及び文献一覧 (文頭Noは集成図Noに対応する)

- 1~5・7・8 中寺州尾遺跡 大滝雅嗣 1989 一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
- 6 大湖遺跡 栗田茂敏 1989 松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ
- 9 宝泉遺跡Ⅰ 井手窪理 1989 県営圃場整備事業(川内地区)埋蔵文化財調査報告書
- 10・17 明穂東岡Ⅱ遺跡 多田仁他 1995 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書X小松町編Ⅲ
- 11~14・24 明穂中ノ岡Ⅲ遺跡 多田仁他 1995 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書X小松町編Ⅲ
- 15・16 医王寺Ⅰ遺跡 中野良一 1991 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
- 18・19 大峰ヶ台遺跡(第4次調査) 栗田茂敏 1995 松山市文化財調査報告書48
- 20・22・26・30・38・41・54・58 松山大学構内遺跡Ⅱ(第3次調査) 宮内慎一 1995 松山市文化財調査報告書49
- 21 第3節朝倉下岡遺跡 作田一耕他 1987 埋蔵文化財発掘調査報告書 第23集
- 23 祝谷六丁場遺跡 宮崎泰好他 1991 松山市文化財調査報告書24
- 25 平坂Ⅱ遺跡 作田一耕他 1991 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
- 27・29・31・42 文京遺跡(第10次調査) 宮本一夫 1991 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ
- 28 長尾遺跡 湖西一成他 1995 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書XⅠ伊予市編Ⅰ
- 32 朝倉南甲遺跡 岡田敏彦他 1986 埋蔵文化財発掘調査報告書17
- 33 松山市久米窪田Ⅴ遺跡 阪本安光 1981 一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
- 34・35・37・43 松山大学構内遺跡(第2次調査) 梅木謙一 1991 松山市文化財調査報告書20
- 36 拾町Ⅱ遺跡 岡田敏彦 1980 一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
- 39 東本遺跡4次調査(4区) 高尾和長 1996 松山市文化財調査報告書54

松山平野出土の紡錘車

- 40 福音寺地区筋違F遺跡 梅木謙一 1996 松山市文化財調査報告書52  
 44 東本遺跡4次調査(3区) 高尾和長 1996 松山市文化財調査報告書54  
 45 桑原田中遺跡 松村 淳 1994 松山市文化財調査報告書26  
 46・48・49 出作遺跡I 谷若倫郎 1993 出作圃場整備事業埋蔵文化財調査報告書  
 47 福音寺地区筋違H遺跡 武正良浩 1996 松山市文化財調査報告書52  
 50 谷町遺跡(第V層)出土  
 51~53 福音小学校構内遺跡 武正良浩 1991 松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ(資料提供)  
 55 来住Ⅵ遺跡 吉本拔他 1981 一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書  
 56 若草町遺跡(第3次調査) 相原浩二・河野史知 1994 松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ(資料提供)  
 57 座拝坂遺跡 松村淳・梅木謙一 1993 和気・堀江の遺跡 松山市埋蔵文化財調査報告書36

表34 松山平野出土の紡錘車

(調査:1997年1月) (1)

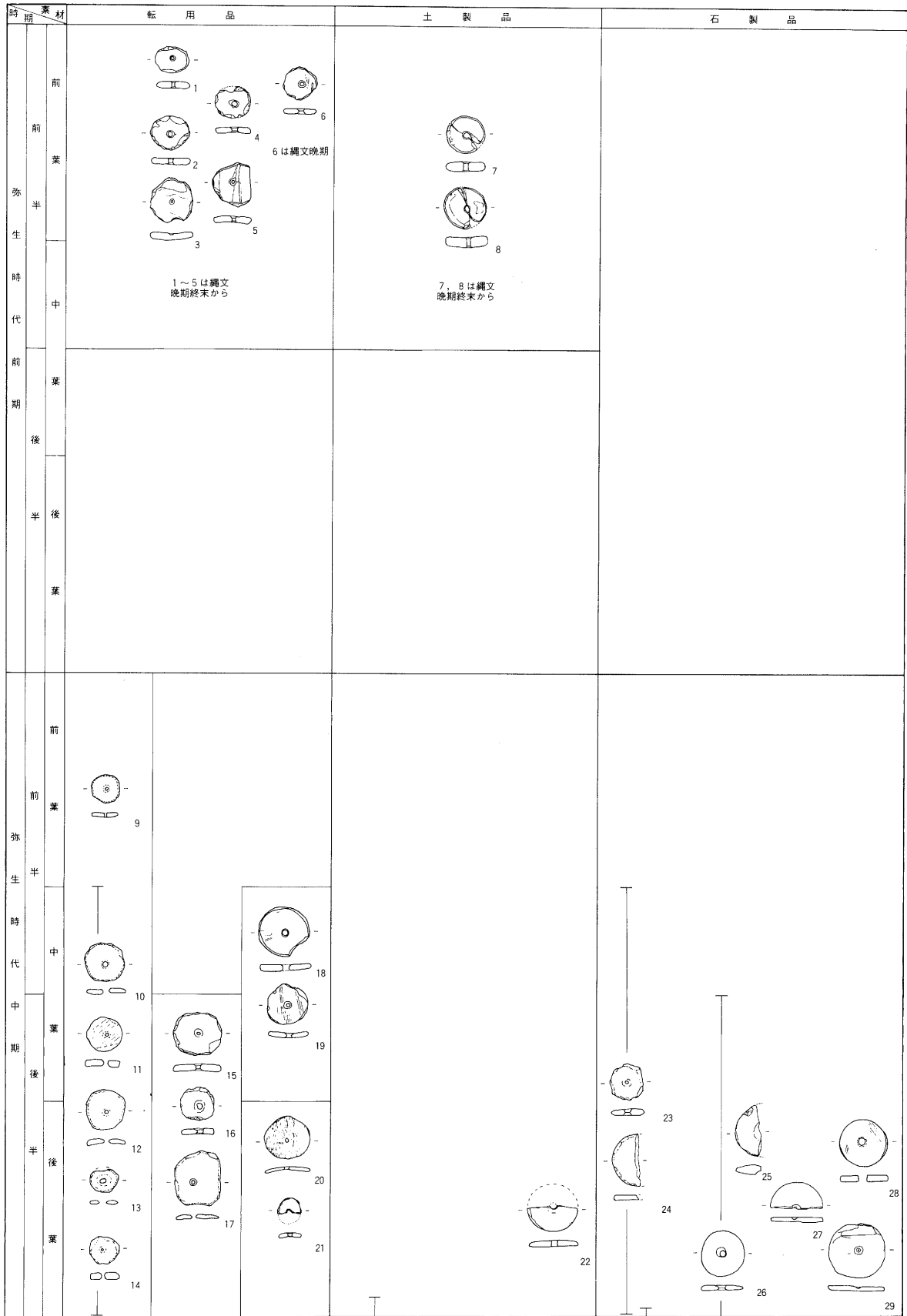
番号	遺跡名	出土地	素材	断面図	法 量				備考
					直径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	
1	中寺州尾 (10調査区)	1号溝状	転用品	長方形	3.5	(0.7)	0.3	(6.9)	
2	中寺州尾 (10調査区)	1号溝状	転用品	長方形	4.0	0.7	0.4	8.4	
3	中寺州尾 (10調査区)	1号溝状	転用品	長方形	4.5	0.8	0.3	(14.1)	
4	中寺州尾 (10調査区)	1号溝状	転用品	長方形	3.4	0.7	0.4	7.4	
5	中寺州尾 (10調査区)	1号溝状	転用品	長方形	4.5	0.6	0.3	11.9	
6	大洲	A区	転用品	長方形	3~3.2	0.5	0.4	5.4	
7	中寺州尾 (10調査区)	1号溝状	土製品	長方形	3.8	1.0	0.4	(13.1)	焼成前穿孔
8	中寺州尾 (10調査区)	1号溝状	土製品	長方形	4.2	1.0	0.3	(19.7)	焼成前穿孔
9	宝泉	竪穴式住居跡	転用品	長方形	3.0	0.5	0.2		
10	明徳東岡Ⅱ	包含層	転用品	長方形	4.2	0.6	0.6	8.6	
11	明徳中ノ岡Ⅲ	1号住居	転用品	長方形	3.5	3.5	0.3	8.9	
12	明徳中ノ岡Ⅲ	1号住居	転用品	長方形	3.9	0.7	0.3	10.4	
13	明徳中ノ岡Ⅲ	1号住居	転用品	長方形	2.9	2.4	0.6	3.0	
14	明徳中ノ岡Ⅲ	22号土坑	転用品	長方形	3.0	0.7	0.3	6.1	
15	医王寺Ⅰ		転用品	長方形	5.0	0.8	0.4	21.0	
16	医王寺Ⅰ		転用品	長方形	3.3	0.6	0.5	5.5	
17	明徳中ノ岡Ⅱ	土器溜り	転用品	長方形	5.5	0.5	0.4	17.6	
18	大峰ヶ台 (第4次)	包含層	転用品	長方形	5.0	0.7	0.6	18.8	
19	大峰ヶ台 (第4次)	SB-12	転用品	長方形	4.2	0.5	0.4	9.8	両面穿孔
20	松山大学構内 (第3次)	SR-1下層下部	転用品	長方形	4.7	0.4	0.4		
21	朝倉下岡	第2号住居	転用品	長方形	5.0	0.5	(0.4)	(2.5)	
22	松山大学構内 (第3次)	SR-1下層下部	土製品	長方形	5.0	0.6	0.6		
23	祝谷六丁場		石製品 (結晶片岩)	長方形	3.4	0.7	0.5	14.4	石庖丁の転用品
24	明徳中ノ岡Ⅲ	7号土坑	石製品 (緑泥片岩)	長方形	2.8	0.6	—	17.7	未製品

考 察

松山平野出土の紡錘車

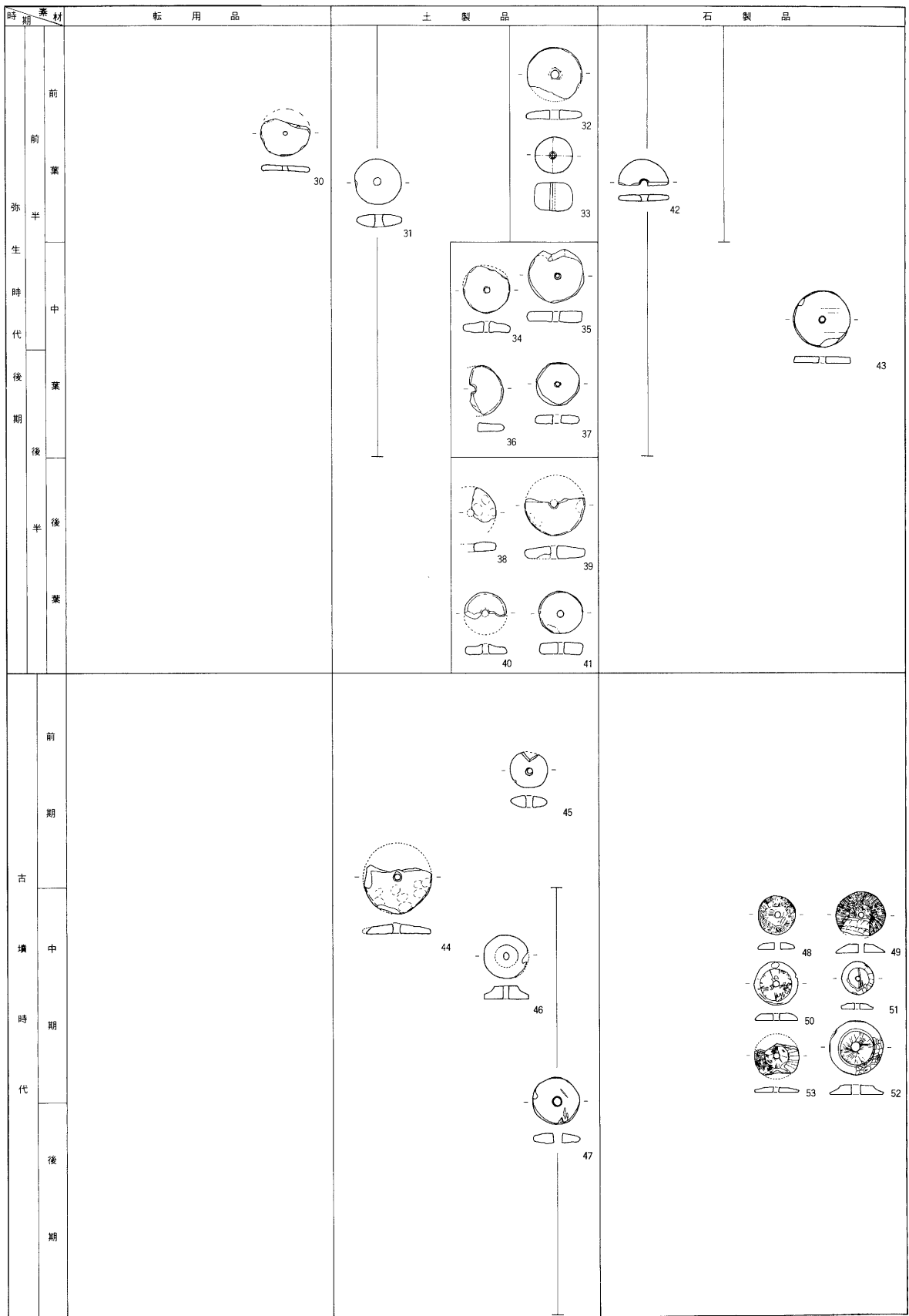
(2)

番号	遺跡名	出土地	素材	断面図	法 量				備 考
					直径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	
25	平坂Ⅱ	4号土坑	石製品 (凝灰岩)	長方形	5.1	1.2	—	(18.3)	未製品
26	松山大学構内 (第3次)	下層下部	石製品 (結晶片岩)	長方形	4.6	0.5	0.6	15.9	両面穿孔
27	文京 (第10次)	SB-1	石製品 (緑色片岩)	長方形	5.2	1.2	—	(18.3)	未製品
28	長尾	2号住居	石製品 (石英粗面岩)	長方形	4.9	0.7	0.8	25.7	
29	文京 (第10次)	SB-1	石製品 (緑色片岩)	長方形	5.5	0.5	—	27.5	未製品
30	松山大学構内 (第3次)	SR-1	転用品	長方形	4.9	0.5	0.4		
31	文京 (第10次)	暗茶褐色土上層	土製品	紡錘形	4.6	1.2	0.8	28.4	
32	朝倉南甲	6号住居	土製品	長方形	5.6	1.0	1.0	(30.0)	焼成前穿孔
33	久米窪田V	2号住居	土製品	長方形	4.0	2.9	0.7		焼成前穿孔
34	松山大学構内 (第2次)	SB-7	土製品	長方形	4.7	1.1	0.7	21.1	
35	松山大学構内 (第2次)	SB-7	土製品	長方形	5.5	1.1	0.7	42.3	焼成前穿孔
36	拾町Ⅱ	第5号住居址	土製品	長方形	5.0	0.9	0.7		
37	松山大学構内 (第2次)	SB-7	土製品	長方形	4.4	0.8	0.7	21	焼成前穿孔
38	松山大学構内 (第3次)	SR-2 (1区P30)	土製品	長方形	5.3	0.8	—		1/4残存
39	東本遺跡 (4次4区)	SB-403	土製品	長方形	6.1	1.3	0.7	26.7	焼成前穿孔
40	筋違F	SB-5	土製品	長方形	4.2	0.8	0.7		焼成前穿孔
41	松山大学構内 (第3次)	SR-2 (6区)	土製品	長方形	4.5	1.2	0.7		
42	文京 (第10次)	暗茶褐色土 C6	石製品 (緑色片岩)	長方形	5.0	0.7	0.6~0.9	(13.8)	
43	松山大学構内 (第2次)	SB-7	石製品 (頁岩)	長方形	5.6	0.7	0.6	41.6	
44	東本遺跡 (4次3区)		土製品	長方形	7.0	1.1	0.6	35.1	焼成前穿孔
45	桑原田中	包含層	土製品	紡錘形	3.7	1.2	0.6	16.9	焼成前穿孔
46	出作遺跡	SX-01	土製品	台形状	2.2~4.4	1.3	0.5		
47	筋違H	SB-2	土製品	長方形	4.8	1.1	1.0		焼成前穿孔
48	出作遺跡	SX01-55	石製品 (蛇文岩)	台形状	3.9	0.6	0.6	18.6	
49	出作遺跡	SX01	石製品 (結晶片岩)	台形状	4.9	0.9	0.6	27.3	
50	谷町	V層	石製品 (緑色片岩)	台形状	4.4	0.8	0.6	23.9	
51	福音小学校 (2区)	SB-65	石製品 (結晶片岩)	台形状	3.3	0.6	0.5	10.2	
52	福音小学校 (3区)	SB-97	石製品 (結晶片岩)	台形状	5.5	0.5	0.8	41.7	
53	福音小学校 (2区)	SB-136	石製品 (結晶片岩)	台形状	3.1	0.5	0.6	11.0	
54	松山大学構内 (第3次)	第Ⅳ層	石製品 不明	台形状	3.2	1.5	0.6	25.1	
55	来住Ⅵ	R11-12	石製品 (滑岩)	台形状	3.4	1.3	0.8	20.2	鋸歯文を付す。
56	若草町 (第3次)		石製品 (結晶片岩)	台形状	3.0	1.2	0.6		
57	座拝坂	包含層	鉄製品	長方形	3.4	(0.5)	(0.4)	18.3	
58	松山大学構内 (第3次)	Ⅳ層	鉄製品	長方形	3.8	0.5	0.5		



第69図 紡錘車集成図1

(S = 1 : 3)



(S=1:3)

第70図 紡錘車集成図2

## 考察Ⅱ 山越町出土の弥生時代資料

### 1. はじめに

昭和51年3月、市内山越3丁目の西原氏より、自宅の改築に際し土器と石器が出土したとの連絡が松山市教育委員会にあった(註1)。教育委員会は、担当者を現地に派遣し、立ち会い調査を行った。この結果、改築面積は約20㎡で、表土直下には黒色土があり、土壌観察より堅穴式住居の一部が露出していることが分かった。調査は、工事中であるため、黒色土中の遺物の取り上げに限られた。出土物はいったん教育委員会に持ち帰り、復元作業と写真撮影を行った。整理の結果、壺形土器1点が復元でき、石器は石庖丁3点、石斧1点が出土していた。土器と石庖丁は教育委員会が、石斧は申請者が保管することになった。その後、本資料は「山越遺跡」として『松山市史料集第一巻考古編』にて写真掲載というかたちで紹介された。

本稿では、出土資料の再検討を行い、山越町一帯の弥生時代資料の充実につとめるものである。

### 2. 資料

土器：第71図1の壺形土器が復元された土器である。口縁部は3分の1、胴部は3分の2の遺存で、頸部下半から胴上部を欠く。形態は、口縁部は大きく開き、端部は垂下する。頸部は長く外傾してたちあがる。胴部は胴中位が最大径となり、肩部は張りが弱い。底部は外傾してたちあがり、大きな平底となる。施文は加飾性が強い。口縁端面には太い沈線文を4条、口縁内面には三角突帯を施す。内面の突帯は複数あり、頸部にちかいものは長く「Ω」状にめぐり、端部にちかい突帯は2条以上で渦双文を描くものと考えられる。頸部には3条以上の三角突帯がめぐる。胴部は、上半部には突帯が2段にめぐり(現状では剥落する)、さらに2条1組の縦方向の突帯が3～4組ある(現状では1組)。胴中位には突帯3条とその上に刺突文がめぐる。調整は、器壁の遺存が不良で部分的にしか看取できないが、胴上半部にはミガキ痕と思われる。内面は、胴上半と底部に指頭痕が残る。

石器：石庖丁は第71図2・3で、2は完形品である。平面形は不整な楕円形で、穿孔は両面からおこなわれる。刃部は両面にもつ。背部には紐ずれ痕がみられる。石材は結晶片岩である。3は約3分の2の遺存で、平面形は不整な楕円形になる。穿孔は両面からおこなわれ、刃部が両面にみられる。石材は結晶片岩である。このほかに、石庖丁には3分の1が遺存する結晶片岩製のものが1点ある。

### 3. まとめ

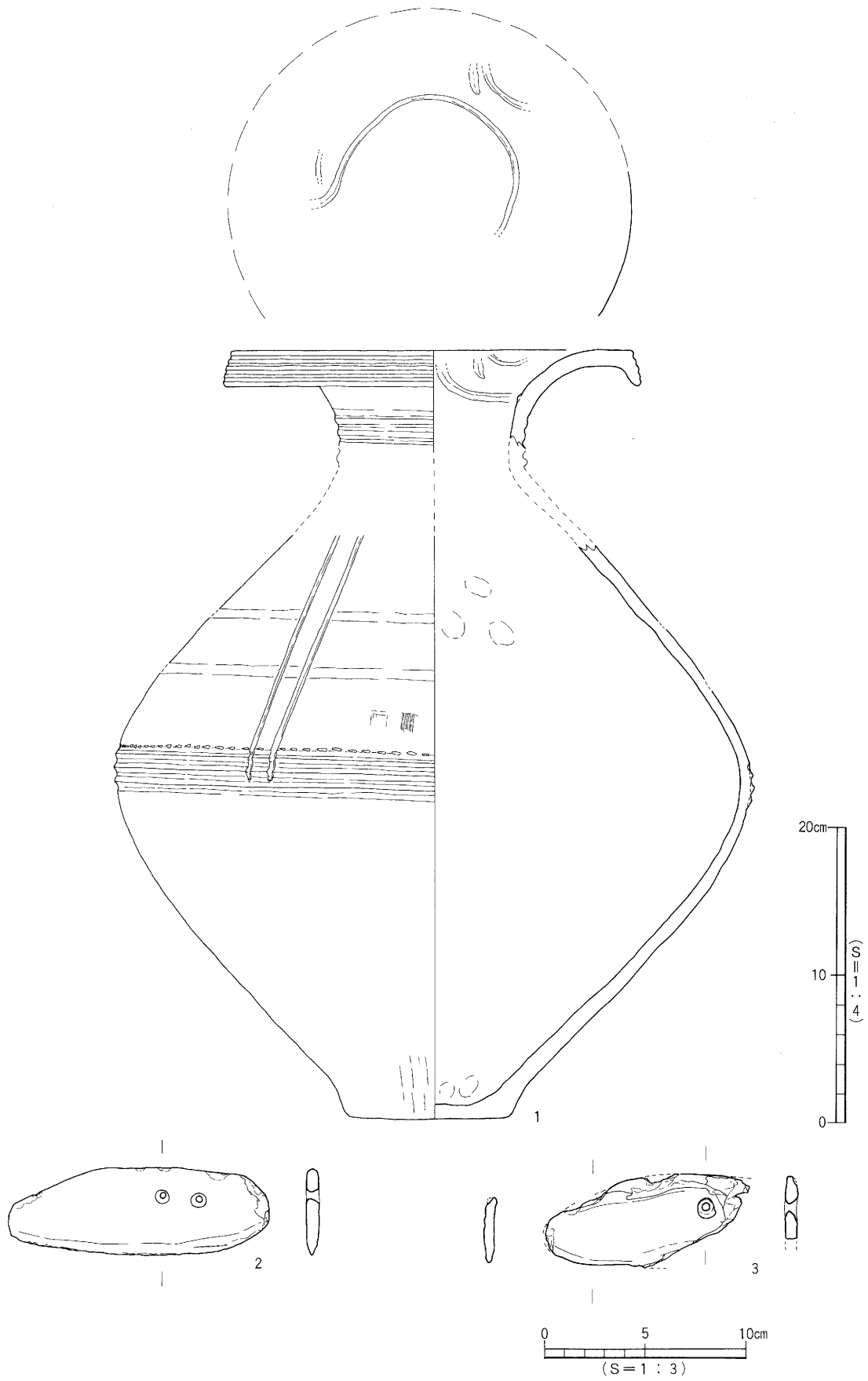
出土土器は、口縁端部が垂下することより中期中葉(梅木編年中期中Ⅱ)に比定される。さらに、この壺は、内面に突帯、胴中位に突帯と刺突文帯があり、前期末からの施文形態が継続していることを示している。石器は、形状と法量より中期の特徴を呈している。このように、出土物は松山平野の弥生中期の典型的形状をもつものであり、編年的研究の一資料となるものである。

さて、山越町内では、本出土地点より南西約1kmに弥生前期中葉の溝が確認されている。また平成7年の姫原遺跡の調査(本地点の0.4km)では中期後葉と後期後葉の集落関連遺構が検出された。よって、本資料は山越地域における弥生集落の継続性を補充するものといえる。

最後に、資料作成に協力いただきました森 光晴、西尾幸則、池田 学、水口あをい、山下満佐子、平岡直美の各氏には記して感謝の意を表するものであります。

(註1) 当該地は、姫山小学校がある丘陵の南麓部にあたる。出土地点は特定できなかった。

考 察



第71図 出土遺物実測図



山越町出土の弥生時代資料

表35 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	壺	口径(26.5) 器高(51.8) 底径 10.7	口縁端部に太沈線4条、口縁内面に突帯。頸部に3条以上の突帯。胴部には突帯2条、刺突文、突帯3条。	㊦一部ヨコナデ ㊧ミガキカ?(マメツ)	㊨ヨコナデ ㊩ナデ	淡茶褐色 淡黄褐色	石・長(1~3) ◎		

表36 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	結晶片岩	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
2	石庖丁	完存	結晶片岩	12.9	4.4	0.6	66.2		
3	石庖丁	2/3	結晶片岩	10.0	4.4	0.6	38.2		



第72図 山越町出土品

## 第6章 調査の成果と課題

本刊では、松山平野の北部にあたる姫原と谷町に所在する姫原遺跡、谷町遺跡の調査報告を行った。両遺跡は和気遺跡群中（註1）にある。広範な地域におよぶが、弥生時代以降の遺跡群内における集落実態については不明な部分が多い。今回の調査では、居住域と生産域を知る資料が得られた。以下、各時代で注目される資料について略記する。

### 弥生時代

谷町遺跡では弥生時代後期後半の堅穴式住居址1棟（SB1）を検出した。本遺跡から南東70mの座拝坂遺跡からは、谷町遺跡SB1よりもやや新しい弥生時代後期末の堅穴式住居を検出している。よって、この地域での弥生時代後期後半～末の居住域の広がりや時期的継続性が伺える。今後の課題は、集落範囲の確定や集落開始の時期について究明していかなければならない。

谷町遺跡SB1は、住居址全体の規模が不明であるが、貼り付けにより構築された高床部を検出している。松山平野内においては貼り付けにより構築された高床部を伴う住居の検出例は少ない（註2）。文京遺跡7次調査SB7、枝松遺跡3次調査SB1、松山大学構内遺跡2次調査SB3に検出例があり、本例は数少ない資料の一つとなる。

姫原遺跡では、円形周溝状遺構2基（SD30・SD17）を検出した。SD30は約1/4の検出で、平面形態は円形と推定され、時期は弥生時代中期後葉に比定される。SD17は約1/2の検出で、平面形は円形で、時期は弥生時代後期後葉に比定される。松山平野内において周溝状遺構は姫原遺跡を含め6遺構11例が知られており、SD30は今のところ最古例の周溝状遺構として位置づけられる（註3）。

SD17の溝中からは1ヶ所に集中して土器が出土している。出土した土器1点に、焼成後に穿孔された土器がみられるが、他の土器には器形や文様に特別なものが見られない。器種構成も甕と壺であり、日常的なものと変わらない。また、SD30・17は、ともに包含層中からの掘り込みであり、遺存状況は良好であった。調査では、溝に区画された内部の面的精査や、東壁土層の断面精査に努めたが、周溝に伴う土坑や桂穴などの遺構は検出されず、土器などの遺物の出土も無かった。これらの事象は、今までに検出された他の周溝状遺構の特徴と共通するものである（註3）。周溝状遺構については、その機能や用途については言及しなかった。今後も資料の収集を行い、他地域の周溝状遺構との検討を含め、その出自と機能について解明していきたい。

姫原遺跡の弥生時代の遺構は溝が中心であるが、個々の性格付けはできなかった。弥生時代の溝には、水田に伴うものと、生活用水路として利用されたものが考えられる。溝の性格は、姫原遺跡一帯の調査の進展をまっけて行いたい。

### 古墳時代

姫原遺跡では古墳時代末の溝SD15を検出している。姫原遺跡では、SD15以外に同時期の溝は検出されていない。水田への給排水、生活用水の利用などを考え合わせるとSD15は重要な溝であるといえる。

## 調査の成果と課題

溝の堆積層は大きく分けて上・中・下層の3層に分層でき、遺物のほとんどは中層からの出土である。中層からは、須恵器片や土師器片と共に散在した状況で馬歯、馬骨と鹿の骨が出土している。獣骨と共に出土した須恵器は、陶邑編年のTK217を主体としその前後の遺物が伴う。よって、獣骨は、確実に7世紀代のものといえる。個体数は、馬歯に成馬の臼歯と若馬の臼歯とがあることから少なくとも2体以上となる。また、獣骨の中には解体痕跡があり、食肉の可能性が考えられるものもある。

獣骨が溝内から出土したことは、祭祀と廃棄の両側面が考えられる。まず文献に見られる犠牲獣による祭祀は、『日本書紀』に牛や馬を雨乞い時の生贄にしたことが記載され、『古語拾遺』には、田を作るときに牛の肉を食べさせたりするなど、殺牛および食肉の習慣を示す記事を見つけることができる。廃棄については、奈良時代の『養老令』の中に官の牛馬が死んだ場合に皮、肉、角、脳を取るような規定が見られ、このような行為の後に廃棄された獣骨があるものと考えられる。

本資料は、溝中から希少な祭祀遺物と思われる管玉や赤色塗彩の手捏土器が出土しており、祭祀性が高い資料といえる。馬歯や獣骨の溝内投入は、水利に関係する農耕儀礼の溝内祭祀と考えるが、その目的や要因などについては、その具体的な内容にまで言及しえるものではない。松山平野内においては、このような獣骨の出土は稀であり、当平野内の資料蓄積と他地域との比較検討を今後継続し、獣骨と溝内祭祀について追究していきたい。

## 中世

姫原遺跡では中世の溝SD13・14を検出している。SD13からは馬骨、SD14からは犬の下顎が出土している。犬の下顎と馬具には解体痕跡が看取され、SD15出土の馬骨と同様である。ただし、SD13出土の馬骨は、調査区の南端でSD15と切り合うことと、溝内埋土に須恵器片が出土することから、馬骨はSD15からの流れ込みの可能性がある。SD13・14出土の獣骨は、確実に溝に伴うものかどうかは課題であり、資料の取り扱いに注意していただきたい。

このほか、SD13・14からは、須恵器や土師器のほか龍泉窯系青磁が出土しており、付近に比較的規模の大きい集落が想定される。

今回の谷町・姫原両遺跡の調査では調査面積が狭小にもかかわらず、弥生時代、古墳時代、中世の遺構や遺物を数多く検出できた。このことは、和気・堀江地域の遺跡内容の豊富さを示すものであり、重要な地域であることが再認識された。また、姫原遺跡一帯は動物遺存体が良好な状態で出土する土壌環境と思われ、今後の周辺域での調査では動物遺存体の出土が期待される。

## [註]

- 1 下條信行 1991 「松山平野と道後城北の文化」『松山大学構内遺跡—第2次調査—』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 2 梅木謙一 1991 『松山大学構内遺跡—第2次調査—』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 3 梅木謙一 1997 「伊予における弥生時代の周溝状遺構」『桑原地区の遺跡Ⅲ』松山市教育委員会・財団法人松山生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター

## 調査の成果と課題

### [参考文献]

- 松村淳・梅木謙一 1993 『和気・堀江の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1993 『影浦谷古墳』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
- 土肥孝 1983 「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
- 国立歴史民俗博物館 1993 国立歴史民俗博物館研究報告—第42集—
- 愛媛県史編集委員会 1986 愛媛県史資料編—考古—
- 松山市史編集委員会 1992 松山市史—第一巻抜刷—

写 真 图 版

## 写真図版例言

1. 遺構の撮影は、調査担当者及び大西朋子が行い、姫原遺跡は高所作業車を用いた。

**使用機材：**

カメラ トヨフィールド45A                      レンズ スーパーアンギュロン 90mm他  
アサヒペンタックス67                              ペンタックス67 55mm他  
ニコンニューFM2                                      ズームニッコール 28～85mm他  
フィルム プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

**使用機材：**

カメラ トヨ/ビュー45G                              レンズ ジンマーS240mm  
ストロボ コメット/CA-32・CB2400 (バンク使用)  
スタンド他 トヨ/無影撮影台・ウエイトスタンド101  
フィルム プラスXパン

3. 白黒写真の現像・焼き付けは、一部を除いて大西が行った。

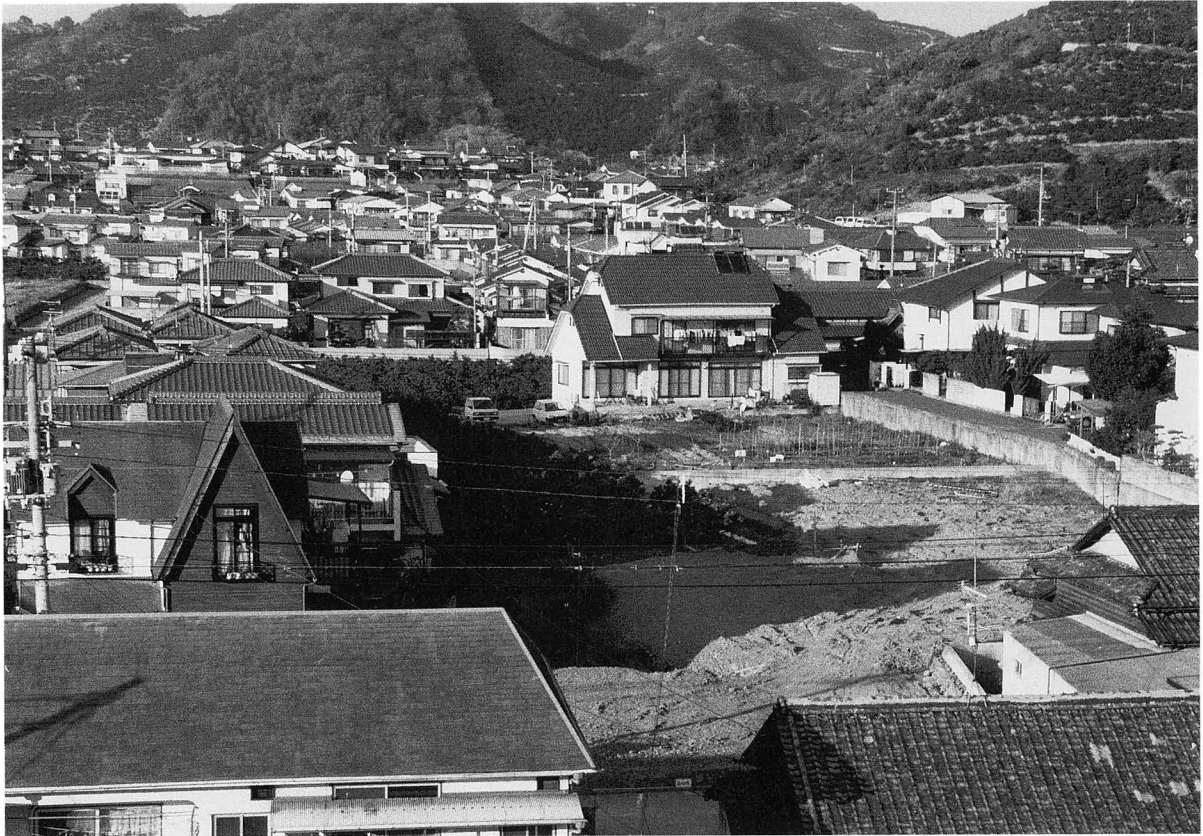
**使用機材：**

引伸機 ラッキー450MD                              レンズ エル・ニッコール135mm  
ラッキー90MS    エル・ニッコール50mm  
印画紙 イルフォードマルチグレードIVRC  
フィルム現像剤 ゴタックD-76・HC110

【参考】『埋文写真研究』Vol. 1～8

〔大西 朋子〕

姫原遺跡



1. 調査地全景（南より）



2. 第Ⅵ層上面遺構検出状況（南より）

姫原遺跡

図版  
二



1. SD30完掘状況（北より）



2. SD17全景（北西より）





1. SD17遺物出土状況（北より）



2. SD17土層断面（南より）



1. SD22遺物出土状況（南より）



2. SD19遺物出土状況（南東より）

姫原遺跡



1. SD15遺物出土状況（北より）



2. SD15完掘状況（南より）

姫原遺跡

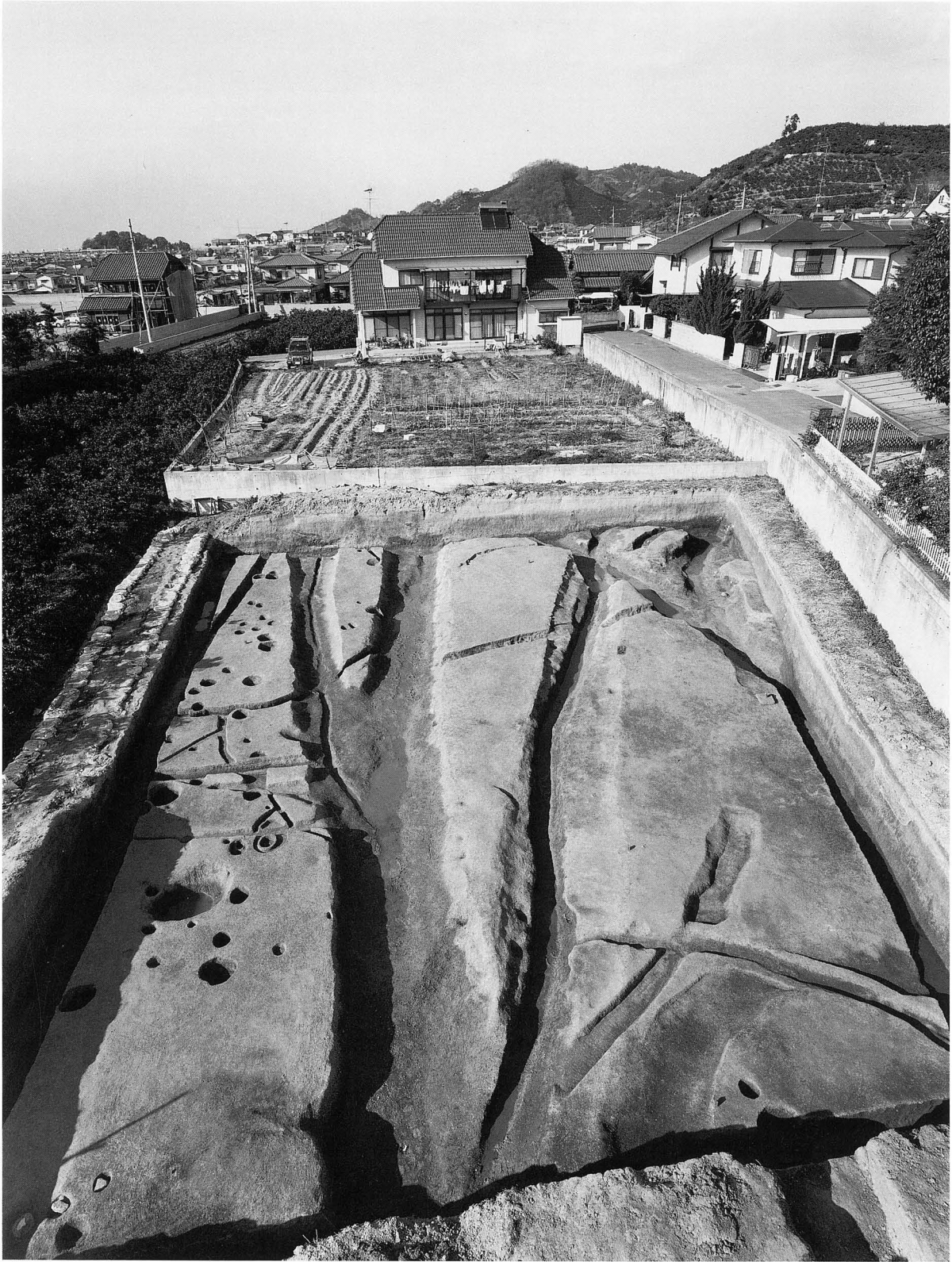
図版  
六



1. SD13・14遺物出土状況（南より）



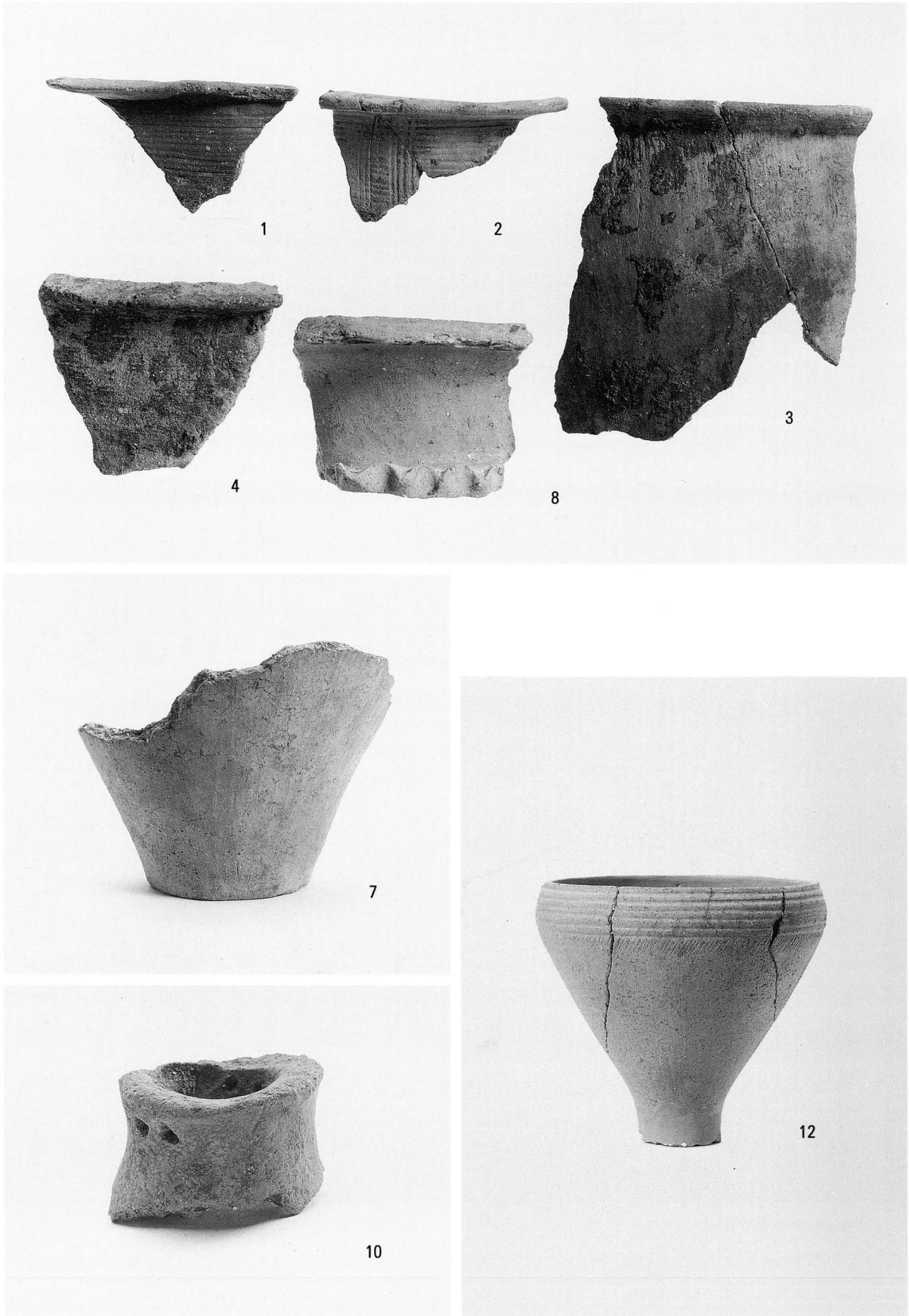
2. 作業風景（東より）



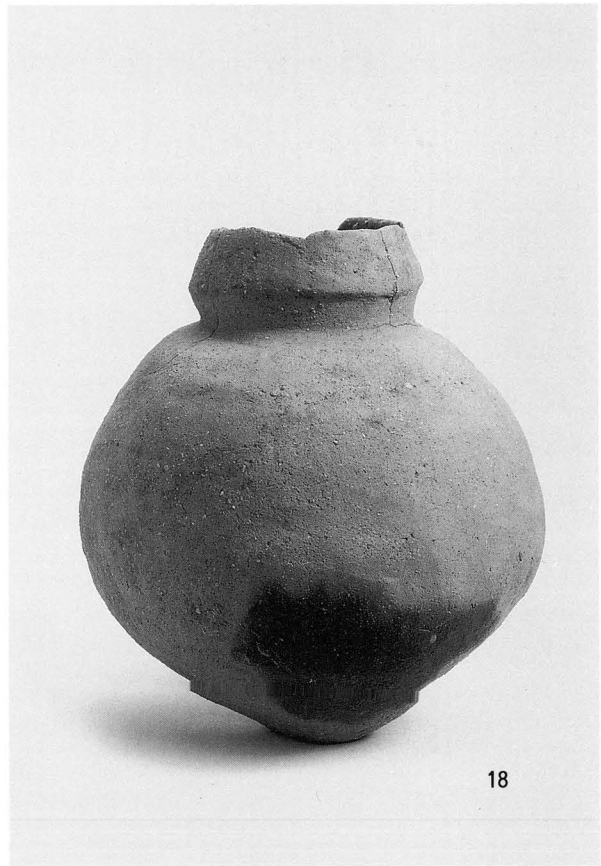
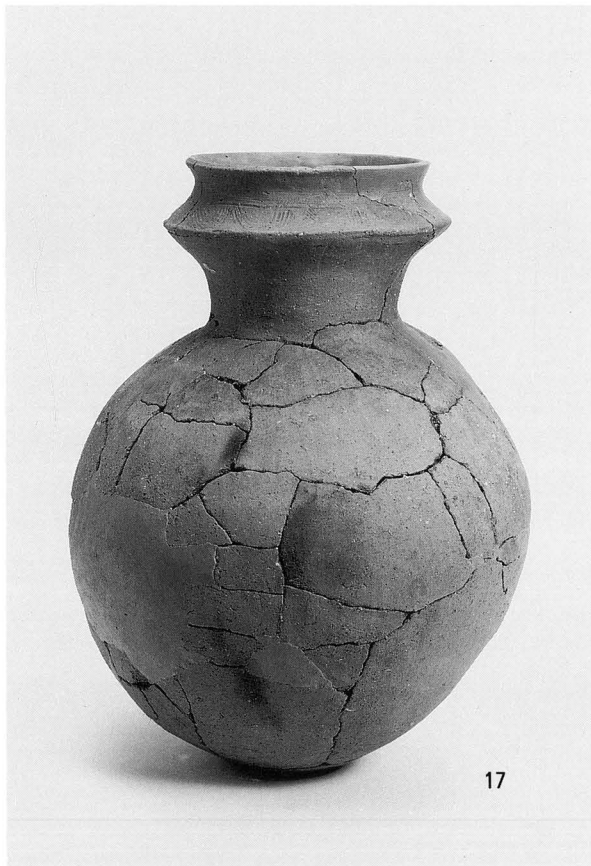
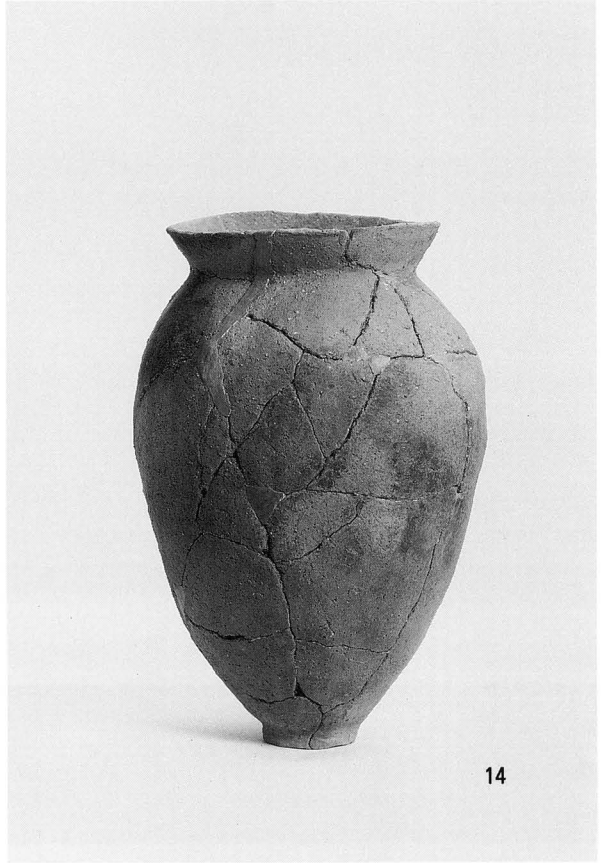
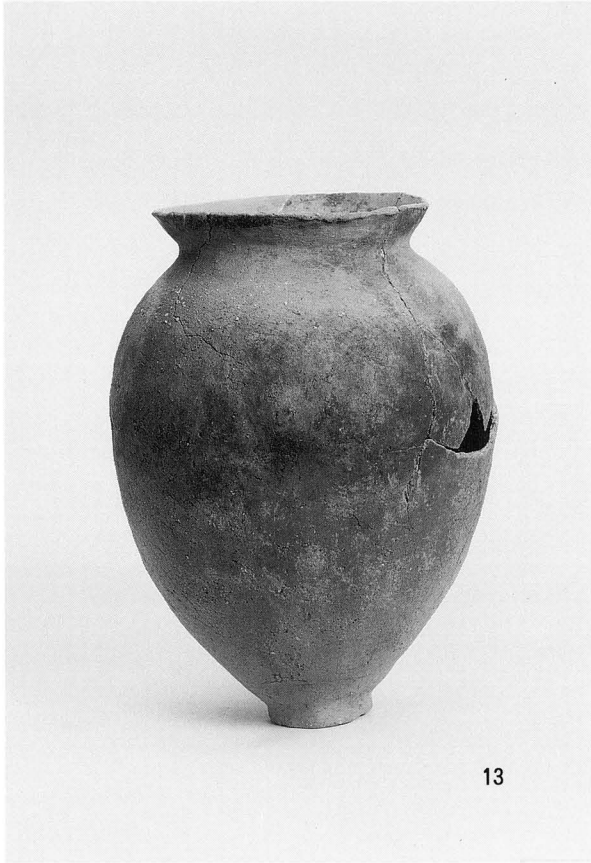
1. 調査区完掘状況（南より）

姫原遺跡

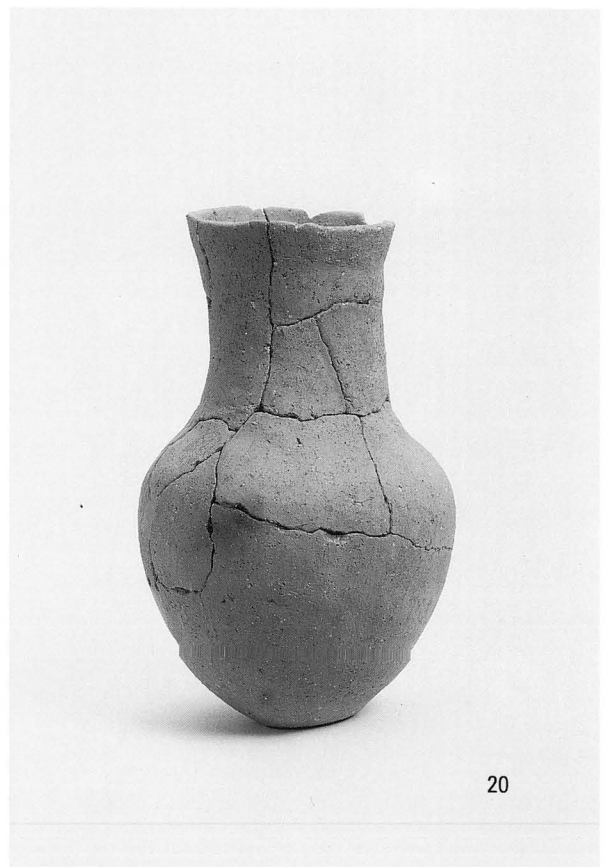
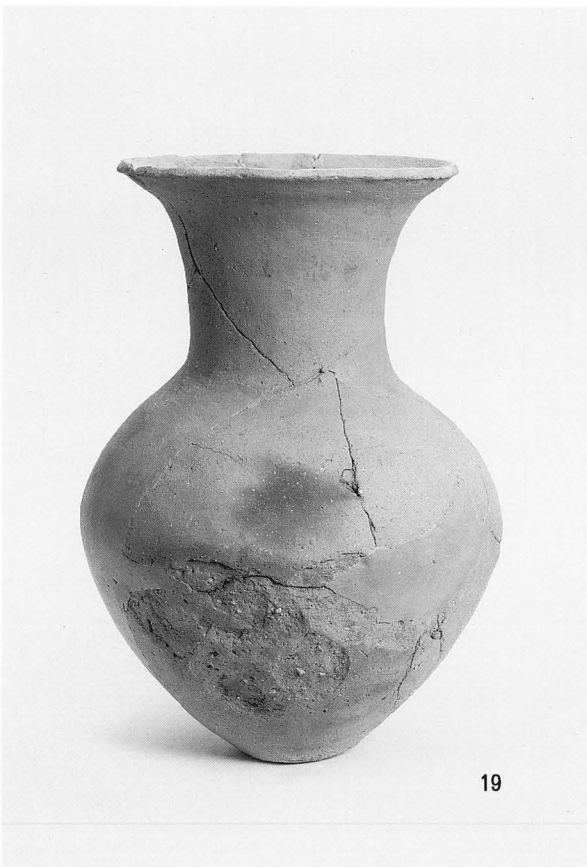
図版  
八



1. SD35出土遺物 (1~4、7、8、10) SD30出土遺物 (12)

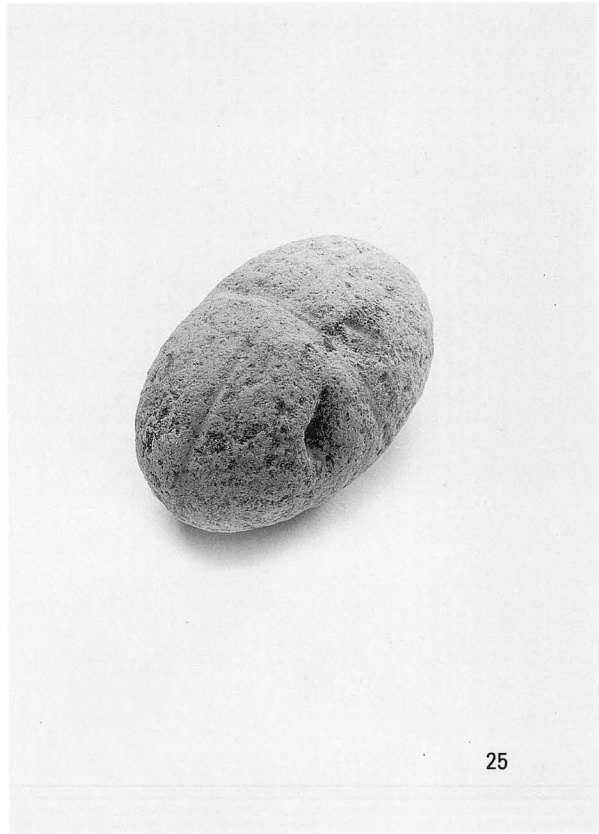
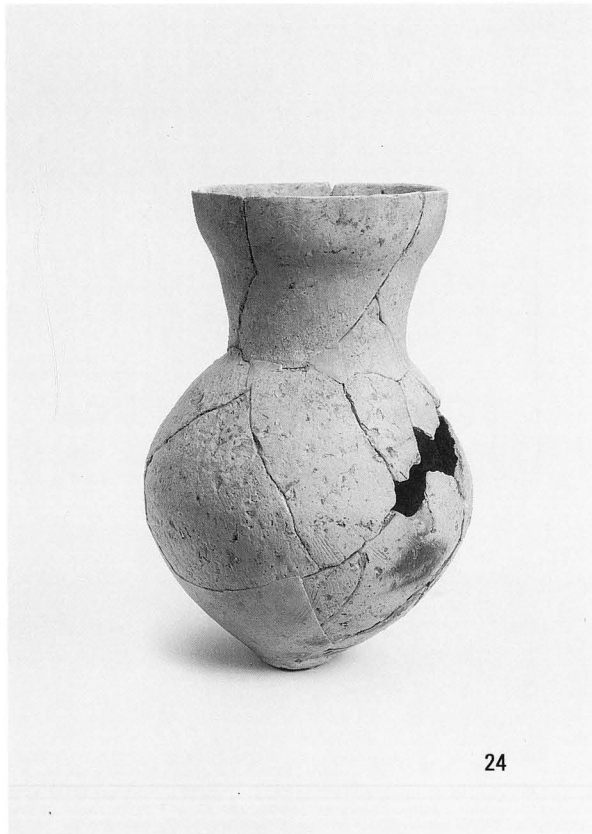


1. SD17出土遺物 ①

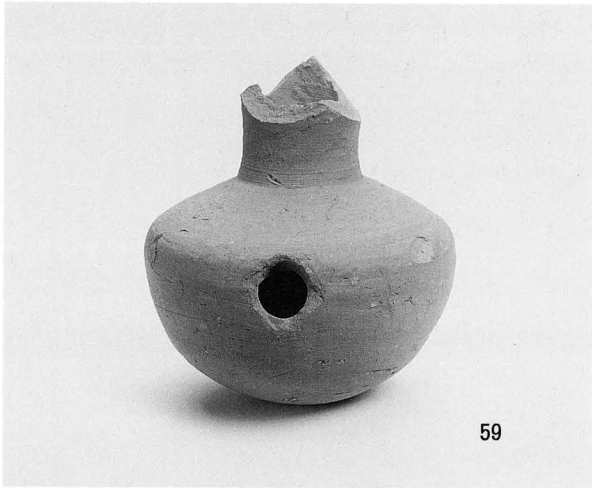


1. SD17出土遺物 ②

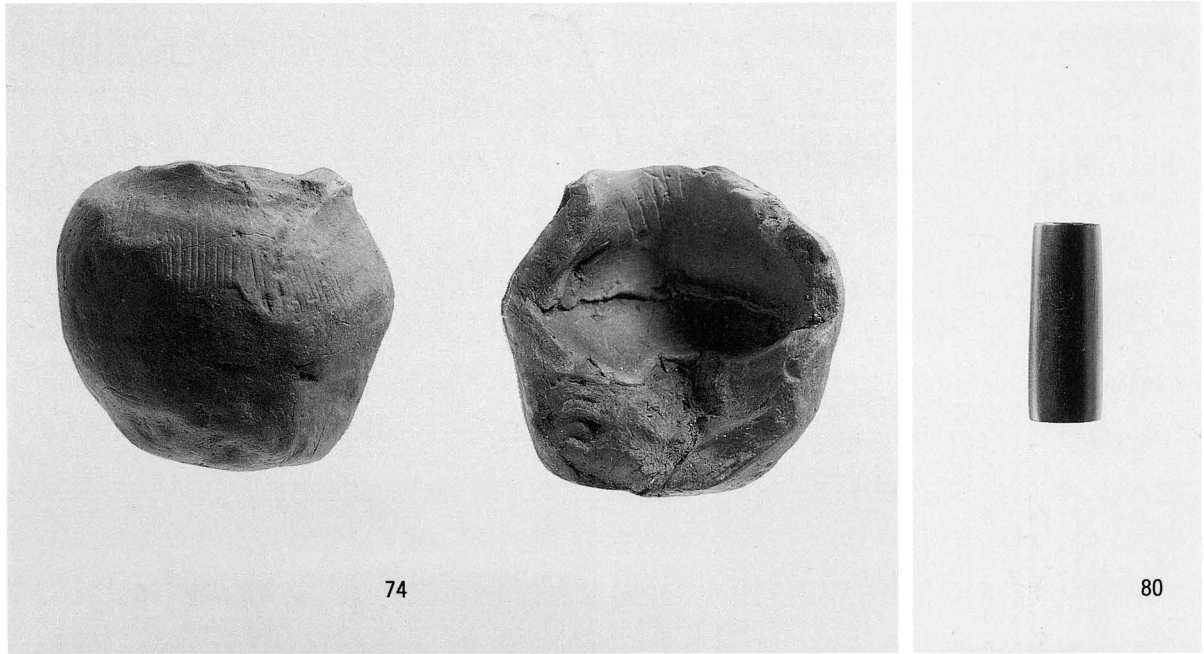




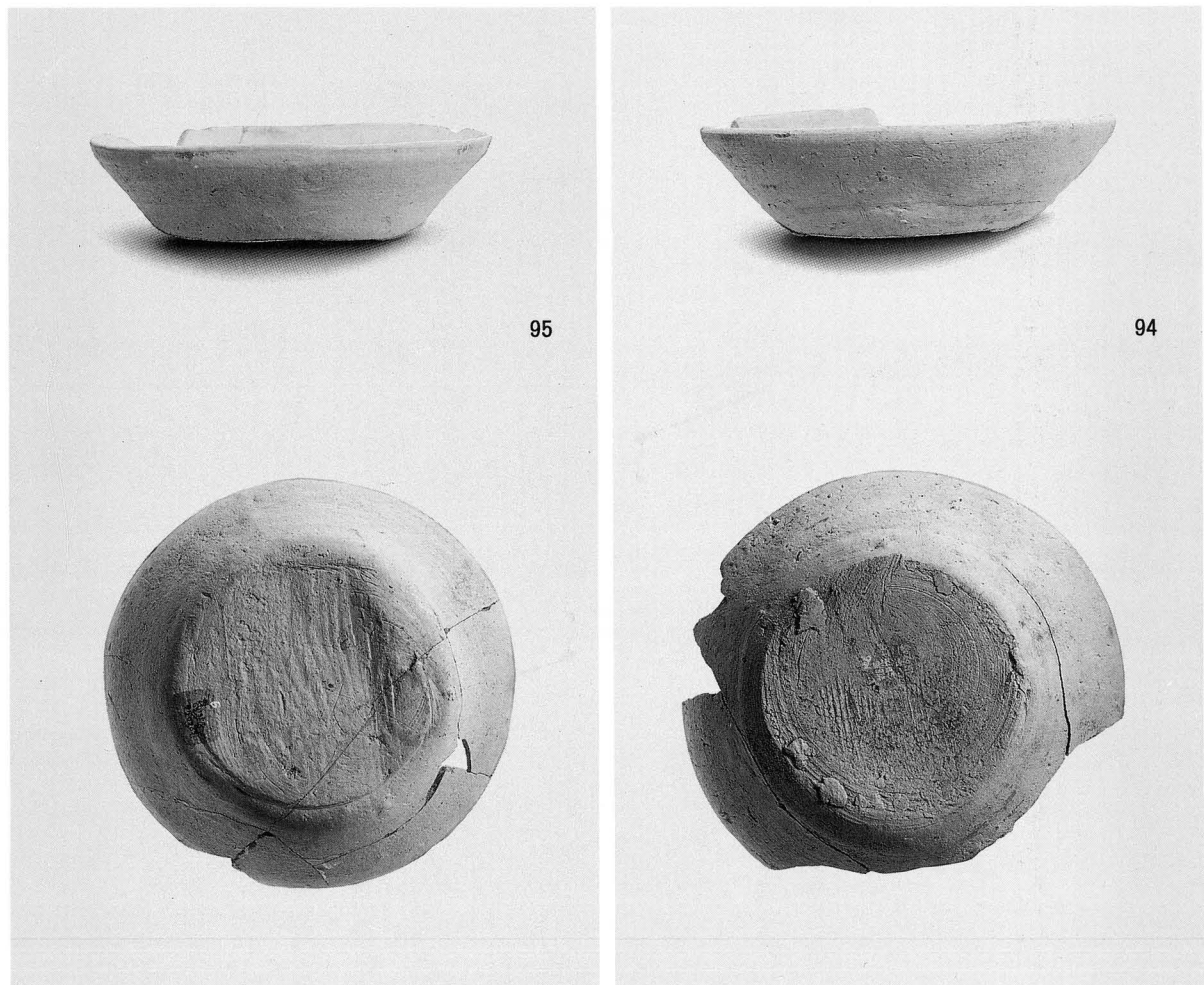
1. S D16出土遺物 (23)、S D19出土遺物 (24、25)、S D22出土遺物 (30)



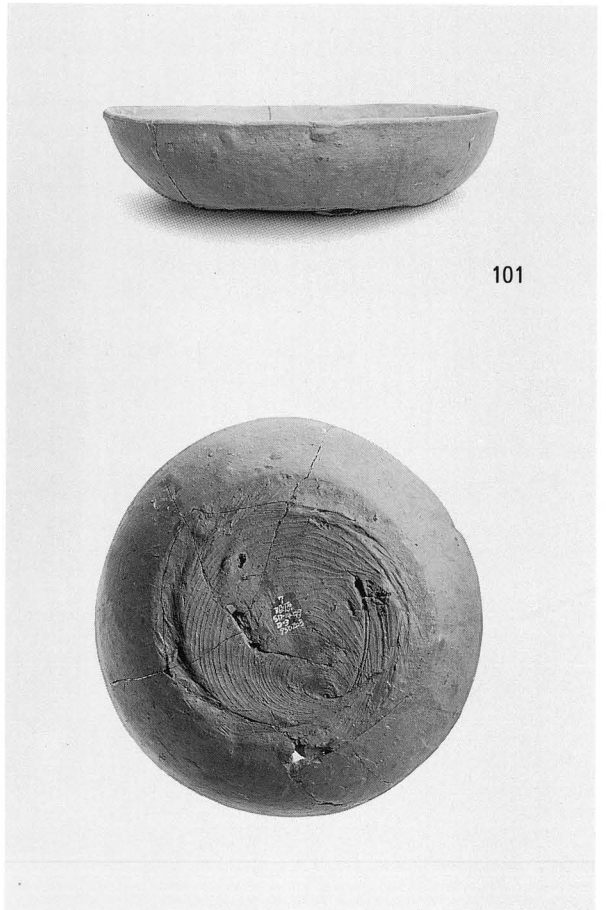
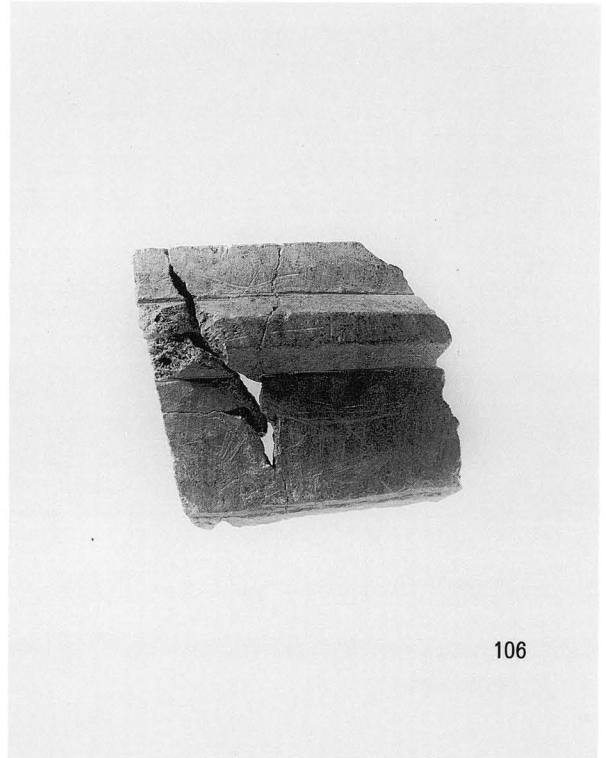
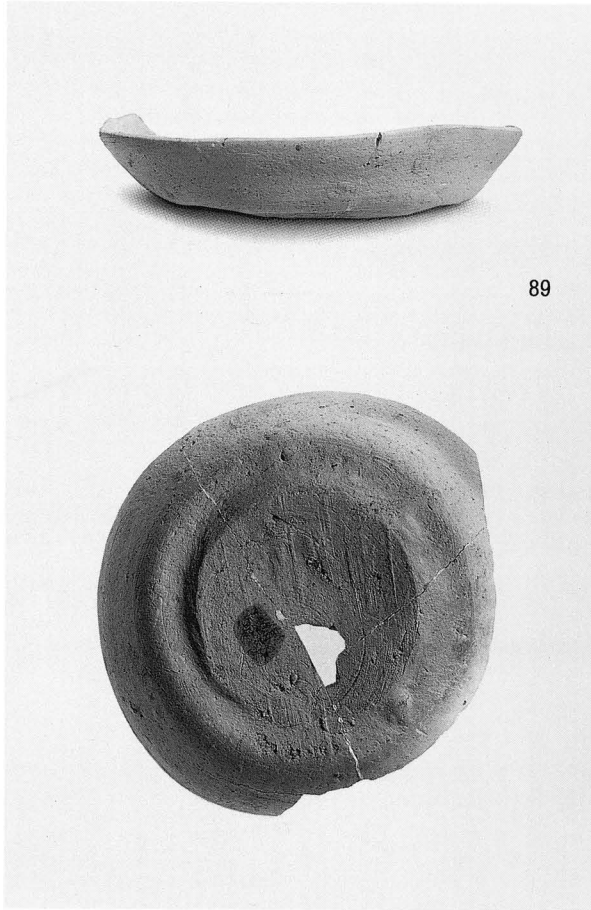
1. SD15出土遺物 ①



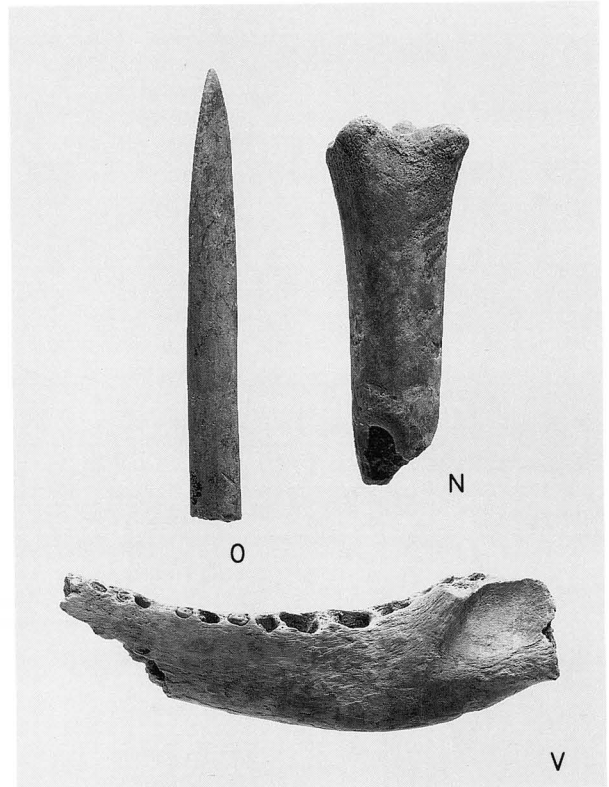
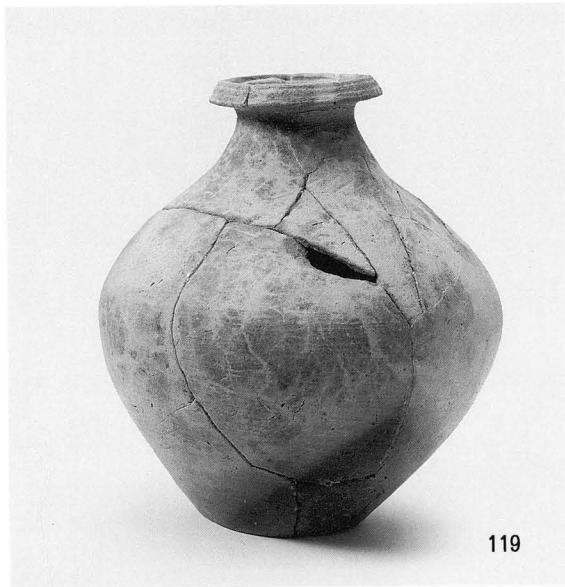
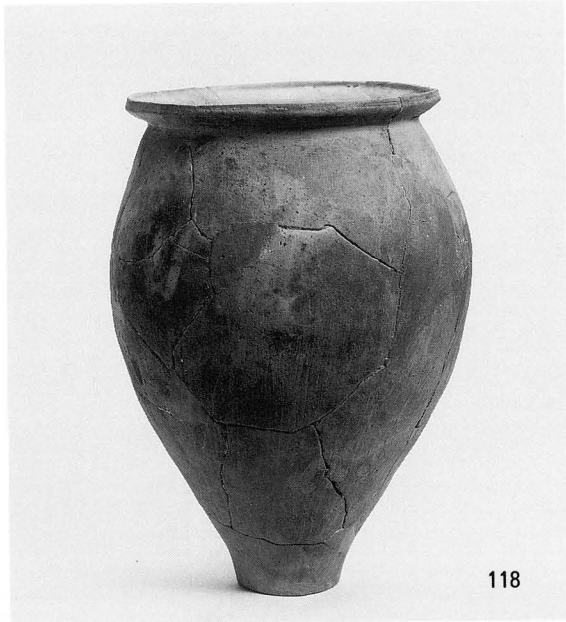
1. SD15出土遺物 ②



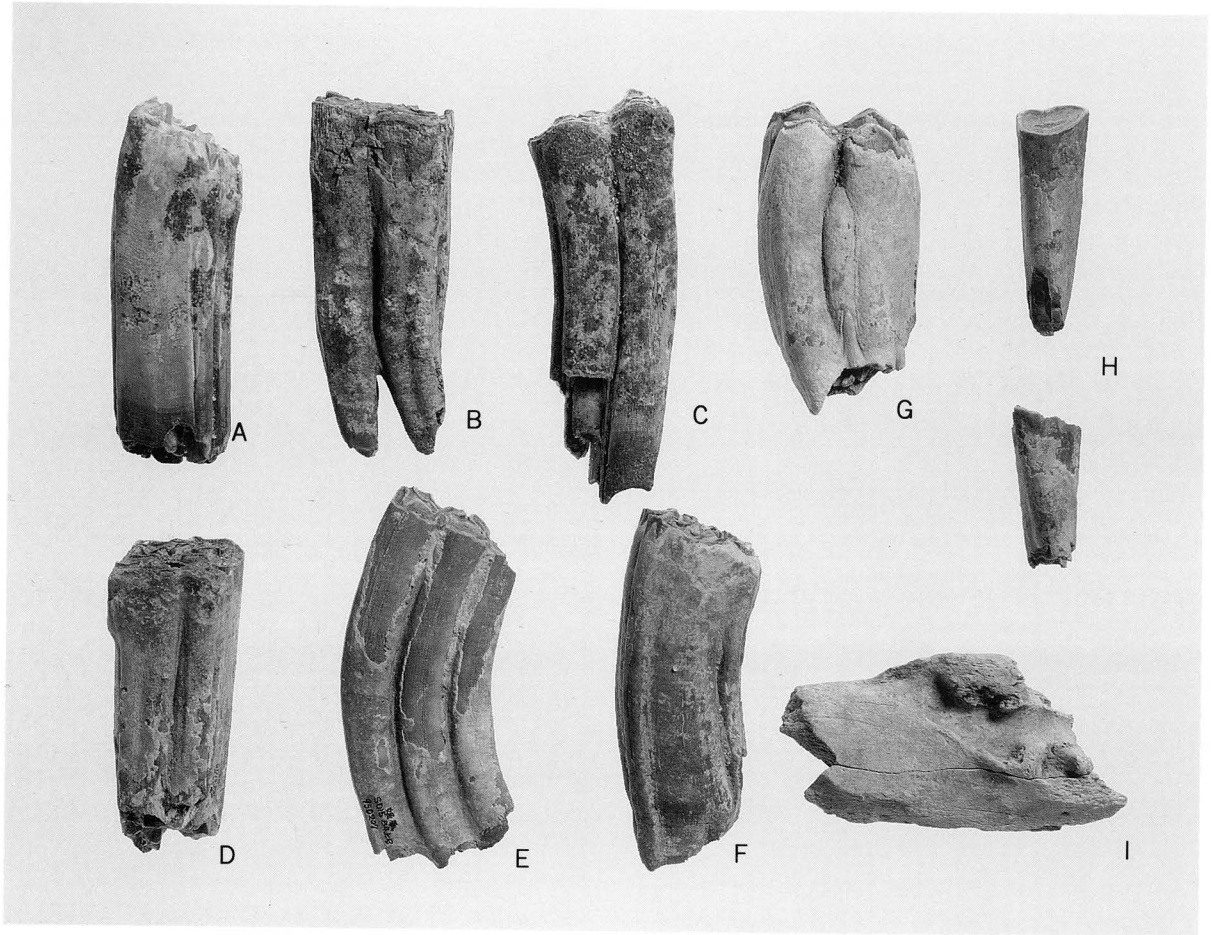
2. SD13出土遺物①



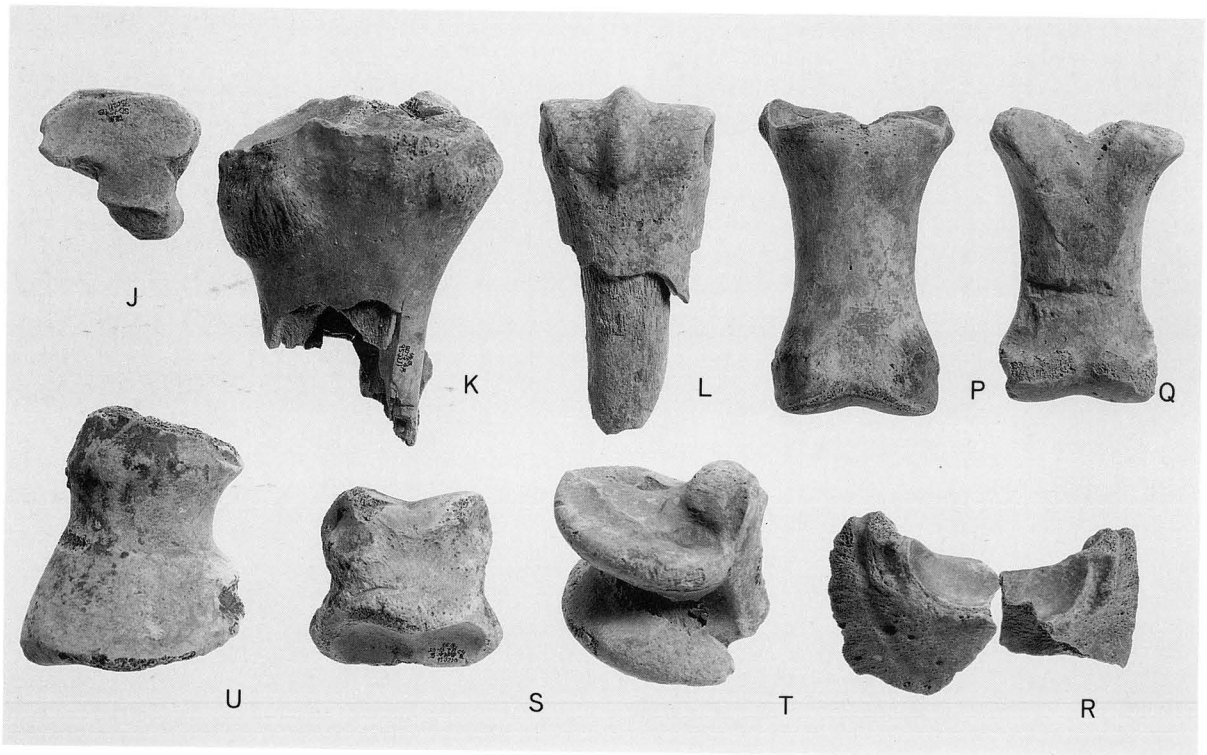
1. SD13出土遺物② (89、106) SD14出土遺物 (101、109)



1. 包含層出土遺物 (118、119、123)、SD15出土獸骨 (M、N、O)、SD13出土獸骨 (W)



1. SD15出土獣骨（馬歯A~H、下顎I）

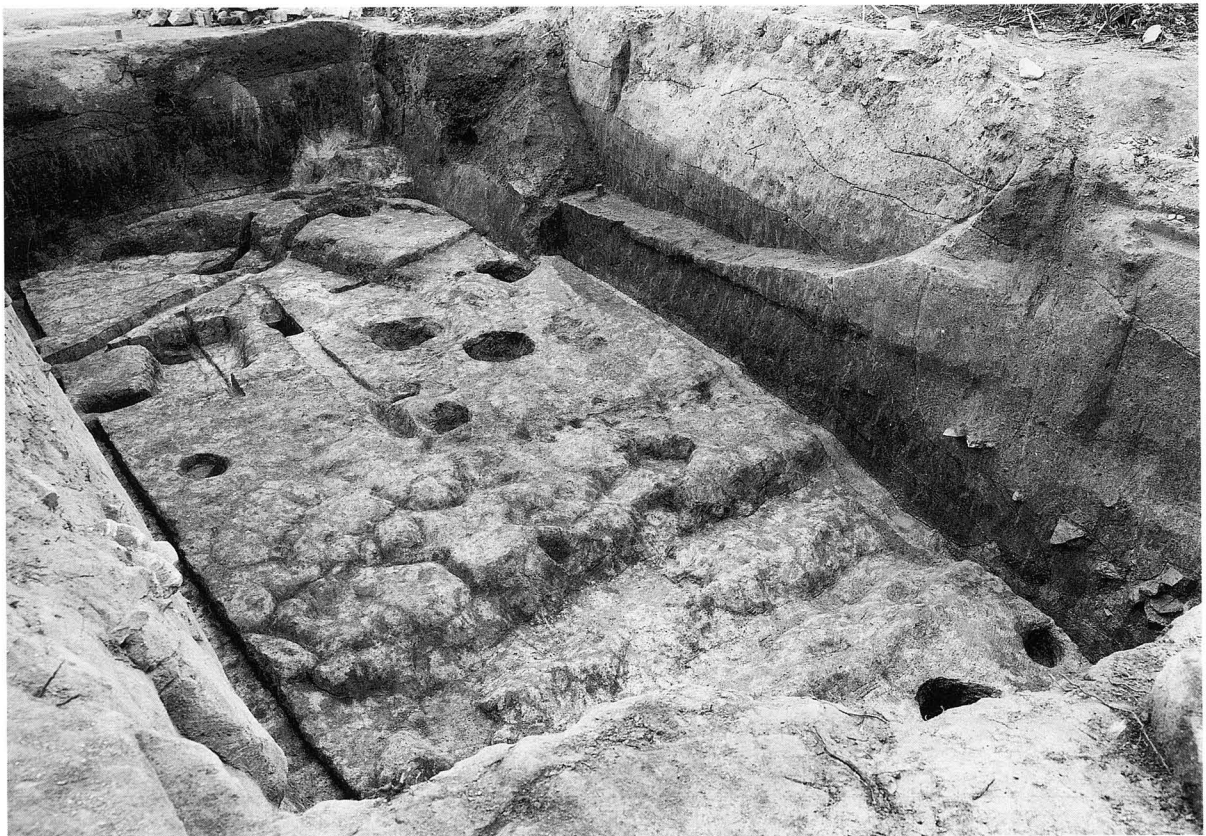


2. SD15出土獣骨（J、K、L）、SD13出土獣骨（P~U）

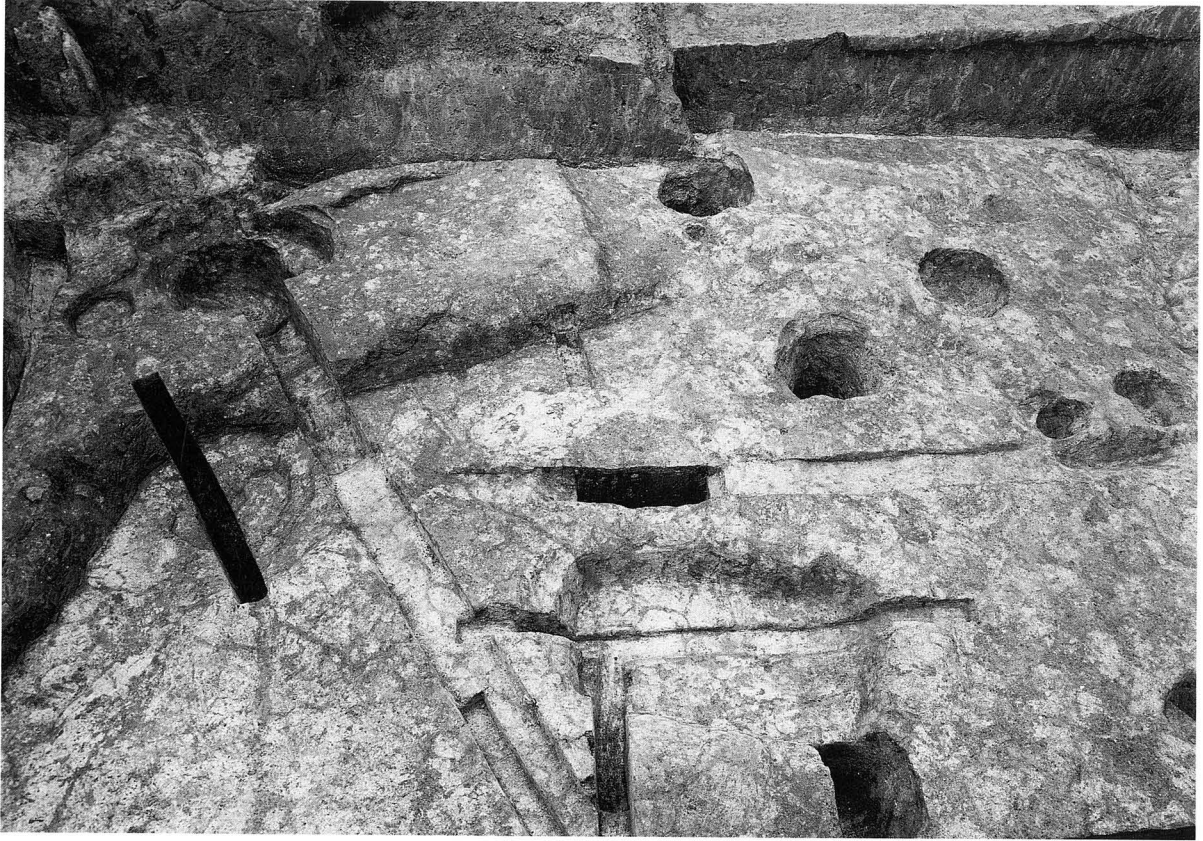
谷町遺跡



1. 調査地全景（北より）



2. 完掘状況（北西より）



1. SB1 (北より)



2. SB1内SK①完掘状況 (東より)





1. SB1内SK②遺物出土状況（西より）



2. SB1内SK③遺物出土状況（西より）

谷町遺跡

図版  
二〇



1. SD 1 遺物出土状況（北より）



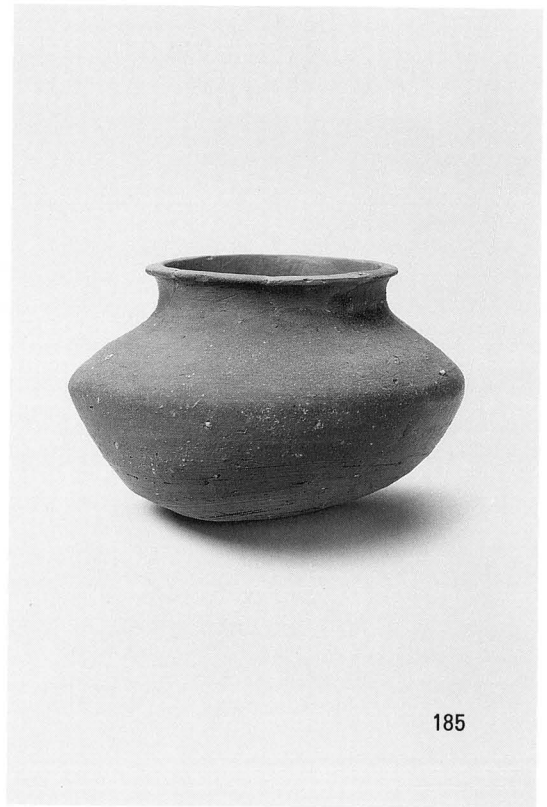
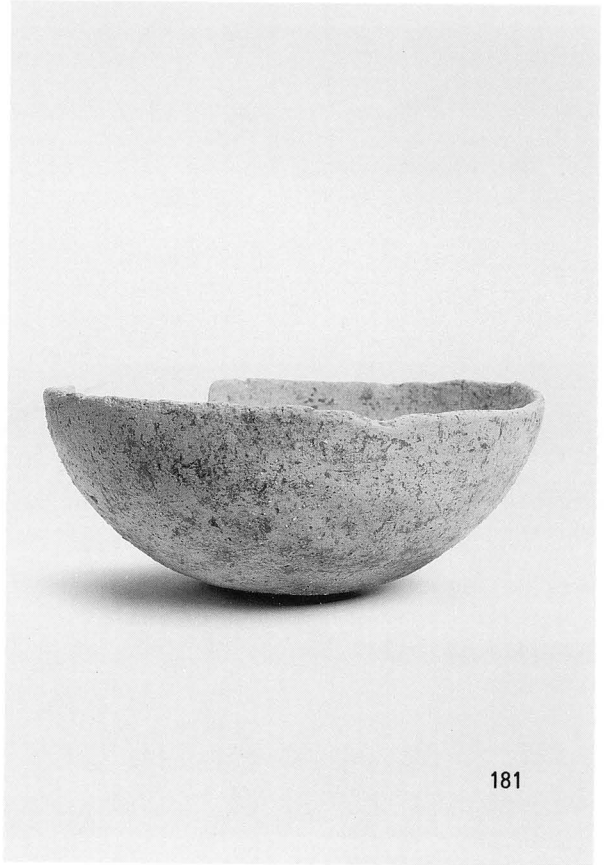
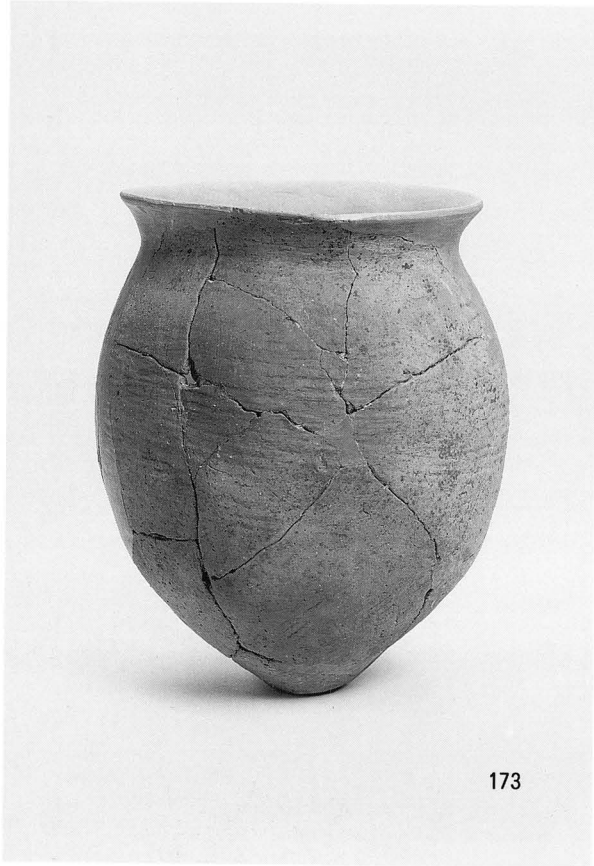
2. SD 2 遺物出土状況（南より）



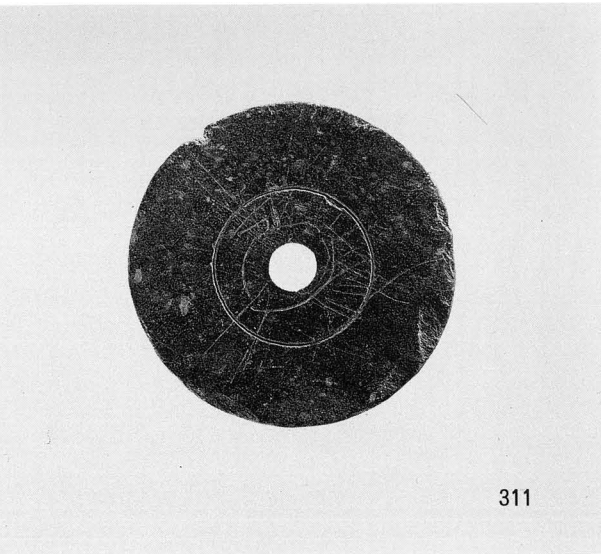
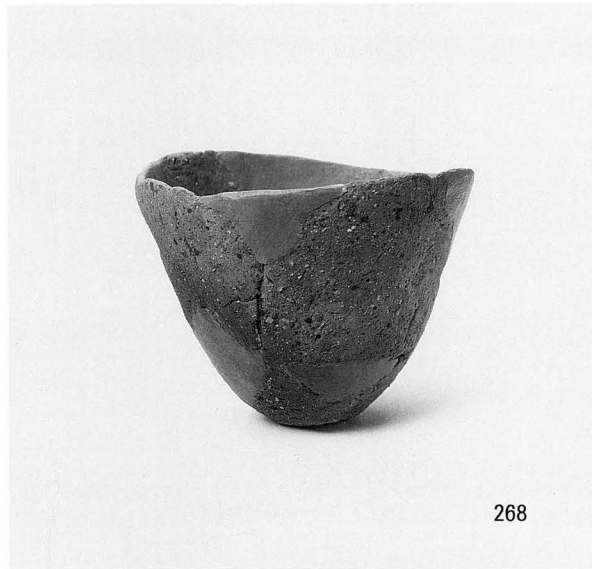
1. 第Ⅲ層完掘状況（南より）



2. 第Ⅴ層紡錘車出土状況（西より）

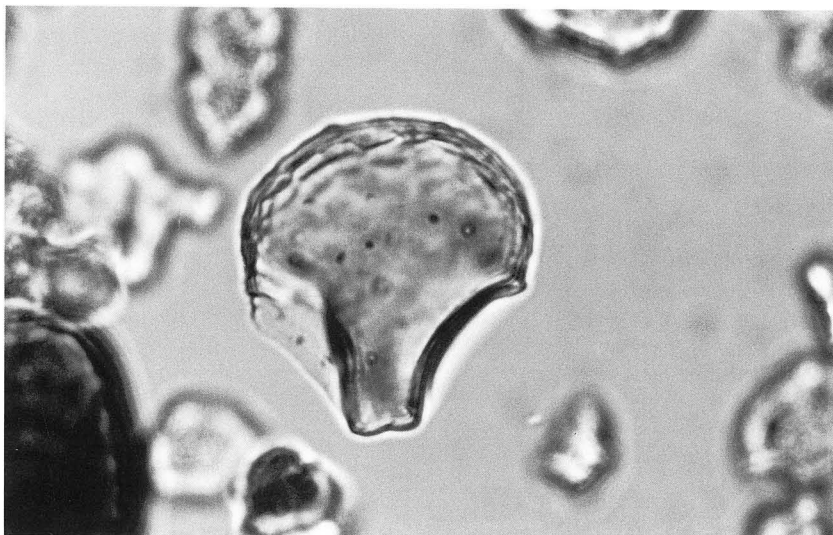


1. SB 1 出土遺物 (162、173、181)、SD 1 出土遺物 (185)

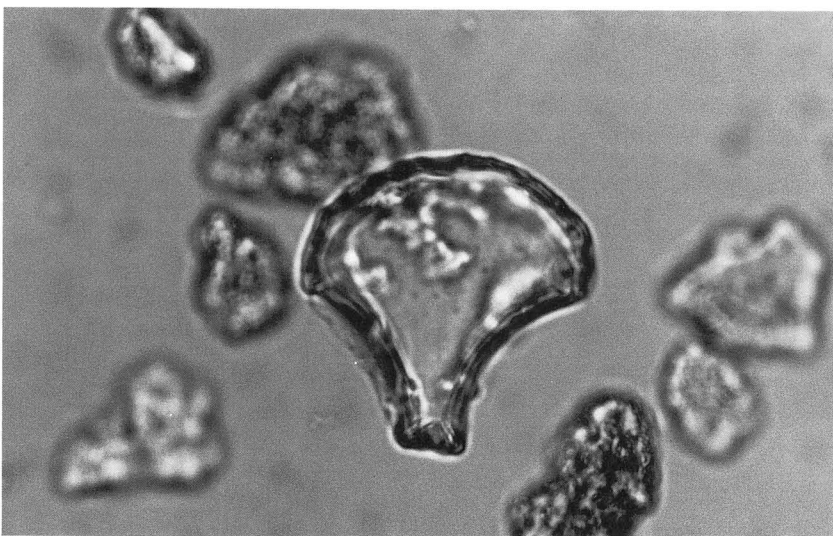


1. 第Ⅲ層出土遺物 (196)、第Ⅴ層出土遺物 (219、267、268、311)

谷町遺跡



1. イネ  
SB 1 内SK①



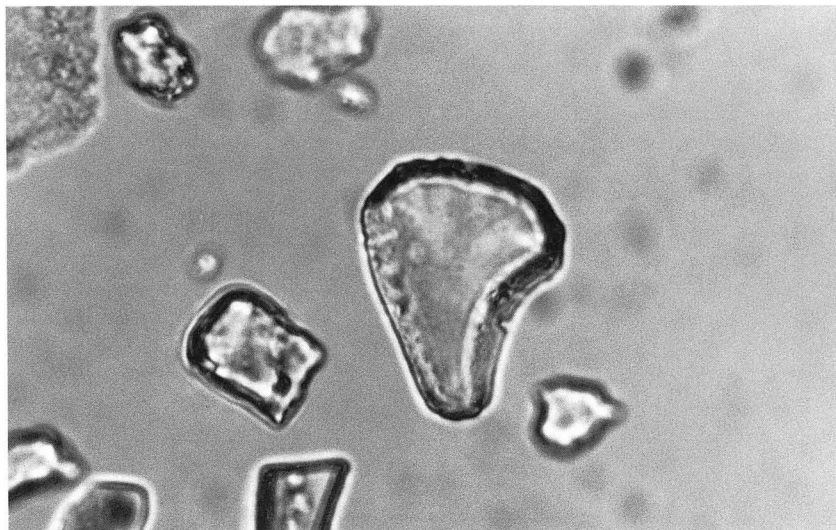
2. イネ  
SB 1 内SK①



3. イネの籾殻  
(穎の表皮細胞)  
SB 1 内SK②

1. 谷町遺跡から検出されたプラント・オパール ①

(400倍)



4. ススキ属型  
SB 1内SK①

3. ネザサ節型  
SB 1内SK②

6. 表皮毛起源  
(イネの剛毛?)  
SB 1内SK②

1. 谷町遺跡から検出されたプラント・オパール ②

(400倍)



卷末図版 1. 姫原遺跡 S D 15 出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	わけ・ほりえのいせき							
書名	和気・堀江の遺跡Ⅱ							
副書名	姫原遺跡・谷町遺跡							
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第64集							
編著者名	相原浩二・山本健一・梅木謙一							
編集機関	松山市教育委員会 財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL 089-948-6605 〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 TEL 089-923-6363							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査機関	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひめばら いせき 姫原遺跡	まつやまし ひめばら 松山市姫原	38201	277	33° 51' 44"	132° 45' 27"	19950105～ 19950228	1,683	宅地開発
たに まち いせき 谷町遺跡	まつやまし たにまち 松山市谷町	38201	290	33° 52' 32"	132° 45' 45"	19950901～ 19951026	701	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺溝	主な遺物		特記事項		
姫原遺跡	集落関連	弥生 古墳 中世	周溝、溝 溝 溝	弥生土器、須恵器 土師器、青磁 獣骨		弥生時代の円形周溝。 古墳時代の溝から馬骨 の出土。		
谷町遺跡	集落関連	弥生 古墳 中世	竪穴式住居、溝 土坑	弥生土器、須恵器 土師器、紡錘車		弥生時代後期の高床を もった竪穴式住居。		

松山市文化財調査報告書 第64集

## 和気・堀江の遺跡Ⅱ

---

平成10年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会

発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1

TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6

TEL (089) 923-6363

印刷 岡田印刷株式会社

〒790-8032 松山市湊町7丁目1-8

TEL (089) 941-9111

---

